

松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 4

— 印西市松崎Ⅲ遺跡 —

平成 18 年 3 月

千葉県企業庁
財團法人 千葉県教育振興財團

松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 4

いんざい まつざき
— 印西市松崎Ⅲ遺跡 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第547集として、千葉県企業庁の松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴って実施した印西市松崎Ⅲ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代早期の集落や、中世の大規模な居館跡と墓域が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 佐藤 健太郎

凡　例

- 本書は、千葉県企業庁による松崎地区整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第4集である。平成16年度より事業名が変更となったが、報告書の書名についてはシリーズであること考慮し、旧事業名である松崎地区内陸工業用地造成整備事業の名称を生かした。
- 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市松崎字堀木戸1,081-1ほかに所在する松崎Ⅲ遺跡（遺跡コード327-006）である。
- 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 本書の執筆は、第1章1節・第2節を室長の藤淳一、第2章第1節を上席研究員新田浩三、第2章2節と第3章を副所長岡田誠造、第2章第3節を研究員立和明美、第4節を上席研究員渡邊高弘が担当し、岡田誠造が編集した。
- 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県企業庁、千葉県教育厅教育振興部文化財課、印西市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」(N1-54-19-14-1)「白井」(N1-54-19-14-3)
- 本書で使用した図面の方位は、すべて公共座標（国家標準直角座標第II系）に基づく座標北である。
- 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。また、遺構図面の縮尺は、原則として1/40である。

	炉・燃焼面	● 上器
	カマド袖	● 石器
	焼土	● 土製品
		● 鉄器
		○ 石器（縄文）

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法と概要	5
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置と環境	5
2 松崎遺跡群と周辺の遺跡	5
第2章 遺構と遺物	10
第1節 旧石器時代	10
1 概要	10
2 文化層の概要	12
3 文化層	16
第2節 縄文時代	42
1 概要	42
2 塚穴住居跡	42
3 炉穴	55
4 陥穴	73
5 土坑	78
6 烧土遺構	103
7 ピット群	104
8 遺構外出土遺物	106
第3節 古墳時代から奈良・平安時代	158
1 概要	158
2 古墳時代	158
3 奈良・平安時代	159
(1) 塚穴住居跡	159
(2) 死骨器を埋納した土坑	166
(3) 遺構外出土遺物	168
第4節 中・近世	170
1 概要	170
2 居館跡	170
(1) 上屋・溝状遺構	170
(2) 掘立柱建物跡	173
(3) 橋列	175

(4) 地下式坑	183
(5) 火葬施設・火葬墓	185
(6) 方形竪穴状遺構・上坑	186
(7) 燃土遺構	196
(8) 出土遺物	197
3 墓域	205
4 台地整形区画	206
5 掘立柱建物跡・櫛列	220
6 土坑	221
7 野馬土手・土堤・溝	225
第3章 まとめ	235
1 旧石器時代	235
2 縄文時代	236
3 古墳時代から奈良・平安時代	236
4 中・近世	237

報告書抄録

挿図目次

第1図 松崎遺跡群全体図	2	第12図 第II文化層 第2ブロック	
第2図 グリッド名称と分割方法	4	遺物分布図	22
第3図 松崎Ⅲ遺跡の位置と周辺の遺跡	6	第13図 第II文化層 第2ブロック	
第4図 上層確認トレンチ配置・本調査範囲	8	出土石器	23
第5図 基本層序	10	第14図 第III文化層 第3ブロック	
第6図 旧石器時代確認グリッドと 単独出土状況	14	遺物分布図	25
第7図 旧石器時代本調査範囲と ブロックの位置	15	第15図 第III文化層 第3ブロック	
第8図 第I文化層 第1ブロック		出土遺物	26
器種別分布図	17	第16図 第IV文化層 第4ブロック	
第9図 第I文化層 第1ブロック		出土石器(1)	28
母岩別分布図	18	第17図 第IV文化層 第4ブロック	
第10図 第1文化層 第1ブロック		出土石器(2)	29
出土石器(1)	19	第18図 第IV文化層 第4ブロック	
第11図 第1文化層 第1ブロック		遺物分布図	30
出土石器(2)	21	第19図 第V文化層 第5ブロック	
		出土石器	31
		第20図 第V文化層 第5ブロック	

遺物分布図	32	第57図	縄文時代陥穴（2）	77	
第21図	単独出土石器（1）	35	第58図	縄文時代土坑（1）	80
第22図	単独出土石器（2）	36	第59図	縄文時代土坑（2）	81
第23図	単独出土石器器種別分布図（1）	37	第60図	縄文時代土坑（3）	84
第24図	単独出土石器器種別分布図（2）	37	第61図	縄文時代土坑（4）	86
第25図	文化層別主要石器	41	第62図	縄文時代土坑（5）	88
第26図	S I 002	43	第63図	縄文時代土坑（6）	90
第27図	S I 002出土土器	43	第64図	縄文時代土坑（7）	92
第28図	S I 004出土土器	44	第65図	縄文時代土坑（8）	93
第29図	S I 003・004	45	第66図	縄文時代土坑（9）	96
第30図	S I 003出土土器	45	第67図	陥穴・土坑出土土器（1）	102
第31図	S I 010	46	第68図	土坑出土土器（2）	103
第32図	S I 010出土土器	46	第69図	縄文時代焼土	104
第33図	S I 013	47	第70図	縄文時代ビット群	105
第34図	S I 013出土土器	47	第71図	グリッド出土土器分布図	107
第35図	S I 014	48	第72図	造構外出土縄文土器（1）	109
第36図	S I 014出土土器	49	第73図	造構外出土縄文土器（2）	110
第37図	S I 001	50	第74図	造構外出土縄文土器（3）	111
第38図	S I 001出土土器	50	第75図	造構外出土縄文土器（4）	113
第39図	S I 007	51	第76図	造構外出土縄文土器（5）	114
第40図	S I 007出土土器	52	第77図	造構外出土縄文土器（6）	115
第41図	S I 015竪穴状遺構	53	第78図	造構外出土縄文土器（7）	116
第42図	縄文住居出土石器（1）	53	第79図	造構外出土縄文土器（8）	118
第43図	縄文住居出土石器（2）	54	第80図	造構外出土縄文土器（9）	119
第44図	縄文住居・炉穴分布図	55	第81図	造構外出土縄文土器（10）	121
第45図	縄文炉穴（1）	57	第82図	造構外出土縄文土器（11）	122
第46図	縄文炉穴（2）	59	第83図	造構外出土縄文土器（12）	123
第47図	縄文炉穴（3）	62	第84図	造構外出土縄文土器（13）	125
第48図	縄文炉穴（4）	64	第85図	造構外出土縄文土器（14）	126
第49図	縄文炉穴（5）	65	第86図	造構外出土縄文土器（15）	127
第50図	炉穴出土土器（1）	69	第87図	造構外出土縄文土器（16）	129
第51図	炉穴出土土器（2）	70	第88図	造構外出土縄文土器（17）	130
第52図	炉穴出土土器（3）	71	第89図	造構外出土縄文土器（18）	131
第53図	炉穴・土坑出土石器（1）	72	第90図	造構外出土土製品	133
第54図	炉穴・土坑出土石器（2）	72	第91図	造構外出土縄文石器（1）	135
第55図	陥穴分布図	74	第92図	造構外出土縄文石器（2）	136
第56図	縄文時代陥穴（1）	76	第93図	造構外出土縄文石器（3）	137

第94図	遺構外出土縄文石器（4）	138	第131図	方形堅穴状遺構・土坑（2）	189
第95図	遺構外出土縄文石器（5）	140	第132図	方形堅穴状遺構・土坑（3）	191
第96図	遺構外出土縄文石器（6）	141	第133図	方形堅穴状遺構・土坑（4）	193
第97図	遺構外出土縄文石器（7）	142	第134図	方形堅穴状遺構・土坑（5）	195
第98図	遺構外出土縄文石器（8）	143	第135図	居館跡内焼土遺構	197
第99図	遺構外出土縄文石器（9）	114	第136図	居館跡内出土青磁・白磁	198
第100図	遺構外出土縄文石器（10）	146	第137図	居館跡内出土陶磁器	200
第101図	遺構外出土縄文石器（11）	147	第138図	居館跡内出土鉢製品	201
第102図	遺構外出土縄文石器（12）	148	第139図	居館跡内出土砥石（1）	201
第103図	遺構外出土縄文石器（13）	149	第140図	居館跡内出土砥石（2）	202
第104図	遺構外出土縄文石器（14）	150	第141図	居館跡内出土錢貨	203
第105図	遺構外出土縄文石器（15）	151	第142図	S K001墓域全体図	207
第106図	遺構外出土縄文石器（16）	153	第143図	S K001墓域内土坑遺物出土状況	209
第107図	遺構外出土縄文石器（17）	154	第144図	墓域内出土砾石	209
第108図	遺構外出土縄文石器（18）	155	第145図	墓域内出土陶磁器	210
第109図	古墳時代円墳	158	第146図	S X012台地整形区画	211
第110図	S I 005住居跡	160	第147図	S X012台地整形区画出土遺物	212
第111図	S I 006住居跡	161	第148図	S X012台地整形区画出土錢貨	212
第112図	S I 006住居跡出土遺物	162	第149図	台地整形区画（S X020・021）平面図	214
第113図	S I 011住居跡	164			
第114図	S I 012住居跡	165	第150図	台地整形区画（S X020・021）セクショ ン	215
第115図	S K411住居跡	166	第151図	2号溝平面図	216
第116図	S X005藏骨器を埋納した土坑	167	第152図	台地整形区画（S X020・021）内土坑 (1)	218
第117図	奈良・平安時代遺構外出土遺物	168	第153図	台地整形区画（S X020・021）内土坑 (2)	219
第118図	中世居館跡全体図	171	第154図	台地整形区画（S X020・021）出土青磁	219
第119図	土塁・溝セクション図	174	第155図	台地整形区画（S X020・021）出土陶器	220
第120図	掘立柱建物跡・櫛列配置図	176	第156図	台地整形区画（S X020・021）出土石製 品	220
第121図	S B001掘立柱建物跡	177	第157図	S B005掘立柱建物跡・010櫛列	222
第122図	S B002掘立柱建物跡	178	第158図	中世土坑（1）	223
第123図	S B003掘立柱建物跡	179	第159図	中世土坑（2）	225
第124図	S B004掘立柱建物跡・001櫛列	180	第160図	S D033野馬上手	226
第125図	002・003・004・005櫛列	181			
第126図	006・007櫛列	182			
第127図	008・009櫛列	183			
第128図	地下式坑 S K344・356	184			
第129図	火葬施設・火葬墓平面図	185			
第130図	方形堅穴状遺構・土坑（1）	187			

第161図	S D038・040・041・042・043溝	…228	第163図	S D022・023溝	…232
第162図	S D019・020・021・024・030・031・ 035～037溝	…229	第164図	溝・グリッド出土石製品	…233
			第165図	溝・グリッド出土銭貨	…234

表 目 次

第1表	文化層別石器群概要一覧	…12	第10表	旧石器時代石器属性表（2）	…39
第2表	文化層別石材器種組成表	…13	第11表	縄文時代土坑一覧表	…101
第3表	第Ⅰ文化層第1 ブロック 母岩器種組成表	…16	第12表	遺構外出土円盤計測表	…132
第4表	第Ⅱ文化層第2 ブロック 母岩器種組成表	…23	第13表	遺構外出土土器片垂計測表	…132
第5表	第Ⅲ文化層第3 ブロック 母岩器種組成表	…24	第14表	縄文時代石器組成表	…152
第6表	第Ⅳ文化層第4 ブロック 母岩器種組成表	…27	第15表	縄文時代石器属性表（1）・（2）	…156
第7表	第Ⅴ文化層第5 ブロック 母岩器種組成表	…33	第16表	中世居館跡出土砥石一覧表	…204
第8表	単独出土石器母岩器種組成表	…34	第17表	中世居館跡出土銭貨一覧表	…204
第9表	旧石器時代石器属性表（1）	…38	第18表	S K001（墓域）出土砥石一覧表	…210
			第19表	S X012出土砥石一覧表	…212
			第20表	S X020・021出土石製品一覧表	…220
			第21表	中世土坑計測表（S X020・021）	…221
			第22表	溝・遺構外出土石製品一覧表	…234
			第23表	溝・グリッド出土銭貨一覧表	…234

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	ド	
図版2	遺跡全景航空写真・遠景	図版5	第Ⅳ文化層第4 ブロック遺物出土状況
図版3	第Ⅰ文化層第1 ブロック遺物出土状況		単独出土15 18R - 82グリッド遺物出土
	第Ⅰ文化層第1 ブロック東セクション (西から)		状況（南西から）
	第Ⅱ文化層第2 ブロック遺物出土状況		単独出土16 19R - 30グリッド遺物出土
	(南東から)		状況（北西から）
図版4	第Ⅲ文化層第3 ブロック遺物出土状況 (北西から)	図版6	縄文時代住居跡 S I 001・002・003
	第Ⅴ文化層第5 ブロック遺物出土状況 (北西から)	図版7	縄文時代住居跡 S I 004・007・010
	単独出土石器6・11・19S - 01, 11グリッ	図版8	縄文時代住居跡 S I 013・014・015
		図版9	炉穴 S K003・006・008・043・044・ 162・164・165・168・176・182・183・ 195

- 図版10 炉穴 S K004・012・196・197・204・
212・S X009・010
- 図版11 炉穴 S K171・173・198・199・200・
201・206・207・211・213
- 図版12 炉穴 S K214・217・218・219・243・
244・245・653
- 図版13 炉穴 S X013・014・S K037・166・170・
175・187・188・216
- 図版14 炉穴 S K005・174・175・205・209・
646・S X015・1号土坑
- 図版15 炉穴 S K014・203・533・611・616・
621・625・700
- 図版16 土坑 S K031・032・034・035・036・
039・086・087・088・159・177・178・
179・215
- 図版17 土坑 S K030・172・190・191・240・
628・634・S X006
- 図版18 土坑 S K011・017・041・202・239・
242・647・654
- 図版19 焼土 S K038・S X001・002・003・004・
011・016
- 図版20 古墳 S D004、奈良・平安時代住居跡 S I
005・006
- 図版21 奈良・平安時代住居跡 S I 011・012・S
X005骸骨器を埋納した土坑
- 図版22 中世居館跡航空写真(1)
- 図版23 中世居館跡航空写真(2)
- 図版24 中世居館跡土壙A・溝 S D025
- 図版25 中世居館跡土壙B・溝 S D025・026・東
区内遺構
- 図版26 中世墓域 S K001・地下式坑 S K344・土
坑 S K390・651・652
- 図版27 中世墓域 S K001
- 図版28 中世墓域内遺物出土状況・S X012台地整
形区画・S X020・021台地整形区画
- 図版29 土坑 S K501・502・503・504・505・
506・507・509
- 図版30 土坑 S K510・511・512・513・514・
515・516・517
- 図版31 土坑 S K518・519・520・522・523・
524・525・526
- 図版32 土坑 S K470・471・474・475・476・
477・478・479・488・528・529・534
- 図版33 土坑 S K480・482・483・484・485・
489・490・491・530・531
- 図版34 野馬土手 S D033
- 図版35 堀状遺構 S D038
- 図版36 溝状遺構 S D019・020・038・040・041・
042・043
- 図版37 溝状遺構 S D022・023・030
- 図版38 第I文化層第1ブロック石器・第II文化
層第2ブロック石器
第III文化層第3ブロック石器・第V文化
層第5ブロック石器
- 図版39 第IV文化層第4ブロック石器・単独出土
石器
- 図版40 繩文住居出土土器 S I 001・002・003・
004・010・013
- 図版41 繩文住居出土土器 S I 007
- 図版42 繩文住居出土土器 S I 014・炉穴出土繩文
土器(1)
- 図版43 炉穴出土繩文土器(2)
- 図版44 炉穴出土繩文土器(3)
- 図版45 炉穴出土繩文土器(4)
- 図版46 跪窓出土繩文土器・上坑出土繩文土器
- 図版47 炉穴・遺構外出土繩文土器
- 図版48 遺構外出土繩文土器(1)
- 図版49 遺構外出土繩文土器(2)
- 図版50 遺構外出土繩文土器(3)
- 図版51 遺構外出土繩文土器(4)
- 図版52 遺構外出土繩文土器(5)
- 図版53 遺構外出土繩文土器(6)
- 図版54 遺構外出土繩文土器(7)
- 図版55 遺構外出土繩文土器(8)

- 図版56 遺構外出土縄文土器 (9)
図版57 遺構外出土縄文土器 (10)
図版58 遺構外出土縄文土器 (11)
図版59 遺構外出土縄文土器 (12)
図版60 遺構外出土縄文土器 (13)
図版61 遺構外出土縄文土器 (14)
図版62 遺構外出土縄文土器 (15)
図版63 遺構外出土縄文土器 (16)
図版64 遺構外出土縄文土器 (17)
図版65 遺構外出土縄文土器 (18) · 土製品
図版66 縄文時代石器 (1)
図版67 縄文時代石器 (2)
図版68 縄文時代石器 (3)
図版69 縄文時代石器 (4)
図版70 縄文時代石器 (5)
図版71 縄文時代石器 (6)
図版72 縄文時代石器 (7)
図版73 縄文時代石器 (8)
図版74 縄文時代石器 (9)
図版75 奈良・平安時代住居跡出土遺物 S I 005 · 006 · 011
図版76 奈良・平安時代住居跡出土遺物 S I 011 · 012 · S K 411 · S X 005 · 遺構外出土遺物
図版77 中世居館跡出土陶磁器
図版78 中世居館跡出土鉄製品・石製品(砥石)
図版79 中世居館跡出土錢貨
図版80 中世墓 (S K 001) 墓出土陶磁器・砥石
図版81 中世墓出土火葬骨
図版82 台地整形区画 S X 012 · 020 · 021出土遺物 · 潤 S D 020 · 030出土遺物 · 遺構外出土遺物
図版83 土壙、溝、遺構外出土錢貨

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、千葉ニュータウン建設事業関連として、印西市南部の松崎地区に内陸工業用地を造成整備することを計画し、地区内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、平成5年7月より当財団が発掘調査を実施することとなった。

松崎遺跡は、既存の道路や地形などから便宜的に松崎Ⅰ遺跡～Ⅹ遺跡の計7遺跡に分け、発掘調査は平成5年7月の松崎Ⅸ遺跡の調査から開始した（第1図）。

松崎Ⅲ遺跡の調査は平成7年4月から開始し、平成9年度・10年度・11年度・12年度と調査を行い、15年度をもって終了した。この間、平成11年度には遺跡範囲の見直しがあり、松崎Ⅱ遺跡と接する北側部分で、台地の中央までの遺跡範囲が南側の谷津の縁まで拡大された。

整理作業は、平成14年度から開始し、16年度をもって終了した。なお、報告書刊行については平成17年度に行うこととなった。発掘調査と整理作業の実施期間・内容・担当は以下の通りである。

平成7年度 発掘調査

調査期間 平成7年4月5日～平成7年7月7日

調査面積 4,000m²

（上層）確認調査400m²/4,000m²、本調査0m²

（下層）確認調査240m²/4,000m²、本調査152m²

担当職員 萩田分室長 藤淳一、技師 立和名明美

（組織） 印西調査事務所長 谷句

平成7年度 発掘調査

調査期間 平成7年7月3日～平成7年8月31日

調査面積 5,900m²

（上層）確認調査590m²/5,900m²、本調査1,100m²

（下層）確認調査268m²/5,900m²、本調査0m²

担当職員 技師 立和名明美

（組織） 印西調査事務所長 谷句

平成9年度 発掘調査

調査期間 平成9年12月1日～平成10年2月10日

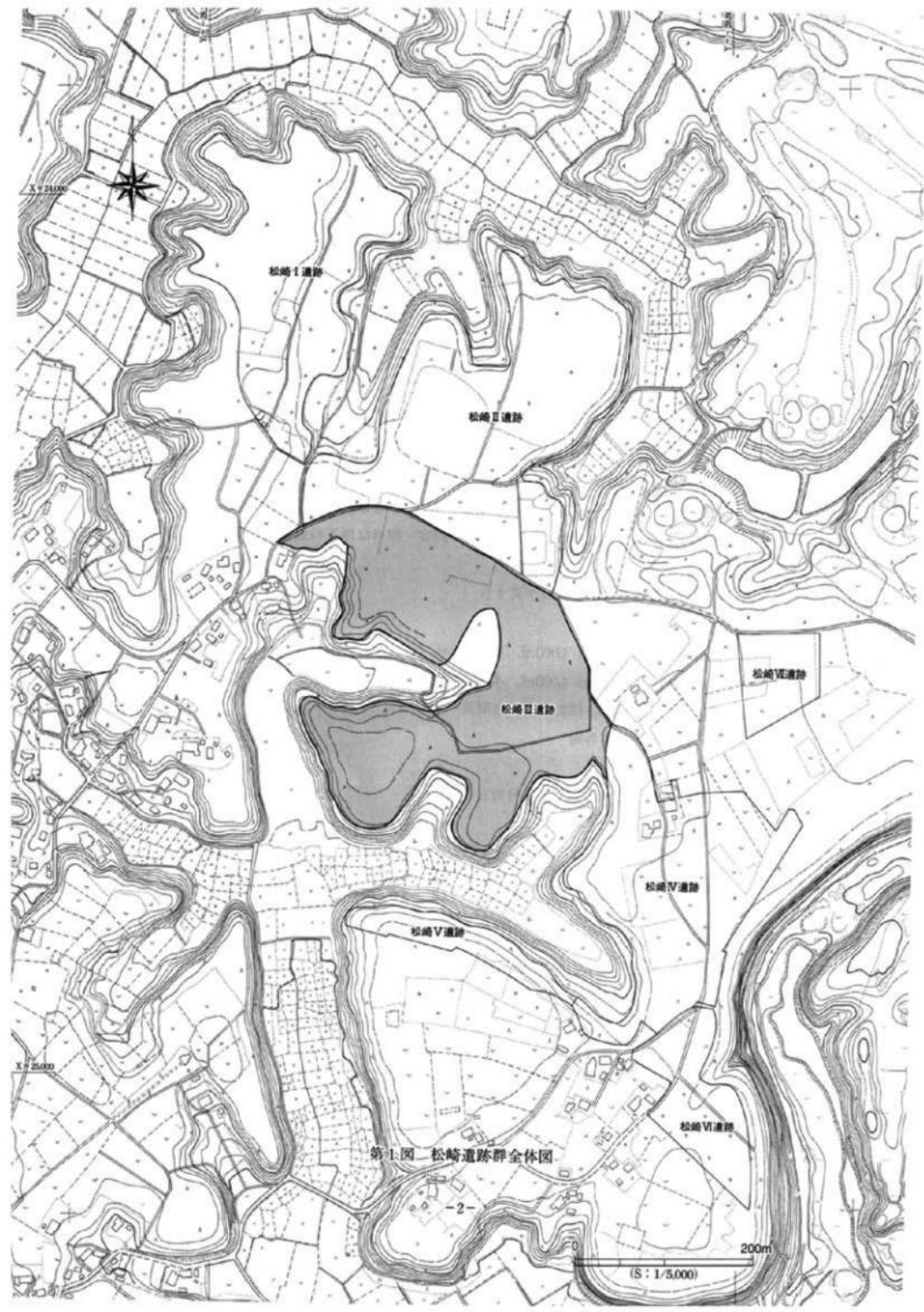
調査面積 3,000m²

（上層）確認調査415m²/3,000m²、本調査0m²

（下層）確認調査184m²/3,000m²、本調査0m²

担当職員 主任技師 石田清彦、技師 田井知二、大内千年

（組織） 北部調査事務所長 折原繁



平成10年度	発掘調査
調査期間	平成10年10月1日～平成11年3月26日
調査面積	34,700m ²
	(上層) 確認調査3,470m ² /34,700m ² , 本調査5,800m ²
	(下層) 確認調査 967m ² /23,090m ² , 本調査 - m ²
担当職員	研究員 猪股昭喜, 花鳥理典, 鈴木弘幸, 竹田良男, 主任技師 落合章雄, 大内千年 (組織) 北部調査事務所長 折原繁
平成11年度	発掘調査
調査期間	平成11年4月6日～平成11年9月30日
調査面積	11,610m ²
	(上層) 確認調査 - m ² / - m ² , 本調査5,810m ²
	(下層) 確認調査472m ² /11,610m ² , 本調査513m ²
担当職員	研究員 萩原恭一, 竹田良男, 織田良昭, 主任技師 石田清彦 (組織) 北部調査事務所長 折原繁
平成11年度	発掘調査
調査期間	平成11年10月1日～平成12年3月29日
調査面積	21,053m ²
	(上層) 2,100m ² /21,053m ² , 本調査18,000m ²
	(下層) 850m ² /21,053m ² , 本調査0m ²
担当職員	研究員 小原邦夫, 高橋覚 (組織) 北部調査事務所長 折原繁
平成12年度	発掘調査（6）
調査期間	平成12年10月16日～平成12年12月13日
調査面積	651m ²
	(上層) 98m ² /651m ² , 本調査0m ²
	(下層) 196m ² /651m ² , 本調査0m ²
担当職員	主席研究員 池田大助 (組織) 北部調査事務所長 石田廣美
平成14年度	整理作業
整理期間	平成14年4月1日～平成15年3月31日
整理内容	水洗・注記の途中～原稿執筆の一部
担当職員	主席研究員 池田大助, 北総調査室長 薮淳一, 上席研究員 安川正行, 大郷一実, 横山昌彦, 矢木節朗, 西野雅人, 研究員 小笠原永隆 (組織) 調査部副部長兼北部調査事務所長 古内茂
平成15年度	整理作業
整理期間	平成15年4月1日～平成15年4月30日, 平成15年6月16日～平成15年10月31日
整理内容	原稿執筆の一部

担当職員 北総調査室長 那淳一、上席研究員 谷鹿栄一、研究員 立和名明美

(組織) 調査部副部長兼北部調査事務所長 古内茂

平成15年度 発掘調査

調査期間 平成15年6月2日～平成15年9月12日

調査面積 3,966m²

(上層) 397m²/3,966m²、本調査792m²

(下層) 256m²/3,966m²、本調査340m²

担当職員 北総調査室長 那淳一

(組織) 調査部副部長兼北部調査事務所長 古内茂

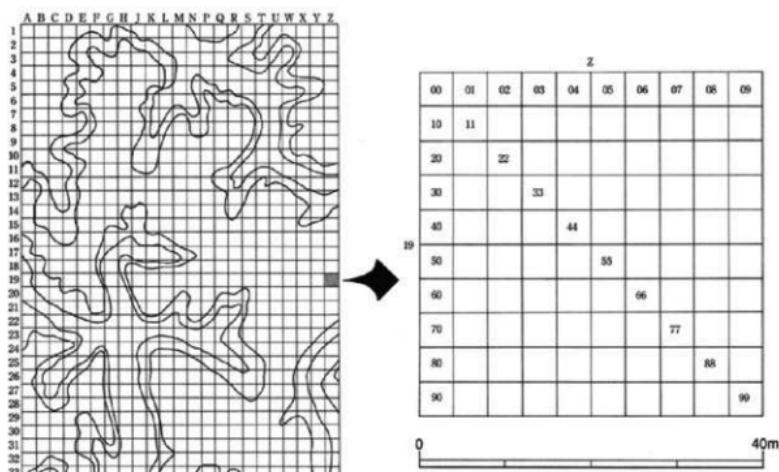
平成16年度 整理作業

整理期間 平成16年6月16日～平成17年3月25日

整理内容 水洗・注記から原稿執筆・編集

担当職員 副所長 岡田誠造 北総調査室長 雨宮龍太郎 上席研究員 桦原弘二、渡邊高弘

(組織) 北部調査事務所長 古内茂



第2図 グリッド名称と分割方法

2 調査の方法と概要

発掘区の設定は、公共率標に基づき遺跡全体を覆うように40m×40mの大グリッドを設定した。この大グリッドは松崎Ⅲ遺跡のみでなく、松崎Ⅰ遺跡から松崎Ⅶ遺跡までの松崎遺跡全体を覆う大グリッド網である。この大グリッド網は、北から南に算用数字で1・2・3・・・、西から東にアルファベットでA・B・C・・・とし、両者を組み合わせて1A・2Bのように大グリッド名をつけた。ただし、アルファベットのT・O・Vは使用していない。大グリッド内の小グリッドは4m×4mとし、北西隅を00とし、東へ01・02・03まで、北から南へ00、10、20・・・とし、00から99までの小グリッドに分割した（第2図）。

調査は、上層・下層ともに確認調査を実施した後に、その結果に基づいて本調査を実施した。確認調査の面積は、上層は全体の10%、下層は全体の4%を基本とし、遺構の分布が散漫な場合や、石器の出土が少數にとどまる場合には適宜拡張を行って確認調査の範囲内で調査を終了した（第4図）。

遺構番号の付与に不統一があるが、新たに統一することはせず、調査時のままの遺構番号で報告する。これについては、調査時の図面・写真、遺物の注記との対照の際の便宜を考慮した結果である。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と環境

松崎遺跡群は、千葉県の北部に位置する印西市に所在する。印西市は、北側に利根川が流れ、西側に手賀沼、南側に印旛沼があり、これらに囲まれた北総台地の一画を成す台地を中心に広がる。松崎遺跡群は、印西市の南部地域、印旛沼の現湖沼面から谷津をやや北に遡った台地上に位置する（第3図）。

松崎Ⅲ遺跡は、北側の松崎Ⅱ遺跡から続く台地の南側にあたる部分と、そこから谷津で隔てられた台地上に位置し、総面積は45,590m²で、標高は25～27mである。

2 松崎遺跡群と周辺の遺跡

松崎遺跡群と周辺の遺跡の調査成果については、平成15年度に当教育振興財団で刊行した『松崎地区内陸上業用地造成整備事業埋文化財調査報告書1－印西市松崎Ⅱ遺跡－』に記している。ここでは、上記報告書中の周辺遺跡の概観に加え、その後の調査成果を記載する。

（1）旧石器時代

旧石器時代の石器集中地点は、これまで松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ遺跡（1・2・3・4・5・6）で検出していたが、平成15年度には、松崎Ⅲ遺跡7地点の調査で関東ロームV～IX層にわたる1か所を更に検出した。また松崎Ⅳ遺跡5地点の調査でもV～IX層にわたる1か所を新たに検出した。これらの中では特に、松崎Ⅱ遺跡IX層の石器群は、環状ブロックとなる可能性がある。

本遺跡と文谷を挟んで西側の台地上に所在する船尾白幡遺跡（21）では、II層の細石刃ブロックのまとまりが見られる。手賀沼水系と印旛沼水系の分水嶺には木刈峠遺跡（29）や一本桜南遺跡（28）がある。木刈峠遺跡では3枚の文化層に25ブロック、6,200点に及ぶ石器が出土した。また、泉北側第3遺跡（30）では環状ブロックが検出されており、南西ヶ作遺跡（27）や六角遺跡（33）でも石器が出土している。新川を挟んだ八千代市のおおびた遺跡（43）では、有舌尖頭器やナイフ形石器が出土している。



第3図 松崎Ⅲ遺跡の位置と周辺の遺跡

(2) 縄文時代

早期では、松崎Ⅲ遺跡と谷津を挟んだ松崎Ⅴ遺跡で、早期条痕文系上器の包含層と炉穴群を検出した。また、松崎Ⅳ遺跡では陥穴と土坑各1基を検出した。周辺地域では炉穴群と貝層が確認された船尾貝塚(20)をはじめ、早期の遺跡が多く確認されている。船尾白幡遺跡(21)でも炉穴とともに燃系文期から条痕文期にかけての遺物が多く出土している。印旛沼南岸の新川を挟んだ八千代市側の台地上に位置する栗谷遺跡(40)では炉穴が22基、上谷遺跡(42)では31基の炉穴が検出されており、境堀遺跡(38)、向境遺跡(39)、役山東遺跡(41)でも炉穴が確認されている。また、印旛村トヶ前遺跡(14)では、炉穴の他に条痕文系土器を主体とした遺物を多量に含んだ包含層がみられた。

前期では遺跡の数は少ないが、八千代市の中ノ台遺跡では黒浜式期の堅穴住居跡10軒、京市北遺跡(32)で閑山式期の炉が検出されている。中期では松崎遺跡群と同一台地上の前戸遺跡(10)、三郷台遺跡(13)、三郷遺跡(12)、別所大山遺跡(31)がある。いずれも加曾利E式土器が出上している。後・晩期では加曾利B式土器を大量に検出した内根遺跡(22)がある。西根遺跡は現水田面から約1m~2m下の低湿地で検出された遺跡である。また、印旛沼南岸の台地上には阿玉台式の土器を出土する佐山貝塚(18)と、神野貝塚(36)がある。

(3) 弥生時代から古墳時代前期

松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期の集落を検出した。Ⅰ遺跡では7基の初期古墳(出現期古墳・方形周溝墓)も検出した。松崎遺跡周辺では弥生中期の遺跡はあまり検出されていないが、印旛沼を挟んだ南西側台地上に位置する田原庄遺跡(35)では40軒の住居跡を伴う環濠集落が調査されている。後期後葉になると集落は多くなり、その密度も高くなる。松崎Ⅳ遺跡で住居跡が検出されたのをはじめ、山王台遺跡(9)、船尾白幡遺跡(21)、船尾町田遺跡(23)、馬ヶ台遺跡(18)、東場遺跡(17)、向新田遺跡(26)等が知られる。印旛沼の南岸では栗谷遺跡(40)、おおびた遺跡(43)、笠田遺跡群、南西岸では道地遺跡(36)、子の神台遺跡、間見穴遺跡、佐山台遺跡などが挙げられる。しかし、これに比して墳墓の検出は僅少である。

(4) 古墳時代中・後期

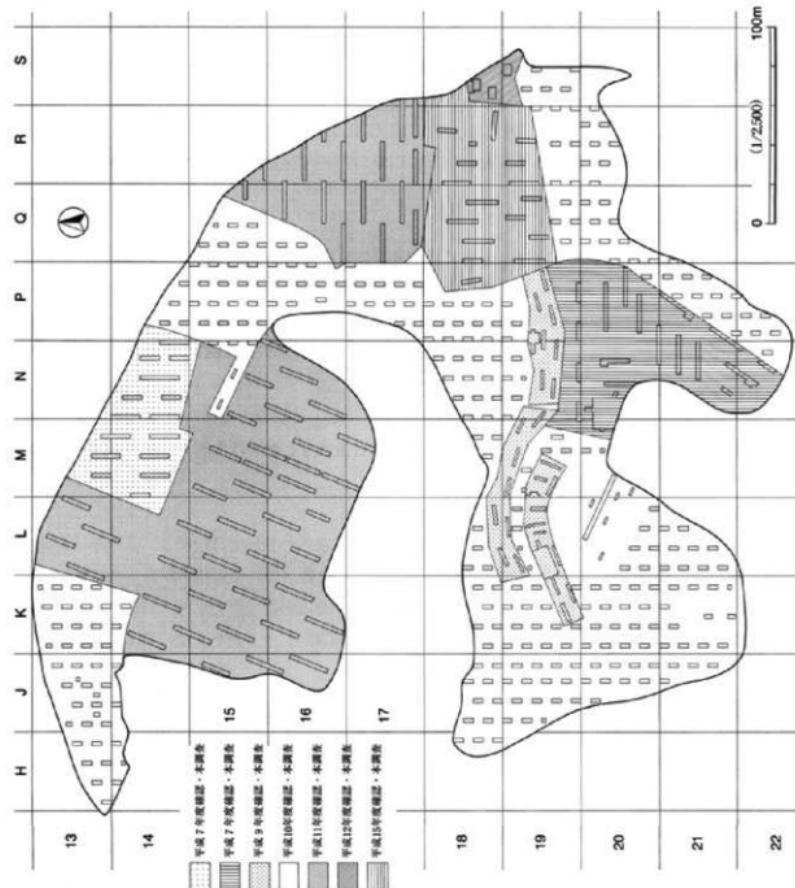
古墳時代中期の遺構は、松崎遺跡群では検出していないが、後期の住居跡は松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡で検出されている。周辺の遺跡では同一台地上の東海道遺跡(11)、前戸遺跡(10)で集落が調査されており、東側の台地では遷昌寺遺跡(16)で集落が検出されている。西側台地上の船尾町田遺跡(23)では30m級の前方後円墳を含む3基の後期古墳が調査され、箱式石棺を埋葬施設とした7世紀中頃の終末期古墳と考えられている。

(5) 奈良・平安時代

松崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ遺跡で奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。同じ台地上の遺跡では前戸遺跡、東海道遺跡等が知られ、西側の支谷を隔てた台地上には、船尾白幡遺跡や鳴神山遺跡(24)などの大規模な集落が形成される。鳴神山遺跡は8世紀初頭に集落が形成され、10世紀前半まで続く遺跡で「弘仁九年・・・」の紀年名墨書き土器や長文の墨書き土器を含む1,000点に及ぶ墨書き・刻書き土器が注目される。また、祭祀を示すような遺構や墨書き土器、人形・馬形形代・梯子などの木製品を出土した西根遺跡もある。印旛沼の低湿地を挟んだ南側台地上には役山遺跡(37)、上谷遺跡(42)などもある。これらの遺跡を含む松崎遺跡周辺は、古代の船尾郷の中心的な地区と考えられる。

(4) 中・近世

松崎Ⅲ遺跡(7)地点において、深さ2.5m以上の薬研堀を伴う1条の土塁を検出した。この塁は両端にトンネルが付くものである。また、周辺遺跡には中世陶磁器を多数出土した船尾城跡(19)があり、白井城に付属する城、あるいは砦とされている。また、松崎Ⅰ遺跡の谷を挟んだ北側には結縁寺城跡(8)がある。この他、墓域や地下式坑を検出した白井谷奥遺跡(16)や、中世土坑墓、天目茶碗等が出土した仲内遺跡(15)、塚3基を検出した神野貝塚(36)内の塚群などがある。



第4図 上層確認トレンチ配置・本調査範囲

参考文献

- (財) 印旛郡市文化財センター 1992 「トヶ前遺跡発掘報告書」
- (財) 印旛郡市文化財センター 「印旛郡市文化財センター年報」昭和62年度～平成5年度
- 印旛村教育委員会 1980 「古出馬々台遺跡縄文早期炉穴址群の調査」
- おおびた遺跡調査団 1975 「おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設地内遺跡」
- 小高春雄 1995 「千葉県における弥生時代後期上器の地域性について」『研究紀要16』(財) 千葉県文化財センター
- 佐藤克己 1978 「船尾城遺跡」八千代市遺跡調査会
- 都淳一 1998 「船橋印西線埋蔵文化財報告書1－八千代市島田込ノ内遺跡－」(財) 千葉県文化財センター
- 鈴木道之助 1975 「木刈跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ」千葉県都市公社
- 千葉県教育委員会 1997 「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛・印旛地区(改訂版)－」
- 千葉県教育委員会 1990 「千葉県所在古墳詳細分布調査報告書」
- 千葉県教育委員会 「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報」昭和47・53・59・62・63年度、平成元～6年度
- (財) 千葉県文化財センター 「財團法人千葉県文化財センター年報」昭和50・55年度、平成5～12年度
- (財) 千葉県文化財センター 「房総考古学ライブラー4 弥生時代」
- (財) 千葉県文化財センター 「房総考古学ライブラー6 古墳時代(2)」
- 野村幸希・古内茂 1976 「船尾白幡遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査V」(財) 千葉県文化財センター
- 古内 茂 1984 「船尾町田遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査VI」(財) 千葉県文化財センター
- 八千代市史料編纂委員会 1974 「八千代の歴史」「八千代市史」
- 八千代市教育委員会 1988 「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和62年度」
- 八千代市教育委員会 1995 「市内遺跡発掘調査報告 平成7年度」
- 八千代市教育委員会 「八千代市埋蔵文化財発掘調査年報」平成6・7年度
- 八千代市教育委員会 1987 「八千代市埋蔵文化財調査報告書」
- 八千代市教育委員会 1994 「八千代市埋蔵文化財調査年報」
- 黒 茂美 2001 「栗谷遺跡」八千代市遺跡調査会

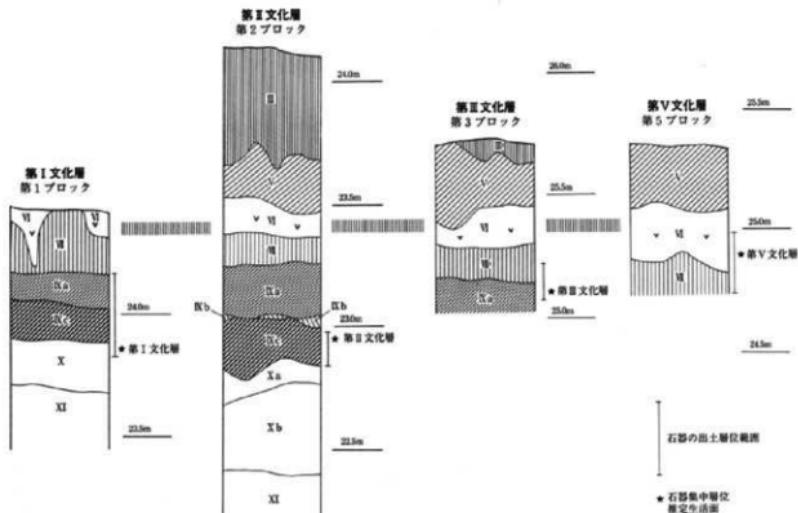
第2章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

1 概要

(1) 基本層序 (第5図)

基本層序は第5図のとおりである。調査範囲が東西400m、南北400mと広く（第6・7図）、また、地形的には、舌状の台地が三つ複合した区域であるため、土層の堆積状況が均一でなく、層序区分が異なる点もみられる。ここでは、各ブロックが、それぞれ離れて分布して出土していることから、第1～3・5ブロックの4ブロックの層序を図示した。また、併せて、各ブロックでの石器の出土層位範囲と石器集中層位（推定生活面）を図示した。



第5図 基本層序

これらの区域の共通した特徴は、第1黒色帯に相当するV層が明確にとらえることが可能であることがまずあげられる。また、立川ローム層上層に相当するIII層が、下部に向かってソフト化が進んでおり、本来あると思われるいわゆる「ハードローム層」を取り込んで、V層までソフト化が進んでいることがあげられる。III層の下部は、本来は、IV層が存在したと思われるが、明確に区分することが困難であったため、本遺跡においては、IV層も含めて、ソフト化している層をIII層として捉えた。

これらの区域の相違点は、調査区北東部に位置する第2ブロックにおいて、IX b層がブロック状に混在しており、他の区域では、IX b層を識別することが困難で、IX a層の直下にIX c層が堆積していた。

III層（明褐色土） 本層が立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。色調は均質ではない。本遺跡では、下部にソフト化が著しく及んでおり、ほとんどがV層まで及んでいる。

IV層（明褐色土） 硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。特徴的な赤色スコリアを含み、全体に赤みを帯びて明色。本遺跡においては、いわゆる「ソフトローム層」であるIII層に取り込まれており、IV層を明確に識別することが困難であったが、III層の下部がわずかに赤みをもつことから、IV層はIII層の下部に堆積していた可能性が高い。

V層（暗灰褐色土） 第1黒色帯に相当する。全体に黒ずんでいる。比較的、第1黒色帯を識別することが容易である。V層の上部まで、ソフト化が進んでいる区域がみられる。

VI層（暗灰黃白色土） AT（姶良丹沢火山灰）が集中的に包含される。黒色スコリアを含み、赤色スコリアも少量含む。

VII層（暗灰褐色土） 第2黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。黒色スコリアを含み、赤色スコリアも少量含む。ATブロックが若干混在する。

IX a層（濃暗灰褐色土） 第2黒色帯下部の上半である。VII層よりも黒ずんでいる。黒色スコリアを多く含み、赤色スコリアも含む。

IX b層（濃暗灰褐色土） 第2黒色帯下部の間層。IX a層よりも若干褐色分が強く、赤みがある。黒色スコリアを多く含む。大粒の赤色スコリアを含む。第2ブロックのみで、ブロック状に識別できたが、他のブロックにおいては、識別できなかった。

IX c層（淡黒褐色土） 第2黒色帯下部の下半である。黒色スコリアを多く含む。大小の赤色スコリアを含む。白色スコリアを微量含む。

X a層（暗灰褐色土） 黒色スコリアを含み、赤色スコリアを微量含む。

X b層（暗灰褐色土） X a層よりも若干暗く、上下の層に比べて、スコリアをほとんど含まなくなる。立川ローム最下層である。

X I層（灰褐色土） 武藏野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。

2. 文化層の概要（第6・7図、第1・2表）

文化層の対応表は、第1表のとおりである。出土総点数は108点である。旧石器時代の文化層は、第I文化層～第V文化層の5文化層に分離できた。各文化層は、すべて集中地点を示すブロックは1箇所で構成される。そのほかに、これらの文化層に所属しないものは、単独出土石器として取り扱った。

文化層別の出土分布とブロックの位置は、第7図のとおりである。各文化層とも出土層位に上下の幅をもつが、各文化層の出土層位と出土集中層位から生活面を推定すると以下のとおりとなる。

(1) 第I文化層：調査区南東部に分布しており、南東に傾斜する斜面に分布する。第1ブロックが相当する。出土層位は、X層上部～IXa層にかけて出土している。X層上部に集中しており、X層上部に生活面をもつ文化層と推定できる。

(2) 第II文化層：調査区北東部に分布しており、南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第2ブロックが相当する。出土層位は、IXc層から出土している。出土点数が少ないとから、集中する層は明確ではない。IXc層に生活面をもつ文化層と推定できる。

(3) 第III文化層：調査区東側の台地の平坦面に立地する。第3ブロックが相当する。出土層位は、IXa層上部～VII層下部にかけて出土する。IXa層上部に集中することから、IXa層上部に生活面を持つと推定される。

(4) 第IV文化層：調査区東側に分布しており、北西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第4ブロックが相当する。出土層位は、IXa層上部～V層にかけて出土している。V層に集中しており、V層に生活面をもつ文化層と推定できる。

(5) 第V文化層：調査区中央部北側に分布しており、南東に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第5ブロックが相当する。出土層位は、VII層上部～VI層下部にかけて出土している。VI層下部に集中しており、VI層下部に生活面をもつ文化層と推定できる。

第1表 文化層別石器群概要一覧

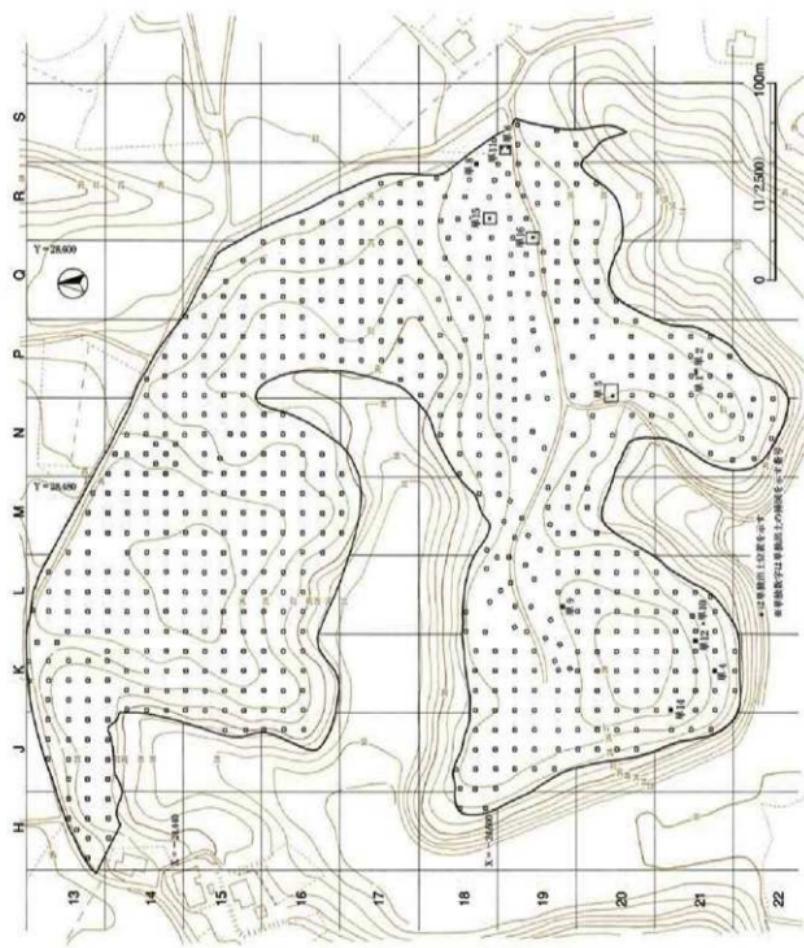
文化層	ブロック	出土層位	推定生活面	出土 点数	器種組成の特徴	石材組成の特徴
I	1	X層上部～IXa層	X層上部	44	ナイフ形石器2点、台形様石器2点、櫻形石器1点、櫻形石器調整剝片1点。	黒曜石と珪質頁岩のみで構成される。黒曜石が41点で主体を占める(93.18%)。その他の石材は、珪質頁岩が3点、出土している。
II	2	IXc層	IXc層	3	台形様石器1点、折断剝片1点、剝片1点。	流紋岩・頁岩で構成される。台形様石器は、流紋岩を用いている。
III	3	IXa層上部～VII層下部	IXa層上部	6	製品は出土していない。微細剝離痕のある剝片1点、折断剝片1点。	頁岩を主体として、ガラス質黒色安山岩・流紋岩を用いている。
IV	4	IXa層上部～V層	V層	31	ナイフ形石器2点、二次加工のある剝片5点、微細剝離痕のある剝片3点、調片16点、碎片3点、敲打1点、建1点。	剝片石器はすべて珪質頁岩で構成されている。櫻石器はチャートである。
V	5	VII層上部～VI層下部	VI層下部	8	ナイフ形石器2点、微細剝離痕のある剝片1点、折断剝片5点。	すべて黒曜石で構成されている。
単独	単独	---	---	16	ナイフ形石器4点、櫻形石器1点、二次加工のある剝片2点、微細剝離痕のある剝片1点、折断剝片2点、剝片6点。	ガラス質黒色安山岩・頁岩・チャートなどを用いている。

(5) 単独出土石器：単独出土石器は、第6図の確認グリッドと単独出土状況で示したとおり、確認調査時に出土したものがほとんどである。なかには、単独出土5・6・11・15・16は拡張調査を行ったが、遺物のひろがりはみられなかった。単独出土したものは、層位的にまとまつたものではない。分布状況は、大きく分けて、3箇所にみられる。調査区南西部の台地の縁辺部と調査区中央部南側の台地中央部と調査区東側の台地中央部に分布している。このうち、調査区南西部の台地の縁辺部から、単独出土4・9・10・12・14がまとまって出土しており、この区域に石器の集中区域があった可能性がある。

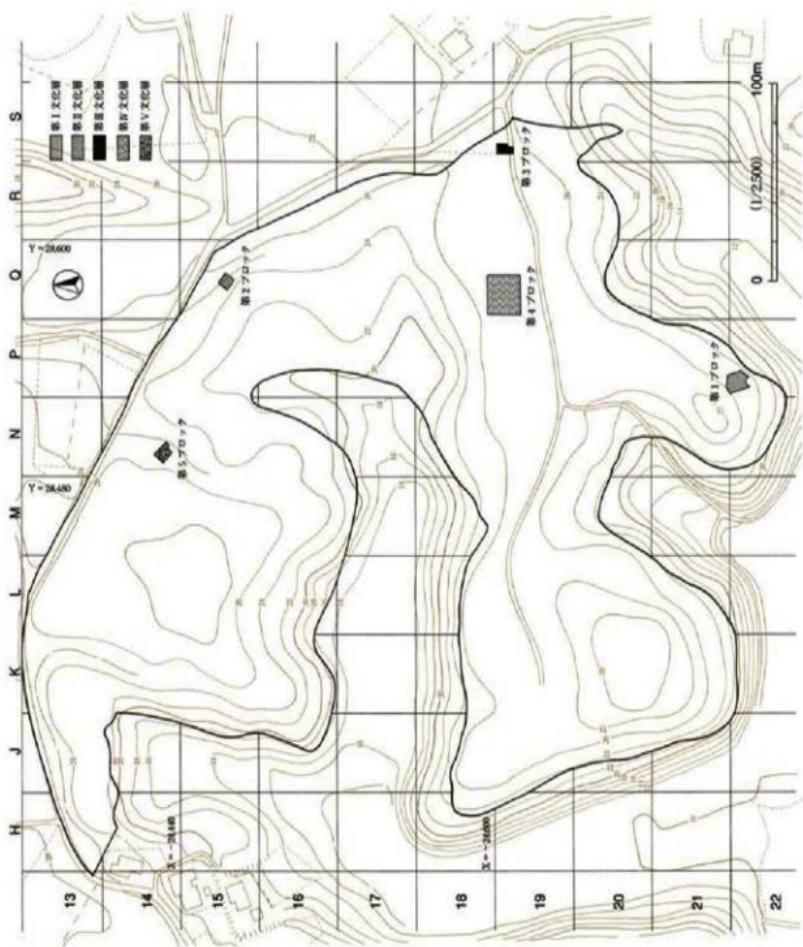
第2表 文化層別石材器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	ナイフ 形 石器	古 形 石器	楔 形 石器	複 形 石器 調 整 削 片	二 次 加 工 の あ る 削 片	鐵 錐 削 離 片	折 断 削 片	石 核	剥 片	砂 片	離 石	運	総 計	組 成 比 (%)
I	1	黒曜石	2 0.71	2 14.14	1 2.38	1 1.21	1 0.09	5 3.72	8 35.99	2 44.68	11 1.48	8 0.62			41 105.02	37.96 22.35
		珪質頁岩						2 0.53			1 0.13				3 0.66	2.78 0.14
I	点数合計		2 0.71	2 14.14	1 2.38	1 1.21	1 0.09	7 4.55	8 35.99	2 44.68	12 1.61	8 0.62			44 105.68	40.74 22.49
I	重量合計															
II	2	泥灰岩		1							1				2 26.33	1.85 5.60
		頁岩		3.6							22.73				1 7.67	0.93 1.63
II	点数合計			1 3.6											3 34.00	2.78 7.24
II	重量合計															
III	3	ガラス質黑色安山岩			1				1		1				1 5.52	0.93 0.50
		泥灰岩													1 7.72	0.07 0.17
III	点数合計				1 3.6				1 0.62		22.73				3 8.34	0.93 1.77
III	重量合計														6 16.21	0.56 3.45
IV	4	珪質頁岩	2 6.22			5 17.81	3 8.99			16 27.31	3 0.64				29 70.92	26.83 15.19
		チャート													2 122.59	2.18 29.10
IV	点数合計					5 17.81	3 8.99			16 37.31	3 0.64	122.59			31 14.14	31.28.70 14.14 136.73
IV	重量合計														207.70	44.20
V	5	黒曜石	2 3.87					1 0.74	5 2.02						8 6.63	7.41 1.41
		頁岩		2 5.80				1 4.74	5 2.02						8 6.63	7.41 1.41
V	点数合計				2 3.87				1 0.74	5 2.02					3 12.25	7.41 1.41
V	重量合計															
VI	6	ガラス質黑色安山岩						1 8.3	2 16.5		1 7.43				4 32.03	3.70 6.82
		泥灰岩	1 2.70												1 3.73	0.93 0.58
VI	点数合計														5 27.82	0.58 5.02
VI	重量合計															
VII	7	珪質頁岩	1 0.62												1 0.62	0.93 0.12
		チャート		1 2.58							2 2.51				3 5.09	2.78 1.09
VII	点数合計							1 16.29			1 19.77				36.06	7.57
VII	重量合計								2 8.3	1 16.5	2 44.45				14 101.84	12.96 21.67
全他の点数合計		30	3 9.19	2 2.58	1 21.69	8 8.3	13 16.5	17 21.69	21 39	11 1.26	1 122.59	1 14.14	1 106	100.00		
全他の重量合計		19.98	17.74 19.98	4.96 4.96	1.21 1.21	38.93 38.93	15.24 15.24	64.33 64.33	41.68 41.68	121.85 121.85	1 1.26	1 122.59	1 14.14	1 106	100.00	
点数組成比(%)		9.26	2.78 4.25	1.88 3.78	0.93 1.06	7.41 8.78	12.04 3.88	15.74 13.69	1.85 9.51	36.11 25.93	10.19 0.27	0.93 26.09	0.93 3.01	100.00		
重量組成比(%)		4.25	3.78 5.78	1.06 1.06	0.26 0.26	8.78 8.78	3.88 3.88	12.04 13.69	1.85 9.51	36.11 25.93	10.19 0.27	0.93 26.09	0.93 3.01	100.00		

[上段: 点数、下段: 重量(g)]



第6図 旧石器時代確認グリッドと単独出土状況



第7図 旧石器時代本調査範囲とブロックの位置

3. 文化層

(1) 第 I 文化層

X 層上部に生活面をもつと推定される。第 1 ブロックが相当する。

① 第 1 ブロック (第 8 ~ 11 図、第 2 · 3 · 8 表、図版 3 · 38)

出土状況 平面分布は、約 4 m × 3 m の格子形の範囲からやや密集して分布している。南西部に集中地点がみられる。出土層位は、X 層上部 ~ IX a 層にかけて出土しており、X 層上部に集中する。

器種別分布 (第 8 図) の特徴は、集中地点から離れた北部に、台形様石器が 2 点まとめて出土している。集中地点においては、南側ではナイフ形石器が 2 点出土しており、北側では石核が 2 点出土しており、碎片が中央部からまとめて出土している。

母岩別分布 (第 9 図) の特徴は、黒曜石 001 が 41 点 (93.18%)、珪質頁岩が 3 点 (6.82%) 出土しており、2 母岩のみで構成されている。黒曜石 001 の占める割合が圧倒的に高い。黒曜石 001 は、集中地点から離れた北側と集中地点から出土している。接合資料は、黒曜石 001 が接合資料 1 ~ 3 の 3 つの接合資料がみられる。これらの接合資料の分布は、集中地点の外周部から出土する傾向がある。このうち、接合資料 1 の 16 ~ 18 の出土状況は、特徴的な分布を示している。集中地点から折断片である 16 と 18 が出土しており、集中地点から離れた北部に台形様石器である 17 が出土しており、近接して同一母岩の台形様石器の 3 が出土している。

珪質頁岩 001 は集中地点の東側に出土しており、接合資料はみられない。黒曜石 001 と集中区域が異なる。

出土遺物 総計 44 点出土した。母岩器種組成は、第 3 表のとおりである。

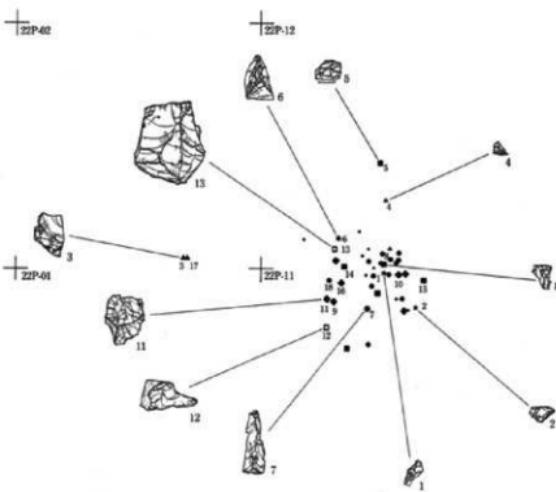
器種組成の特徴は、主要な器種は、ナイフ形石器 2 点、台形様石器 2 点、楔形石器 1 点、楔形石器調整剥片 1 点、二次加工のある剥片 1 点、微細剥離痕のある剥片 7 点、折断剥片 8 点、石核 2 点であり、出土点数に対して、二次加工・微細剥離痕・折断等の調整加工が施された石器の比率が高いことがいえる。

1 ~ 18 のうち、5 のみが珪質頁岩 001 であるが、他のものはすべて、黒曜石 001 である。比較的大きな母岩を本ブロックに持ち込んで、石器製作していることがうかがえる。

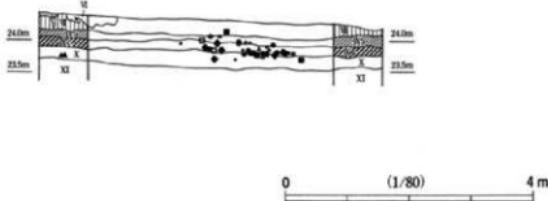
第 3 表 第 I 文化層第 1 ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	台形様石器	楔形石器	楔形石器調整剥片	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	折断剥片	石核	剥片	碎片	總計	組成率 (%)	
I	1	黒曜石	001	2 0.71	2 13.14	1 2.38	1 1.21	1 0.09	3 3.72	8 35.99	2 44.68	1 1.48	8 0.62	41 105.02	93.18 99.38	
		黒曜石 点数合計		2	2	1	1	1	3	8	2	11	8	41	93.18	
		黒曜石 重量合計		0.71	14.14	2.38	1.21	0.09	3.72	35.99	44.68	1.48	0.62	105.02	99.38	
		珪質頁岩	001						0.53				0.13	3	6.82	
		珪質頁岩 点数合計							0.53				0.13	3	6.82	
		珪質頁岩 重量合計							0.53				0.65	0.65	6.62	
1 点数合計				2	2	1	1	1	7	8	2	12	8	44	100.00	
1 重量合計				3.71	14.14	2.38	1.21	0.09	4.25	35.99	44.68	1.48	0.62	105.02	100.00	
点数組成比(%)				4.55	4.55	2.27	2.27	2.27	15.91	18.18	4.55	27.27	18.18	100.00		
重量組成比(%)				0.67	13.38	2.25	1.14	0.09	4.02	31.06	42.28	1.32	0.59	100.00		

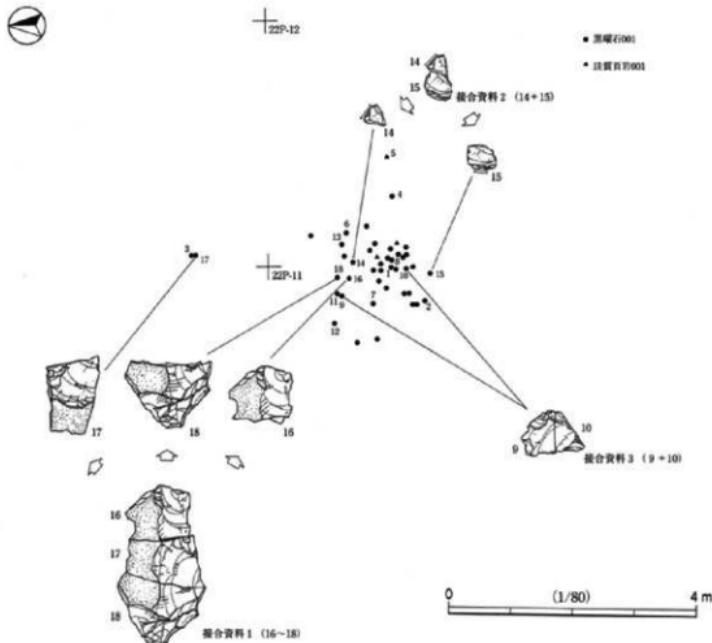
上段: 点数、下段: 重量(g)



- ナイフ形石器
 - ▲ 台形様石器
 - 楔形石器
 - 扇形石器調整済片
 - ▲ 二次加工のある剥片
 - 鋸齒調理痕のある剥片
 - 断面剥片
 - 石核
 - 剥片
 - 片



第8図 第I文化層 第1ブロック器種別分布図



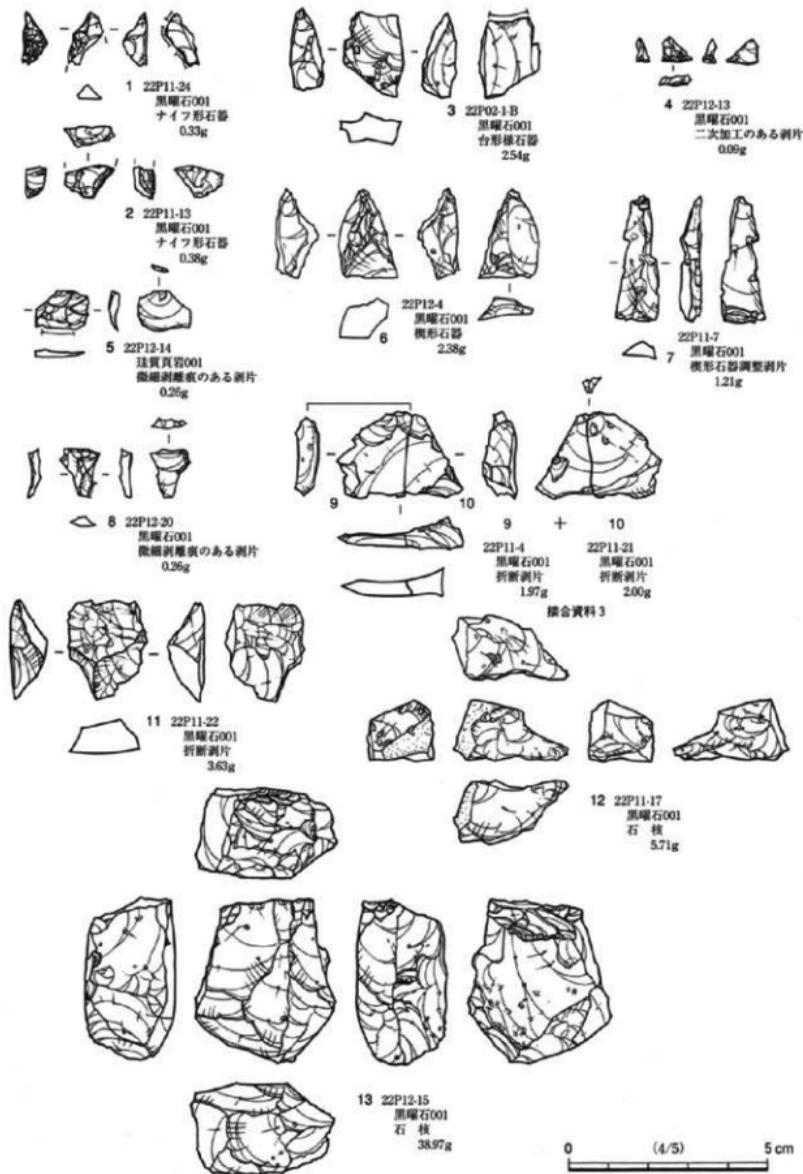
第9図 第I文化層 第1ブロック母岩別分布図

1・2はナイフ形石器である。1が先端部で、2は基部がそれぞれ残存している。1・2ともに、急角度のプランティング加工が施されており、しかも、同一母岩で製作されている。また、主要剥離面の剥離方向からみても、剥離方向が一致しており、接合はしていないが、一つのナイフ形石器が分割されたものである可能性が高い。1と2が一つのナイフ形石器であると推定すれば、復元される最大長が約20mmで、最大幅が14mm程度の小型のナイフ形石器であったと推定される。2の分割面をみると、大きな夾雜物が入っており、ナイフ形石器として機能していた時期か、調整加工の際に、分割されたものと思われる。

3は台形様石器である。比較的厚みのある剥片を素材として、打面部を腹面から大きく折断し、末端部を背面側から2回の折断によって成形加工されている。表面上端部に素材の縁辺を残しており、この部位に、微細剥離痕が連続的にみられる。

4は二次加工のある剥片である。非常に小型の貝殻状の剥片を素材として、表面下部に非常に細かい調整加工が連続的に施されている。両極剥離によって剥離された剥片を素材としている可能性が高い。

5・8は微細剥離痕のある剥片である。5は幅広の横長剥片を素材として、末端部に微細剥離痕が連続的にみられる。8は綫長剥片を素材として、中間部から折断されて末端部が残存した剥片を素材として、表面右側縁下部に、微細剥離痕がみられる。



第10図 第1文化層 第1ブロック出土石器（1）

6は楔形石器である。厚みのある剥片を素材として、下端部を折断した後に、両極剥離を行っており、表面と腹面に楔形石器調整剥片が剥離されている。両極剥離によって剥離されたことを根拠に、楔形石器として識別したが、石核として認識することも可能である。

7は楔形石器調整剥片である。上下両端は両極剥離によって剥離されたと思われる剥離面がみられる。

9~11は折断剥片である。9+10は接合資料3である。接合した状態で、幅広の横長剥片を素材として、末端部を折断した後に、打面部からさらに加撃を加えて、器体の中央部から左右に分割されている。両極剥離によって、折断された可能性がある。11は厚みのある剥片を素材として、打面部と末端部を折断によって成形している。表面上に素材面の縁辺が残存している。素材の縁辺に、微細剥離痕がみられないことから、折断剥片として識別したが、3の台形様石器と共に通じた折断が行われていることから、台形様石器として識別することも可能である。

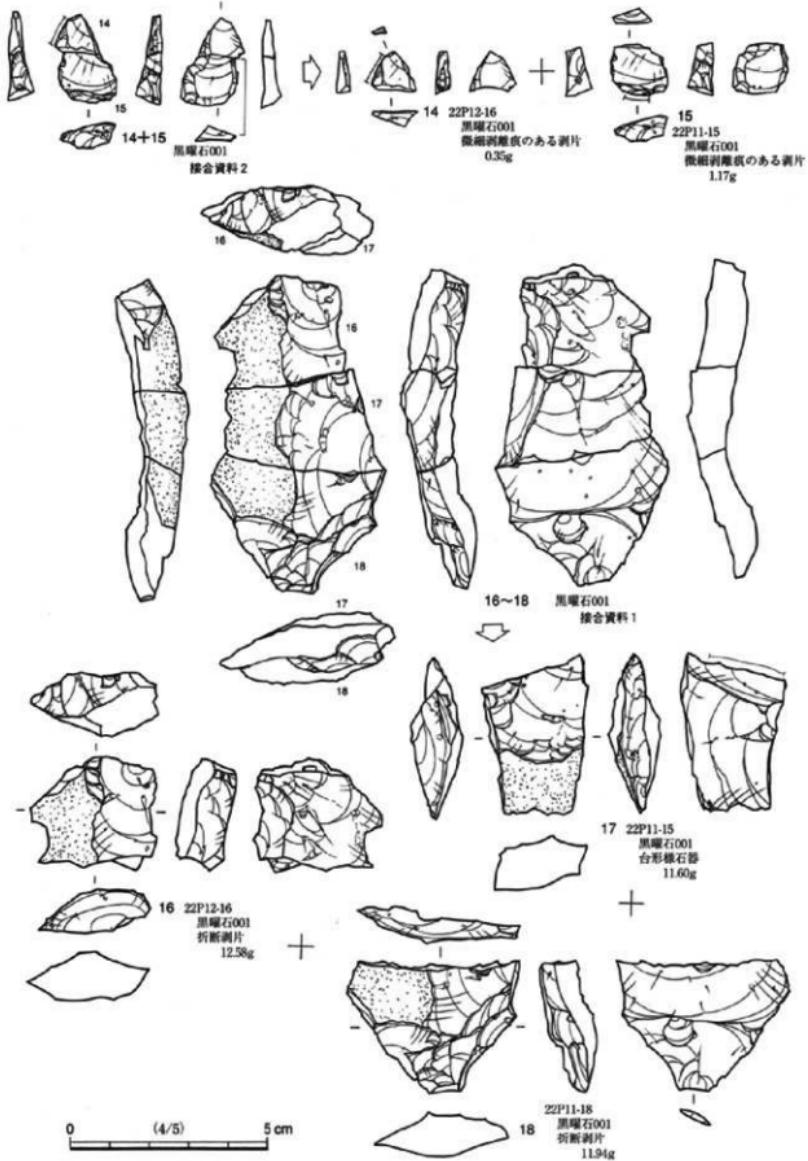
12・13は石核である。12は厚みのある不定形な剥片を素材として、下端部から比較的幅広の剥片を剥離後に、表面上端部から小型の幅広剥片を剥離している。13は非常に厚みのある分割砾を素材としていると思われる。左側縁から幅広の剥片を剥離後に、下端部から2・3枚の横長剥片が剥離されている。この下端部からの剥離は、石核調整の可能性がある。次に、上端部に打面作出のために、数回の細かい調整加工が行われている。打面調整加工として捉える事も可能である。最後に、成形された石核から、上端部を平面として固定して、頭部調整を行いながら、縱長剥片を連続的に剥離している。

14+15は接合資料2である。14+15の状態で、下端部を折断後に、裏面下端部から剥離されている。両極剥離による可能性もあることから、楔形石器と識別することも可能である。14は表面左側縁に微細剥離痕がみられる。15は末端部に微細剥離痕がみられる。

16~18は接合資料1である。接合資料1は、まず、素材の縱長剥片を剥離した過程が注目される。次に、縦長剥片を16・17・18の三つに分割した方法が注目される。

まず、16~18の縱長剥片が剥離された方法について、観察してみよう。16~18の状態で、両極剥離によって剥離された縱長剥片である。背面左側に大きく自然面を残している。背面上端部からの剥離は、中間部で階段状の剥離となっている。背面下端部からは下端部の打面幅を狭くするような頭部調整が行われている。16~18が両極剥離によるものであると判断した根拠は、腹面の形状が、上端部からの加撃が器体の約4/5まで及んでいるが、下端部からの加撃が約1/5ほど行われていることが観察され、上下両端からの加撃による剥片と考えられるからである。16~18が、比較的大きな剥片であり、上下両端から石核調整と思われる剥離面が観察されることから、黒曜石001は比較的大きな母岩であることが推定できる。

次に、16と17と18とに分割された方法について観察してみよう。16~18の接合した状態から、腹面左側上面部には、幅広で比較的薄い剥片が剥離されている。その後、腹面側から器体の中央部を打撃することによって、16・17・18に三分割している。17は三分割されたものの中間部である。打面部と末端部が折断されており、裏面下端部に素材の縁辺が残されており、上端部には非常に銳利な縁辺が残存している。上端部の銳利な縁辺には、微細剥離痕がみられる。この折断の方法や形態の特徴は、3の台形様石器と類似していることから、台形様石器として識別した。これ以外の16・18は素材の銳利な縁辺が残されていないことから、折断剥片として識別したが、機能的には、17の台形様石器と同様に用いられた可能性が高いことが推察される。



第11図 第1文化層 第1ブロック出土石器（2）

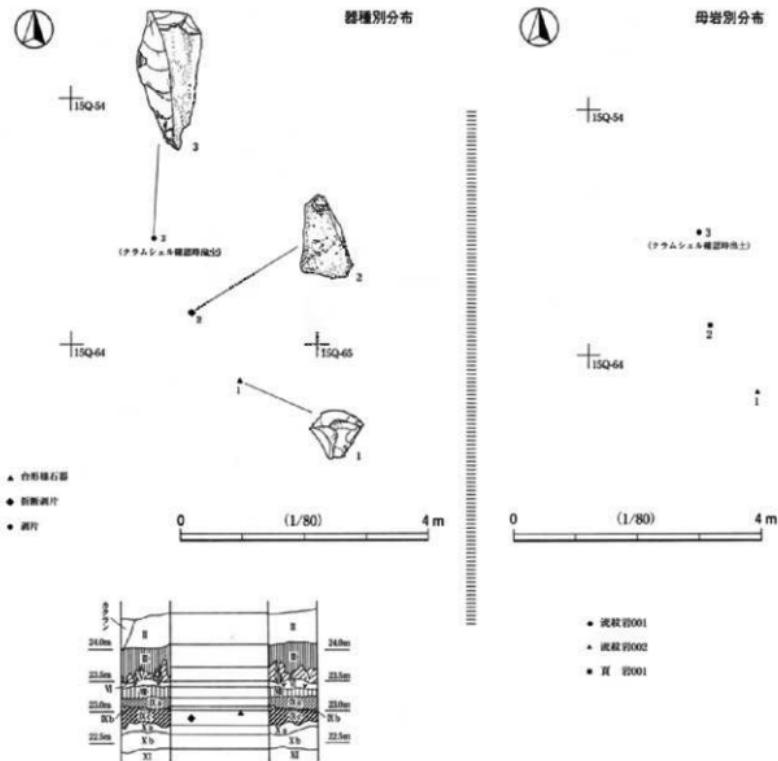
(2) 第Ⅱ文化層

IXc層に生活面をもつと推定される。調査区北東部に分布しており、南西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第2ブロックが相当する。

①第2ブロック(第12・13図、第2・4・9表、図版3・38)

出土状況 平面分布は、約3m×1mの楕円形の範囲から散漫に分布している。出土層位は、IXc層から出土している。生活面は、IXc層であると推定されるが、出土点数が少ないとから、IXc層の下部か上部であるか、どの部位に集中するか明確でない。

器種別分布(第12図)の特徴は、出土点数が少ないが、南東部に台形様石器が1点出土しており、折断測片が中央部から出土し、剥片が北部から出土している。碎片や石核等は出土していない。



第12図 第Ⅱ文化層 第2ブロック遺物分布図

母岩別分布（第12図）の特徴は、3点出土しているが、すべて単独母岩で構成されており、製品・剥片のかたちで搬入されている。

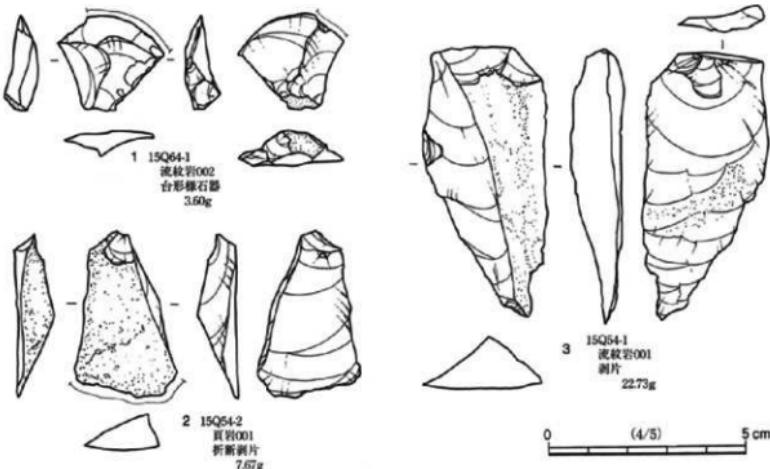
出土遺物 総計3点出土した。母岩器種組成は、第4表のとおりである。器種組成の特徴は、台形様石器1点、折断剥片1点、剥片1点の3点のみで構成される。出土点数が少ないながら、台形様石器が1点出土しており、この石器が本文化層を特徴付ける石器となっている。

母岩組成の特徴は、出土遺物のすべてが、単独出土である。これらは、製品・剥片のかたちで搬入された石器であると考えられる。

第4表 第II文化層第2ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	台形様石器	折断剥片	剥片	総計	組成比(%)
II	2	流紋岩	001			1 22.73	1 22.73	33.33 66.85
			002	1 3.6			1 3.6	33.33 10.59
		流紋岩 点数合計		1		1	2	66.67
		流紋岩 重量合計		3.6		22.73	26.33	77.44
		頁岩	001		1 7.67		1 7.67	33.33 22.56
		頁岩 点数合計			1		1	33.33
		頁岩 重量合計			7.67		7.67	22.56
		II 点数合計		1	1	1	3	100.00
		II 重量合計		3.6	7.67	22.73	34	100.00
		点数組成比(%)		33.33	33.33	33.33	100.00	
		重量組成比(%)		10.59	22.56	66.85	100.00	

[上段:点数、下段:重量(g)]



第13図 第II文化層 第2ブロック出土石器

1は台形様石器である。撥形をした幅広の剥片を素材としている。背面上部にポジティヴ面と腹面末端部によってできた鋭利な縁には、微細剥離痕がみられる。右側縁下部には、背面と腹面の両側から粗い調整加工が施されている。裏面右下端部から、器体の奥まで入り込む平坦な調整加工が施されている。打面部には、自然面が残されている。

2は良質の頁岩を用いており、縦長剥片を素材としている。右側縁は、背面側から大きく折断されている。素材の末端部は、微細剥離痕がみられる。

3は剥片である。幅広の平坦打面から縦長の剥片が剥離されている。背面右側には、自然面が大きく残されている。背面左側には、縦長剥片を剥離した剥離面がみられ、3のような縦長剥片が連続的に剥離された可能性がある。

(3) 第Ⅲ文化層

IX a 層上部に生活面をもつと推定される。調査区東側の台地の平坦面に立地する。第3ブロックが相当する。

①第3ブロック (第14・15図、第2・5・9表、図版4・38)

出土状況 平面分布は、約4m×2mの楕円形の範囲から散漫に分布している。出土層位は、IX a 層上部～Ⅷ層下部にかけて出土しており、IX a 層上部に集中する。IX a 層上部に生活面があると推定される。

器種別分布 (第14図) の特徴は、製品が出土しておらず、微細剥離痕のある剥片・折断剥片・剥片で構成され、これらの石器が散漫に分布している。

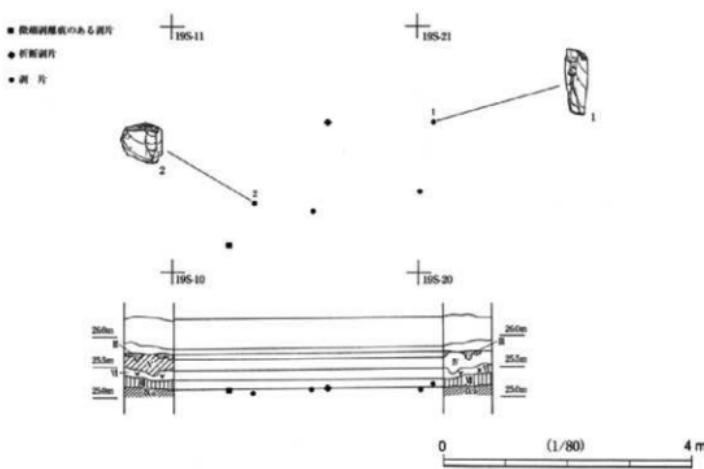
母岩別分布 (第14図) の特徴は、頁岩001のみが2点で構成されているが、そのほかの母岩は単独出土である。本ブロックに、嵌入されたものと思われる。接合資料はみられない。

第5表 第Ⅲ文化層第3ブロック母岩器種組成表

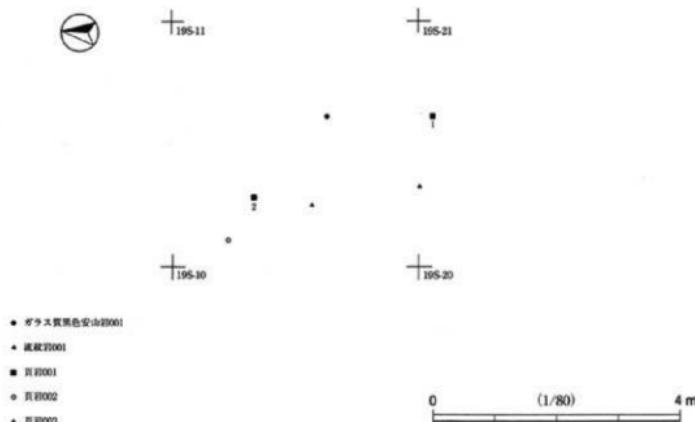
文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	微細剥離痕度のあ	折断剥片	剥片	総計	組成比(%)
Ⅲ	3	ガラス質黒色安山岩	001		1 2.35		1 2.35	16.67 14.50
		ガラス質黒色安山岩	点数合計		1		1	16.67
		ガラス質黒色安山岩	重量合計		2.35		2.35	14.50
		夷紋岩	001			1 5.52	1 5.52	16.57 34.05
		夷紋岩	点数合計			1	1	16.67
		夷紋岩	重量合計			5.52	5.52	34.05
		頁岩	001			2 5.35	2 5.35	33.33 33.00
		002	1 0.62				1 0.62	16.67 3.82
		003				1 2.37	1 2.37	16.67 14.52
		頁岩	点数合計	1		3	4	66.67
		頁岩	重量合計	0.62		7.72	8.34	51.45
Ⅳ	点数合計			1	1	4	6	100.00
Ⅳ	重量合計			0.62	2.35	13.24	16.21	100.00
点数組成比(%)				16.67	16.67	66.07	100.00	
重量組成比(%)				3.82	14.50	81.68	100.00	

[上段:点数、下段:重量(g)]

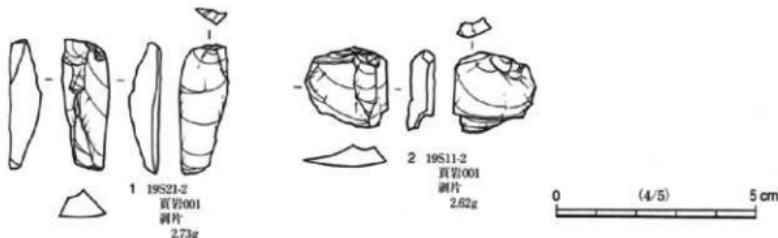
器種別分布



母岩別分布



第14図 第Ⅲ文化層 第3ブロック遺物分布図



第15図 第Ⅲ文化層 第3ブロック出土遺物

出土遺物 総計6点出土した。母岩器種組成は、第5表のとおりである。

器種組成の特徴は、微細剥離痕のある剥片1点、折断剥片1点、剥片4点であり、調整加工が施された製品は出土していない。

母岩組成の特徴は、頁岩001以外は単独母岩である。石材は、頁岩が4点出土しており、ガラス質黒色安山岩1点、流紋岩1点で構成されている。

1・2は剥片である。1は平坦打面で、頭部調整が行われた縦長剥片である。背面構成から、小型の縦長剥片が連続的に剥離されたことがうかがえる。2は平坦打面で、頭部調整が行われた横長剥片である。背面構成から、腹面と同一方向に連続的に剥離されたことがうかがえる。末端部は階段状の形状を呈する。

本文化層は、製品が少ないことから、石器群の内容が明確ではない。ただし、1・2における石器製作技術に共通する特徴として、平坦打面で、頭部調整が行われ、背面構成が腹面と同一方向に剥離が行われていることがあげられる。

(4) 第Ⅳ文化層

Ⅶ層に生活面をもつと推定できる。調査区東側に分布しており、北西に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第4ブロックが相当する。

①第4ブロック (第16~18図、第2・6・9・10表、図版5・39)

出土状況 平面分布は、約5m×3mの楕円形の範囲からやや密集して分布している。南東部に密集して分布し、北部は散漫に分布している。出土層位は、Ⅸa層上部～Ⅷ層にかけて出土している。Ⅶ層に集中しており、Ⅸ層に生活面をもつ文化層と推定できる。

器種別分布 (第18図) の特徴は、ナイフ形石器が北部から2点出土している。石器集中地点の外周部から出土する傾向がみられる。敲石と礫は南東部にまとまって出土している。

石材別分布 (第18図) の特徴は、チャートが南東部にまとまって出土しており、他はすべて珪質頁岩である。接合資料は接合資料4のみである。北部に分布する11の二次加工のある剥片と確認調査時の19Q一括の剥片とが接合した。

出土遺物 総計31点出土した。母岩器種組成は、第6表のとおりである。

器種組成の特徴は、ナイフ形石器2点、二次加工のある剥片5点、微細剥離痕のある剥片3点、剥片16

点、碎片3点、敲石1点、礫1点である。ナイフ形石器と二次加工のある剥片の比率が非常に高いことと敲石と礫が含まれることが特徴としてあげられる。

母岩組成の特徴は、敲石と礫がチャートでその他はすべて珪質頁岩で構成されていることである。

接合資料は1資料のみであるが、良質な珪質頁岩を用いて、厚みのない剥片が量産されていることが本プロックの特徴である。13の敲石を用いて、剥片剥離が行われたものと思われる。

1・2はナイフ形石器である。いずれも、縱長剥片を素材として、基部に調整加工が施されており、打面は残存している。1は左側縁下部に、腹面側から折断剥離が行われた後に、背面側から急角度でやや荒い調整加工が施されている。2は左側縁下部に細かい調整加工が背腹両面に施されている。

3～6は二次加工のある剥片である。3は幅広の横長剥片を素材として、腹面右上部に平坦な調整加工が施され、背面左下部に背面側から急角度の調整加工を施した後に、腹面側から細かい調整加工が施されている。4は厚みのない縱長剥片を素材として、剥片末端部の左側縁下部に荒い調整加工が施されている。5は厚みのある縱長剥片を素材として、末端部に背腹両面から調整加工が施されている。両板剥離によつて剥離された楔形石器である可能性もある。6は厚みのない幅広の剥片を素材として、腹面左側縁中部に細かい調整加工が施されている。

7～9は微細剥離痕のある剥片である。いずれも素材末端部に微細剥離痕がみられる。

10は打面再生を行ったことを示す剥片である。

11+12は接合資料4である。背面に大きく自然面を残す幅広の剥片を素材として、末端部と頭部を3分割した接合資料である。11は二次加工のある剥片である。頭部の折断資料で、打面側の左上部に細かい調整加工が施されている。12は剥片である。中間部の接合資料である。11と12とは風化の度合いが異なつておらず、12が赤化していることから、被熱により3分割した可能性がある。

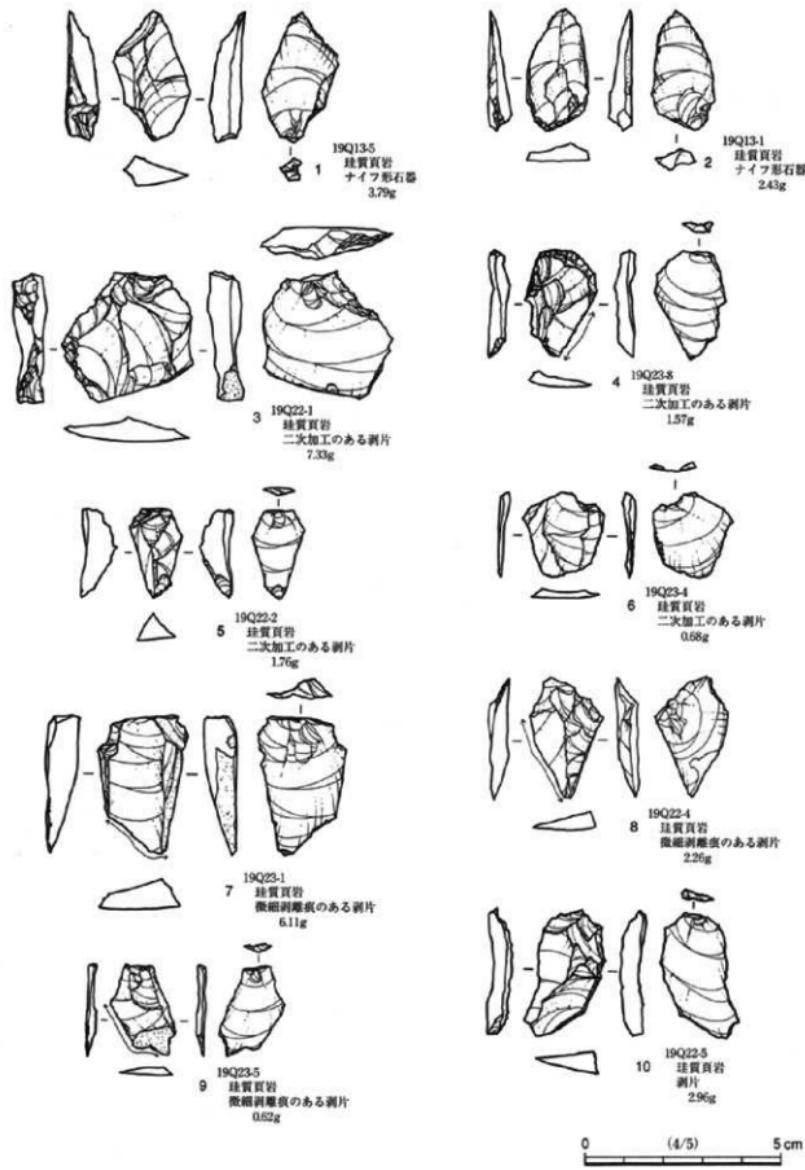
13は敲石である。球形に近い円礫を素材として、下端部に敲打痕が集中してみられる。

14は礫であるが、明確には敲打痕がみられないが、敲石の可能性もある。

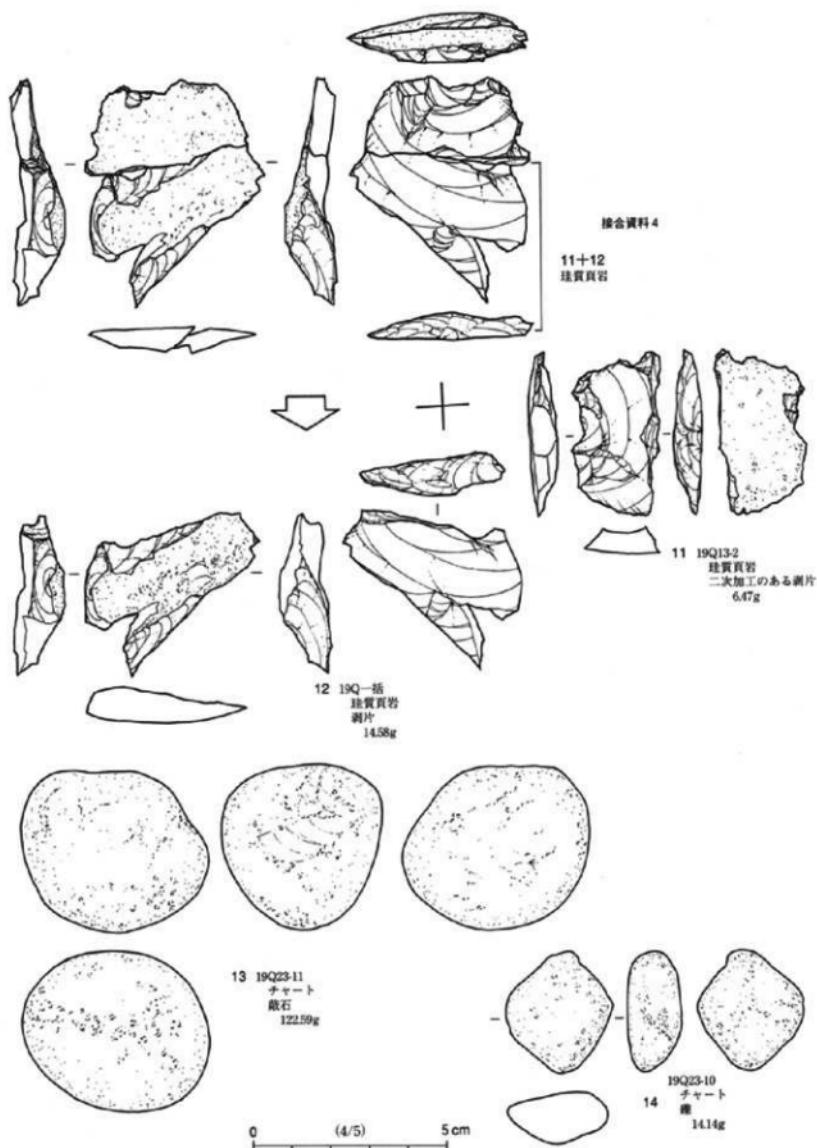
第6表 第IV文化層第4プロック母岩種組成表

文化層	ブロック	母岩名	ナイフ形石器	二次加工の ある 剥片	微細剥離 する 剥片	剥片	碎片	敲石	礫	総計	組成比 (%)	
IV	4	珪質頁岩	2	5	3	16	3	—	—	29	93.55	
			6.22	17.81	8.99	37.31	0.64	—	—	70.97	34.17	
		珪質頁岩 國際合計	2	5	3	16	3	—	—	29	93.55	
		珪質頁岩 重量合計	6.22	17.81	8.99	37.31	0.64	—	—	70.97	34.17	
		チャート	—	—	—	—	—	1	1	2	6.45	
		チャート 國際合計	—	—	—	—	—	122.59	14.14	136.73	65.83	
		チャート 重量合計	—	—	—	—	—	122.59	14.14	136.73	65.83	
		IV 總合合計	2	5	3	16	3	11	11	31	100.00	
		IV 重量合計	6.22	17.81	8.99	37.31	0.64	122.59	14.14	207.70	100.00	
点数組成比(%)		6.45	16.13	9.68	51.61	9.68	3.23	3.23	—	—	100.00	
重量組成比(%)		2.99	8.57	4.33	17.96	0.31	39.02	6.81	—	—	100.00	

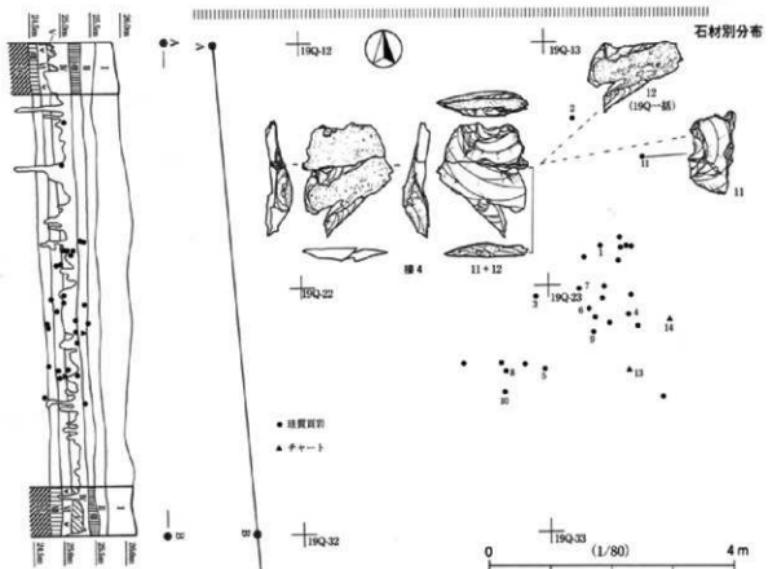
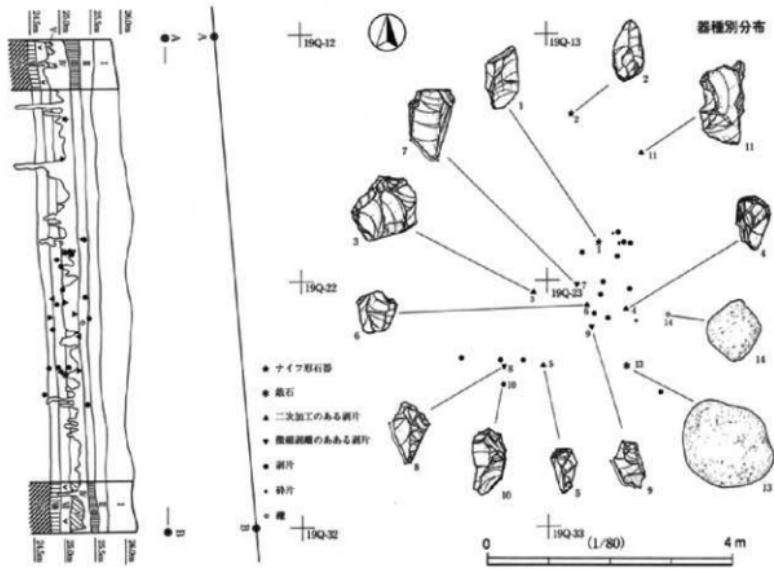
[上段 点数、下段 重量(g)]



第16図 第IV文化層 第4ブロック出土石器（1）



第17図 第IV文化層 第4ブロック出土石器（2）



第18図 第IV文化層 第4ブロック遺物分布図

(5) 第V文化層

VI層下部に生活面をもつと推定できる。調査区中央部北側に分布しており、南東に緩やかに傾斜する斜面に分布する。第5ブロックが相当する。

①第5ブロック (第19・20図、第2・7・10表、図版4・38)

出土状況 平面分布は、約6m×6mの円形の範囲から散漫に分布している。円形に出土しているものの、集中区の中心部は、遺物分布の空白地点がみられる。出土層位は、VII層上部～VI層下部にかけて出土している。VI層下部に集中しており、VI層下部に生活面をもつ文化層と推定できる。

器種別分布 (第19図) の特徴は、ナイフ形石器が北西部と南東部から、それぞれ1点ずつ出土している。石器集中地点の外周部から出土する傾向がみられる。また、折断剥片が5点出土しているが、集中地点にまとまって出土する傾向がある。

母岩別分布 (第19図) の特徴は、すべて黒曜石001で構成されていることである。接合資料はみられず、北西部と南東部にナイフ形石器が出土している。

出土遺物 総計8点出土した。母岩器種組成は、第6表のとおりである。

器種組成の特徴は、ナイフ形石器2点、微細剥離痕のある剥片1点、折断剥片5点である。剥片・碎片が含まれていない。特に、ナイフ形石器と折断剥片の比率が非常に高いことが特徴としてあげられる。

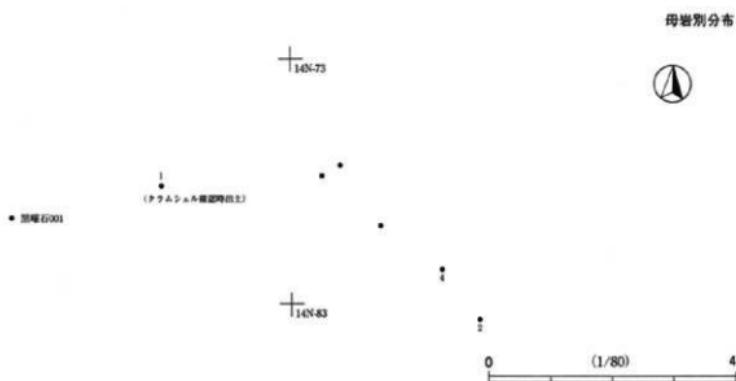
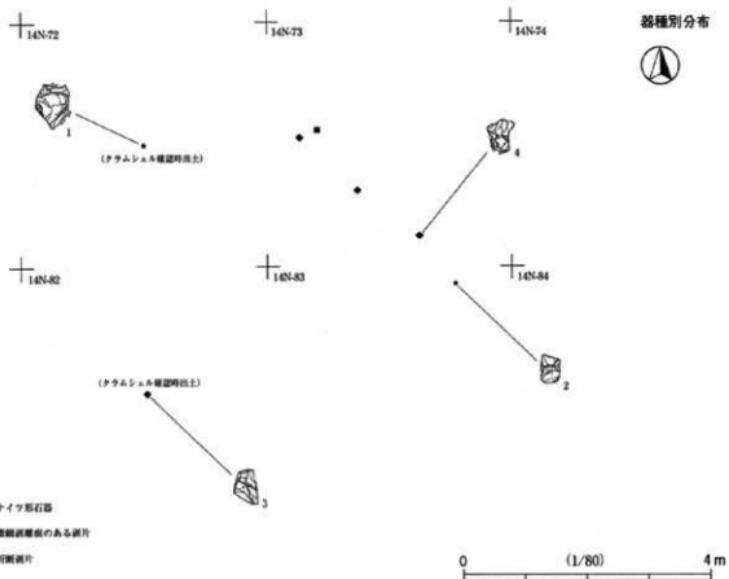
母岩組成の特徴は、すべて黒曜石001で構成されていることである。接合資料はみられないものの、これらの石器には剥片・碎片が含まれておらず、製品として黒曜石001をまとめて持ち込んだ可能性が高い。

1・2はナイフ形石器である。1は幅広の厚みのない剥片を素材として、頭部と末端部に粗い調整が施されている。表面上部と表面右側縁下部に微細剥離痕がみられる。2は小型の厚みのない剥片を素材として、末端部には腹面側から粗い調整が施されている。表面上部と表面右側縁下部に微細剥離痕がみられる。1・2ともに、素材の形状や調整加工の部位や、素材を横に用いて、素材の縁辺を上部に用いて、台形状の形状を呈する点で共通する点が多い。

3・4は折断剥片である。3は厚みのある剥片を素材として、右側縁を背面から器体の奥まで入り込むようによく折断されている。この剥離によって、素材の縁辺の先端部にあたる右側縁下部は、鋭利な縁辺を形成する。4は厚みのない綫長剥片を素材として、右側縁を急角度に折断している。裏面右側縁下部には、微細剥離痕がみられる。



第19図 第V文化層 第5ブロック出土石器



第20図 第V文化層 第5ブロック遺物分布図

1～4の共通する石器製作の特徴は、本ブロックから出土した石器が、すべて同一母岩の良質の黒曜石001を用いている。厚みのない小型の剥片を剥離し、折断を頻繁に行い、素材の鋭利な縁辺が残されるような折断が行われている。鋭利な縁辺には、微細剥離痕のみられるものが多い。

第7表 第V文化層第5ブロック母岩器種組成表

文化層	ブロック	母岩名	母岩番号	ナイフ形石器	微細剥離痕の ある剥離片数の あ	折断剥片	統計	組成比 (%)
V	5	黒曜石	001	2 3.87	1 9.74	5 2.02	8 6.63	100.00 100.00
		黒曜石・鷹賀合計		2 3.87	1 9.74	3 2.02	8 6.63	100.00 100.00
V	個数合計			2 3.87	1 9.74	5 2.02	8 6.63	100.00 100.00
V	重量合計			25.00 58.37	12.55 11.15	62.36 30.47	100.00 100.00	
点数組成比(%)								
重量組成比(%)								

〔上段:点数、下段:重さ(g)〕

(6) 単独出土石器

単独で出土したものとを単独出土石器として取り扱った。

① 単独出土石器 (第21～24図、第2・8・10表、図版4・5・39)

出土状況 確認調査時に出土したものがほとんどである。なかには、単独出土5・6・11は拡張調査を行ったものの、単独での出土が確認された。単独出土したものは、層位的にまとまったものではない。分布状況は、大きく分けて、3箇所にみられる。調査区南西部の台地の縁辺部と調査区中央部南側の台地中央部と調査区東側の台地中央部に分布している。このうち、調査区南西部の台地の縁辺部から、単独出土4・9・10・12・14がまとまって出土しており、この区域に石器の集中区域があった可能性がある。

出土遺物 総計14点出土した。母岩器種組成は、第8表のとおりである。

器種組成の特徴は、ナイフ形石器4点、楔形石器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片1点、折断剥片2点、剥片4点である。特に、ナイフ形石器の比率が非常に高いことが特徴としてあげられる。

石材組成の特徴は、ナイフ形石器4点出土しているが、流紋岩1点、頁岩2点、珪質頁岩1点で構成されている。多く用いられている石材は、頁岩・ガラス質黒色安山岩があげられる。

1～14は単独出土のものであるが、遺物取上げ時の出土層位は、1・2がⅢ層、6・8・9・11・12・14がⅣ～V層、13がⅦ層、5がX層から出土である。3・4・7・10は出土層位が不明である。これらの出土層位と、出土地点から、同段階の石器群としてまとめられる可能性のあるものは、二つの石器群が想定される。

一つめは、1・2が調査区中央部南側の台地中央部の21P53グリッドから出土しており、Ⅲ層出土の石器群としてとらえることができる。二つめは、4・9・10・12・14が調査区南西部の台地の縁辺部から出土しており、Ⅳ～V層出土の石器群としてとらえることが可能である。

1～4はナイフ形石器である。いずれも良質の石材が用いられており、素材は石刃が用いられている。

上述のとおり、1・2は出土地点が21P53グリッドであり、Ⅲ層出土であることから、同じ集中地点からの出土である可能性が高い。1は両設打面から剥離された石刃を素材としており、素材の打面を先端部

に設置している。右側縁と左側縁下部に急角度のプランティング加工が入念に施されている。特に、基部の調整加工が入念に施されており、基部は尖った形状を呈する。全体形状は、柳葉形を呈する。左側縁上部は素材の縁辺が残されていたが、発掘時に破損している。2は石刃を素材として、打面を基部に設定して、左側縁に急角度のプランティング加工が施されている。先端部が残存しており、中間部から基部にかけては破損している。全体形状は不明だが、素材の形状や調整加工の特徴や出土状況から、おそらく1の形態と類似したものであると推定される。

3は両設打面の石核から剥離された細長の石刃を素材として、右側縁下部と左側縁下部と上部に急角度のプランティング加工が施されている。素材の打面を先端部に設定している。基部の形状は尖った形状を呈する。全体形状は柳葉形を呈する。素材の用い方や基部の形状や全体形状は、1と類似する。右側縁上部に素材の縁辺が残されている。先端部は発掘時に破損している。4は単設打面の石核から剥離されたと思われる石刃を素材としている。左側縁下部に急角度の比較的粗い調整加工が施されている。素材の打面部を先端部に設定している。先端部と基部は破損している。石刃を素材として、急角度の調整加工が施されていることから、ナイフ形石器として識別したが、全体形状が不明であることから、ナイフ形石器として識別できない可能性もある。

5は楔形石器である。X層から出土している。小型の円礫を素材として、両極剥離を行っている。いわゆる「遠山技法」によるものである可能性が高い。

6・8は二次加工のある剥片である。6は打面調整が施された幅広の剥片を素材としている。左側縁には背腹両面から粗い調整加工が施されている。8は厚みのある小型の剥片を素材として、素材の末端部に粗い調整加工が施されている。

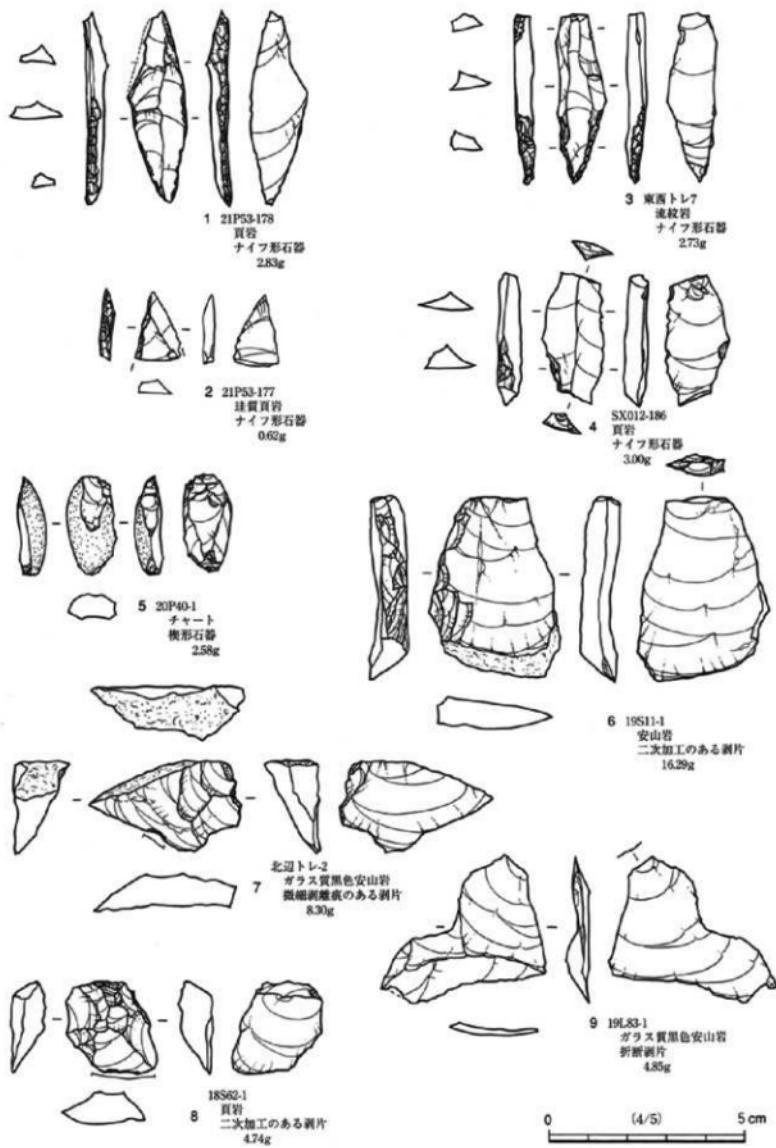
7は微細剥離痕のある剥片である。自然面を打面として、幅広の剥片を素材として、素材の末端部にあたる表面左下部に微細剥離痕がみられる。

9・10は折断剥片である。線状打面から剥離された不定形な剥片を素材として、右側縁が折断されている。10は線状打面から剥離された幅広の剥片を素材として、右側縁が上端部から折断されている。上端部に細かい調整加工もみられ、楔形石器である可能性もある。

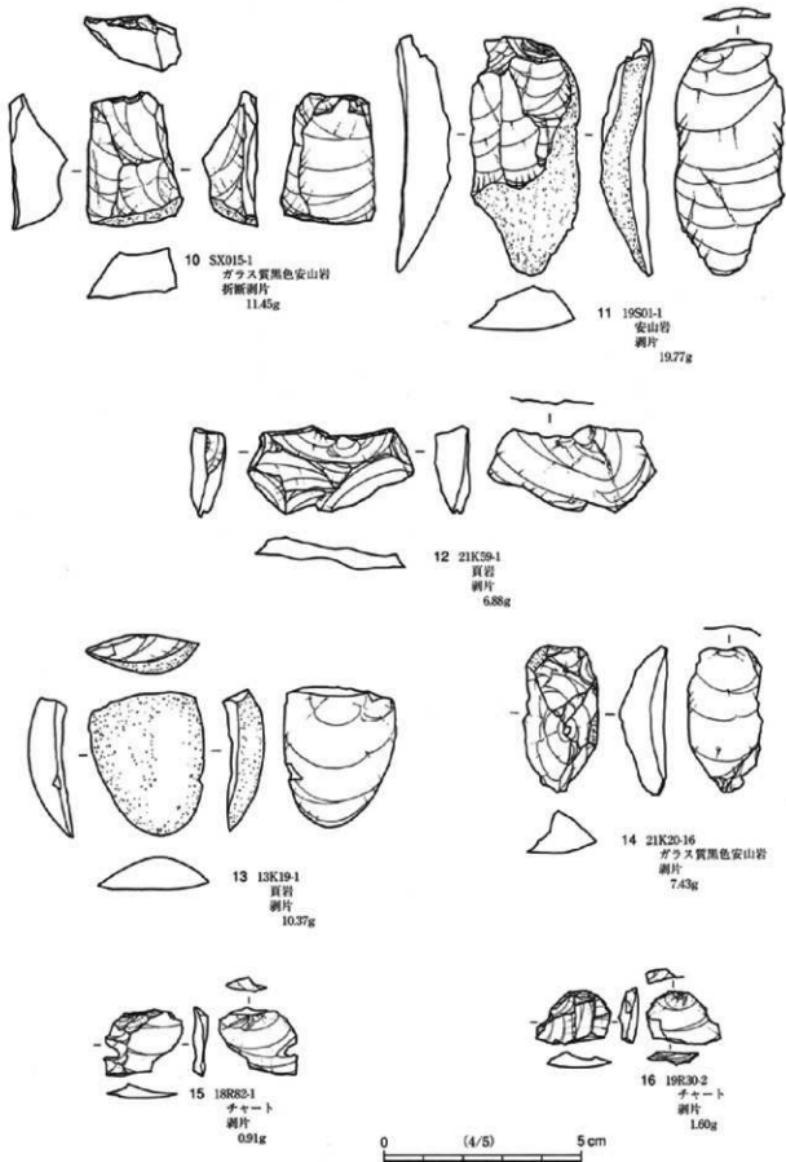
第8表 単独出土石器母岩器種組成表

文化層	プロック	母岩名	ナイフ形石器	楔形石器	二次加工がある	微細剥離片痕のあ	折断剥片	剥片	総計	組成比(%)
單	單	ガラス質黒色安山岩				1 8.3	2 16.3	1 7.43	4 32.03	25.00 30.69
		流紋岩	1 2.73						1 2.73	6.25 2.62
		頁岩	2 5.83		1 4.74			2 17.25	5 27.82	31.25 26.66
		珪質頁岩	1 0.62						1 0.62	6.25 0.59
		チャート		1 2.58				2 2.51	3 5.09	18.75 4.88
		安山岩			1 16.29			1 19.77	2 36.06	12.50 34.56
単点数合計			4	1	2	1	2	6	16	100.00
単重量合計			9.18	2.58	21.03	8.3	16.3	46.96	104.35	100.00
点数組成比(%)			25.00	6.25	12.50	6.25	12.50	37.50	100.00	
重量組成比(%)			8.80	2.47	20.15	7.95	15.62	45.00	100.00	

[上段:点数、下段:重量(g)]



第21図 単独出土石器（1）

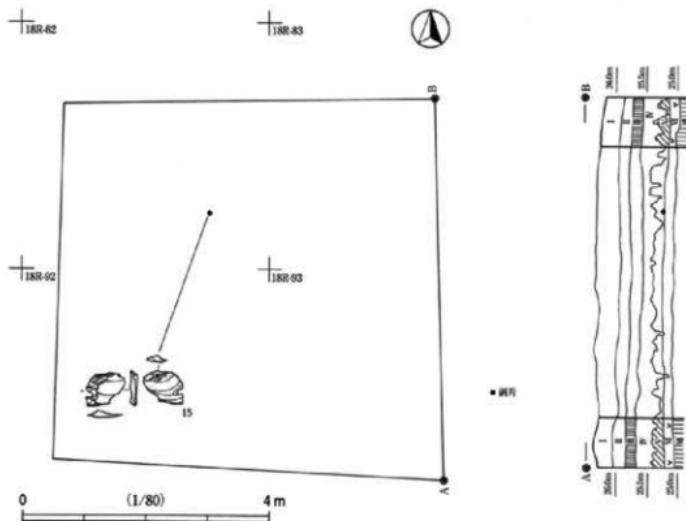


第22図 単独出土石器（2）

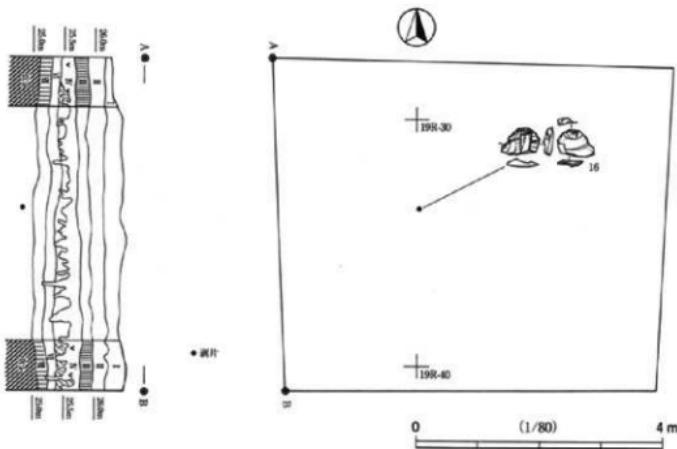
11～14は剥片である。11は幅の狭い平坦打面から縦長剥片が剥離されている。頭部調整が頻繁に行われている。12は線状の打面から剥離された幅広の剥片である。13は背面に大きく自然面を残し、縦長剥片を剥離している。打面部は、剥片の剥離時の同時割れによるものと思われる。14は線状の打面から剥離された縦長剥片である。

15はV層から出土している。頭部調整が入念に施されている。小型の不定形な剥片である。

16はIX a層から出土している。厚みのある小型の剥片である。末端部は欠損している。



第23図 単独出土石器種別分布図（1）



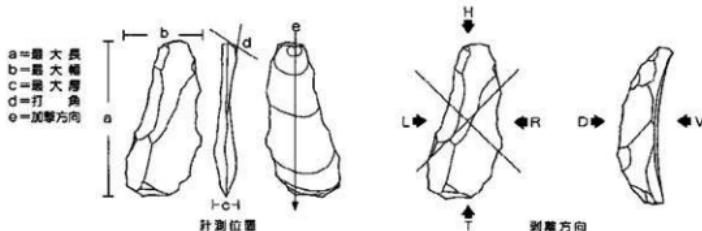
第24図 単独出土石器種別分布図（2）

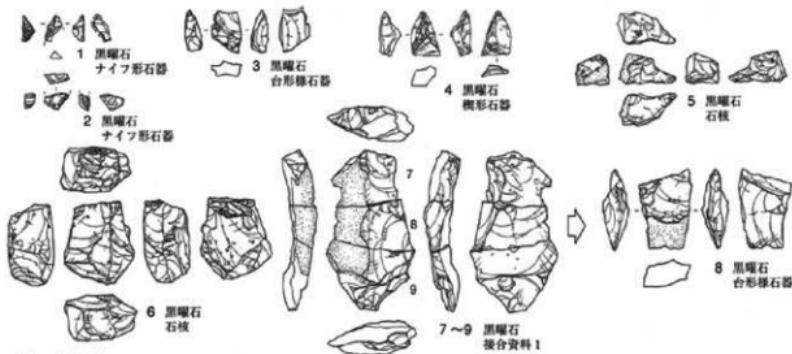
第9表 旧石器時代石器属性表 (1)

第10表 旧石器時代石器属性表 (2)

石器属性表について

1. 採集番号 実測区を掲載した遺物の通し番号。
2. 層位 発掘遺物取り上げ時の所見の層位名を記した。
3. 最大長・最大幅・最大厚 計測方法は第下左図に示した。
4. 打面形状 数字: 打面上に残る剥離面数。
P = 点次打面、L = 線状打面、C = 自然面打面、J = 節理面 (節理面は剥離面数に含めない)
5. 打角・剥離角 打角: 剥片の打面とポジティブバルブがつくる角度 (下左図加撃方向とのおり)
剥離角: 核石の打面とネガティブバルブがつくる角度。ただし、目的的剥片を剥離した剥離面を計測する。
6. 打面調整・頭部調整 觀察されるものについて「○」で示した。
7. 背面構成 主要剥離面の剥離方向を基準とし、背面を構成する剥離面の加撃方向について、以下のとおり分類し、背面構成の分類を有する資料については「○」で示した。H = 頭部側、T = 尾部側、R = 背面を正面にして右側、L = 左側、D = 背面側、V = 腹面側からの加撃方向を示す。C = 自然面、J = 節理面。ただし、変形度の高いもの (楔形石器等) は記さなかった。碎片はわかる範囲で記した。(下右図のとおり)
8. ポジ面 背面にポジティブ面を有する資料については「○」で示した。
9. 末端形状 F = 直線状 (Feather end)、H = 翻巻状 (Hinge fracture)、S = 階段状 (Step fracture)、O = 逆反りまたは石核底面に達する (Outrepasse) を示す。
10. 調整角 振器・剣器の刃部、ナイフ形石器の刃溝し、彫刻刃面の形成などにおける調整剥離角。両面調整石器の場合は剥離角を示さない。
11. 刃部角 ナイフ形石器などの刃部において、腹面と背面との角度を計測。
12. 使用痕 N = 刃こぼれ (Nicked edge)、C = いわゆるコーングロス。植物との接触面に生じるボリッシュ (Corn gross)、S = 敷打 (String marks)、G = すりつぶし (Grinding marks)、P = 磨り (Polishing marks)、H = 被熱痕 (Heated marks)
13. 遺存部位 記号は折れによって依存している部位を示す。
H = 頭部 (Head)、VM = 上下方向の中間部 (Vertical Middle)、B = 尾部 (Bottom)、R = 背面からみて右側 (Right)、HM = 左右方向の中間部 (Horizontal Middle)、L = 背面からみて左側 (Left)
14. 欠損 ナイフ形石器などの製品のうち、欠損を有するものは「+」で示した。
15. 備考 その他の表現できない属性を記載する。



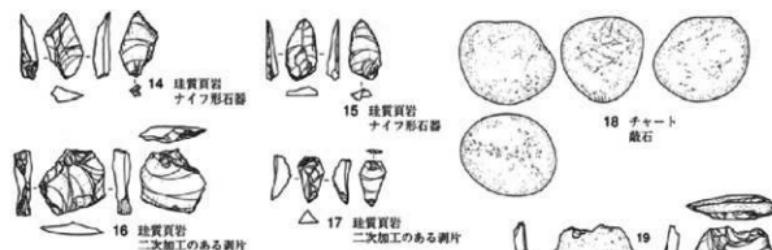


第Ⅰ文化層



第Ⅱ文化層

第Ⅲ文化層



第Ⅳ文化層



第Ⅴ文化層



第25図 文化層別主要石器

第2節 縄文時代

1 概要

松崎Ⅲ遺跡全体を概観すると、遺構では、早期・中期の竪穴住居跡、早期の炉穴、階穴、土坑等が検出されている。早期の遺構には、竪穴住居跡6軒、炉穴62基などがあり、撲糸文系土器と条痕文系土器を伴出している。中期の遺構では、竪穴住居跡2軒がある。後期の遺構には、焼上遺構1基がある。他には時期が明確ではない土坑100基以上が検出されている。これらの土坑はその形状や深さ、遺物の有無などに差異があらるが遺跡の南西の台地上で集中して検出されている。他には21K24・25と21K・32グリッドを中心とした2か所の範囲から石器と楔形石器がまとまって出土する箇所を検出した。この周辺には縄文早期の竪穴住居跡や炉穴が集中することからこの石器群は、縄文早期に属するものと考えられる。また、早期～後期の各時期の土器も出土しており、このうち量的に多いのは早期の撲糸文と条痕文で、他には中期の加曾利E式、後期の加曾利B式、堀之内式も出土している。

出土した縄文土器については、本報告書では以下のように分類した。

第I群土器 早期の土器

- 第1類 撲糸文系の土器
- 第2類 沈線文系の土器
- 第3類 条痕文系の土器

第II群土器 前期の土器

第III群土器 中期の土器

第1類 中期前半の土器

- a種 勝坂式系統の土器
- b種 阿玉台式土器

第2類 中期後半の加曾利E式土器

第IV群土器 後期の土器

第1類 堀之内式土器

- a種 有文のもの
- b種 縄文のみのもの

第2類 加曾利B式土器

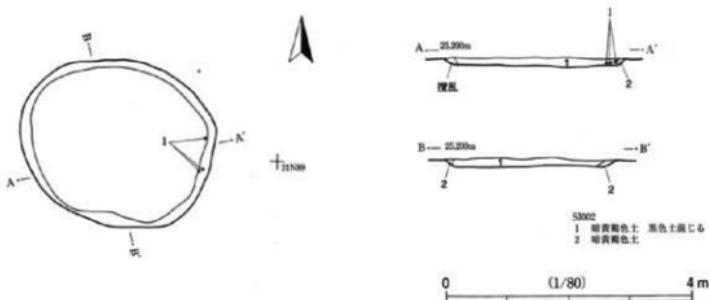
- a種 精製土器
- b種 粗製土器

2 竪穴住居跡

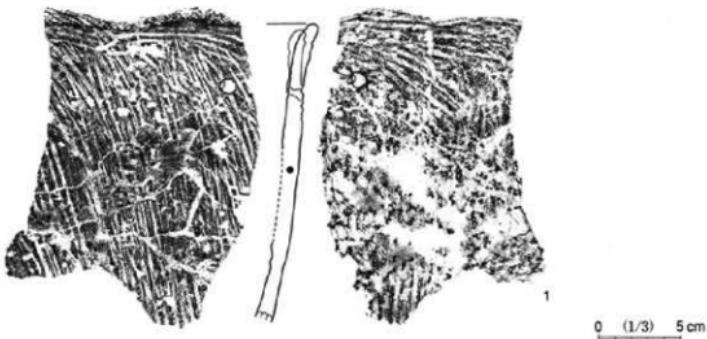
早期と中期の竪穴住居跡を検出した。また、21K・04グリッド付近で検出し、調査時には遺構扱いと思っていたSI1008、SI1009はピット状の遺構である程度の遺物の集中は認められるものの、遺構としての認定の根拠に乏しいため欠番として扱うこととした。

(1) 早期

6軒が検出された。このうちの5軒は、印旛沼へ開口する、幅が100mで台地上との比高が20mほどの支谷に面し、支谷が東西南北の四方へ分岐する支谷の北東の台地上に位置する。標高は約28mほどで、ほぼ平坦な台地の南面する側の谷頭にあたる。早期の竪穴住居跡は、周囲の台地の中では最も標高が高く、南に緩く傾斜する急峻な崖に開まれた台地の縁辺からやや内側に入ったところに位置する。ただ、SI1002のみは幅40mほどのややゆるやかな傾斜で谷へ落ちる支谷を挟んで、前記5軒の住居跡から東側へ120mほど離れた、この台地では最も標高の高い位置で検出されている。



第26図 S I 002



第27図 S I 002 出土土器

S I 002 (第26図・図版6)

平面形は東西に拉げた梢円形で、長径3.2m、短径2.7m、深さは確認面から0.2mを測る。床面は平坦で、炉・柱穴などの施設は検出されず、床面の硬化した部分も見られなかった。覆土は暗黄褐色の一層で、黒色土を混入する。覆土内からは条痕文系土器が出土している。

出土遺物 (第27・43図・図版6・40・66)

1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、住居跡の東壁の立ち上がり付近の床面から少し浮いた層位から出土したもので3片が接合した。底部は検出されなかった。口縁は波状を呈し、口唇部上端にはR Lの繩文が斜位に施文される。胎土には長石、石英を多く含み、スコリアや砂粒を含んでいる。色調は外面が褐色から黒褐色を呈し、内面は褐色から暗褐色を呈する。器面には内外面ともタテ方向や斜位に幅2mmほどの条痕が施されており、口縁部では内外面とも1cmほどの幅でヨコ方向の条痕が巡っている。口縁から3.5cm下がって焼成前の穿孔が1か所ある。穿孔の方向は器面に対して斜め下方に向いている。また、遺存する器面の下半は顕著に二次的に被熱した痕が認められる。他には繩文中期と後期の土器片が若干出土した。また石器では敲石が1点出土している(第43図-1)。

S I 003 (第29図・図版6)

東側の壁の一部がSI004と切り合っているが、その前後関係は不明である。S I 003は掘り込みが浅く南側の壁の立ち上がりも明瞭ではないが、平面形は円形で、径の推定は4.9m～5.3m、深さは確認面から0.1mである。床面は平坦で炉は検出されなかった。柱穴と考えられるものは中央の1基と壁の立ち上がりに沿った外周にはほぼ等間隔に1.3mから1.6mの間隔で9基ほど検出されている。中央の柱穴の平面形は方形がかかった円形で径0.5m、深さは0.1mほどである。壁際のピットの平面形は全てほぼ円形で径0.2mから0.3m、深さ0.2mから0.4mを測る。北西側のピットの間隔が2.7mと開いているが、これは出入口にあたるためであろうか。上記以外のピットは性格が不明であるが、深さは0.2mから0.3mである。遺物は遺構確認面付近からの出土である。

出土遺物 (第30・42図・図版40・66)

1は胴部破片で、内外面に条痕が施文される。外面では斜位や横位に、反時計回りに下から上に、右から左方向へ施文している。2は胴部破片で器面に条痕が施文される。1.2とも焼成は良好である。3は胴部破片で、棒状工具を押し引いて文様を施文する。内面には擦痕状の痕跡が残る。4は底部に近い胴部破片で、Lの燃糸が施文される。胎土は緻密で焼成も良好である。5は尖底土器の底部である。外面は灰褐色を呈し、内面は黒色がかっている。内外面ともタテ方向のナデで整形されている。約1/2ほどが遺存している。焼成は良好で胎土も密である。6は深鉢の底部で丸みを帯びる。外面は淡灰褐色を呈し、内面は赤みがかかった褐色である。胎土には砂粒・赤褐色スコリアを含む。5、6とも条痕文系土器の底部である。他にこの住居跡からは前期の織維土器、後期の土器破片のほか磨石片・楔形石器が各1点と小剥片・碎片等が若干出土した。第42図-1に図示したのは楔形石器である。円鑿を利用している。

S I 004 (第29図・図版7)

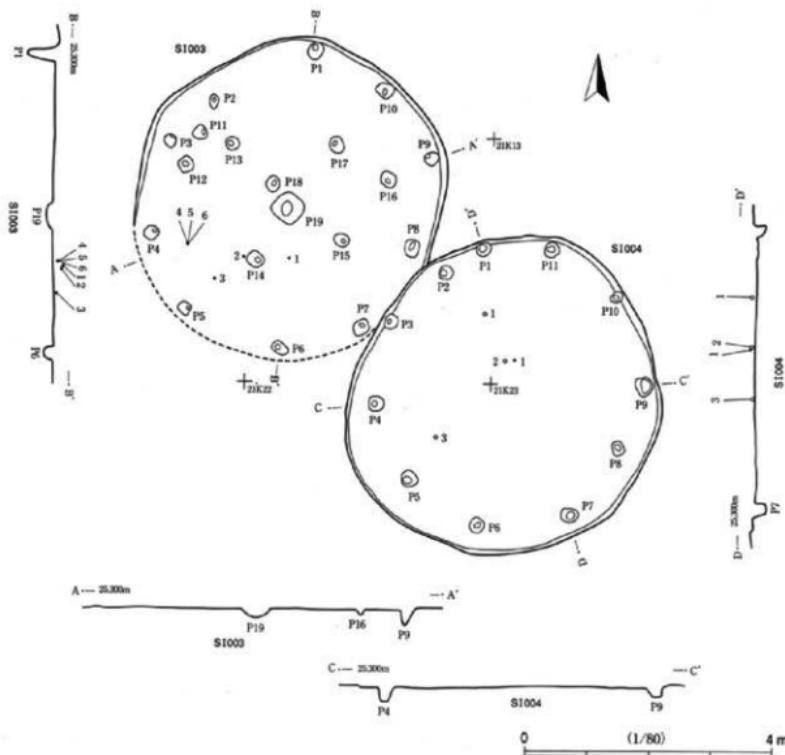
SI003と北西の一部が重複する。住居の平面形はほぼ円形で径4.9m～5.3m、深さは0.1mを測る。床面は平坦で、炉は検出されなかった。床面外周の壁の立ち上がりに沿って1.1m～1.5mの間隔でピットがほぼ等間隔に並ぶ。南壁のピットは壁の立ち上がりから少し内側に離れている。北西側の2基のピットの間隔がほかに比べて狭い。ピットの平面形は全てほぼ円形で径0.2m～0.3m、深さは0.1m～0.2mである。遺物は遺構確認面からの出土である。

出土遺物 (第28・42図・図版40・66)

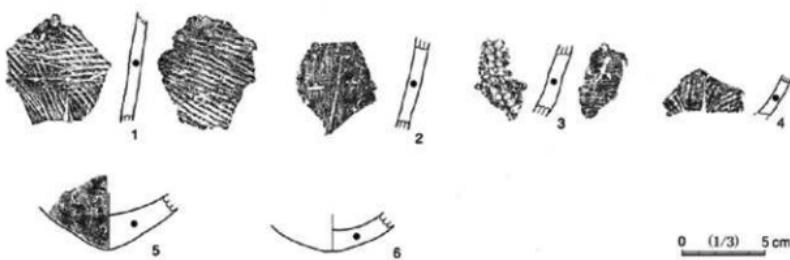
1は外面に浅い条痕があり、口唇部上面にL Rの縄文を押圧施文する。2は無文の土器の口縁部で、口唇部外面に5mm間隔で刺みを入れている。胎土には砂粒を多く混入する。他には燃糸文系・条痕文系の土器と前期の織維土器の破片が若干出土しているが図示できるものはなかった。また、石核 (第42図-4)・楔形石器 (第42図-2) が各1点、R剥片 (第42図-3) と碎片が出土した。



第28図 S I 004 出土土器



第29図 S I 0 0 3 · 0 0 4



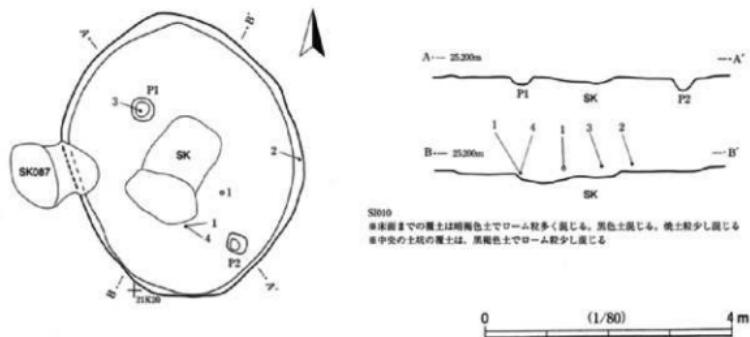
第30図 S I 0 0 3 出土土器

S I 010 (第31図・図版7)

西側の壁に掛かって搅乱坑がある。平面形は北西から南東に長い楕円形で、長径4.6m、短径3.6m、確認面からの深さは5cmと極めて浅い。炉や床面の硬化部分は見られないが覆土中に焼土粒が含まれていた。床面には北西側と南東側にピットがある。柱穴になるかは不明である。遺物はS I 003と同様に燃系文系・条痕文系の土器と前期の繊維土器、中期の加曾利E式の破片が若干と、楔形石器が1点、剥片が2点出土した。底面の中央に重複する2基の土坑がある。北側の土坑は北東から南西に長い楕円形で長辺1.2m以上、短辺1.0m、深さ0.1m。南側の土坑は北東から南西に長い楕円形で長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.2mをはかる。

出土遺物 (第32・42図・図版40・66)

1は口縁部破片で、口縁部がわずかに外半し、口唇部は角状を呈する。内外面とも丁寧なナデで整形している。2は口縁部破片で、床面直上からの出土である。器面の内外に横位の、段差が付くほどの削りとナデを施す。口唇部は内削ぎ状に稜をなす。3は胴部破片で、砂粒を胎土に多く混入する。器面には棒状工具によるケズリに近いナデを加える。4は胴部破片で、器面に細かい条痕文を施す。第43図-5は楔形石器で、確認面で検出されたものである。横断面が菱形の剥片の長軸方向上下端部に階段状剥離と潰れが観察される。



第31図 S I 010



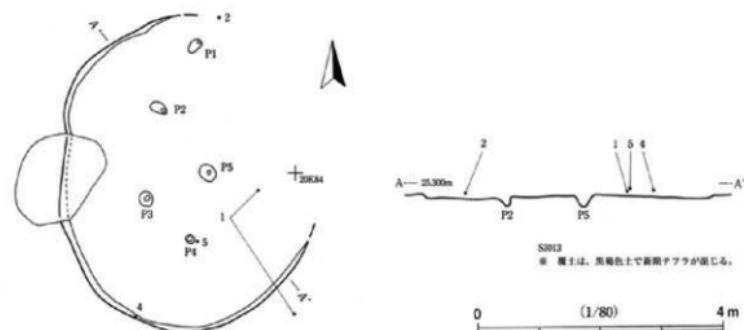
第32図 S I 010 出土土器

S I 013 (第33図・図版8)

西壁の一部が中世の土坑(001)と重複する。北東の壁は掘り込みが薄く不明である。平面形は南北に長い梢円形で、長径推定5.2m、短径推定4.2m、確認面からの深さは5cmである。床面には炉や硬化部分は見られないが、5基のピットを検出した。ピットの径は0.1m~0.3m、深さは0.1m~0.2mである。覆土内からの出土遺物はないが、確認面から早期の撚糸文系の土器が多く検出された。なお、3は西側に重複する中世土坑中の出土である。

出土遺物 (第34図・図版40)

1は口唇部に丁寧なナデを加え、口唇部直下から縦位の撚りの戻ったような粗な撚糸を浅く施文する。口縁部は丸頭状で胎土には砂粒を多く含む。2は撚りの細いL Rの撚糸を縦位に施文する。3・4・5は口唇部直下に少し無文部を残しながら、R Lの純文を間隔を空けながら施文する。4は口唇部の内外面を口唇部直下の2cmまでを丁寧なナデ整形を加え、その下に撚りの緩いR Lの撚糸を縦位に施文する。口縁部は肥厚し、やや外半する。これらはいずれも夏島式期の土器である。



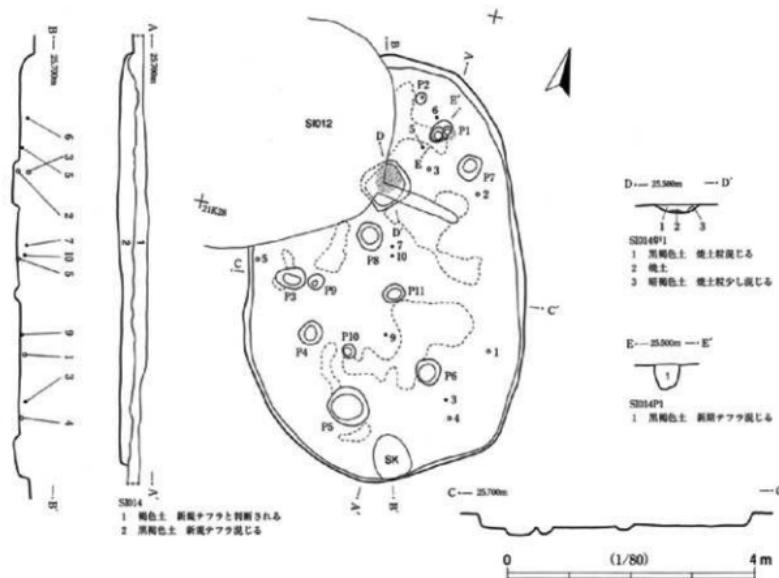
第33図 S I 013



第34図 S I 013出土土器

S I 014 (第35図・図版8)

北西側の一部を奈良・平安時代の住居跡のS I 012に埋されているが、北西から南東に長い梢円形で、長径6.9m、短径4.4mで深さは0.2mである。炉は北側で検出された。床面の硬化面は、円を描くように6か所

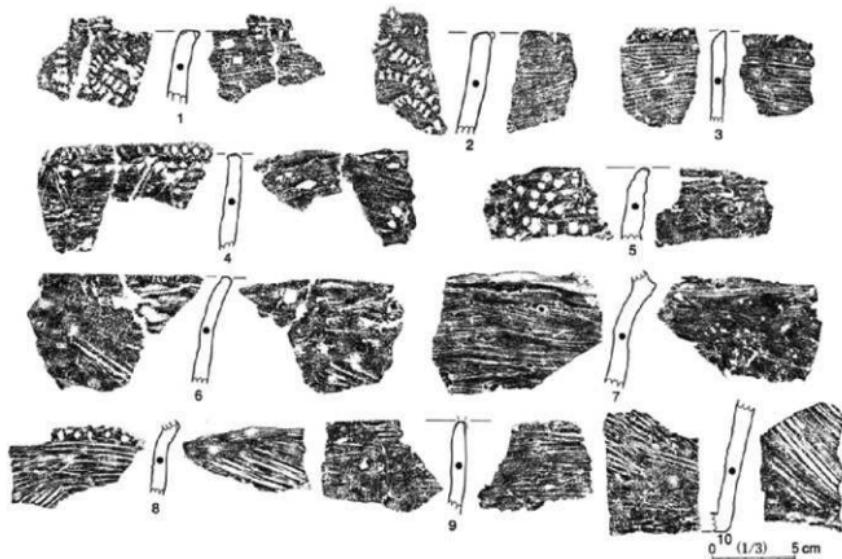


第35図 SI 014

で見られた。柱穴と思われるビットは12基が検出されたが、いずれも浅い掘り込みである。ビットには南側に3基ずつ2列に整然と並んでいるものがある。列の間隔は1.5mで、ビット同士の間隔は北側が1.0m、南側が1.3m～1.5mである。ビットの径は0.3m～0.6mで、深さは5cm～20cmである。この直線的に並んだビットがこの住居の柱穴であるとすると、住居跡の長軸の向きと合わない。この他のビットも、深さは5cm～10cmと浅い。遺物は撚糸文系・条痕文系の土器が多く、石器・石核・磨石各1点と剥片が出土地した。

出土遺物（第36・42・43図・図版42・66）

1～6, 9は口縁部の破片である。1は口唇部が外側に迫り出し、内削ぎ状となっている。その口唇部に15mmの間隔をあけて刻み目が内外面に付される。また、口縁部には板状の工具により直線や弧線の列点文が付される。2も口唇部に刻み目を入れ、1と同様な文様が施文される。3は胎土に僅かに纖維を含んでいる。口唇部は内削ぎ状で、口唇部の外端部に断面が円形の細い棒状の工具で刻みを連続して入れている。口縁部の内外面には条痕文が付される。4は口縁部上端に連続して棒状工具の押圧と思われる楕円形を呈する刻み目を付す。さらに口縁部外面には棒状工具による連続した刺突文が一条付され、その下に棒状工具を斜位に押引して文様を付している。5は器面の剥落が著しい破片である。胎土に纖維を含み、半裁竹管で連続して施文する。6は二次的な被熱を被っており外側の一部には煤が付着している。口縁部は緩く外湾し、内外面に条痕が残る。7は胴部破片で、口縁部が欠落している。器形は口縁部が屈曲して外湾す



第36図 S I 0 1 4 出土土器

るようである。8は7と同様に胴部破片で、口縁部が屈曲して有段状に厚くなり、その肥厚した部分に棒状工具によって刻み目が縱に連続的に付されるものである。9の口唇部には指で摘んだように器厚の一部が厚い部分と薄い部分がある。器面には条痕が付される。10は底部の破片で平底である。これらの土器は茅山下層式と考えられる。第43図-6は石鏃である。先端部を欠く。抉りが基部に入る。第42図-7は剥片素材の石鏃で、周辺からの平坦加工が全周に及ばず未成品的なものである。第42図-8は楔形石器である。黒曜石製の厚い素材のもので、上下端部の階段状剥離が顕著である。第43図-2は粘板岩製の磨製石斧である。先端の刃部を欠損した後に、調整加工を施し刃部を再生している。

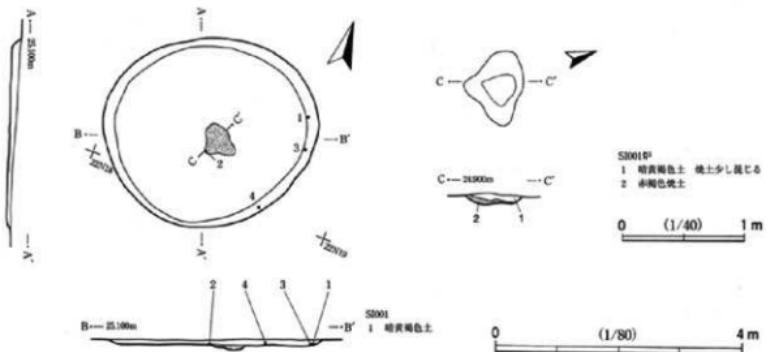
(2) 中期

S I 001 (第37図・図版6)

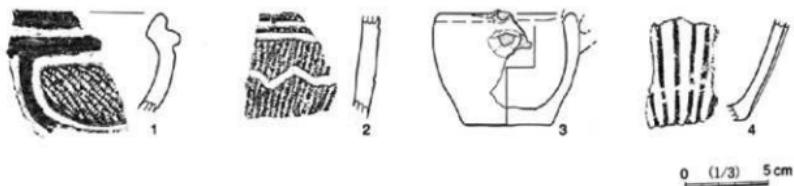
早期の住居跡群とは東側に谷を一つ挟んだ、南西へ突き出る舌状台地上に位置し、平坦面が長さ100m、幅50m前後の台地の基部に近い場所に位置する。住居跡の平面は北東から南西にやや長い円形で、長径3.4m、短径3.1m、深さは確認面から0.1mを測る。床面の中央の少し東に寄って火がある。床面の硬化面は無い。柱穴も検出されなかった。床面直上から遺物が検出された。この住居の時期は検出された土器から、縄文時代中期の加曾利E式期と考えられる。

出土遺物 (第38図・図版40)

1は口縁部の破片である。口唇部直下に椭円形に隆起を貼り付け、文様帶を区画する。区画された中に斜行縦文を充填する。口縁部の断面形は内湾する。2は胴部破片で、縦文を施した後に水平方向に2条



第37図 SI001



第38図 SI001出土土器

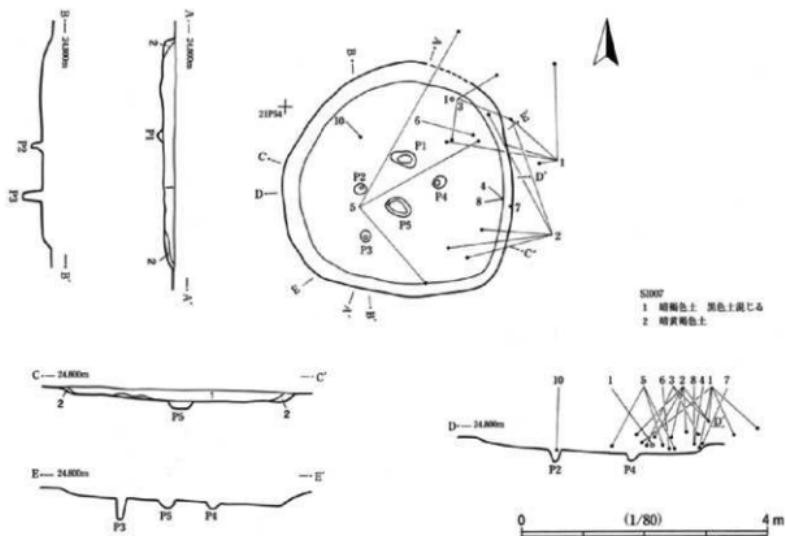
の平行沈線とその下に鋸歯状の波形の沈線を付す。3は、無文の小型鉢である。口縁部は平線で1/4しか無いが、口縁の一部が隆起しており口縁下1.5cmに突起が残る。器面の内外面とも良く整形されており光沢がある。4は胴部から底部の一部にかけての破片で、縦の平行沈線のみで文様を構成している。これらの土器はいずれも、縄文中期の加曾利E式期の土器である。他に加曾利E式の土器片が多く出土しているが図示できるものはない。

SI007 (第39図・図版7)

SI001と同じ台地上で、001から北東へ約30m離れた台地の東側の縁辺部寄りで検出された。北東側で土坑 (SK049) と重複する。住居跡の平面形はほぼ円形で、径3.9m~4.0m、深さは0.2mを測る。床面から炉は検出されなかった。硬化面も無く、床面の中央付近に5基のピットが検出された。これらのピットの径は0.2m~0.4mで、深さは床面から0.1m~0.3mを測る。遺物は住居の東側の床面から浮いた状態で出土している。

出土遺物 (第40図・図版41・66)

1はキャリバー型の深鉢形土器で、口縁部に耳状の把手が付く。二次的にかなり被熱しており、内外面ともぼろぼろになっている。口縁部文様帯と胴部文様帯は2条の隆帯で区画され、口縁部文様帯の曲線を



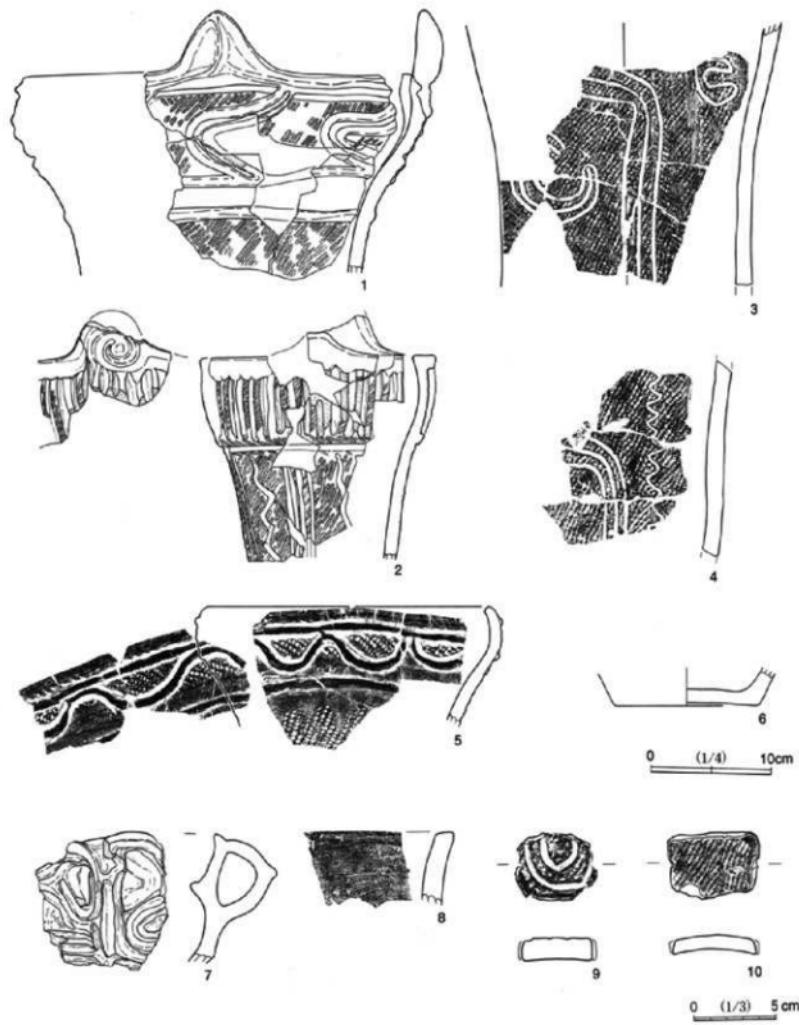
第39図 S 1 0 0 7

描く隆帯と隆帯の間には縄文が充填される。口縁部と胴部の間は隆帯が無文帯を挟むように巡る。胴部には斜縄文が付される。2はキャリバー状の鉢形土器で、口縁部に渦巻き状の突起と把手が付く。口縁部には隆帯を平行して連続して貼り付け、隆帯には斜位にR Lの縄文を付す。口縁部文様帯と胴部文様帯は一条の沈線で区画され、胴部には斜縄文を施した後に三条単位の懸垂文が付される。懸垂文と懸垂文の間には、蛇行する沈線が一条施される。3・4は同一個体と考えられる深鉢形土器の胴部破片で、縄文を施した後に平行する沈線により弧状の文様や曲線で文様を構成している。5は深鉢形土器の口縁部である。口縁は平縁で口縁部文様帯は二本の隆帯で区画し、その中に斜縄文を施した後に隆帯を貼り付けた速弧文を置き、隆帯で区分した下側の縄文を磨り消している。胴部の文様は、隆帯で口縁部文様帯と分けた下を幅約1cmの幅で縄文を磨り消して無文帯を配し、その下から斜縄文を施している。6は深鉢の底部と考えられる。底部外面が少し上げ底になる。約1/2が遺存する。7は渦巻き文と沈線文で構成される口縁部の横状把手の破片である。8は無文の口縁部の破片である。9・10は胴部破片を利用した土器片錐である。これらの土器は加曾利E式の範疇で捉えられる土器である。石製品には黒曜石製の石鎌1点・石皿が1点と雲母を含む岩石の破片が3点出土した。

(3) 壴穴状遺構

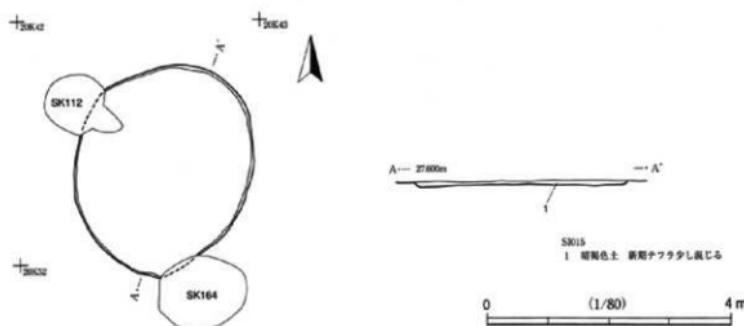
S 1015 (第41図・図版8)

台地上の最も標高が高い地点に位置する。この遺構は、掘込みも浅く、柱穴などのピットも検出されな

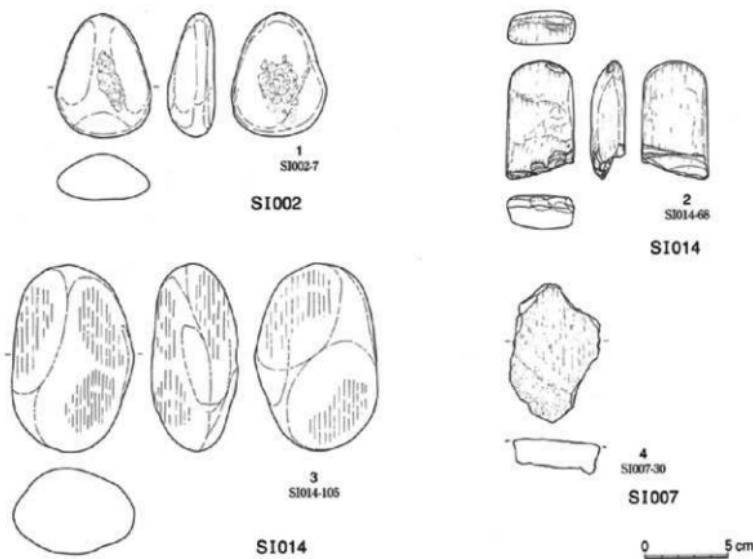


第40図 S I 0 0 7 出土土器

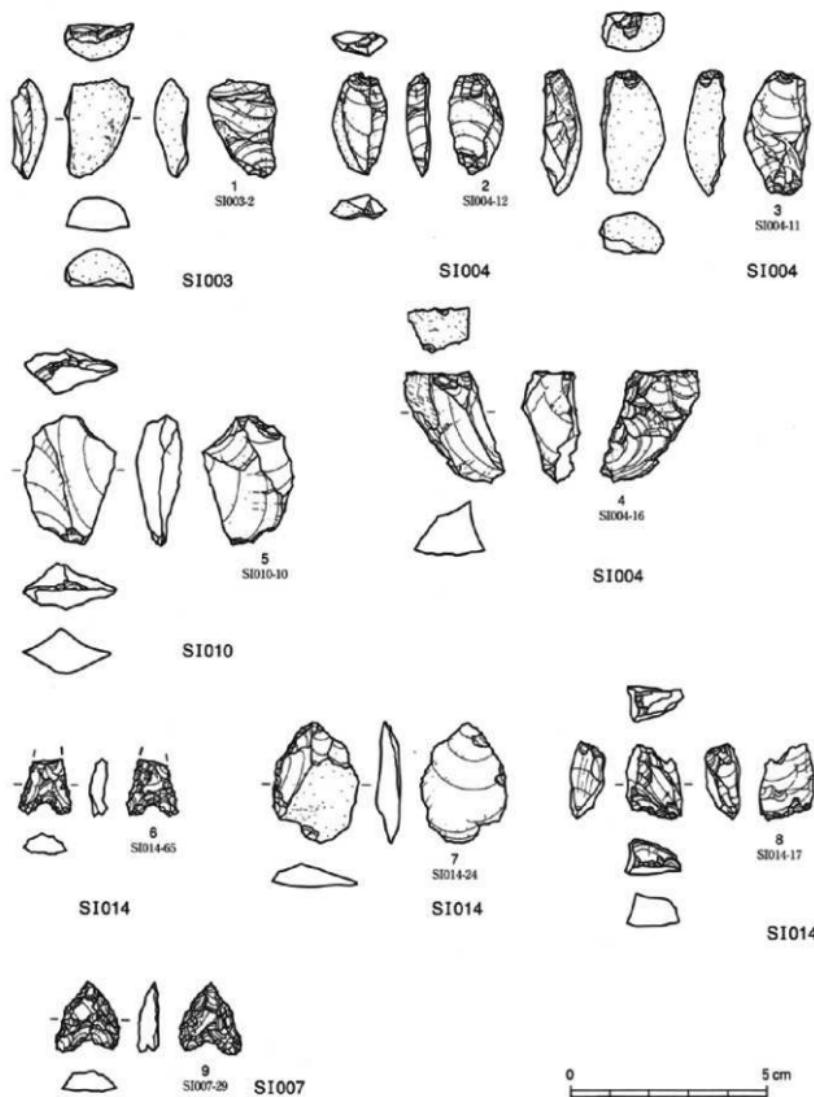
かったが、その形態から竪穴状遺構とした造構である。平面形は橢円形に近く、長径3.5m、短径2.90mで、深さは0.06mである。北西と南東の壁の一部が土坑と重複する。また、遺物も出土しなかった。



第41図 S1015 竪穴状遺構



第42図 縄文住居出土石器（1）



第43図 縄文住居出土石器（2）

3 炉穴

早期の炉穴が56基ほど検出された。これらの炉穴の分布は、概ね縄文早期の住居跡が検出された範囲と重複することが看取される（第44図）。その分布範囲は大きく分けると住居の分布範囲と同様の二つの地区に集中しており、立地的には印旛沼西端の低湿地を南から侵入する支谷に面した、北東に位置する台地の南東から南西側斜面に面した位置にある。他の一つはこの群とは同じ台地上ではあるが、東側に緩やかな谷を一つ挟んで南西に跳びだした台地上の東側斜面に面して散漫に分布しながら立地する。

これらの炉穴はその平面の形態や断面形から次のようにA類からD類の四類に分類した。分類した四類の中には重複関係として捉えられるものも含まれる。

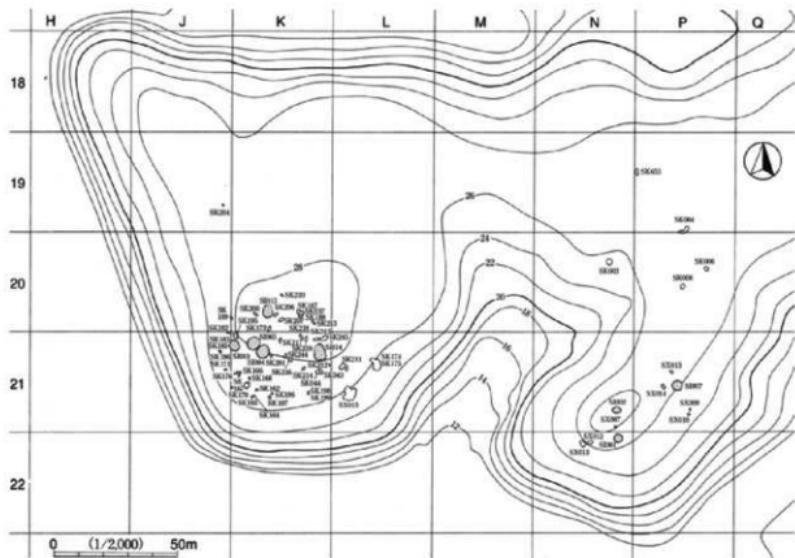
A類 平面形が円形または梢円形で、掘り込みも比較的浅く、遺構の規模が比較的小型のもの。

B類 平面形が長梢円形で、掘り込みは比較的浅いものから深いものがあり、遺構の規模もA類に比較して大きいもの。

C類 平面形が円形または不整形で、張り出しを有するもの。これは何基かの遺構が重複しているようにも見える。

D類 平面形が不整形で、規模も大きなもので底面が平坦では無く、焼土範囲も複数認められるもの。

炉穴は調査時にSKあるいはSXを遺構番号の前に付けて調査しているので、それを踏襲して説明を加えることとする。また説明に際しては、原則として類毎の遺構番号順に記述を進める事とする。



第44図 縄文住居・炉穴分布図

A類

SK003 (第45図・図版9)

22N-27・37に所在する。平面形は不整形を呈する。長径2.3m、短径2.0m、深さ0.52mである。西側に寄った底面に炉床がある。炉床直上の覆土層には炭化物と焼土粒が多量に混入していた。出土遺物は無い。

SK006 (第45図・図版9)

20P-37に所在する。東西に長い洋ナシ形の炉床のみ検出した。長径0.86m、短径0.69mである。早期の燃糸文系土器の小破片が1点出土した。

SK008 (第45図・図版9)

20P-54・55に所在する。北側にやや張り出した不整五角形で、長径2.14m、短径1.60m、深さ0.32mである。焼土が底面から浮いた位置で確認されている。

SK044 (第45図・図版9)

21K-38・48に所在する。ほぼ円形で径は推定で1.56m、深さ0.32mを測る。出土遺物は燃糸文系土器が数点出土した。

SK162 (第45図・図版9)

21K-52・62に所在する。北東から南西にやや長い楕円形で長径1.23m、短径1.00m、深さ0.14mを測る。東隅に炉床がある。被熱した縄文早期と思われる胸部破片2点が出土した。他には奈良・平安時代の土師器坏の口縁部の小片が1点出土した。

SK164 (第45図・図版9)

21K-62に所在する。北東から南西にやや長い円形で長径0.76m、短径0.63m、深さ0.11mを測る。出土遺物は無い。

SK167 (第45図)

21J-59、21K-50に所在する。東西にやや長い円形で長径1.09m、短径0.70m、深さ0.11m。底面の南側が炉床になる。出土遺物は無い。

SK168 (第45図・図版9)

21K-41に所在する。南側に偏った円形で、長径1.38m、短径1.12m、深さ0.32mを測る。底面の北隅に炉床があり、早期の土器片が覆土中及び炉床直上から出土した。

遺物 (第50図・図版43)

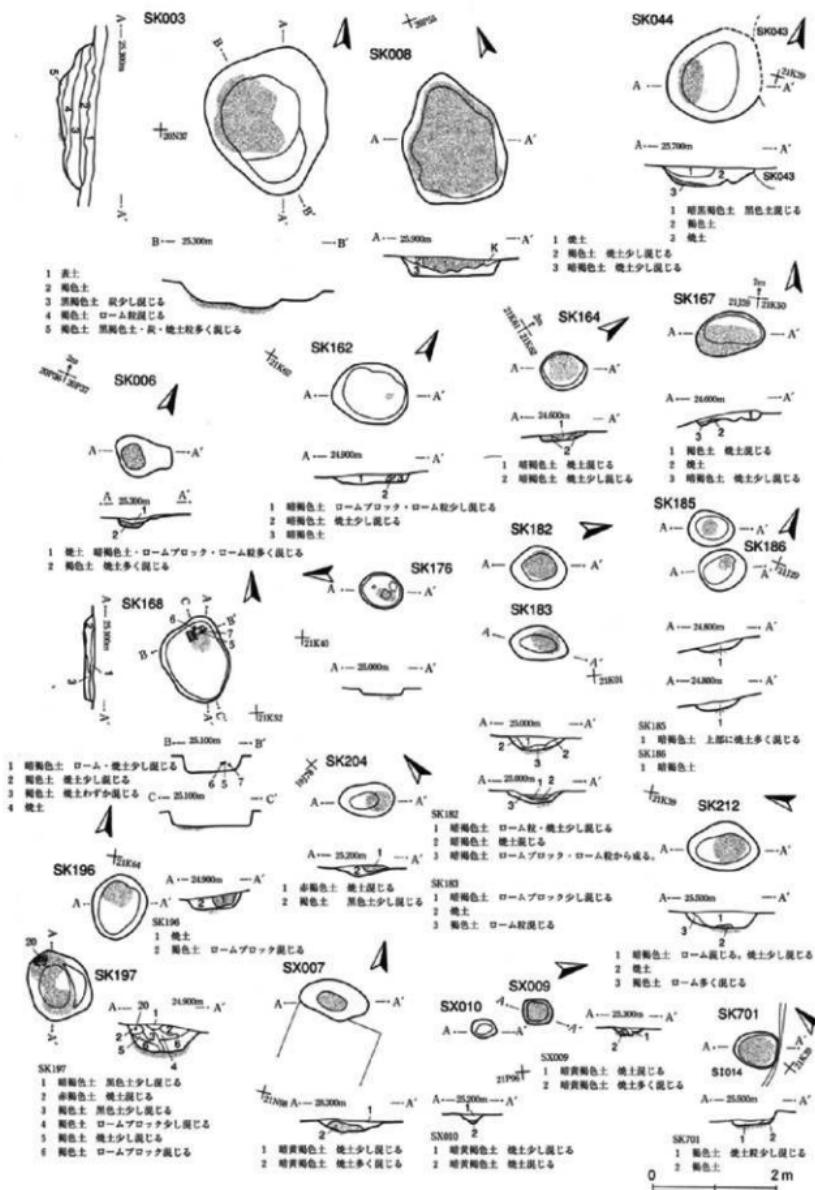
5は器面に擦痕を残す土器の口縁部である。擦痕は器面の内外面に見られる。口縁部がやや外反気味に開く。6は器面の内外面に擦痕を残し、外面には丁寧なナゲを加える。器厚がやや厚い。7は内外面に擦痕が残る土器の口縁部である。6と比較して器厚が薄い。胎土に赤褐色スコリアを混入する。5～7は胎土上に纖維を僅かに混入する。これらの土器は第I群土器第3類の土器である。

SK176 (第45図・図版9)

21K-40に所在する。(ほぼ)円形で径0.70m、深さ0.11m。炉床周辺から二次的な被熱によりボロボロになった早期の条痕文系土器の小片がまとまって出土したが図示できる遺物は無い。

SK182 (第45図・図版9)

21J-09に所在する。南北に長い楕円形で長径0.90m、短径0.70m、深さ0.22mを測る。覆土中にロームブロックやローム粒を混入している。出土遺物は無い。



第45図 繩文炉穴（1）

SK183 (第45図・図版9)

21J-09に所在する。南北に長い楕円形で長径0.96m、短径0.55m、深さ0.22mを測る。SK182と隣接した位置にあり、規模や形態が類似している。出土遺物は無い。

SK185 (第45図)

21J-18・28に所在する。ほぼ円形で径0.76m、深さ0.11mを測る。出土遺物は無い。覆土上部に焼土を多く混入している。

SK186 (第45図)

21J-28に所在する。ほぼ円形で径0.76m、深さ0.14mを測る。出土遺物は無い。SK185と隣接しており、規模や形態が類似している。

SK196 (第45図・図版10)

21K-63・64に所在する。南北に長い楕円形で、長径1.07m、短径0.86m、深さ0.24mを測る。早期の撲糸文系土器1点、条痕文系土器2点が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

SK197 (第45図・図版10)

21K-63に所在する。ほぼ円形で径1.13m、深さ0.41mを測る。覆土の上層から中層にかけて焼土が混入していた。また、確認面から早期の格子目文の付された沈線文系土器の胴部破片が6点まとめて出土した。

遺物 (第51図・図版44)

20は口縁部に横長の格子目文、口縁部以下は綫長や斜条痕で文様を構成している。内面は縱長の格子目文を基調として整形がなされているが、二次的な被熱によって胴部内面の器面は剥脱が甚だしい。胎土には僅かに纖維を含む。

SK204 (第45図・図版10)

19J-78・79に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径0.91m、短径0.55m、深さ0.13mを測る。覆土の上層に焼土が含まれていた。出土遺物は無い。

SK212 (第45図・図版10)

21K-39に所在する。南北に長い楕円形で長径1.14m、短径0.77m、深さ0.27mを測る。早期の撲糸文系土器の胴部小片が9点出土したが図示できるものは無い。

SK701 (第45図)

21K-28グリッドに所在する。早期の住居跡であるS I-014の南側の壁の内側に重複して検出されたものである。規模は長径0.72mで短径0.60mである。

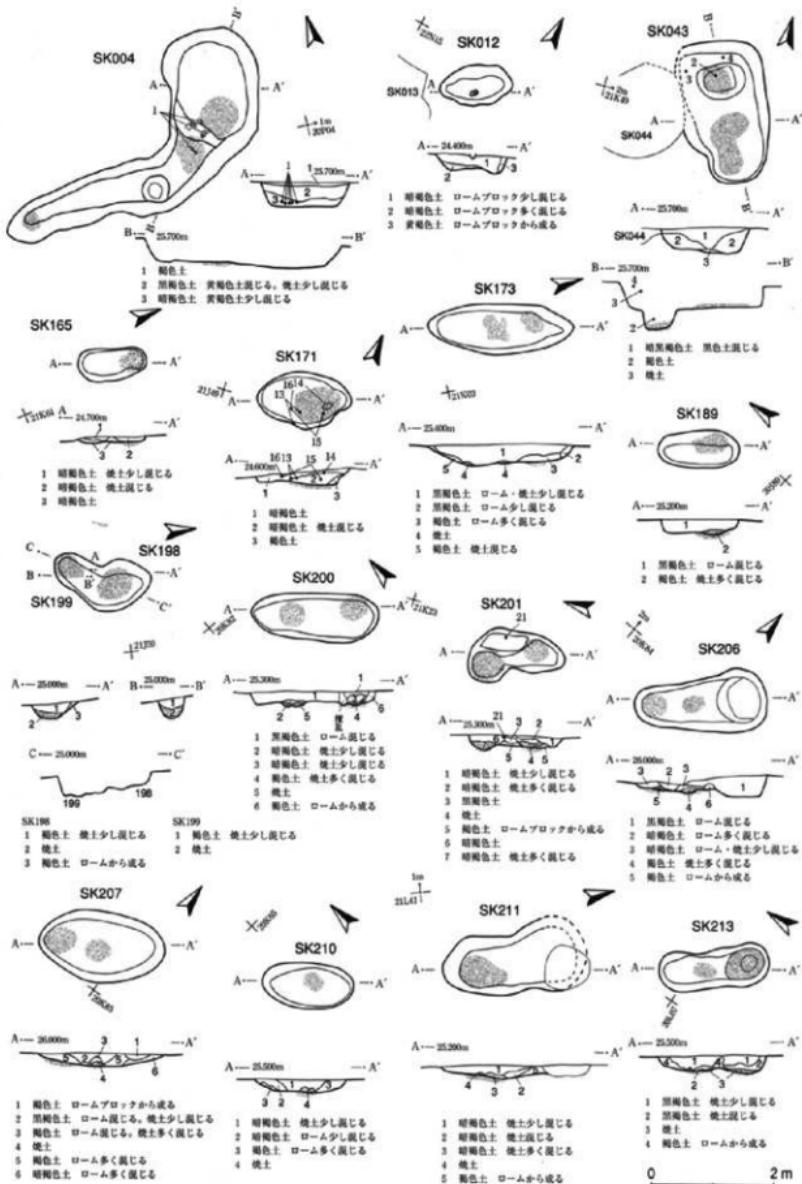
SX007 (第45図)

21K-98に所在する。南側の一部を上層確認トレンチが壊す。平面形はほぼ東西に長い楕円形で、長径1.14m、短径0.61m、深さ0.18mを測る。土層断面から底面直上の覆土中に焼土が多量に堆積していた。遺物は早期の条痕文系と思われる土器の小片が1点出土したのみである。

SX009 (第45図・図版10)

21P-75に所在する。ほぼ円形で径0.52m、深さ0.12mを測る。覆土中に焼土が含まれる。遺物は早期の条痕文系と思われる小土器片が1点出土した。

SX010 (第45図・図版10)



第46図 繩文炉穴 (2)

21P-85に所在する。ほぼ円形で径0.42m、深さ0.12mを測る。炉床の痕跡ははっきりしないが、覆土中に焼土が多量に混入している。出土遺物は無い。

B類

SK004 (第46図・図版10)

19P-94、19P-03・04に所在する。北から西へ屈曲する全長4.95m、深さ0.41mほどの細長い不整形である。炉床が中央部に二つと南西端に一つあることから、複数の炉穴が重複している可能性もある。早期の条痕文系土器片が底面からまとめて出土した。

遺物 (第50図、図版42)

1は器面に擦痕が残る無文の土器である。口縁部の1/5ほどが遺存していたが底部は出土しなかった。内面は二次的な被熱で、器面がボロボロで剥脱が見られる。胎土に纖維を僅かに混入する。

SK012 (第46図・図版10)

22N-15に所在する。北東から南西に細長い楕円形で、長径1.18m、短径0.64m、深さ0.28mを測る。焼土の堆積はなかった。早期の条痕文系と思われる縄文土器の平底の破片が出土したが細片であり二次的な被熱のため器面は剥脱し荒れている。

SK043 (第46図・図版9)

21K-38・39・48・49に所在する。西側でSK044と一部重複しており、セクションの観察からSK043が付で044の方が後に構築されたことが看取される。北西から南東方向に長い方形で、長径2.32m、短径1.42m、深さ0.41mを測る。炉床が南北2か所ある。北側の炉床は底面のピット中にある。早期の撲糸文系・条痕文系土器のほか奈良・平安時代の土師器壺の破片も出土した。奈良・平安時代の堅穴住居跡SI005の西側に近接するためであろう。

遺物 (第50図、図版42)

2は口縁部がやや内済し、口唇部は内削ぎ状で口唇部の内外面に棒状工具による刻み目が等間隔に入る。胎土には僅かに纖維が混入する。炉穴中の覆土下層の炉床を伴うピット状の遺構中から出土した。3は口縁部破片で、やや内削ぎ状の口唇部の内外面に棒状工具により刻み目を入れる。口縁部には二条の斜位の沈線を挟んで半截竹管による列点文を付す。胎土には僅かに纖維を混入する。覆土上層から出土した。4は一括資料で、出土地点は不明である。器面に条痕文が残り、内面はくすんだ暗灰色で器面は荒れている。2、3は第I群土器第3類の茅山下層式土器である。

SK165 (第46図)

21K-61・62に所在する。北東から南西に長い小判形で長径1.11m、短径0.54m、深さ0.07mを測る。出土遺物は無い。

SK171 (第46・図版11)

21J-39・49に所在する。東西に長い楕円形で長径1.54m、短径0.95m、深さ0.25mを測る。覆土中層に焼土が混入する。遺物は覆土中層から早期の条痕文系土器片が出土した。

遺物 (第50図・図版43)

13は細かな波状口縁の口唇部上端に二条単位の線刻による刻み目を有する口縁部破片で、器面には条痕が残り、二次的な被熱を受けている。胎土には纖維を含む。14・15は斜位の格子目文を表裏に施文する同一個体と考えられる胴部の破片である。14は胴部上半が外反する。胎土に赤橙色のスコリアを混入する。

16は棒状工具による整形痕が器面表裏に残る。

SK173 (第46・図版11)

20K-93に所在する。南北に長い梢円形で長径2.38m、短径0.83m、深さ0.32mを測る。覆土中にローム土が多く混入する。中央と北に寄った二か所の底面のハードロームが被熱しており、炉床と考えられる。早期の撚糸文系・条痕文系の土器片とチャート製の剥片が1点出土した。

SK189 (第46図)

20J-89に所在する。北西から南東に長い小判形で、長径1.31m、短径0.62m、深さ0.25mを測る。炉床の焼土部分は東側の壁に寄った位置で検出された。出土遺物は無い。

SK198・SK199 (第46図・図版11)

21J-59・69に所在する。2つの炉穴が重複していると思われ、炉床が複数検出されている。平面形は北東から南西に長い梢円形で長径1.60m、短径0.77m、深さ0.37mを測る。SK198からの出土遺物は無いが、SK199からは早期の条痕文系土器の細片2点とチャート製の石錐の先端部が1点出土した。

SK200 (第46図・図版11)

20K-82に所在する。北西から南東に長い小判形で長径2.07m、短径0.80m、深さ0.22mを測る。炉床は2か所あるが、炉床はその内の1か所は底面に、他の1か所は底面から一部浮いた状態で検出されている。無文の底部に近い土器片が1点出土したが図示できるものはない。

SK201 (第46図・図版11)

21K-23に所在する。南北に長い不整形を呈する梢円形で、長径1.57m、短径0.60m、深さ0.23mを測る。炉床は2か所で検出されている。セクション図の観察から2基の炉穴の重複と考えられる。早期の撚糸文系土器片とチャートの小円碟から剥がされた剥片が1点出土した。

遺物 (第51-53図・図版44)

21は口縁部破片で、口唇部に半截竹管のような工具による2条の斜めに横切る連続刺突文と2条の刻み日文が施文される。口縁部は外反し、器厚もやや薄くなる。器面の外面は擦痕が浅く残り、横ナデを加えた後に工具による刺突痕を残す。内面は丁寧なナデを施す。胎土には僅かに機械を含む。第53図5は楔形石器である。チャート製で、小梢円碟の上下端部の階段状剥離と潰れが顯著である。

SK206 (第46図・図版11)

20K-84に所在する。北東から南西に長い小判形で長径2.15m、短径1.01m、深さ0.35mを測る。炉床は底面の中央と、0.8m離れた南端の2か所から検出された。早期の撚糸文系・条痕文系の土器片が出土した。

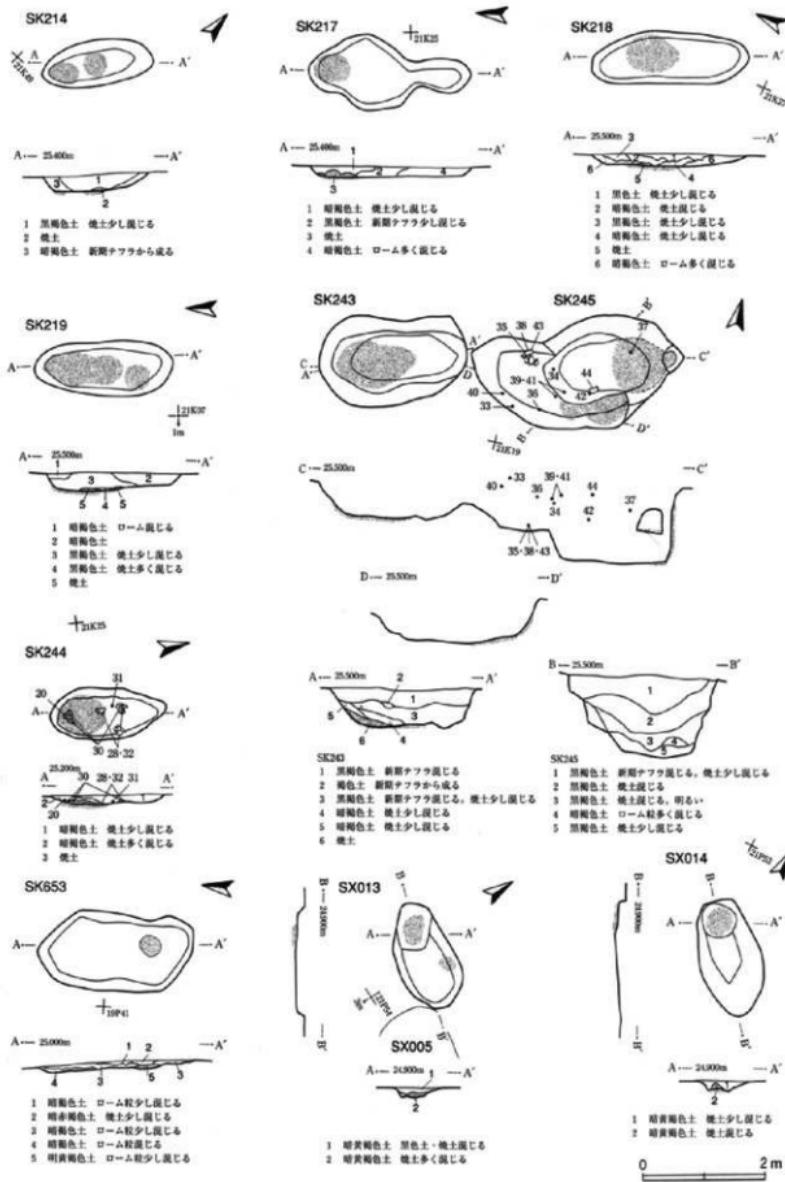
SK207 (第46図・図版11)

20K-84・85に所在する。北東から南西に長い梢円形で長径2.05m、短径1.16m、深さ0.18mを測る。南に寄った位置の2か所から炉床が確認された。覆土中にはローム土が多量に含まれていた。早期の撚糸文系・条痕文系の土器の細片が出土した。

SK210 (第46図)

20K-64・65に所在する。北西から南東に長い梢円形で長径1.48m、短径0.75m、深さ0.21mを測る。炉床は一か所である。早期の撚糸文系土器の細片が5点出土した。

SK211 (第46図・図版11)



第47図 繩文炉穴（3）

21L-31に所在する。北側が他の遺構との重複によって一部不明であるが、南北に長い小判形のようで長径は推定で234m、短径1.12m、深さ0.21mを測る。覆土には焼上りが含まれていた。炉床は南に寄った位置で1か所検出された。早期の撚糸文系・条痕文系の土器片が出土したが遺存度が悪く図示できなかった。

SK213（第46図・図版11）

20K-88・98に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.78m、短径0.68m、深さ0.28mを測る。炉床は中央と南隅の2か所にある。早期の撚糸文系・条痕文系土器の細片9点が出土した。

SK214（第47図・図版12）

21K-37に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.81m、短径0.73m、深さ0.26mを測る。炉床は中央と南端の二か所にある。早期の撚糸文系土器片とチャートの小円碟から剥離された小剥片が1点出土した。

SK217（第47図・図版12）

21K-04・14に所在する。南北に長い不整形で長径2.64m、短径1.21m、深さ0.19mを測る。炉床は北に寄った位置から1か所が確認された。早期の撚糸文系の微細な土器片が7点出土した。

SK218（第47図・図版12）

21K-06・07に所在する。南北に長い楕円形で長径2.56m、短径0.85m、深さ0.18mを測る。炉床は中央やや北に寄った位置で1か所が検出された。早期の撚糸文系・条痕文系の二次的な被熱で器面の剥脱の顕著な細片が14点出土した。

SK219（第47図・図版12）

21K-07に所在する。南北に長い小判形で長径2.25m、短径0.91m、深さ0.29mを測る。炉床は南北に細長く、底面が被熱している。早期の撚糸文系・条痕文系の土器片と、チャート製の剥片素材で、基部に抉りの入った片面調整加工の石鏃が1点出土した。

遺物（第51・53図・図版44・66）

25は口縁部破片である。口唇部に斜めの刻み目を付す。器面の内外には条痕状の文様が付される。器身も薄く、小型土器の破片と考えられる。26、27は同一個体と考えられる胴部破片で、胎土に纖維を混入する。内外の器面には条痕状の擦痕が残る。第53図-7は石鏃である。チャート製で背面の先端部及び基部に細部調整が認められるが裏面には細部調整がほとんど及んでいない。

SK243（第47図・図版12）

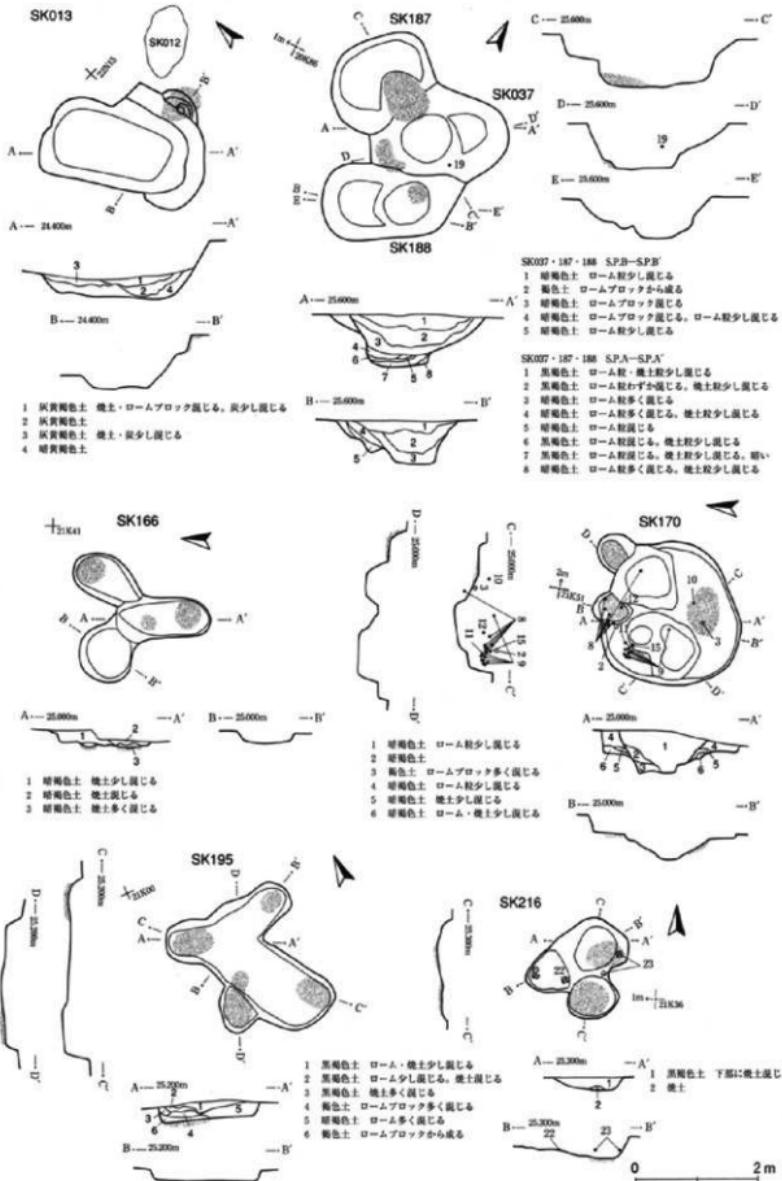
21K-08に所在する。東西に長い楕円形で長径2.39m、短径1.48m、深さ0.60mを測る。西に寄った底面で炉床が1か所検出された。炉床は底面から壁の立ち上がりにかけての範囲で火を焚いた痕跡が確認できた。遺物は早期の撚糸文系・条痕文系の土器片が出土した。

SK244（第47図・図版12）

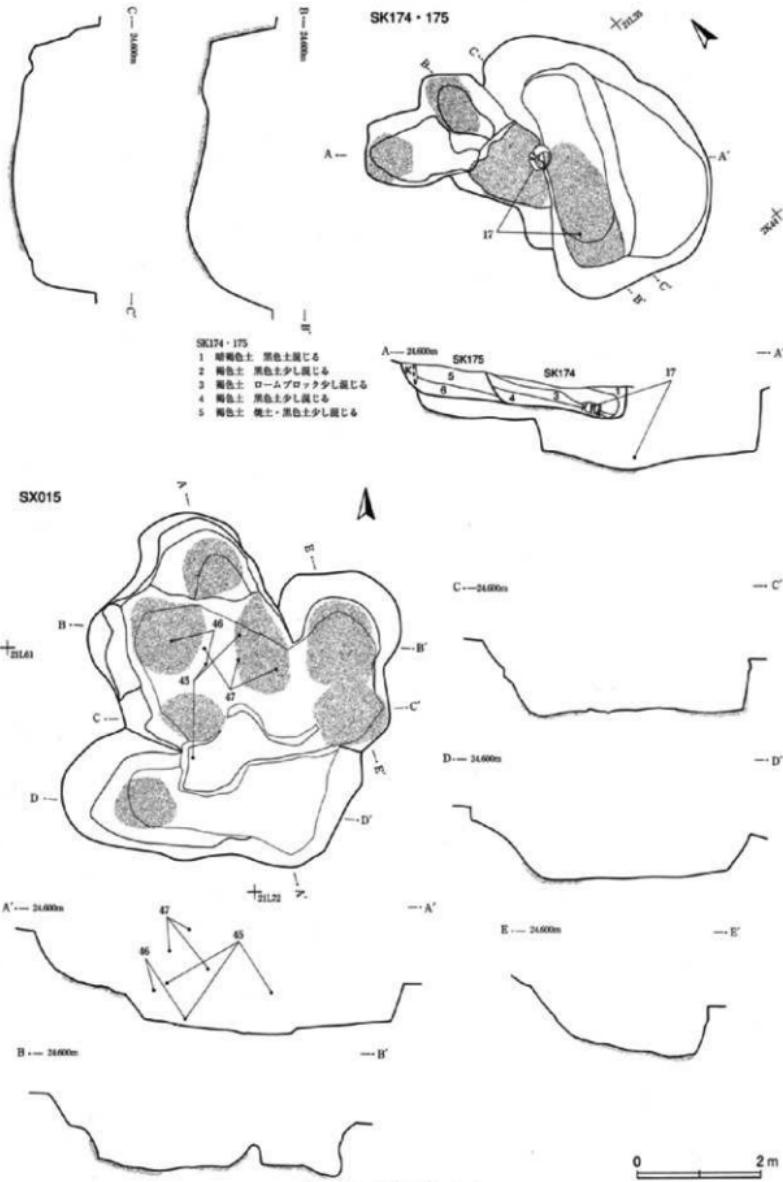
21K-25・35に所在する。東側に隣接してが穴（SK-245）が所在する。南北に長い楕円形で長径1.91m、短径0.84m、深さ0.15mを測る。炉床は底面の南に寄った位置で検出された。覆土下層からは早期の条痕文系の土器片を主体に撚糸文系の土器片も出土した。

遺物（第51・52図・図版42・44）

28は口縁部から胴部の破片で、1/4が遺存していた。表面には格子目文の条痕が、内面には斜位の条痕が付される。口唇部上端にも2~3条の条痕が付される。内面は二次的被熱が著しい。28、29、31、32は同



第48図 繩文炉穴 (4)



第49図 縄文炉穴 (5)

一個体と考えられるが接合しない。30は口縁部から胴部の破片で、斜位に条痕を付す。口唇部に押圧による刻目が入る。内面は擦痕が残るが、二次的な被熱により器面の剥脱が見られる。また、胎土には僅かに繊維を含む。これらの土器は第1類第2類土器の土器である。

SX245 (第47図・図版12)

21K-08・09に所在する。東西に長い不整の楕円形で、長径3.47m、短径1.82m、深さ1.25mを測る。東側の壁がオーバーハングしており、トンネル状になった壁際には直立に直径0.2×0.3mの煙道が構築されている。炉床は南側の底面から壁に架かる位置で検出された。早期の沈線文系の土器片が覆土中及び西側の一段高いテラス状のか所から出土した。

遺物 (第52図・図版45・47)

33は無文の土器の口縁部で、緩やかな波状を呈する。口縁部の内外面に規則的に指頭で押圧を加えたような痕跡を残し、内面の口縁部には条痕が見られる。内面は二次的な被熱を受けている。また、胎土に繊維を混入する。34は口縁部が僅かに外反する。口唇部はつまみ上げによって外反している。器面には擦痕が残る。内面は二次的な被熱によって器面の剥脱が著しい。35は胴部破片で、器面には条痕文が残る。36は口縁部が内湾する。器面に擦痕が残る土器である。口縁部に指頭による押圧を内外面から交互に加えた痕跡が残り、口縁部断面を上から見ると波打っている。37は口唇部が内削ぎ状で、器面に斜位の条痕文が残る。内面は口唇部直下に条痕様の整形痕と擦痕が残る。38は口縁部が内湾し、口唇部はつまみ上げによって外反する。口唇部は内削ぎ状を呈し、口縁直下は指頭による押圧が口縁に沿って規則的に入る。器面には条痕状の擦痕が横位に残る。胎土に繊維を含む。39は口唇部に刻み目を入れ、口縁部には半截竹管により列点文を付す。口縁部と胴部は隆起帯により区画され、胴部以下が屈曲して窄まる。胎土に繊維と赤褐色のスコリアを混入する。40は胴部破片である。縁位に太沈線を規則的に配した下端にアナグラフの貝殻の貝殻背面の押圧痕を付し、その下に縱の太沈線の刻みを横に巡らせる。その上に無文帯を挟んで横の沈線と横位の半截竹管による列点文を配し、隆脊が巡る。内面には条痕が残され、屈曲部には指頭による押圧痕が残る。42、43、44は底部破片である。42は上げ底状の底盤の破片である。内面の底面に条痕が残る。43は1/2が遺存していた。内面には擦痕が残り、外面はゴツゴツしている。44は器面に条痕が残る。胎土には繊維を混入する。

SX653 (II009) (第47図・図版12)

19P-30・40に所在する。南北に長い小判形で長径2.52m、短径1.29m、深さ0.10mを測る。南側に寄つて炉床が1か所検出された。遺物は検出されなかった。

SX013 (第47図・図版13)

21P-33・34・43・44に所在する。ほぼ東西に長い楕円形で長径1.80m、短径0.95m、深さ0.17mを測る。北東側と西隅の2か所に炉床がある。出土遺物は無い。南東側に接して平安時代の土坑墓 (SX005) がある。

SX014 (第47図・図版13)

21P-52・53に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.93m、短径1.03m、深さ0.16mを測る。北西隅に炉床がある。出土遺物は無い。

C類

SX013 (第48図)

22N-14・15に所在する。北西から南東に長い隅丸方形で、長径2.70m、短径1.77m、深さ0.86mを測る。図に示した焼上は遺構検出面で検出したものである。覆土中には焼上、炭化物などが含まれているが、焼土等の炉床と考えられるものは検出されなかった。確認面で検出した焼土は東側に隣接するSK012と一緒にものである可能性があり、この遺構が炉穴であるかどうか疑問が残るが、ここでは炉穴として分類しておく。遺物は出土しなかった。

SK037・187・188（第48図・図版13）

20K-76・77・86・87に所在する。張り出しを2か所持つもので、3基が重複しているように見える。調査時にはそれぞれに遺構Noを付したが1基として記述する。長径3.3m、深さ0.83mを測る。SK037からは早期の燃糸文系、187からは早期の燃糸文系、条痕文系、後期の加曾利B式の土器片が出土した。

遺物（第51・53図・図版43・66）

19は内外面に条痕が残る口縁部破片で、胎土には僅かに纖維を混入する。全体に二次的な被熱を受けている。口唇部は内削ぎ状を呈する。胎土には纖維を僅かに混入する。第53図1は楔形石器である。チャート製小角礫の上下端部方向からの階段状剥離が観察される。

SK166（第48図・図版13）

21K-40に所在する。張り出しが2か所有り、北側が二股のようなY字形で、長径2.40m、短径0.72m、深さ0.18mを測る。炉床が3か所ある。覆土に焼上が含まれていた。出土遺物は無い。

SK170（第48図・図版13）

21K-51に所在する。平面形はほぼ円形で、僅かに2か所が張り出している。径2.23m、深さ0.65mを測る。いくつかの遺構が重複しているようにも見える。炉床は3か所で検出された。断面はすり鉢状を呈し、底面も平坦ではない。覆土上層からは早期の条痕文系土器の破片が出土した。

遺物（第50・53図・図版42・43・66）

8は微かに条痕のような擦痕が残る。口縁部の4/5が遺存しており、内面は二次的な被熱で器面の剥脱が著しい。口縁部の二か所に焼成後の穿孔がみられ、1か所は外側から、他の一か所は内側からやや上方に向かって穿孔されている。9は斜位の条痕が内外面に残る。胎土には纖維を含む。10は尖底土器の底部破片である。内面は二次的な被熱で剥脱が著しい。11は12と同一個体と考えられるが接合はしない。12は口縁部が緩やかな波状を呈し、口唇部は内外面からのつまみ上げ状に尖っており、僅かに外反する。器面には内外面に擦痕が残り、口縁部に主に外面からの穿孔が1か所みられる。内面は器面の剥脱が著しい。これらの土器は第I群第2類土器の土器である。第53図2は楔形石器である。幅広の剥片素材のもので上下方向と裏面の階段状剥離が看取される。8は磨石である。縱断面形は凸レンズ状になる。

SK195（第48図・図版9）

21K-00に所在する。三か所の張り出しを有する。長径2.93m、短径1.13m、深さ0.43mを測る。各々の張り出しひには炉床がある。覆土中にはローム土・ハードローム土が含まれていた。早期の燃糸文系土器片と、チャートの円錐素材の剥片が2点出土した。

遺物（第53図・図版66）

3、4は楔形石器である。石材はチャートを使用する。ともに縦長の扁平な剥片を素材とし、自然面が残る。

SK216（第48図・図版13）

21K-25・26・35・36に所在する。平面形は張り出し部を有する不整形で、長径1.65m、短径1.4m、深さ0.6mを測る。炉床は東側と南側で検出された。早期の撚糸文系・条痕文系の土器片、チャート素材の細長い円環が縦に割れたもの1点、黒曜石の剥片が2点ほど覆土中から出土した。

遺物（第51図・図版44）

22は無文の土器の口縁部で、口唇部の内面側の器厚が薄くなる。器面には擦痕が残り、外面はナデを加える。胎土に赤橙色のスコリアを含む。23は無文の土器の胴部で一片が接合した。器面には丁寧なナデを加える。胎土には横縞と赤橙色のスコリアを混入する。24は無文の土器の口縁部で、指頭による押圧で口唇部がつまみ上げ状に尖る。胎土には纖維と赤褐色スコリアを含む。これらの土器片は同一個体の可能性がある。

D類

SK174・SK175（第49図・図版13・14）

21L-23・24・34に所在する。セクションの観察からは、いくつかの炉穴が重複しているようである。北西に張り出し部を持ち、南北に長い不整橢円形で長径4.50m、短径3.00m、深さは1.70mを測る。炉床は中央から西側にかけて4か所ある。覆土中層から早期の条痕文系土器を主体に撚糸文系土器も出土した。ほかに黒曜石の剥片1点の他、被熱した細長の円環1点、被熱した円環片1点等が出土した。

遺物（第51図・図版42・43）

17は倒立した状態で底部を欠いて出土した。器形は口縁部が緩やかに波打ち、外面の口縁部には横位の格子目文、口縁部以下の胴部には斜位の格子目文を施文する。内面は横位の格子目文を施文する。また、内面の下半は二次的な被熱のため器面の剥脱が激しくボロボロになっている。口唇部にも格子目のような沈線が付される。器形は口縁が大きく広がる深鉢状で、平面形は円形が少し潰れた格円形を呈する。18は一括中から抽出した口縁部破片である。口唇部には棒状工具を押圧した刻み目を付しており、緩やかな波状を呈する。文様は部分的だが、三条の平行沈線と刺突による列点文で構成される。また、口縁部と胴部は隆帯の後で区画され、隆帯には棒状工具による刻み目が付される。胴部以下の文様については欠損しているため不明である。

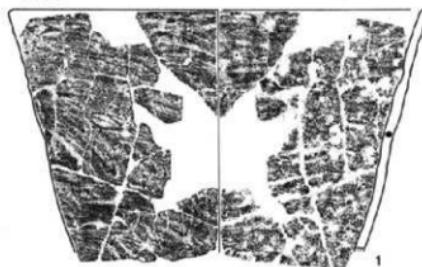
SX015（第49図・図版14）

21L-51・52・61・62に所在する。平面形は不整形で、張り出し部を四か所有する。長径6.30m、短径6.00m、深さ1.50mを測る。炉床は七か所で検出された。遺物は条痕文系の土器片を主体に撚糸文系の土器片も若干出土するほか、被熱して赤褐色を呈する細長の小円環と円環片が各1点出土した。

遺物（第52図・図版45・47）

45は口縁部が外反して開く。口唇部は平縁で、上端に条痕が残る。上端部外面には縦に短く規則的に連続した刻み目を施文し、その下に半截竹管状の工具による縫合位、斜位の連続刺突の列点文を付す。口縁部と胴部の境が屈曲し、その屈曲部の後で連続した刻み目を付して、それ以下の胴部は無文である。胎土には纖維を含む。二次的な被熱によって内外面の器面の剥落が著しい。46は口縁部破片で2片が接合した。口唇部は平縁で、上端に条痕が残る。上端部外面には縦に短く規則的に連続した刻み目を施文し、その直下に一条の横位の連続した刺突の列点文を付している。内面には横位、斜位の条痕状の整形痕が残り、口縁部は緩やかに外反して開く。47は底部破片で、平底であるが外面はデコボコしている。器面には条痕状の擦痕が残る。内外面ともにボロボロで胎土には纖維を含む。45-47は第I群土器第3類の土器である。

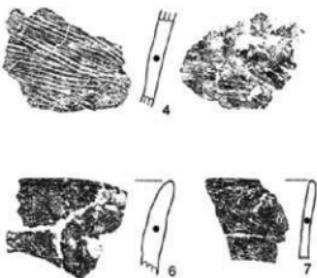
SK004



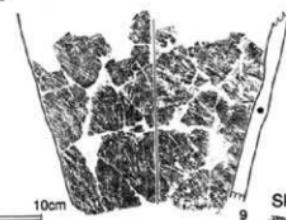
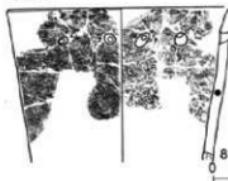
SK043



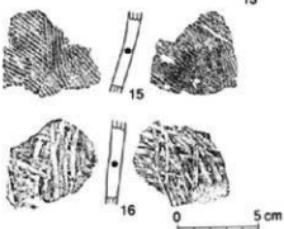
SK168



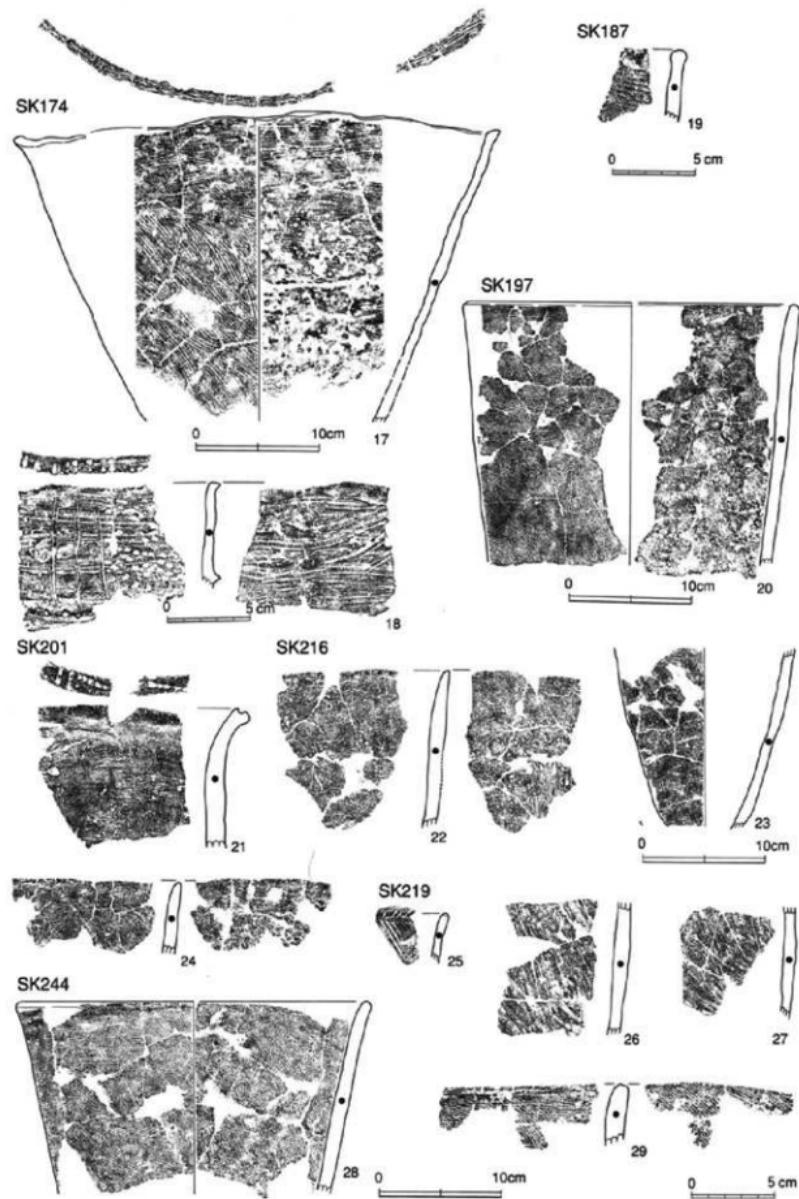
SK170



SK171

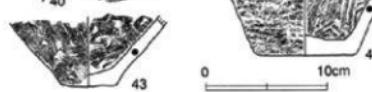
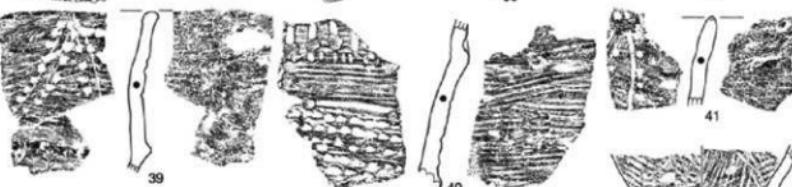
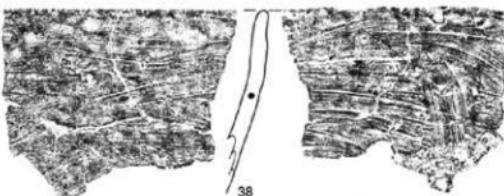
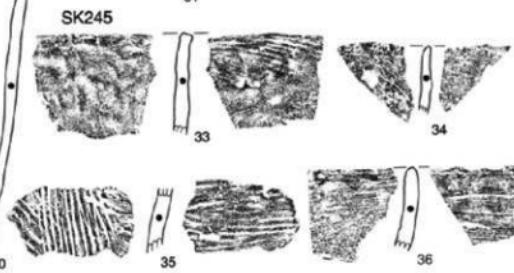
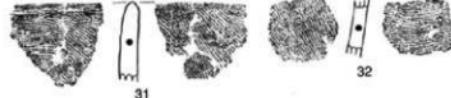
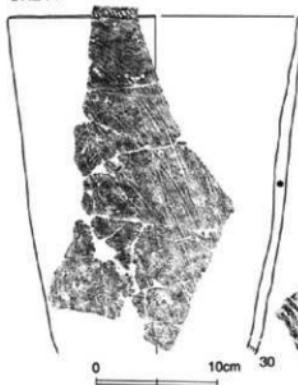


第50図 炉穴出土土器（1）



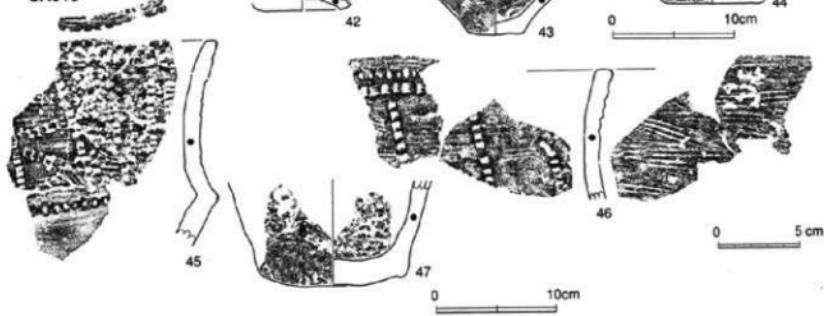
第51図 炉穴出土土器 (2)

SK244

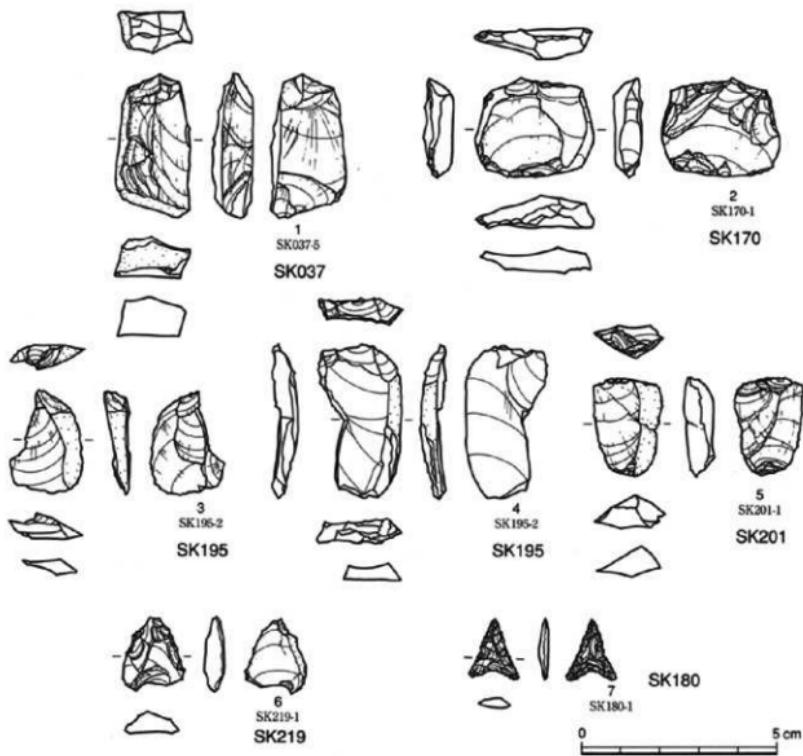


0 10cm

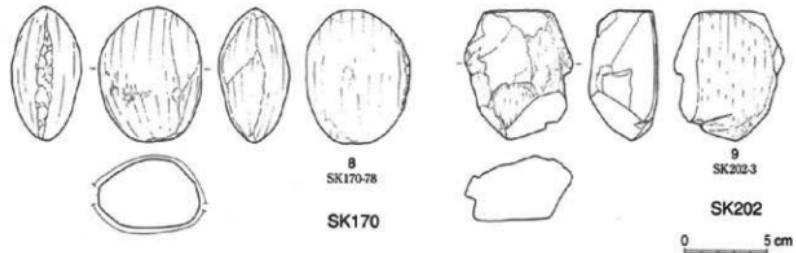
SX015



第52図 炉穴出土土器（3）



第53図 炉穴・土坑出土石器（1）



第54図 炉穴・土坑出土石器（2）

4 陥穴

南から侵入する印旛沼からの支谷が、ほぼ東西南北の四方に分岐して更に谷を刻む支谷の、北東側の舌状に突き出た台地の南側斜面と、この台地の基部の、北から回り込んでくる別の支谷に挟まれて台地が狹まる部分の台地平坦部の中央付近から15基が検出された（第55図）。これらの陥穴は、多少の差異はあるが概ね次の5つのタイプに分類される。

- ① 平面形が円形または楕円形で、断面が円筒状を呈する。底面にピットを有するものを含む。
- ② 平面形が楕円形で、底面は幅が狭くなり細長い。底面は上端よりも幅が狭く長い。長軸の断面がフラスコ状を呈するもの。
- ③ 平面形が長楕円形で、底面は幅が狭く細長いもので、断面がV字状を呈するもの。
- ④ 平面形が長楕円形で、底面は幅が狭く細長いもので、断面はV字状を呈し、底面にピットを有するもの。
- ⑤ 平面形が長楕円形で、底面は細長く底面に段差を有するもの。

以上の基準で分類すると①にはSK005, 205, 209, 655の4基が該当し、②にはSK646, 土坑1号の2基が、③にはSK002, 203, 428, 533, 616, 621の6基が、④にはSK014, 625の2基が、⑤にはSK611の1基がそれぞれ該当する。なお、底面は水平で平坦なものを基準とする。

①から⑤に分類した陥穴の内で、①は台地縁辺部に近い位置に等高線とほぼ平行に分布し、③は①と同じような位置ではあるが突出した台地の中央部寄りの、①よりも内側とその台地の基部に分布する傾向が見られる。

①平面形がほぼ円形で、断面が円筒状を呈するものには下記のものが含まれる。これらの陥穴の特徴にはその形態の他に、覆土中にローム粒やハードロームのブロックが多く混入する事が挙げられる。

SK005（第56図・図版14）

20P-35・36に所在する。ほぼ円形で直径1.92m、深さ1.70mを測る。底面の中央にピット状の窪みを有する。

SK205（第56図・図版14）

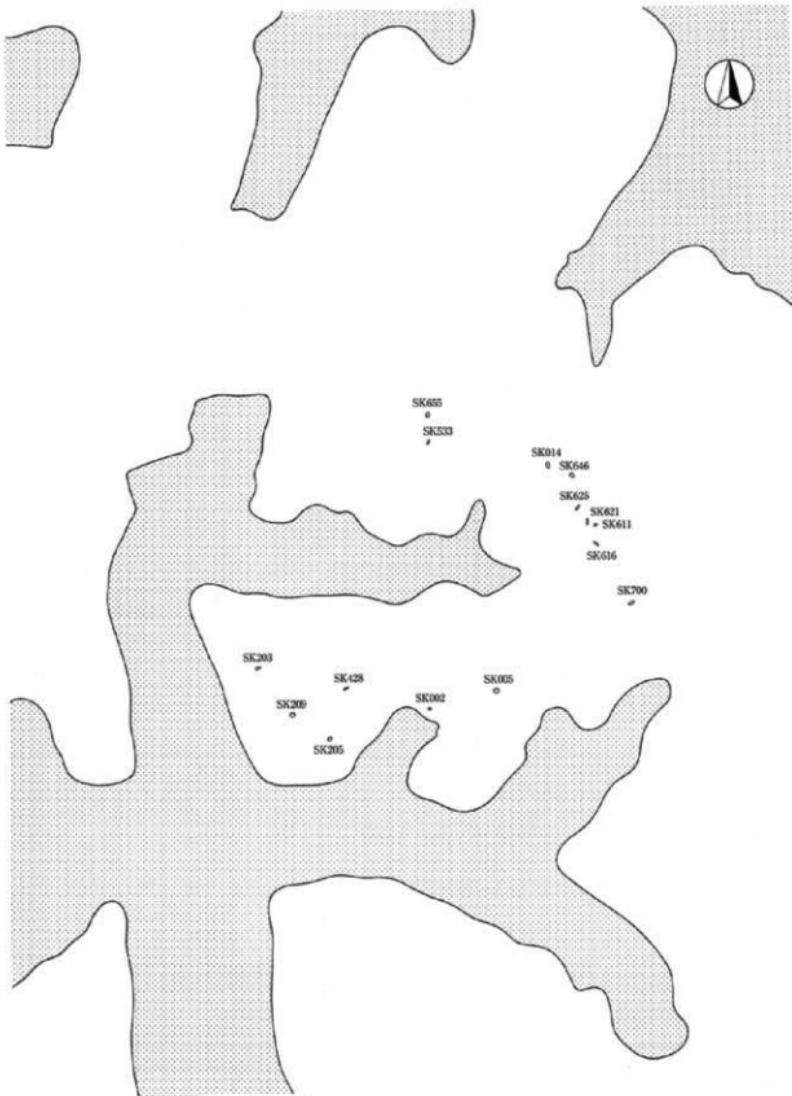
21L-22に所在する。平面形は楕円形で、長径2.08m、短径1.16m、深さ2.23mを測る。長径側の断面の方に段差が見られる。覆土中から縄文早期の撚糸文の破片が出土した。

遺物（第67図・図版46）

1は口縁部破片で、口唇部がやや肥厚する。器面には浅く撚糸文LRが施文される。焼成は良好で、胎土には砂粒を多く混入する。2は胴部破片で、撚りの戻ったしの撚糸を粗に施文する。一括資料であり、出土か所や層位は不明である。3は口縁部破片で、口唇部が僅かに残る。口唇部上端は平坦で、条痕が付される。口唇部外側は連続して刻み目が付され、その下には棒状工具によって連続した刺突文が付される。胎土には纖維を混入する。

SK209（第56図・図版14）

20K-74・75に所在する。ほぼ円形で径1.92m、深さ2.35mを測る。底面から0.80m上がった断面に横に掘られたピット状の窪みが1か所確認された。覆土中からは縄文早期の撚糸文、条痕文土器のほかに後期の堀之内式の破片が出土した。



第55図 墓穴分布図

遺物（第67図・図版46）

4は口縁部破片で口縁部に縄文Rを斜めに施文後、2条の沈線を平行に巡らせている。5は無文の上器の口縁部である。器厚は薄く、焼成は良好である。

SK655（旧1号上坑）（第56図・図版14）

14N-62・72に所在する。梢円形で、長径1.88m、短径1.40m、深さ1.96mを測る。

②平面形が梢円形で、底面は幅が狭くなり細長い。底面は上端よりも幅が狭く長い。断面形はフラスコ状を呈するものには次の1基が該当する。

SK646（第56図・図版14）

15R-90・91に所在する。長径2.11m、短径1.48m、深さ2.17mを測る。

SK700（第57図・図版15）

18S-52・53に所在する。北東から南西に長い小判形で、長径2.32m、短径1.03m、深さ2.18mを測る。出土遺物は無い。

③平面形が長梢円形で、底面は幅が狭く細長いもので、断面がV字状を呈するものには次の7基が該当する。

SK002（第57図）

20N-62に所在する。長径1.26m、短径0.87m、深さ0.66mを測る。このタイプの陥穴としては長径、深さとも小型である。

SK203（第57図・図版15）

19J-77・78に所在する。長径2.13m、短径0.86m、深さ0.58mを測る。この造構は深さが浅く陥穴かどうかについては疑問が残るがその平面形からここでは陥穴としておく。

SK428（第57図）

20L-25に所在する。中世居館跡の敷地内にあたり、SK429と重複する。長さ2.53m、幅0.33m、深さ1.03mを測る。

SK533（第57図・図版15）

15N-22に所在する。長径2.40m、短径0.35m、深さは0.40mを測る。深さが浅く疑問が残るが、その平面形から陥穴としておく。

SK616（第57図・図版15）

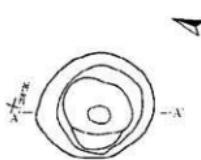
17R-35に所在する。長径2.27m、短径0.30m、深さ0.25mを測る。深さが浅く疑問が残るが、その平面形から陥穴としておく。

SK621（第57図・図版15）

16R-84・94に所在する。長径2.39m、短径0.67m、深さ0.75mを測る。

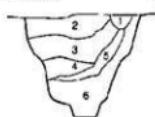
④平面形が長梢円形で、底面は幅が狭く細長いもので断面はV字状を呈し、底面にピットを有するものには2基が該当する。

SK014（第57図・図版15）



A - 200m

- A'



2

3

4

5

6

- N'

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

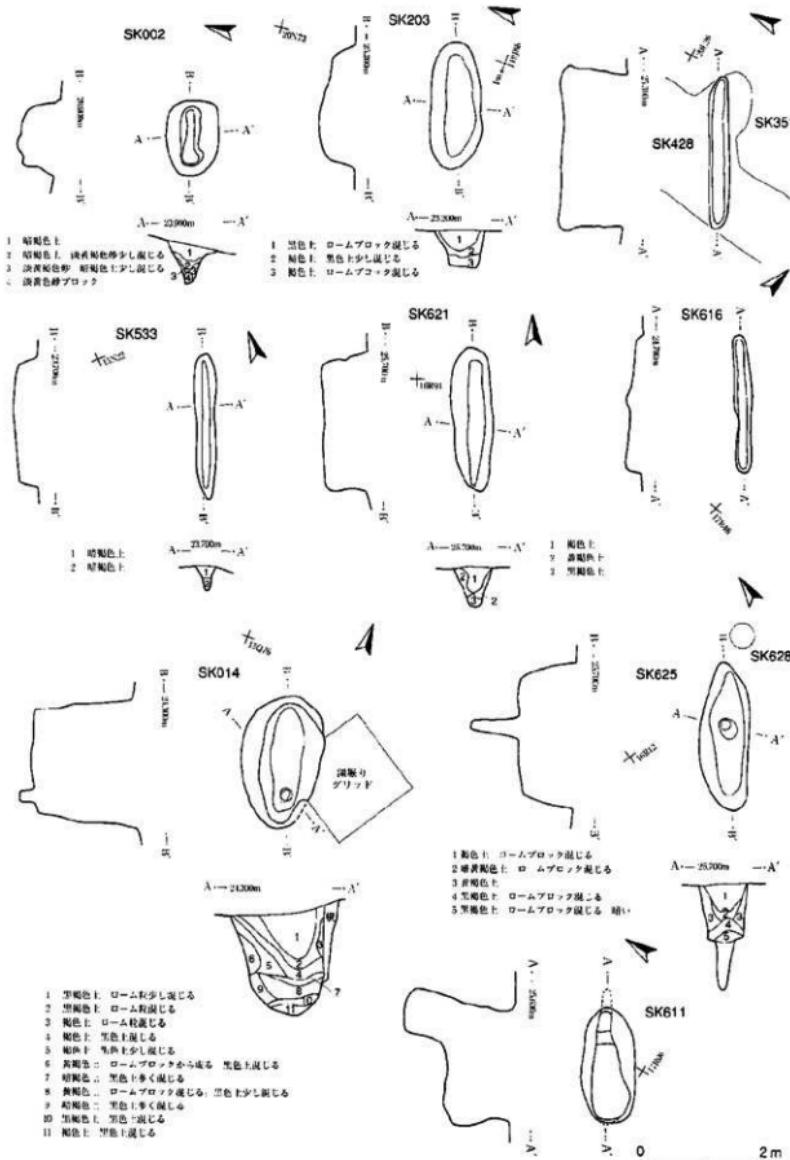
355

356

357

358

359



第57図 繩文時代縄穴（2）

15Q - 76に所在する。長径2.15m, 短径1.33m, 深さ1.70mを測る。底面施設としては底面の一端に長軸側にやや内傾して径0.21m, 深さが0.26mのピットが1基ある。

SK625 (第57図・図版15)

16R - 52・62に所在する。長径2.44m, 短径0.80m, 深さ0.93mを測る。底面の中央に径約0.35mで深さ0.77mのピットが1基ある。

⑤平面形が長梢円形で、底面は細長く、底面に段差を有するものには1基が該当する。

SK611 (第57図・図版15)

16R - 95・96, 17R - 05に所在する。長径1.89m, 短径0.87m, 深さ1.11mを測る。底面の一端の隅はさらに0.70m深くなる。

5 土坑 (第58~66図・第11表・図版16~19)

縄文時代の土坑は156基である。これらの土坑には円形、梢円形、不整形、方形などの様々なものが含まれており、その規模も様々である(第11表)。土坑内出土土器の時期は、他の遺構やグリッド出土土器と時期的な差がないことからこれらの土坑は、早期から後期の所産と考えられる。

早期の土器を出土した土坑は、遺跡南側の21PグリッドにあるSK039を除き、大グリッド20J・20L・21J・21K・21Lに集中する。後期の土器を出土した土坑は、SK 654が19Mグリッドにあるほかは、21Pグリッドに3基まとまり、20Lグリッドの13基を中心周辺の19L・20K・21J・21Kの各グリッドに集中する。このことは、グリッド出土土器と同様な分布を示しており、遺跡内での縄文各期の活動の跡を伺わせるものである。

これらの内で、早期の土器を覆土中から出土した土坑にはSK039・SK040・SK041・SK063・SK071・SK085・SK086・SK169・SK180・SK184・SK191・SK192・SK202・SK234・SK235・SK236・SK241・SK242の18基がある。中期の土器を出土した土坑はSK060の1基のみであるが、後期の土器を出土した土坑はSK017・SK035・SK036・SK038・SK048・SK051・SK052・SK059・SK088・SK160・SK220・SK221・SK223・SK224・SK225・SK226・SK228・SK230・SK231・SK232・SK233・SK240・SK654・SK006の23基にのぼる。また、出土土器の無いものが112基にのぼる。また、土坑内の土器の出土層位も様々で、土器の出土をもって直ちに土坑の時期を決定するには至らない。したがって、個々の土坑の記述にあたっては、その平面形態をもとに事実記載を中心に記述を進めることとする。

(1) 円形土坑 (第58~61図)

SK031 (第58図・図版16)

21P - 62に所在する。ほぼ円形で、径は0.91m、深さは0.27mである。出土遺物はない。

SK032 (第58図・図版16)

21P - 60・70に所在する。円形で径1.12m、深さは0.57mである。セクションの観察からは埋め戻された痕跡がある。底面は平坦ではなく、デコボコしている。剥片が出土した。

SK034 (第58図・図版16)

21P - 24に所在する。円形で径は1.48m、深さは0.57mである。

SK035 (第58図・図版16)

21P-43に所在する。円形で径は1.35m、深さは0.24mである。底面の中央が円形に凹む。後期の土器片が出上した。

遺物 (第68図・図版46)

24は胴部破片で、櫛状工具による細かな沈線が施文される。胎土には赤橙色のスコリアを多く混入する。

SK036 (第58図・図版16)

21P-37に所在する。ほぼ円形で径は1.28m、深さは0.32mである。後期の堀之内式の土器片が出上した。

遺物 (第68図・図版46)

25は胴部破片である。R L の縄文を施文した後に横方向の2条の平行沈線と垂下する沈線で文様を構成する。

SK039 (第58図・図版16)

21P-34・35に所在する。北西から南東に長い円形で長径1.23m、短径0.99m、深さ0.19mである。底面の中央が凹み、底面は平坦ではない。早期の燃糸文系の小土器片が出上した。

SK040 (第58図)

21K-45に所在する。ほぼ円形で径0.98m、深さは0.72mである。南西側が中世造構と一部重複し、壊されている。早期の条痕文系土器の口縁部片と胴部片が各1点出土したがいずれも小破片で図示できなかつた。

SK055 (第58図)

20L-65に所在する。円形で径0.85m、深さは0.20mで、比較的浅い土坑である。出土遺物はない。

SK056 (第58図)

20L-75・85に所在する。円形で径0.97m、深さは0.35mである。出土遺物はない。

SK057 (第58図)

20L-86に所在する。円形で径0.89m、深さは0.20mである。出土遺物はない。

SK060 (第58図)

20L-94に所在する。ほぼ円形で径1.35m、深さは0.63mである。中期の加曾利E式の土器片が出上した。

遺物 (第67図・図版46)

17は胴部破片で、横位の2条の沈線で区画された間に棒状工具によって円形の連続した刺突文を施文し、その沈線で区画した上下の文様帶には沈線と縄文と磨り消しによって文様が構成されている。

SK065 (第58図)

20L-63に所在する。ほぼ円形で径1.60m、深さは0.38mである。出土遺物はない。

SK066 (第58図)

20L-23に所在する。ほぼ円形で長径0.85m、短径0.63mで、深さは0.29mである。出土遺物はない。

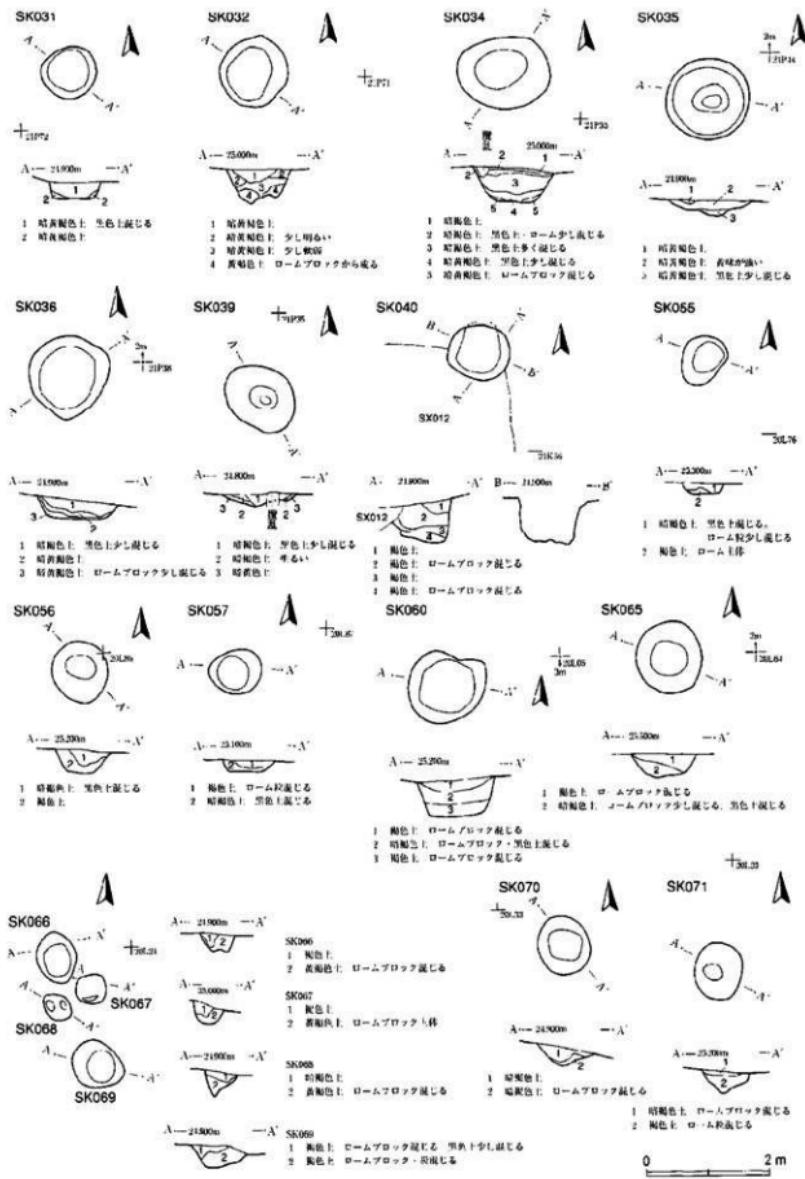
SK067 (第58図)

20L-23に所在する。ほぼ円形で径0.5m、深さは0.49mである。出土遺物はない。

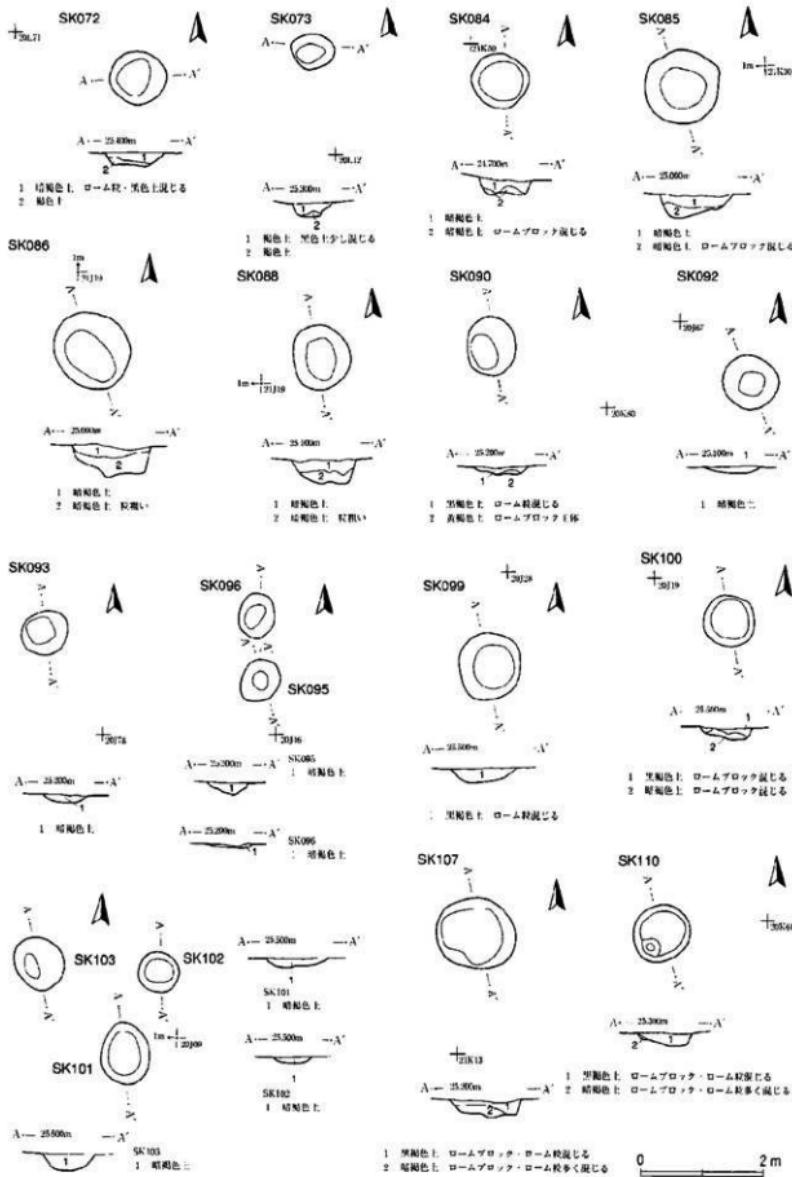
SK068 (第58図)

20L-23に所在する。ほぼ円形で、径0.54m、深さは0.42mである。出土遺物はない。

SK069 (第58図)



第58図 繩文時代土坑（1）



第59図 繩文時代土坑（2）

20L-23に所在する。東西に長い卵形のような円形で、長径0.9m、短径0.76m、深さは0.33mである。出土遺物はない。

SK070 (第58図)

20L-33に所在する。円形で径0.97m、深さ0.30mである。台地が南東へ傾斜する位置にある。出土遺物はない。

SK071 (第58図)

20L-22・23に所在する。ほぼ円形で径0.92m、深さは0.35mである。早期の条痕文系の土器片が2点出土したが、小片のため図示できなかった。

SK072 (第59図)

20L-71に所在する。円形で径0.92m、深さは0.35mである。出土遺物はない。

SK073 (第59図)

21L-01に所在する。やや不整の円形で、長径0.72m、短径0.59mで、深さは0.25mである。出土遺物はない。

SK084 (第59図)

21K-50に所在する。円形で径0.93m、深さは0.28mである。出土遺物はない。

SK085 (第59図)

南から侵入する幅80mほどの支谷に面する台地縁辺部にあたる、21J-29・39、21K-20・30に所在する。円形で径1.22m、深さは0.42mである。早期の条痕文系土器片1点と磨石片が出土した。

遺物 (第67図・図版46)

11は胴部破片で、器面には条痕が残る。胎土には胎土を含む。

SK086 (第59図・図版16)

21J-09・19に所在する。ほぼ円形で径1.04m、深さ0.39mである。早期の条痕文系土器片が3点出土した。

遺物 (第67図・図版46)

12は胴部破片で、条痕文系上器の破片である。胎土には繊維を含む。13は底部に近い破片である。胎土に繊維を含む。

SK088 (第59図・図版16)

21J-09に所在する。ほぼ円形で径1.04m、深さ0.39mである。後期の堀之内式の土器片が2点出土した。

SK090 (第59図)

20J-79に所在する。南北に長い円形で、長径0.95m、短径0.79mで、深さは0.12mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK092 (第59図)

20J-67に所在する。ほぼ円形で径0.89m、深さは0.10mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK093 (第59図)

20J-67に所在する。ほぼ円形で径0.80m、深さは0.13mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK095 (第59図)

20J-35に所在する。ほぼ円形で径0.76m、深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK096 (第59図)

20J-35に所在する。南北に長い円形で、長径0.87m、短径0.58m、深さは0.06mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK099 (第59図)

20J-27に所在する。ほぼ円形で径1.11m、深さは0.22mである。出土遺物はない。

SK100 (第59図)

20J-19に所在する。円形で径0.84m、深さは0.20mで、底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK101 (第59図)

20J-08に所在する。南北に長い円形で、長径1.10m、短径0.79m、深さは0.14mである。出土遺物はない。

SK102 (第59図)

20J-98に所在する。ほぼ円形で径0.65m、深さは0.10mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK103 (第59図)

20J-98に所在する。ほぼ円形で径0.89m、深さは0.27mである。出土遺物はない。

SK107 (第59図)

21K-03に所在する。ほぼ円形で径1.28m、深さは0.31mである。土坑底面の中央が少し陥んでいる。出土遺物はない。

SK110 (第59図)

20K-60に所在する。ほぼ円形で径0.98m、深さは0.21mである。底面は水平ではなく、北側があがっている。南西の壁際に小ピットが1基検出された。出土遺物はない。

SK112 (第60図)

20K-42に所在する。ほぼ円形で径1.00m、深さは0.17mであるが、底面は水平ではない。出土遺物はない。

SK113 (第60図)

20K-41に所在する。円形で径0.70m、深さは0.13mと浅い土坑である。出土遺物はない。

SK114 (第60図)

20K-31・32に所在する。円形で径0.92m、深さは0.39mである。北側の壁の一部はオーバーハンプしている。出土遺物はない。

SK116 (第60図)

20K-40に所在する。ほぼ円形で径0.44m、深さは0.14mの小土坑である。出土遺物はない。

SK117 (第60図)

20K-30に所在する。南北に長い円形で長径0.97m、短径0.79m、深さは0.37mである。出土遺物はない。

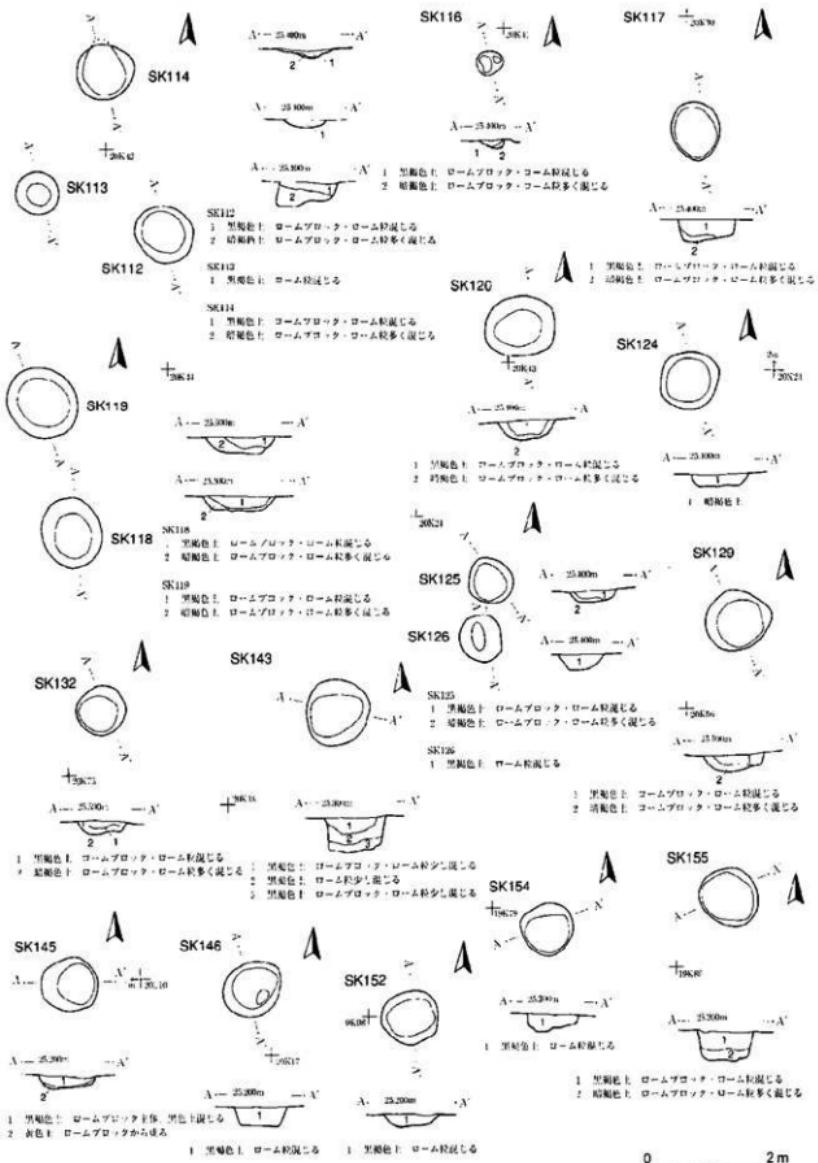
SK118 (第60図)

20K-43に所在する。南北に長い円形で長径1.14m、短径0.96m、深さは0.29mである。出土遺物はない。

SK119 (第60図)

20K-43に所在する。ほぼ円形で径1.23m、深さは0.25mである。出土遺物はない。

SK120 (第60図)



第60図 繩文時代土坑（3）

20K - 32・33に所在する。ほぼ円形で径1.14m, 深さは0.30mである。縄文早期の住居である S I - 001 の北東に位置する。西に面した谷に向かって緩く傾斜する地形上に位置している。出土遺物はない。

SK124 (第60図)

20K - 23に所在する。ほぼ円形で径0.96m, 深さ0.21mである。出土遺物はない。

SK125 (第60図)

20K - 24に所在する。ほぼ円形で径0.76m, 深さは0.19mである。出土遺物はない。

SK126 (第60図)

20K - 24に所在する。ほぼ円形で径0.76m, 深さは0.26mである。出土遺物はない。

SK129 (第60図)

20K - 56に所在する。ほぼ円形で径1.02m, 深さは0.28mである。出土遺物はない。

SK132 (第60図)

20K - 65に所在する。ほぼ円形で径0.80m, 深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK143 (第60図)

20K - 18に所在する。ほぼ円形で径1.10m, 深さは0.54mである。出土遺物はない。

SK145 (第60図)

20K - 09・19に所在する。ほぼ円形で径0.93m, 深さは0.22mである。出土遺物はない。

SK146 (第60図)

20K - 06に所在する。ほぼ円形で径1.02m, 深さは0.32mである。底面の南壁に寄ってピット状の落ち込みが1基ある。出土遺物はない。

SK152 (第60図)

19K - 88・98に所在する。ほぼ円形で径0.93m, 深さは0.20mである。出土遺物はない。

SK154 (第60図)

19K - 79に所在する。ほぼ円形で径0.84m, 深さは0.29mである。土坑の底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK155 (第60図)

19K - 79に所在する。ほぼ円形で径0.99m, 深さは0.50mである。出土遺物はない。

K157 (第61図)

19K - 99に所在する。円形で径0.56m, 深さは0.14mであり, 浅くて底面は平坦でない土坑である。出土遺物はない。

SK159 (第61図)

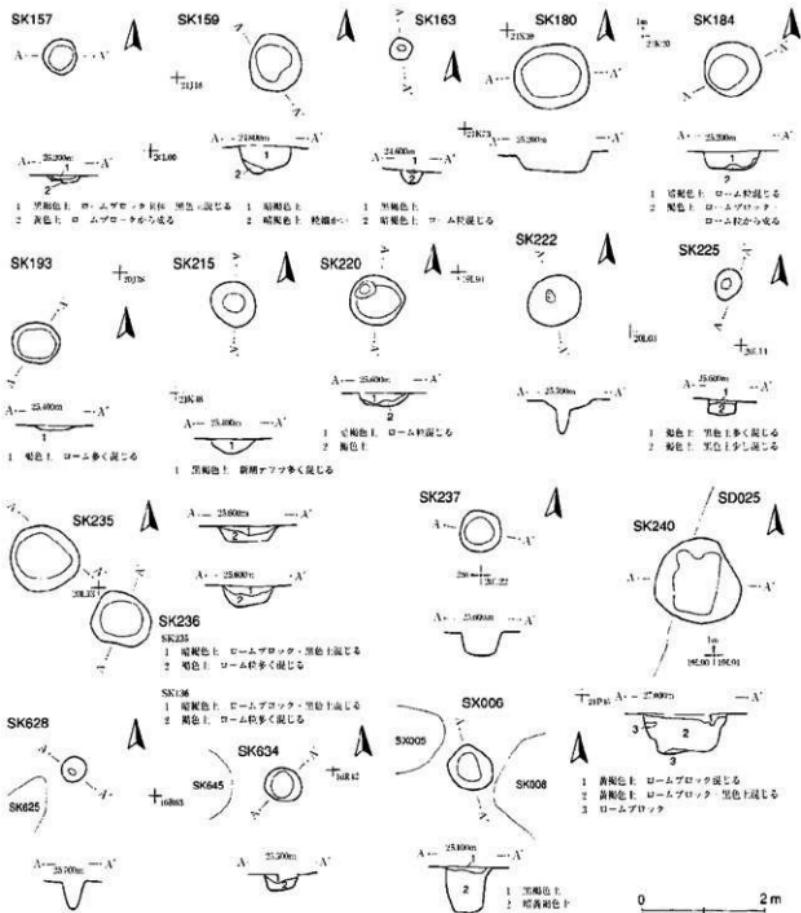
谷に面した台地縁辺の, 21J - 08に所在する。ほぼ円形で径0.93m, 深さは0.46mで, 土坑の底面は平坦ではない。台地の縁辺部に位置している。出土遺物はない。

SK163 (第61図)

21K - 62に所在する。円形で径0.35m, 深さは0.22mである。土坑というよりは柱穴ピット状の掘り込みと考えられる。出土遺物はない。

SK180 (第61図)

21K - 31に所在する。ほぼ円形で径1.21m, 深さは0.33mである。縄文早期の住居の南側に近接してい



第61図 繩文時代土坑 (4)

る。早期の条痕文の土器片が出土した。

遺物 (第67図・図版46)

15はII縁部破片で、器面の全体に条痕が付されている。胎土には纖維を混入する。

SK184 (第61図)

21K-20に所在する。ほぼ円形で径0.94m、深さは0.31mである。早期撲糸文系土器の小片が1点出土した。

SK193 (第61図)

20J-37に所在する。ほぼ円形で径0.78m、深さは0.09mと浅い。出土遺物はない。

SK215 (第61図)

21K-38に所在する。ほぼ円形で径0.75m、深さは0.23mである。土坑の底面は擂鉢状を呈する。出土遺物はない。

SK220 (第61図)

台地平坦部の、19L-93に所在する。ほぼ円形で径0.90m、深さは0.23mである。北西隅に深さ0.10mのピット状の凹みがある。後期の加曾利B式の小土器片が4点出土した。

遺物 (第68図・図版46)

27は脛部破片で、隆帯を貼り付けて棒状工具による刻みを加える。隆帯で削られた下部には縄文が施文される。

SK222 (第61図)

19L-92に所在する。ほぼ円形で径0.92m、深さは0.20mである。底面は擂鉢状で、中央に底面から0.35mの深さの柱穴状ピットが1基ある。出土遺物はない。

SK225 (第61図)

20L-03に所在する。ほぼ円形で径0.55m、深さは0.24mである。後期の加曾利B式の小土器片が1点出土した。

SK235 (第61図)

20L-22に所在する。ほぼ円形で径1.14m、深さは0.25mである。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

SK236 (第61図)

20L-33に所在する。ほぼ円形で径0.97m、深さは0.35mである。早期の撲糸文系の小土器片が出土した。

SK237 (第61図)

20L-12に所在する。ほぼ円形で径0.65m、深さは0.38mである。出土遺物はない。

SK240 (第61図)

台地平坦部の、19L-80・81に所在する。ほぼ円形で径1.39m、深さは0.69mである。早期の撲糸文系の小土器片が11点と後期の小土器片が12点出土した。

遺物 (第68図・図版46)

33・34は脣部破片で、縄文を施文した後に沈線で文様を構成する。後期の土器である。

SK628 (第61図)

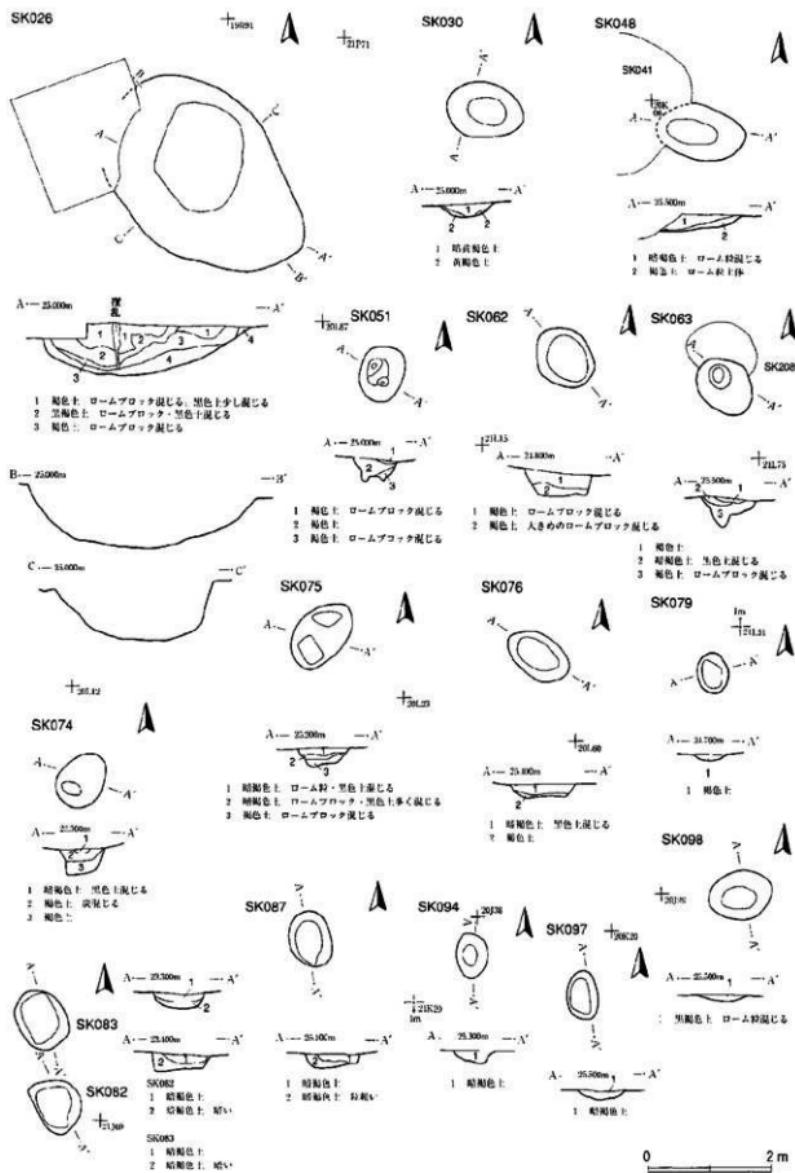
16R-52に所在する。ほぼ円形で径0.42m、深さは0.46mである。この遺構も土坑とするよりは柱穴状のピットと考えられる。

SK634 (第61図)

16R-41に所在する。円形で径0.62m、深さは0.27mである。

SX006 (第61図)

21P-44に所在する。SX005とSX008に東西から挟まれている。ほぼ円形で径0.73m、深さは0.77mであ



第62図 繩文時代土坑（5）

る。中期の加曾利E式と後期の加曾利B式の土器片が出土した。

(2) 楕円形土坑

SK026 (第62図)

19R-90・91に所在する。北西から南東に長い楕円形で、長径は3.80m以上あり、短径2.63m、深さは0.92mである。底面は鉢状である。出土遺物はない。

SK030 (第62図)

21P-71に所在する。東西に長い楕円形で、長径1.26m、短径0.91m、深さは0.23mで、底面は鍋底状である。出土遺物はない。

SK048 (第62図)

21K-06に所在する。SK 041と重複するが、東西に長い楕円形と思われる。長径は推定で1.41m、規徑0.89m、深さは0.29mである。早期の撚糸文系の土器片が1点出土した。

SK051 (第62図)

20L-87に所在する。南北に長い楕円形で長径0.90m、短径0.72m、深さは0.30mである。底面に2つのピット状の凹みがある。縄文土器の底部片が出土した。

SK062 (第62図)

21L-04に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.08m、短径0.90m、深さは0.43mである。出土遺物はない。

SK063 (第62図)

20L-64に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.05m、短径0.82m、深さは0.49mである。撚糸文系の土器片が2点出土した。北側はSK208と重複している。底面は平坦ではなく、柱穴状のピットが1基ある。

遺 物 (第67図・図版46)

4は口縁部破片で、外面には指頭による押圧の痕跡が残る。器面に擦痕状の整形痕が残る。

SK074 (第62図)

20L-11・12に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径0.94m、短径0.72m、深さは0.41mである。底面に窪みがある。出土遺物はない。

SK075 (第62図)

20L-12に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径1.18m、短径0.79m、深さは0.37mである。底面は平坦ではなく、2カ所に不整形の窪みがある。出土遺物はない。

SK076 (第62図)

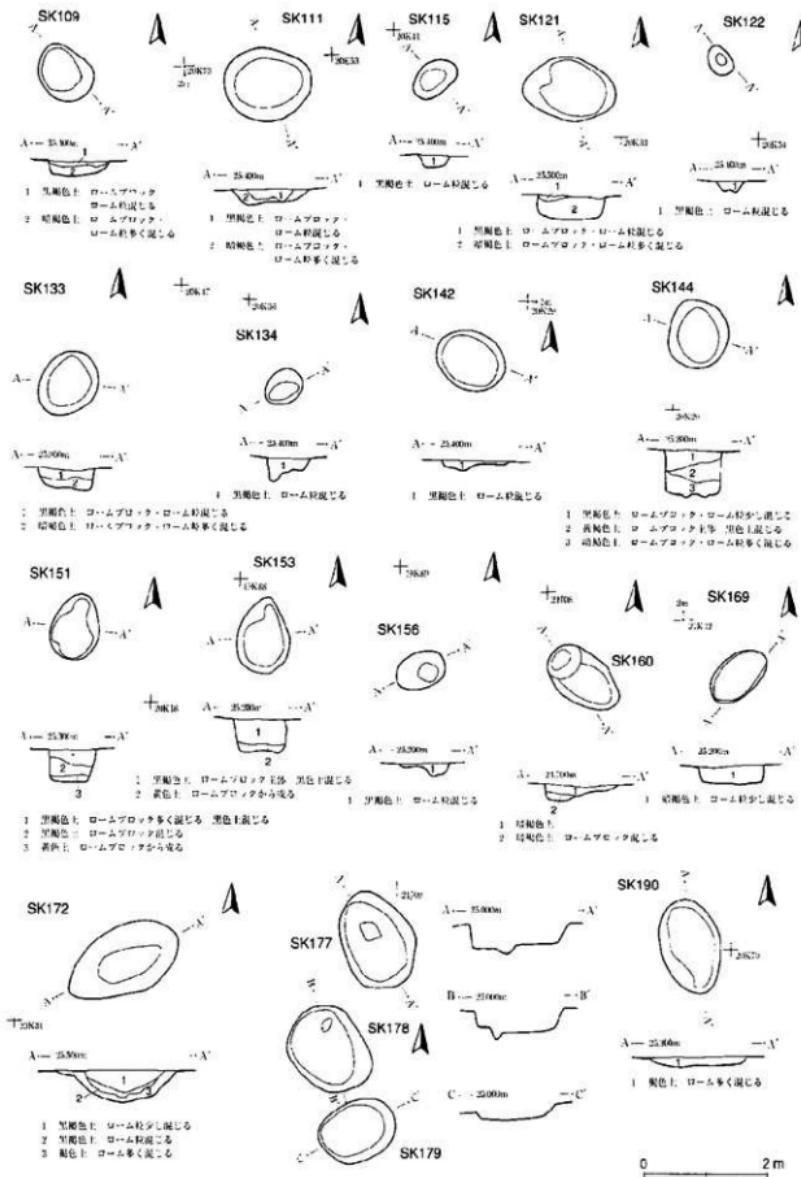
20K-59に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.09m、短径0.67m、深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK079 (第62図)

21L-50に所在する。南北に長い楕円形で長径0.69m、短径0.41m、深さは0.15mと浅く、鍋底状を呈する。出土遺物はない。

SK082 (第62図)

21J-58に所在する。不整の楕円形で、長径0.91m、短径0.73m、深さは0.27mである。出土遺物はない。



第63図 繩文時代土坑(6)

SK083 (第62図)

21J-58に所在する。長径1.01m、短径0.79m、深さは0.31mである。底面形は不整の長方形を呈する。出土遺物はない。

SK087 (第62図)

21J-19に所在する。長径0.91m、短径0.68m、深さは0.23mである。出土遺物はない。

SK094 (第62図)

20J-47に所在する。南北に長い楕円形で長径0.73m、短径0.51m、深さは0.21mである。底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK097 (第62図)

20J-29に所在する。南北に長い楕円形で長径0.79m、短径0.51m、深さは0.16mと浅く、底面は描鉢状である。出土遺物はない。

SK098 (第62図)

20J-19・29に所在する。東西に長い楕円形で長径1.05m、短径0.81m、深さは0.11mと浅く、底面は描鉢状である。出土遺物はない。

SK109 (第63図)

20K-62に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径0.98m、短径0.81m、深さは0.27mである。出土遺物はない。

SK111 (第63図)

20K-52に所在する。東西に長い楕円形で長径1.40m、短径1.23m、深さは0.25mである。出土遺物はない。

SK115 (第63図)

20K-41に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径0.79m、短径0.52m、深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK121 (第63図)

20K-22に所在する。東西に長い楕円形で長径1.41m、短径1.04m、深さは0.39mである。出土遺物はない。

SK122 (第63図)

20K-33に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径0.53m、短径0.35m、深さは0.18mである。出土遺物はない。

SK133 (第63図)

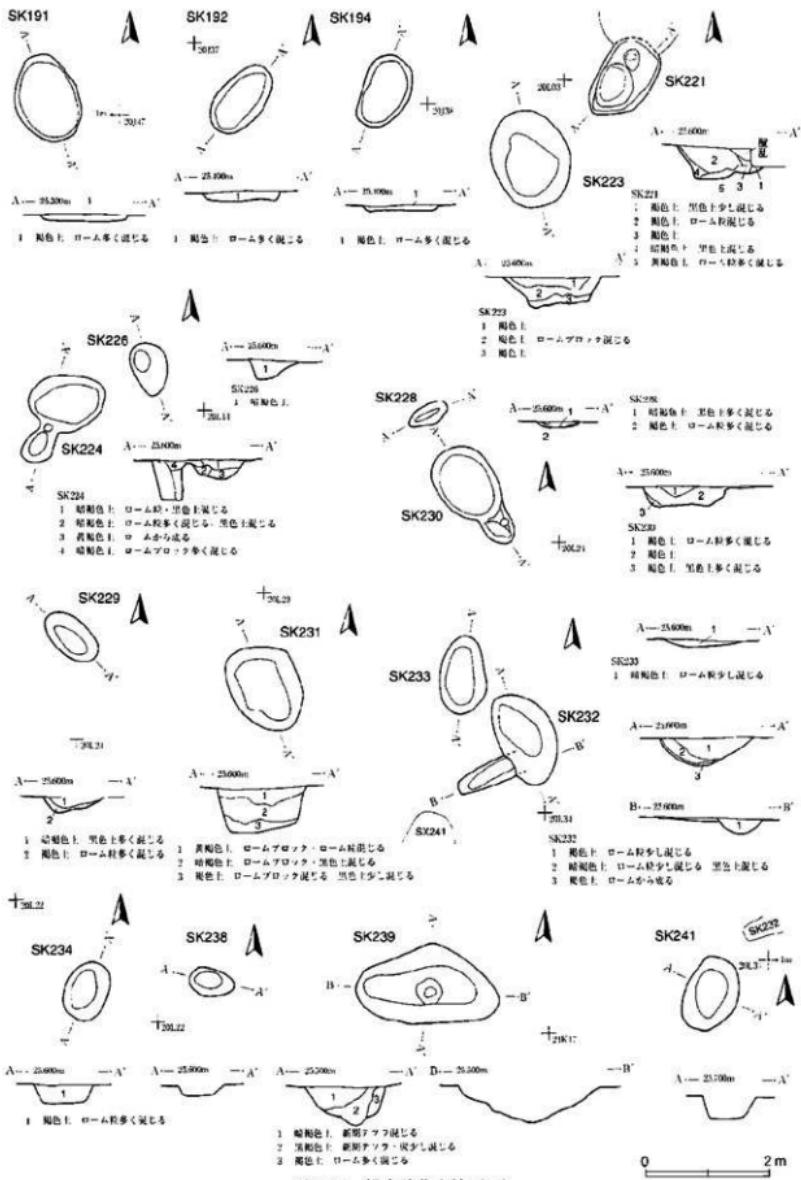
20K-46に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.14m、短径0.92m、深さは0.35mである。底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK134 (第63図)

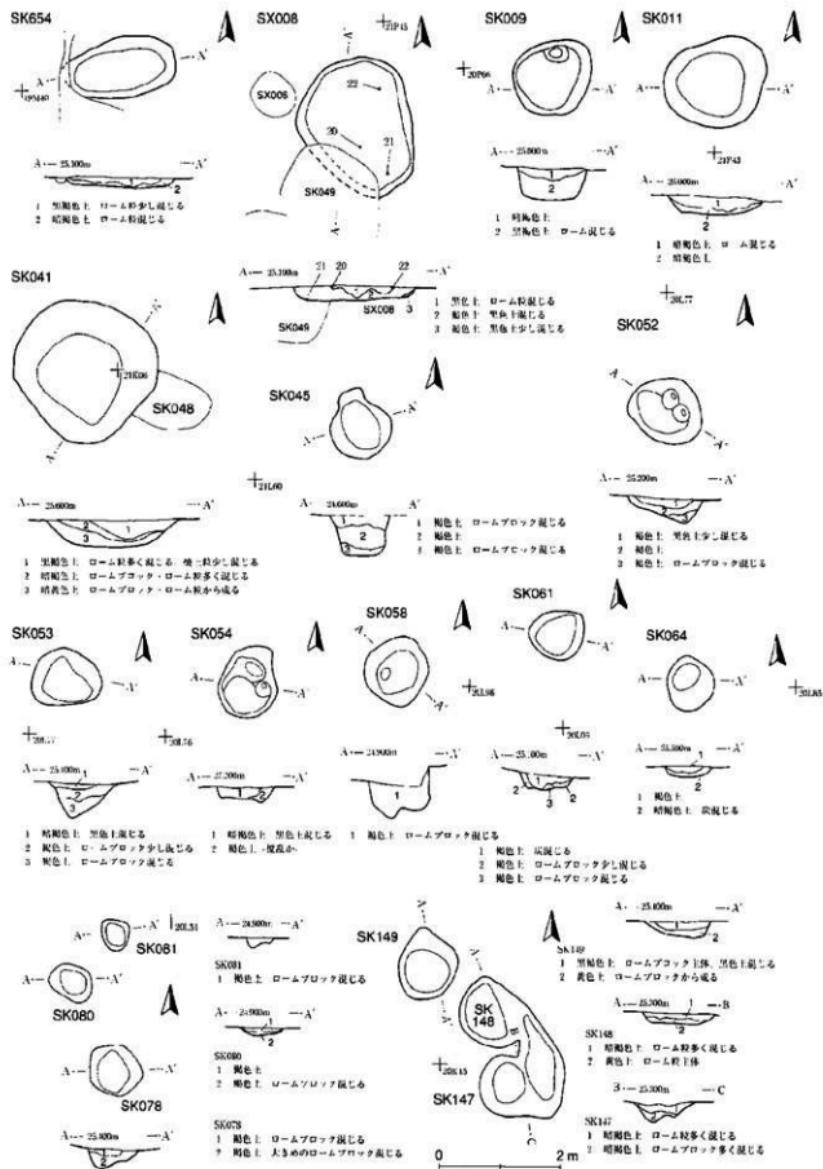
20K-36に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径0.67m、短径0.52m、深さは0.37mである。底面の一端に柱穴状のピットが1基ある。出土遺物はない。

SK142 (第63図)

20K-28に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.16m、短径0.94m、深さは0.17mと浅く、底面



第64圖 繩文時代土坑（7）



第65図 繩文時代土坑(8)

も平坦ではない。出土遺物はない。

SK144 (第63図)

20K-19に所在する。円形に近い楕円形で、長径1.10m、短径0.95m、深さは0.78mで、底面は平坦ではなくテコボコしている。出土遺物はない。

SK151 (第63図)

20K-07に所在する。南北に長い楕円形で長径1.08m、短径0.80m、深さは0.53mである。出土遺物はない。

SK153 (第63図)

19K-88に所在する。南北に長い楕円形で長径1.25m、短径0.86m、深さは0.54mである。底面は平坦ではなく、中央がわずかに盛りあがるようである。出土遺物はない。

SK156 (第63図)

19K-89に所在する。東西に長い楕円形で長径0.81m、短径0.50m、深さは0.21mである。底面の一端が円形に窪んでいる。出土遺物はない。

SK160 (第63図)

21J-08に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.34m、短径0.80m、深さは0.28mである。底面の一端には浅い柱穴状のピットが1基ある。覆土中からは後期の土器片と、磨石片と思われる石が出土した。

SK169 (第63図)

21K-42に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.07m、短径0.63m、深さは0.30mである。早期の条痕文系の小土器片が1点出土した。

遺物 (第67図・図版46)

14は口縁部破片で、二次的な被熱により器面はボロボロである。器面には沈線が付されている。

SK172 (第63図)

20K-21に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.97m、短径1.13m、深さは0.52mである。底面は擂鉢状を呈する。出土遺物はない。

SK177 (第63図)

21J-08・09に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.65m、短径1.16m、深さは0.39mである。底面の中央に寄って柱穴状のピットが1基ある。出土遺物はない。

SK178 (第63図)

21J-08に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.50m、短径1.18m、深さは0.38mである。底面に柱穴状のピットが1基ある。出土遺物はない。

SK179 (愛63図)

21J-08・18に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.25m、短径0.96m、深さは0.19mと浅い。出土遺物はない。

SK190 (第63図・図版17)

20J-69・79に所在する。南北に長い楕円形で長径1.33m、短径0.61m、深さは0.14mと浅い。出土遺物はない。

SK191 (第63図・図版17)

20J-36・46に所在する。南北に長い楕円形で長径1.45m, 短径1.03m, 深さは0.09mと浅い。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

遺物 (第67図・図版46)

5は口縁部破片である。器厚が薄く、小型の深鉢であろう。器面の剥落が著しく、胎上には砂粒を多く混入している。

SK192 (第64図)

20J-37に所在する。北東から南西に長い小判形で長径1.28m, 短径0.72m, 深さは0.16mと浅い。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

遺物 (第67図・図版46)

6は口縁部破片で、Rの撲糸を粗に施文する。焼成前の穿孔が口縁部に残る。

SK194 (第64図)

20J-27・37に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.19m, 短径0.76m, 深さは0.07mと浅い。出土遺物はない。

SK221 (第64図)

19L-93, 20L-03に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.44m, 短径0.89m, 深さは0.53mである。底面は平坦ではなく、2基の柱穴状のピットがある。後期の加曾利B式の小土器片が2点出土した。

遺物 (第68図・図版46)

28は斜位の沈線で文様を構成する。内面側の口唇部直下には1条の沈線が巡る。後期の土器である。

SK223 (第64図)

20L-02に所在する。南北に長い楕円形で長径1.59m, 短径1.26m, 深さは0.51mである。底面は南側が傾斜して約0.10mほど下がっている。後期の加曾利B式の小土器片が2点出土した。

遺物 (第68図・図版46)

29は口縁部にR Lの繩文を施文した下部に沈線を1条巡らせ、沈線以下は無文となっている。焼成は良い。

SK224 (第64図)

20L-13に所在する。2基の土坑が重複している。北側の土坑は東西に長い楕円形で、長径1.20m, 短径0.97m, 深さは0.31mである。南側の土坑は柱穴状を呈し、径0.5~0.6m, 深さは0.60mである。後期の加曾利B式の土器片が出土した。

SK226 (第64図)

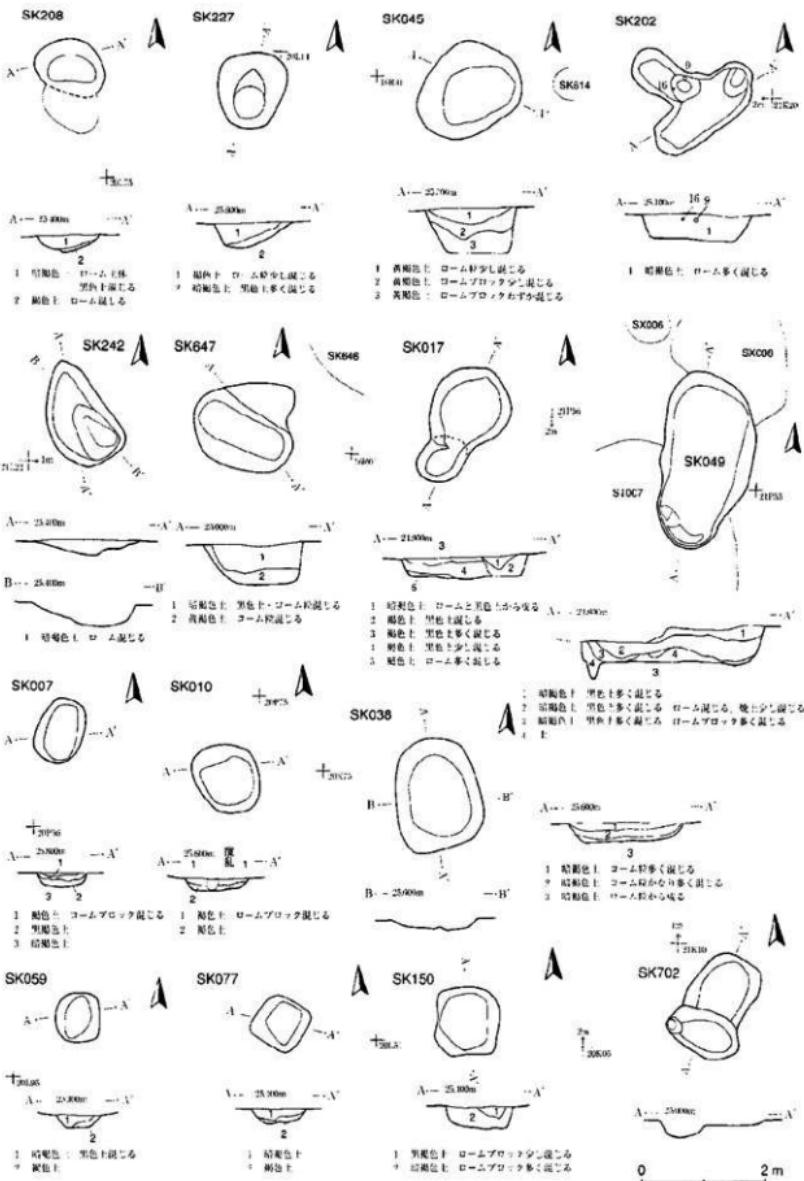
20L-03に所在する。南北に長い楕円形で長径0.86m, 短径0.58m, 深さは0.30mである。後期の加曾利B式の小土器片が1点出土した。

遺物 (第68図・図版46)

30は脣部破片で、繩文を充填する文様帶と沈線により区画された無文帶で文様が構成されている。焼成は良好である。

SK228 (第64図)

20L-13に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径0.68m, 短径0.34m, 深さは0.09mと浅い。後期



第66図 繩文時代土坑 (9)

の加曾利B式の小土器片が1点出土した。

SK229（第64図）

20L-13・14に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.11m、短径0.56m、深さは0.26mである。底面は平坦ではなく傾斜している。出土遺物はない。

SK230（第64図）

20L-13に所在する。北西から南東に長い楕円形で、南東側で浅い掘り込みの遺構と重複している。長径は1.82m、短径0.93m、深さは0.33mである。覆土内から早期の撲糸文系の小土器片が5点出土した。

SK231（第64図）

20L-22・23に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.45m、短径1.11m、深さは0.75mである。早期の撲糸文系土器2点と後期の加曾利B式の土器片が1点出土した。

SK232（第64図）

20L-23に所在する。2基の土坑が重複している。東側の土坑は南北に長い楕円形で長径1.53m、短径0.92m、深さは0.48mで、底面は播鉢状である。西側の土坑は東西に長い楕円形で長径は推定で0.9m以上、短径0.36m、深さは0.07mと浅い。こちらの土坑の方が古い。早期の撲糸文系の土器片4点と後期の加曾利B式の土器片が4点出土した。

遺物（第68図・図版46）

31は無文土器の口縁部で、器面は内外面ともミガキを加えており光沢を残している。32は胸部破片で、縄文施文後に斜位の沈線を加える。

SK233（第64図）

20L-23に所在する。南北に長い楕円形で長径1.28m、短径0.74m、深さは0.11mと浅い。小土器片が3点出土した。

SK234（第64図）

20L-22に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径0.96m、短径0.69m、深さは0.31mである。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

遺物（第67図・図版46）

7は腹部破片で、Rの撲りの綾い撲糸を粗に施文する。

SK238（第64図）

20L-22に所在する。東西に長い楕円形で長径0.74m、短径0.47m、深さは0.17mである。出土遺物はない。

SK239（第64図）

21K-06に所在する。東西に長い楕円形で長径2.26m、短径1.29m、深さは0.65mである。底面は平坦ではなく、中央に柱穴状の凹みが1基ある。覆土中に炭化物を混入する層が見られた。土器等の出土遺物はない。

SK241（第64図）

20L-33に所在する。北東から南西に長い楕円形で長径1.20m、短径0.85m、深さは0.37mである。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

SK654（第65図）

19M-30に所在する。中世居館跡の溝と溝の間の、土壁が切れている所にある。東西に長い楕円形で、長径は推定で184m、短径102m、深さは0.16mと浅い。出土遺物はない。

S X008 (第65図)

21P-44に所在する。不整の楕円形で、長径227m、短径189m、深さは0.94mである。南側に不整形の土坑が1基、重複している。南側の土坑の方が旧く、この土坑の方が新しい。覆土上層及び下層から縄文中期の加曾利E式の土器片等が出土した。

遺物 (第67・68図・図版47)

18は把手状の突起の付く口縁部破片で、陸帯で区画された中に縄文を充填している。19は胴部破片で、陸帯で口縁部文様帯と胴部文様帯を区画し、口縁部文様帯では、陸帯の内側に沈線による無文帯を巡らせ、その内側に縄文を充填させた部分と渦巻文で文様を構成する部分で文様を構成している。これらの土器は加曾利E I式の土器である。20は口縁部から胴部にかけての破片である。1-5ほどが遺存していた。口唇部が大きくT字に張り出し、口唇部が内湾する。軽広の口唇部には2条の沈線が同心円状に巡り、外面には短沈線による刻み目を付す。11縁部以下にはR Lの斜縄文が施文され、曲がりくねった沈線、直線の沈線が1条垂下している。部分的に施文した縄文が磨り消されているか所も見られる。21は土器片縁で、楕円に調整した土器片の2辺に刻みを加える。器面には陸帯の貼り付けがあり、その陸帯をうまく利用している。22・23は胴部破片で沈線と縄文で文様が構成されている。

(3) 不整円形土坑

SK009 (第65図)

20P-56・66に所在する。不整の円形で、長径1.42m、短径1.23m、深さは0.57mである。底面の北隅に柱穴状のピットが1基あるが、底面からの深さは0.10mである。出土遺物はない。

SK011 (第65図・図版18)

21P-32・33に所在する。不整の円形で長径1.68m、短径1.53m、深さは0.30mである。出土遺物はない。

SK041 (第65図・図版18)

20K-95、21K-05に所在する。ほぼ円形で長径2.24m、短径2.21m、深さは0.44mである。早期の撲糸文系の土器片が3点、条痕文系の土器片が2点出土した。いずれも小片である。SK048と重複するが、前後関係は不明である。覆土上層に焼土粒がわずかに混入していた。

SK045 (第65図)

21L-50に所在する。不整の円形で、長径1.14m、短径1.00m、深さは0.66mである。出土遺物はない。

SK052 (第65図)

20L-76・77に所在する。北西から南東に長い楕円形で長径1.15m、短径1.07m、深さは0.39mである。底面は東に向かって傾斜しており、底面に2基の柱穴状のピットがある。早期の撲糸文系の土器片が出土した。

遺物 (第67図・図版46)

3は口縁部破片で、浅く粗な撲糸を施文する。

SK053 (第65図)

20L-67に所在する。不整の円形で、長径1.17m、短径0.93m、深さは0.61mである。底面は平坦ではなく、V字状に狭まる。出土遺物はない。

SK054 (第65図)

20L-66に所在する。南北に長い楕円形で長径1.18m、短径0.96m、深さは0.22mである。底面に浅い落ち込みが2基ある。出土遺物はない。

SK058 (第65図)

20L-87・97に所在する。不整円形で長径1.09m、短径1.03m、深さは0.70mである。底面の西側には一段低い門みがある。出土遺物はない。

SK061 (第65図)

20L-94・95に所在する。不整円形で長径0.90m、短径0.83、深さは0.25mである。覆土の上層には炭化物が混入していた。出土遺物はない。

SK064 (第65図)

20L-74・84に所在する。不整円形で長径0.79m、短径0.72m、深さは0.18mである。覆土の下層に炭化物が混入していた。出土遺物はない。

SK078 (第65図)

21L-50に所在する。不整円形で径0.85、深さは0.40mである。底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK080 (第65図)

21L-50に所在する。北西から南東に長い不整円形で、長径0.72m、短径0.55m、深さは0.12mである。出土遺物はない。

SK081 (第65図)

21L-50に所在する。不整円形で、長径0.55m、短径0.48m、深さは0.17mである。底面は平坦ではない。出土遺物はない。

SK147+SK148 (第65図)

20K-05・15に所在する。南北に長い不整形で、長径2.60m、短径1.50m、深さは0.33mである。幾つかの上坑が重複している。出土遺物はない。

SK149 (第65図)

20K-04に所在する。不整円形で、長径1.18m、短径0.97m、深さは0.27mである。底面が南側に緩く傾斜している。出土遺物はない。

SK208 (第66図)

20L-64に所在する。不整円形で、長径1.17m、短径0.89m、深さは0.29mである。南側の一部が他の土坑と重複している。出土遺物はない。

SK227 (第66図)

20L-13に所在する。不整円形で径1.25、短径1.11m、深さは0.39mである。底面は鍋底状で、北側の壁はゆるやかに立ちあがる。出土遺物はない。

SK645 (第66図)

16R-31・41に所在する。不整円形で、長径1.78m、短径1.40m、深さは0.76mである。出土遺物はない。

(4) 不整形土坑

SK202 (第66図・図版18)

西側の谷に面した台地先端部の、21J-19・29に所在する。Y字状の形で、何基かの土坑の重複とも考

えられる。長径1.97m、短径0.79m、深さ0.45m。早期の条痕文系の土器片と焼けた磨石が出土した。

遺物（第67図・図版46図）

16は胴部破片で、外面に条痕文が縱方向に施文される土器である。

SK242（第66図・図版18）

21L-11に所在する。南北に長い不整形で長径1.76m、短径1.07m、深さは0.23mである。底面は平坦ではなく、南隅が深くなる。早期の撚糸文系の土器片が出土した。

遺物（第67図・図版46）

9は口縁部破片で、浅く粗に撚糸文Rを施文する。10は尖底の底部に近い破片で、撚糸Rを施文する。

SK647（第66図・図版18）

15R-00に所在する。底面形は隅丸長方形である。長径1.74m、短径1.53m、深さは0.69mである。出土遺物はない。

SK017（第66図・図版18）

21P-45・55に所在する。2基の土坑が重複している。長径2.10m、短径1.29m、深さは0.36mである。出土遺物はない。

（5）不整長方形土坑

SK049（第66図）

21P-44・54に所在する。南北に長い小判形で長径2.9m、短径1.5m、深さ0.3m。底面の南隅に落ち込みがある。SK029として調査後、SK049として拡張して調査している。出土遺物は無い。

（6）方形土坑

SK007（第66図）

20P-46に所在する。ほぼ南北に長い隅丸方形で、長径1.07m、短径0.76m、深さは0.26mである。出土遺物は無い。

SK010（第66図）

20P-74に所在する。隅丸方形で、長径1.23m、短径1.02m、深さは0.21mである。出土遺物はない。

SK038（第66図・図版19）

20K-65・75に所在する。南北に長い隅丸方形で、長径1.83m、短径1.40m、深さ0.33mである。早期の撚糸文系土器を主体に条痕文系土器と後期の堀之内式も出土した。

遺物（第68図）

26は口縁部破片で、口唇部上面と口縁部の内面には沈線が1条巡る。口縁部にはLRの繩文が施文される。内面は「寧なミガキ」が加えられる。

SK059（第66図）

20L-85に所在する。ほぼ方形で長径0.81m、短辺0.71m、深さは0.21mである。繩文後期の土器片が出土した。

SK077（第66図）

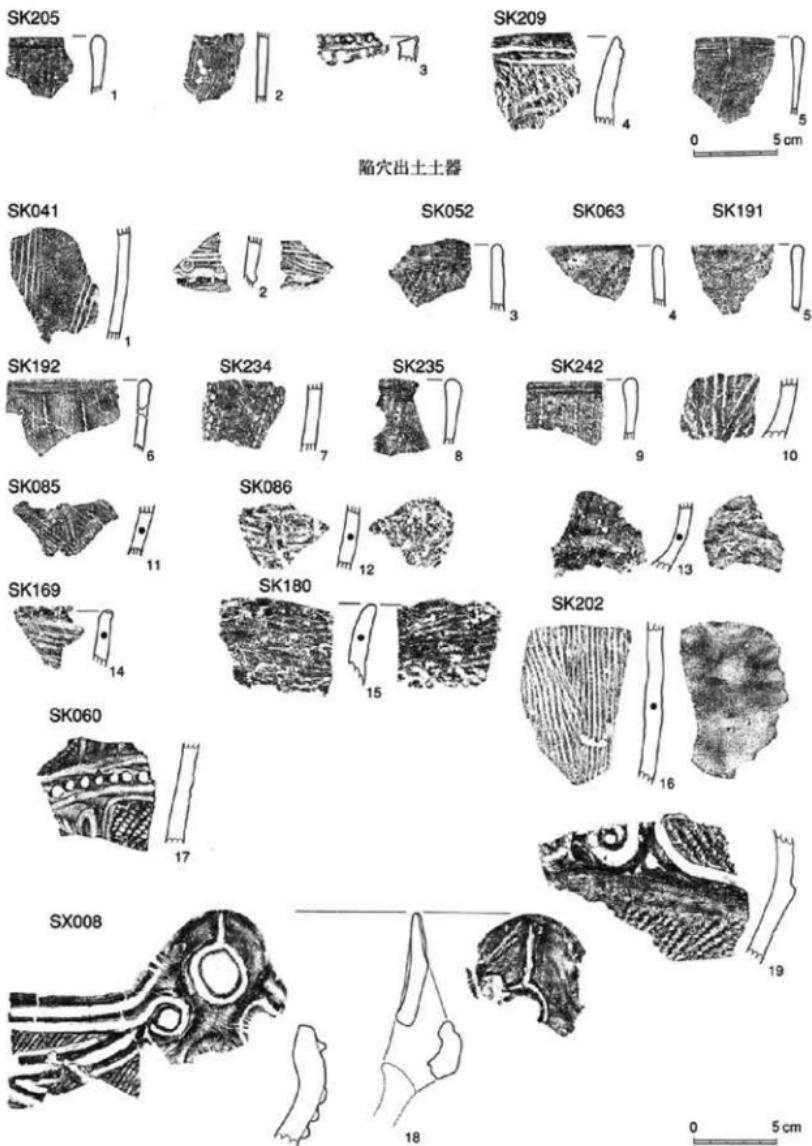
20L-40に所在する。ほぼ方形で一辺が0.82mで、深さは0.23mである。

SK150（第66図）

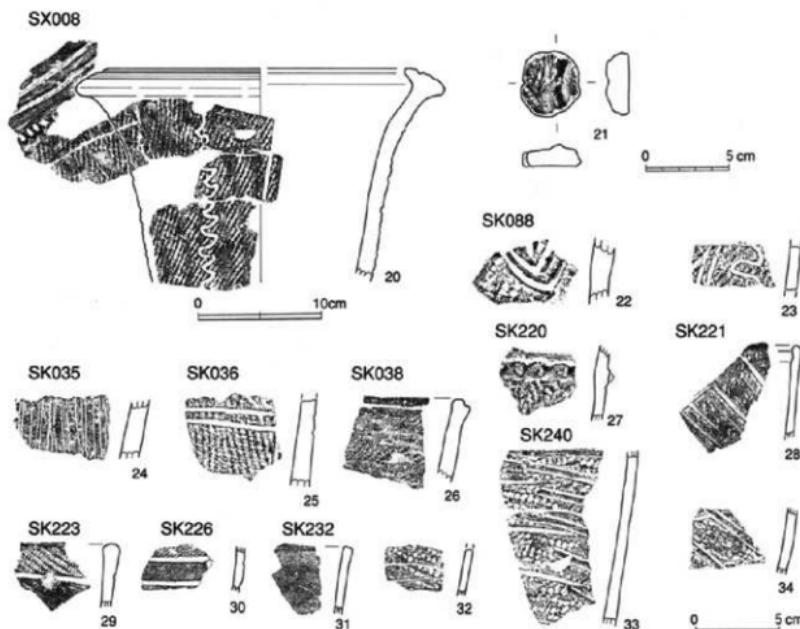
20K-04に所在する。ほぼ正方形で長辺1.10、短辺1.01m、深さは0.37mである。出土遺物はない。

第11表 繩文土坑一覧表

遺構番号	大 戸口	小 戸口	形 態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
SK031	21P	6	円形	0.91	0.83	0.27
SK032	21P	60	円形	1.12	1.04	0.57
SK034	21P	24	円形	1.48	1.18	0.57
SK035	21P	43	円形	1.35	1.33	0.24
SK037	21P	37	円形	1.28	1.26	0.32
SK039	21P	34	円形	1.23	0.99	0.19
SK040	21A	45	円形	0.98	0.90	0.54
SK055	26L	65	円形	0.85	0.67	0.70
SK056	26L	85	円形	0.97	0.90	0.35
SK057	26L	86	円形	0.89	0.73	0.26
SK060	26L	94	円形	1.25	1.18	0.63
SK065	26L	63	円形	1.66	1.06	3.08
SK067	21L	23	円形	0.50	0.49	0.35
SK070	21L	33	円形	0.97	0.83	0.30
SK071	21L	23	円形	0.92	0.77	0.35
SK072	20L	71	円形	0.88	0.86	0.24
SK073	21L	1	円形	0.72	0.59	0.25
SK084	21K	50	円形	0.93	0.93	0.28
SK085	21J	39	円形	1.22	1.22	0.28
SK086	21J	19	円形	1.30	1.19	0.51
SK088	21J	9	円形	1.04	0.93	0.39
SK090	20J	79	円形	0.95	0.29	0.29
SK092	20J	67	円形	0.89	0.87	0.10
SK093	20J	67	円形	0.80	0.71	0.13
SK096	20J	35	円形	0.76	0.61	0.21
SK096	20J	35	円形	0.87	0.58	0.06
SK099	20J	27	円形	1.11	1.03	0.22
SK100	20J	19	円形	0.84	0.83	0.20
SK101	20J	8	円形	1.10	0.79	0.14
SK102	19J	99	円形	0.65	0.65	0.21
SK103	19J	96	円形	0.89	0.77	0.27
SK107	20K	94	円形	1.28	1.13	0.31
SK110	20K	60	円形	0.98	0.90	0.21
SK112	20K	42	円形	1.00	0.90	0.17
SK113	20K	41	円形	0.70	0.71	0.13
SK114	20K	31	円形	0.92	0.91	0.39
SK116	20K	40	円形	0.44	0.39	0.14
SK117	20K	30	円形	0.97	0.79	0.37
SK118	20K	43	円形	1.14	0.96	0.29
SK119	20K	43	円形	1.23	1.09	0.25
SK120	20K	33	円形	1.14	0.96	0.30
SK124	23	45	円形	0.90	0.76	0.21
SK125	20K	23	円形	0.96	0.93	0.21
SK125	20K	24	円形	0.76	0.72	0.19
SK126	20K	24	円形	0.76	0.67	0.26
SK129	20K	56	円形	1.02	0.97	0.28
SK132	20K	65	円形	0.80	0.76	0.21
SK143	20K	18	円形	1.10	1.01	0.54
SK145	20K	19	円形	0.93	0.88	0.22
SK146	20K	6	円形	1.02	0.87	0.32
SK152	19K	88	円形	0.93	0.86	0.20
SK154	19K	79	円形	0.84	0.82	0.29
SK155	19K	79	円形	0.96	0.89	0.30
SK157	19K	99	円形	0.56	0.53	0.34
SK159	21J	8	円形	0.93	0.84	0.46
SK163	21K	62	円形	0.35	0.33	0.22
SK180	21K	31	円形	1.21	1.04	0.33
SK184	21K	20	円形	0.94	0.89	0.31
SK192	20J	37	円形	0.78	0.67	0.09
SK193	21K	38	円形	0.75	0.68	0.23
SK220	19J	93	円形	0.90	0.80	0.23
SK222	19L	92	円形	0.92	0.80	0.35
SK225	20L	3	円形	0.54	0.40	0.34
SK235	20L	22	円形	1.14	1.09	0.25
SK236	20L	33	円形	0.97	0.91	0.35
SK237	20L	12	円形	0.65	—	0.38
SK240	19L	80	円形	1.36	—	0.69
SK268	16R	52	円形	0.42	0.40	0.46
SK304	16R	41	円形	0.62	0.54	0.27
SK306	21P	44	円形	0.73	0.67	0.77
SK326	19H	90	椭円形	0.93	0.63	0.92
SK329	21P	71	椭円形	1.26	0.91	0.23
SK348	21K	5	椭円形	1.41	0.89	0.29
SK351	20L	87	椭円形	0.90	0.72	0.38
SK362	21L	4	椭円形	1.06	0.90	0.43
SK362	21L	4	椭円形	1.06	0.90	0.43
SK363	20L	64	椭円形	1.05	0.82	0.49
SK366	21L	23	椭円形	0.85	0.63	0.29
SK368	21L	23	椭円形	0.54	0.41	0.42
SK374	21L	11	椭円形	0.94	0.72	0.41
SK375	21L	12	椭円形	1.18	0.79	0.37
SK376	20K	89	椭円形	1.09	0.67	0.21
SK379	21L	50	椭円形	0.69	0.41	0.15
SK382	21J	58	椭円形	0.91	0.73	0.27
SK387	21L	11	椭円形	1.01	0.79	0.31
SK387	21J	19	椭円形	0.91	0.68	0.23
SK394	20J	47	椭円形	0.73	0.51	0.21
SK397	20J	29	椭円形	0.79	0.51	0.16
SK398	20J	29	椭円形	1.03	0.81	0.11
SK109	20K	62	椭円形	0.98	0.81	0.27
SK111	20K	52	椭円形	1.40	1.23	0.25
SK115	20K	41	椭円形	0.79	0.52	0.21
SK121	20K	22	椭円形	1.41	1.04	0.39
SK122	20K	33	椭円形	0.53	0.35	0.18
SK133	20K	46	椭円形	1.14	0.92	0.35
SK134	20K	36	椭円形	0.67	0.52	0.37
SK142	20K	28	椭円形	1.16	0.94	0.17
SK144	20K	19	椭円形	1.10	0.95	0.78
SK154	20K	7	椭円形	1.08	0.80	0.53
SK155	19K	88	椭円形	1.25	0.86	0.54
SK156	19K	89	椭円形	0.81	0.59	0.21
SK160	21J	8	椭円形	1.34	0.80	0.28
SK169	21K	42	椭円形	1.07	0.63	0.30
SK172	20K	21	椭円形	1.97	1.13	0.52
SK177	21J	8	椭円形	1.65	1.16	0.39
SK178	21J	8	椭円形	1.50	1.18	0.38
SK179	21J	8	椭円形	1.25	0.96	0.19
SK190	20J	60	椭円形	1.33	0.91	0.14
SK191	20J	36	椭円形	1.45	1.03	0.09
SK192	20J	37	椭円形	1.28	0.72	0.16
SK194	20J	27	椭円形	1.19	0.76	0.07
SK221	19L	93	椭円形	1.44	0.89	0.53
SK223	20L	2	楕円形	1.59	1.26	0.51
SK226	20L	3	楕円形	0.86	0.56	0.30
SK228	20L	13	楕円形	0.68	0.38	0.09
SK229	20L	13	楕円形	1.11	0.56	0.26
SK231	20L	23	楕円形	1.45	1.11	0.75
SK232	20L	23	楕円形	1.53	0.92	0.48
SK232	20L	23	楕円形	0.84	0.36	0.07
SK233	20L	23	楕円形	1.28	0.24	0.11
SK234	20L	22	楕円形	0.96	0.69	0.31
SK238	20L	12	楕円形	0.74	0.47	0.17
SK239	21K	6	楕円形	2.26	1.29	0.65
SK241	20L	33	楕円形	1.20	0.85	0.37
SK64	19M	30	楕円形	(1.84)	1.02	0.16
SX008	21P	44	楕円形	2.27	1.89	0.94
SK221	20L	3	楕円形	1.20	0.97	0.31
SK226	20L	77	不整形	1.15	1.07	0.39
SK209	20P	66	不整形	1.42	1.23	0.37
SK611	21P	32	不整形	1.68	1.53	0.30
SK641	21K	5	不整形	2.24	2.23	0.44
SK945	21L	50	不整形	1.14	1.00	0.66
SK064	20L	74	不整形	0.79	0.72	0.18
SK069	21L	23	不整形	0.90	0.76	0.33
SK078	21L	50	不整形	0.85	0.85	0.40
SK080	21L	50	不整形	0.72	0.55	0.12
SK081	21L	50	不整形	0.55	0.48	0.17
SK149	20K	4	不整形	1.18	0.97	0.27
SK227	20L	13	不整形	1.25	1.11	0.39
SK645	14R	41	不整形	1.78	1.46	0.76
SK147	20K	15	不整形	1.00	1.08	0.33
SK202	21K	10	不整形	1.97	0.79	0.45
SK202	21K	10	不整形	0.76	0.64	0.14
SK222	21K	10	不整形	1.82	0.93	0.33
SK242	21L	10	不整形	1.76	1.07	0.23
SK647	15R	90	不整形	1.74	1.53	0.69
SK208	20L	64	不整形	1.17	0.89	0.29
SK017	21P	45	不整形	2.10	1.29	0.36
SK049	21P	44	不整形	2.85	1.48	0.51
SK148	20K	5	不整形	1.13	0.92	0.19
SK007	20P	46	方形	1.07	0.76	0.26
SK019	20P	74	方形	1.23	1.02	0.21
SK038	20K	75	方形	1.83	1.49	0.33
SK039	20L	85	方形	0.81	0.71	0.21
SK077	20L	40	方形	0.83	0.82	0.23
SK150	20K	4	方形	1.10	1.01	0.37
SK224	20L	3	円形	0.70	0.47	0.64
SK208	21P	44	円形	0.80	0.70	0.20



第67圖 陷穴・土坑出土土器（1）



第68図 土坑出土土器（2）

SX702 (第66図)

21K-10グリッドに所在する。南側で土坑が重複する。長辺は推定で1.40m、短辺は1.08mで、深さは確認面から0.10mと浅い。

6 焼土遺構（第69図、図版19）

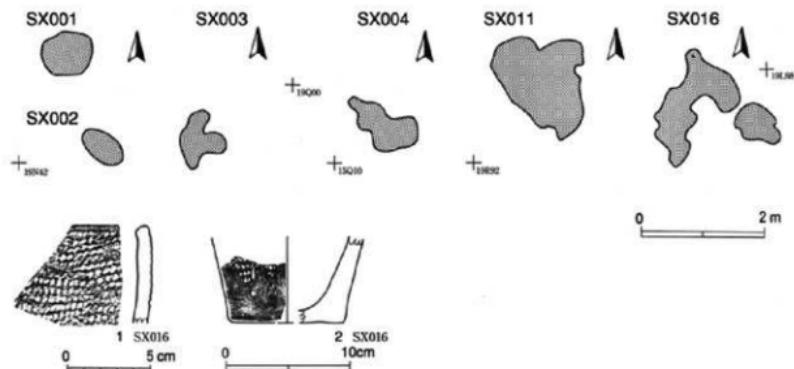
遺跡内から6基の焼土遺構を検出した。これらの多くは遺構の集中する地区とは離れた位置から検出されており、その時期や性格は不明なものが多い。従って、遺構の密集する地区の1基（SX016）も含めて時期不明の遺構として取り扱うこととする。

SX001

西へ延びる舌状台地の基部にあたる平坦部に所在する。焼土のみ検出した。掘り込みは無い。焼土はほぼ円形で径0.7m～0.8m。出土遺物は無い。

SX002

SX001から南へ2m離れて検出した。掘り込みは無い。焼土は北西から南東に長い梢円形で長径0.8m、短径0.4m。出土遺物は無い。



第69図 縄文時代焼土

SX003

台地平坦部に所在する。焼土のみ検出した。掘り込みは無い。焼土は不整形で長径1.0m、短径0.7m。出土遺物は無い。

SX004

SX003から南東へ3m離れて焼土のみ検出した。掘り込みは無い。焼土は不整形で長径1.3m、短径0.8m。出土遺物は無い。

SX011

台地平坦部に所在する。焼土のみ検出した。掘り込みは無い。焼土は不整形で長径1.9m、短径1.4m。出土遺物は無い。

SX016

中世の居館跡内で検出した。地形的には焼土の東側は傾斜してやや低くなる位置にある。東西2m、南北2m、幅0.6mの「へ」の字形の範囲のロームが熱を受けて変色硬化していた。この硬化した範囲の東側の、長さ0.4m、幅0.1mの範囲と西側の一部は特に被熱して焼土化していた。硬化部分内とその北側で加曾利B式の粗製深鉢の小破片が若干まとまって出土したが、それらの土器片は二次的に熱を受けた痕跡はなく、ほとんど復元できなかった。この焼土遺構は、縄文後期の可能性はあるが時期不明としておく。

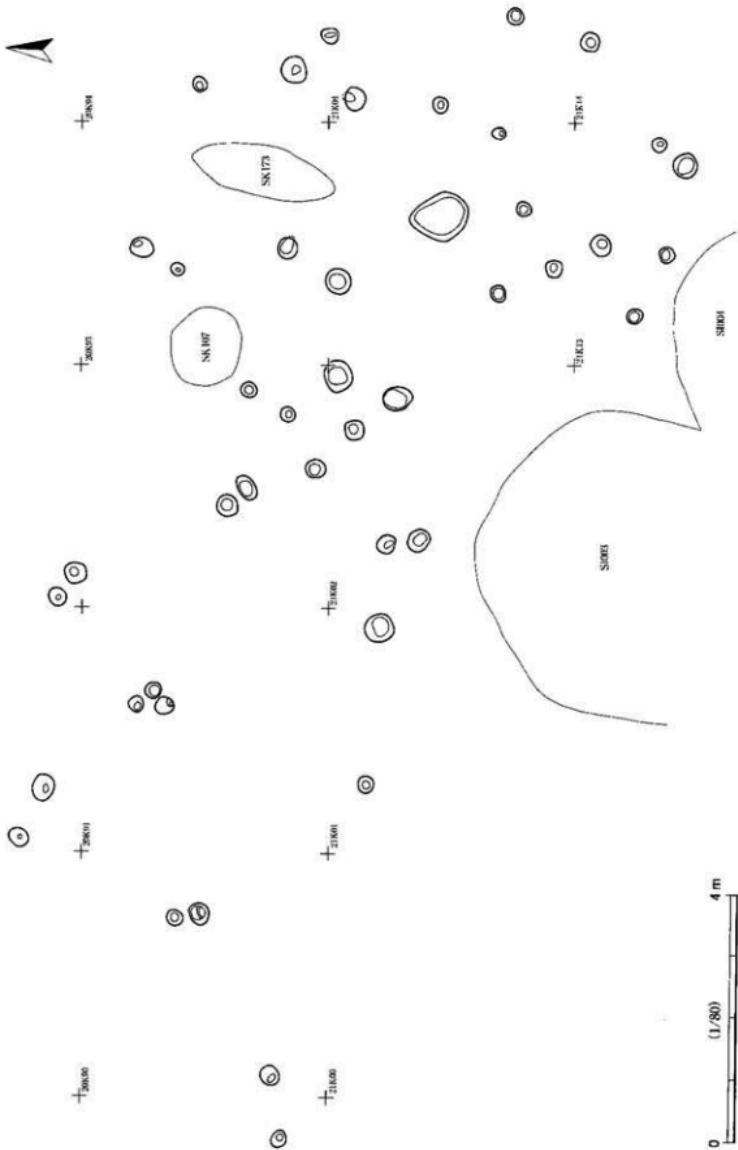
遺物

1は深鉢の口縁部の破片で、単節R Lの縄文を横位に施文している。2は深鉢の底部である。

7 ピット群

遺構（第70図）

20K-81・82グリッド付近から21K-13・14グリッド付近にかけて、東西20m、南北12mの240m²ほどの範囲内に44基のピットを検出した。これらのピットは、縄文早期の遺物包含層を調査している際に検出し



第70回 繩文時代ビックト群

たもので、ピットの径は0.2~0.3m、確認面からの深さは0.2mまでの比較的浅いものが多い。ピットの配置や分布に規則性は見られないが、検出した範囲が比較的まとまっている点、他の遺構との重複関係がない点、南側に早期の竪穴住居跡であるSI003・SI004がある点などを考慮すると、調査時には確認されなかった縄文時代早期の竪穴住居跡の柱穴だけを検出した可能性を残すことから、ここでは縄文時代に山米するピット群として捉えておきたい。

8 遺構外出土遺物

縄文時代早期から後期までの各時期の土器・石器が出土している。このうちで早期の土器は、21Kグリッドと19L~21Lグリッドに集中的に散布が見られる(第71図)。早期の土器の散布は遺跡範囲内では「つ」の字状の遺跡範囲南側の台地上に分布し、早期の住居跡・窓穴をはじめとする遺構が集中する。前期の土器の分布は、早期の土器の分布範囲と一部重複しながら18R・20L・21K・21N・21Pの各グリッドに分布する。この分布は、台地の先端部近くと、小さな谷を挟んだ台地平坦部、台地基部の3地点に大きく分けられる。中期になると14N・19L・19R・21L・21Pの各グリッドで土器が出土している。これらの分布域は、台地縁辺部に近い場所に分布があることを示している。後期の土器は、遺跡の南半の台地上に広く散布し面的な広がりを見せて、18・19Q、18R、19J、19・20K、20L、20~22N、20・21Pの各グリッドから出土している。しかし、後期に関しては遺構の検出は希薄であることが特徴の1つとして挙げられる。

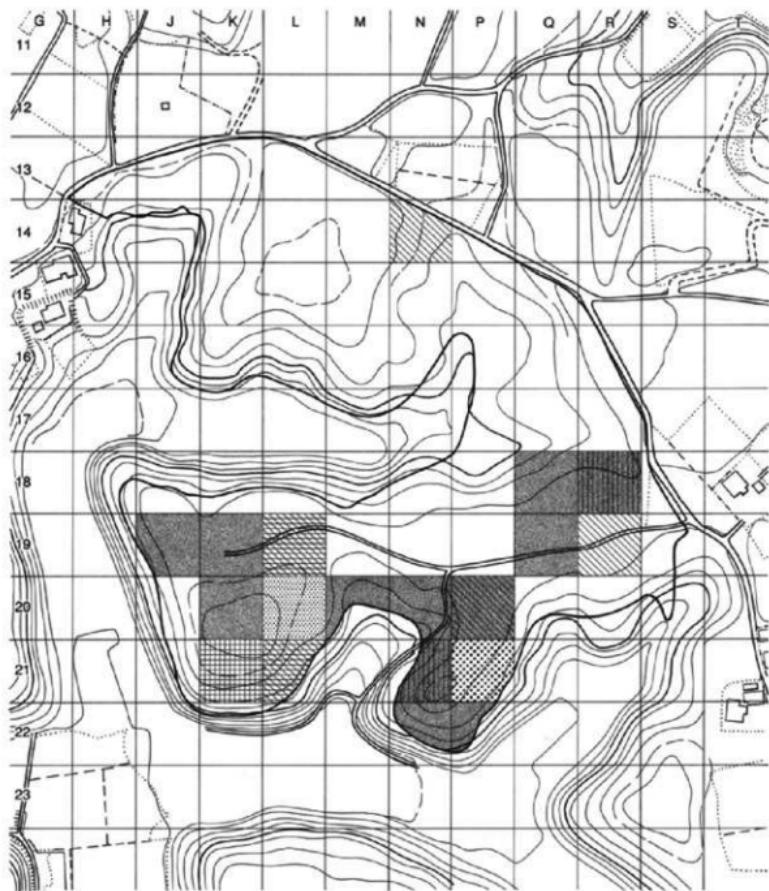
上記のうちで量的に多いのは、早期と後期の土器である。このことは、晚期をのぞく縄文時代の各時期に活動の跡を残しながらも活動の長短や、内容、規模等におのずと差異が生じていたことを示すものかも知れない。

(1) 土器(第72~89図、図版47~65)

第1群土器

第1類土器(第72・73図、図版49・50)

撚糸文系土器を一括した。1、2は口唇部に縄文を押印し、口縁部以下の胴部にかけて縄文が施文されるタイプの土器である。1は口唇部の外面に縄文LRを斜位に連続して押印する。口唇部がやや肥厚し、外反する。口唇部の直下5mmには、指頭による圧痕が連続的に残る。口縁部には縄文が浅く施文される。口唇上面から内面にかけては丁寧な調整を加える。2は二次的な被熱により器面が荒れているが、口唇部が肥厚し、口唇部上面には縄文LRを斜位に連続して押印する。口唇部直下には幅15mmの施文が無い部分が巡り、その下に横位の文様が施文されるようである。3、4はRLの撚糸を粗に施文する。口唇部は丁寧なミガキが入ったような光沢を残す。4は造存する内面全体に光沢を残す。5は二次的な被熱により器面が荒れているが、浅くLRの撚糸を施文する。6は口唇部がやや肥厚し、粗にLRの撚糸を施文する。焼成は良好である。8は胎土に砂粒を多量に混入し、器面にはRLの撚糸が施文される。9は内面が煤けたような暗い色調を呈する。9、10とも器面には口唇部直下からRLの撚糸が施文される。11は胎土に砂粒を多量に混入し、器厚は薄手である。口唇部から2cmほどの無文部があり、その下からRLの撚糸を浅く施文する。12は内外面とも丁寧なミガキが加えられる。器厚は薄手で、焼成は良好である。口唇直下からRLの撚糸が浅く施文される。13は口唇直下に10mmの間隔をあけて斜位にRLの撚糸が粗に施文される。14は粗にLRの撚糸を施文する。器面には光沢を残す。15~17は二次的な被熱で器面が荒れているが、口唇



早期	早・中期	早・前・後期
中期	早・中期	前・中・後期
中期	中期	前・後期
後期	後期	中・後期

第71図 グリッド出土土器分布図

直下から文様が施文される。17、18、19はRの撚糸を粗に施文する。器面には光沢が残る。20、22はRの撚糸を粗に浅く施文する。20は二次的な被熱で器面が荒れているが、22と同様に器面には丁寧にミガキが入る。21は浅く粗に撚糸が施文される。器面は丁寧に調整され、光沢を残す。22は口縁下20mmに焼成後の穿孔が見られる。穿孔は主として外面からのもので、大きさは4mm×5mmの報長の梢円形である。23～36はRの撚糸をやや斜めに粗に施文する。23の器面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。また、24～30、32～34は撚糸の施文部の間隔が広く開いている。37～39は口縁部直下にくびれが見られ、そのくびれ以下にRの撚糸が施文される。40～42は口縁部直下に一条の繩文原体を押印し、胴部に撚糸が施文されるもので、40はRの撚糸を羽状に施文する。43は小型の鉢で、全体の1/4ほどが遺存していた。口縁部直下にRLの繩文の原体を押印する。44～46は底部で44は砲弾型で1/3が遺存していた。45、46は尖底型である。44には外面にケズリ痕が残る。以上の土器のうちで1、2は井草I式の土器である。3～36は夏島式または稻荷台式、37～39は稻荷原式、40～43は花輪台式にそれぞれ比定されよう。

第2類土器（第73～78図、図版47・50～54）

条痕文系の土器を一括した。47は器面に太めのケズリ痕の残るタイプで、内面には横位に擦痕状の調整痕があり、縱方向にナデのような器面を平滑にする整形が部分的に加えられる。48～50は器面に太い沈線が施文されるタイプの土器で、48・50は口縁部破片である。51～60は器面に横方向の、擦痕状の跡痕を残す土器の口縁部である。平線が多いが、56は外削ぎ状に口唇部が尖り、口縁部が緩やかな波状を呈する。52は口縁部直下に指頭によると想われる圧痕が巡り、器面が凹状にへこんでいる。内面は平滑に磨きされている。57は口縁部が外反し、口縁部は内外面とも横ナデによる調整、口縁部以下は外面は縱方向のケズリ、内面は斜位のケズリで調整する。58～67、69、71、73、74、76、79～81は口唇部に刻み目を付するものである。58は口縁の内面側に幅が4mmのヘラ状の工具により断面V字状に刻み目が施文される。59は口縁部に斜めに刻みが施文される。58～60は器面には丁寧な横位のナデが施され、平滑に調整されている。61・63・67・69・73・74・79は器面に擦痕状の整形痕を残し、口唇部には刻み目が付されるタイプである。63は口縁部が外反する。64は口唇部が内削ぎ状を呈する。

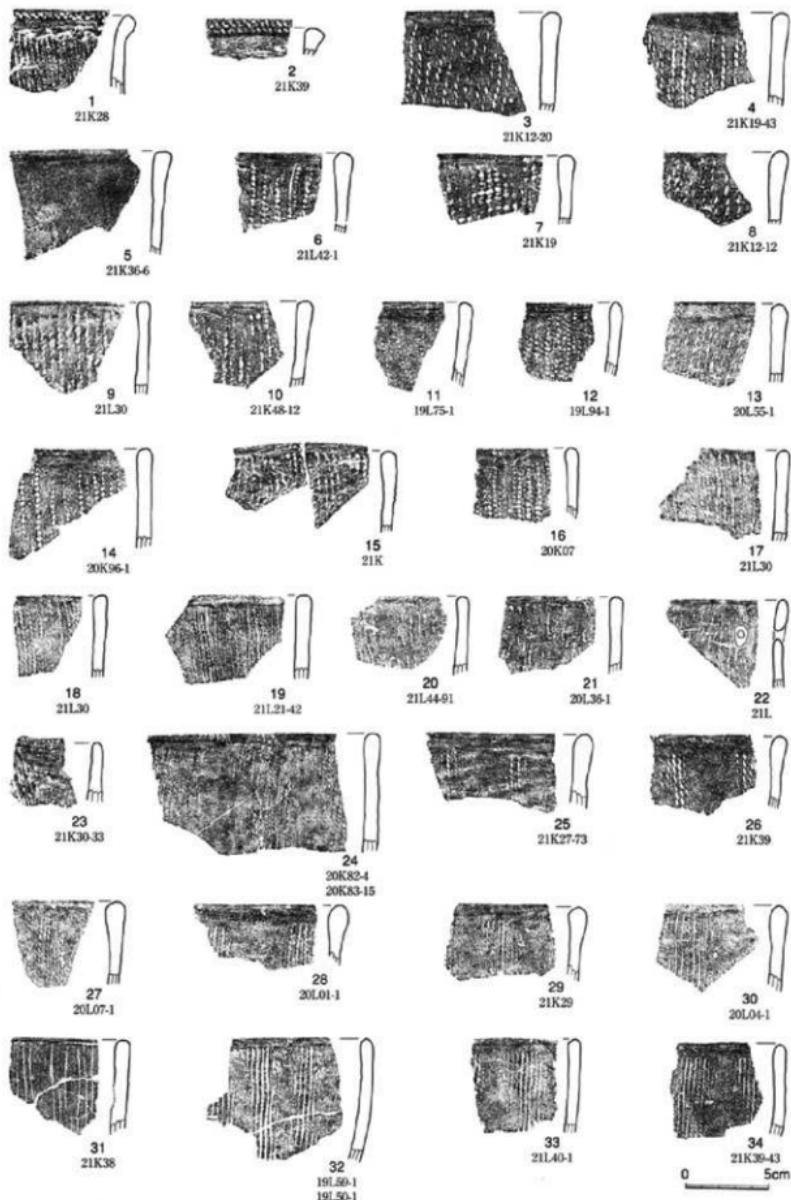
77は器面に擦痕状の整形痕を残し、口唇部に刻み目を付さないタイプである。

62・65・66・71・76は器面に条痕が残り、口唇部に刻み目を付するタイプである。この内で、62と66は口唇部から口縁部にかけて無文帶を有し、62は斜位の1条の沈線の両側に水平方向と垂直方向に2本の沈線を付して文様を構成する。76は口縁部に径が4mmの焼成前の穿孔が見られる。

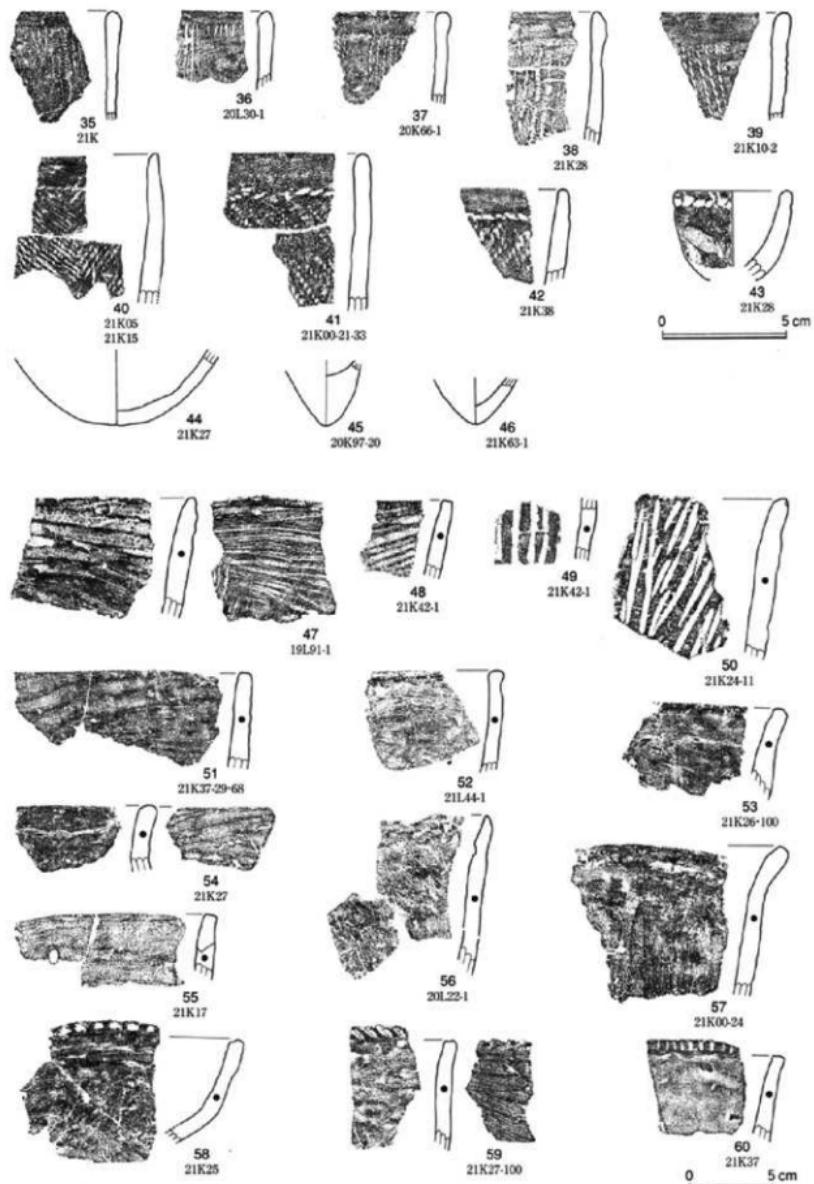
68・70・72・75は口唇部に刻み目を付さないタイプで、75には口唇下1.3cmのところに径5mmの棒状工具による貫通しない穿孔が2.2cm間隔で施文される。78は胴部破片である。

81・83は口唇部に線状の規則的な刻み目を有し、表裏に横位の条痕が施文される。また、竹管によると考えられる円形文と、沈線文で文様が構成されるタイプである。

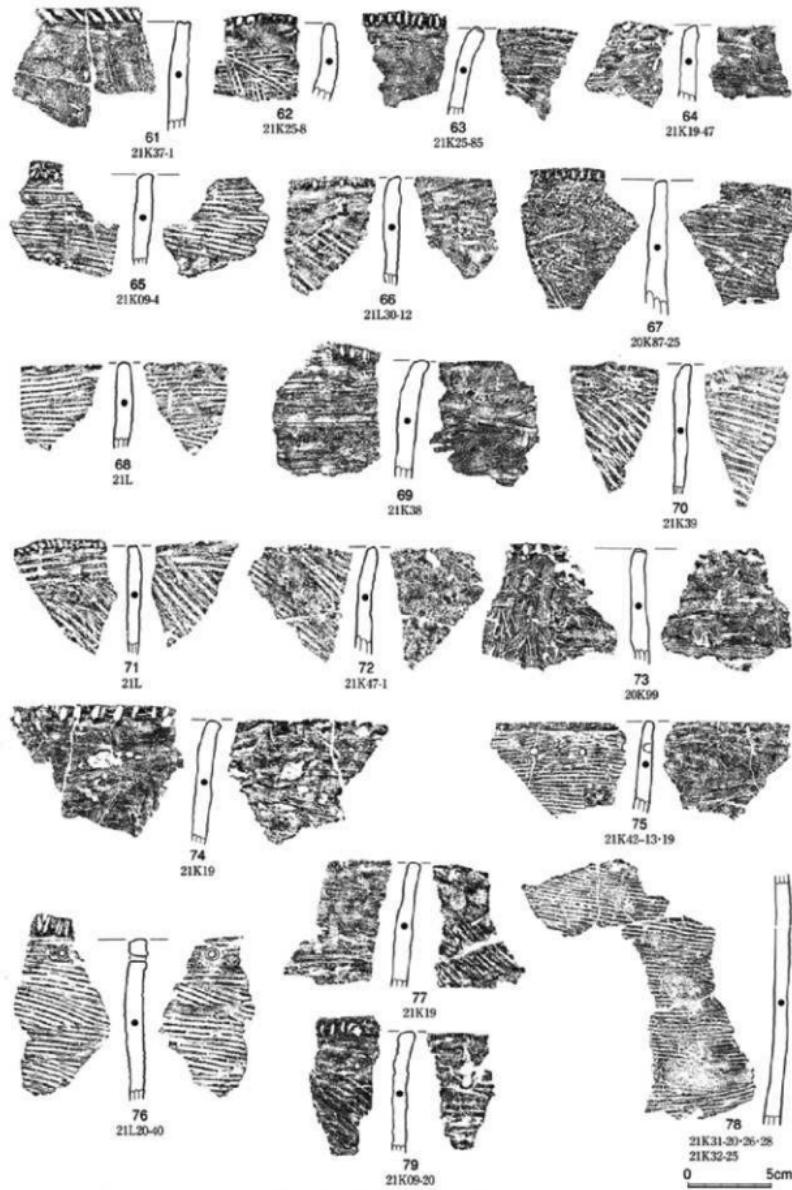
81は直線的に垂下する沈線と曲線が施文される。内面は口縁部から6cm下部まではナデで調整され、それ以下は沈線が付されている。83は僅かに沈線の曲線がわかる破片である。80・82・86は上記の特徴にさらに胴部に陸帯を貼り付け、陸帯にも短沈線を付するものである。84もこのタイプと考えられるが破片のため詳細は不明である。85は口唇部の内外に刺突による刻み目を付し、口縁が波状を呈するタイプである。波状の盛りあがったところの真ん中が窪んで小さな平坦面がある。口縁部には棒状工具による連続した刺突文が右下がりと左下がりの2方向から施文される。



第72図 遺構外出土繩文土器（1）



第73図 遺構出土土器 (2)



第74図 遺構外出土繩文土器（3）

86~90・96は口唇部に刻み目を施し、刺突文と沈線と隆帯で文様を構成し、隆帯には刻み目が付されるタイプである。

89・90は接合しないが同一個体と考えられる。口唇部の内外には棒状工具による刻み目が付され、2条の平行した弧状と縱方向の沈線で文様が構成される。90にはアナグラ属の貝殻の殻頂押捺文が明瞭に残る。91・93・94は口唇部に棒状工具を押しつけたり、細い線で刻み目を付し、胴部には半截竹管状の工具による押し引き文が付される。91・93には口縁部と胴部文様帶を区画する隆帯を貼り付けている。器形的には隆帯以下がくの字に折れて窄まるようである。

95は口唇部に線状の刻み目を入れ、曲線を描く隆帯を口縁部に貼り付けてその隆帯上にも刻みを入れてある。96は口唇部の内外に棒状工具による刻み目を入れ、口縁部と胴部を区画するように隆帯を巡らせ、隆帯には棒状工具により刻み目を付す。口縁部文様帶は垂直方向と斜め方向に幅14mmほどの、沈線で区画した無文帶で三角形に区画した中に、棒状工具により斜め上方向や斜め下方向から刺突して文様を構成する。幅広の無文帶には90と同様にアナグラ属の貝殻を用いた殻頂押捺文がみられる。97は口唇部の外側に棒状工具による刻み目を入れ、口縁部と胴部を区画するように隆帯を巡らせる。隆帯には棒状工具により刻み目を付す。口縁部から胴部の隆帯まで縦に隆帯を1本貼り付けてその隆帯にも刻み目を加える。破片のため詳細は不明だが、口縁から胴部の隆帯まで垂直方向に幅9mmのヘラ状工具による1条のケズリ痕が隆帯と交互に施文されるようである。また、口唇下には主に外側からの穿孔が見られる。穿孔から隆帯までは1条の押し引き文が施文される。

98~109は表裏に条痕または擦痕があるタイプの土器である。これらの内で、98は口縁部が緩やかな波状を呈し、口縁部と胴部を区画する頸部に隆帯を貼り付け、器形が隆帯以下の胴部で屈曲して窄まる。99・100は口唇部が外反し、99は口唇部外面には棒状工具による刻み目を加える。101は口唇部に緩やかな条痕を付す。108は口縁部が緩やかな波状を呈し、焼成前と考えられる外面からの穿孔が見られる。

110は口縁部に近い胴部破片で、1条または2条の細沈線を直線または曲線で描出する。沈線で区画された内は無文または楊子状の細い工具で刺突しており、沈線に架かるように細い円形の竹管の押圧痕を施文する。111は口縁部に貝殻腹縁の押圧により波形の文様を施文する。

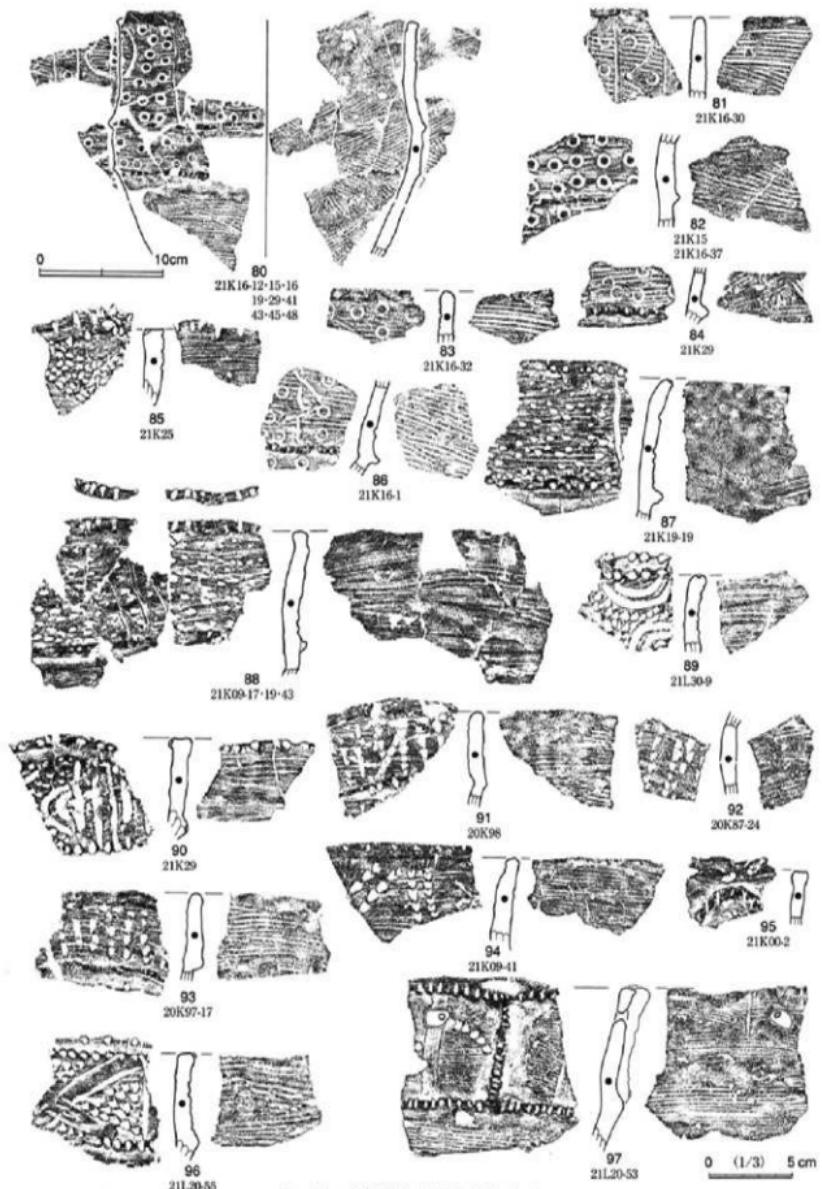
112~120・122は底部である。112はL Rの繩文を施文する。胎土には纖維を僅かに混入する。113には擦痕が見られる。114・118・119・120・122には条痕が施文されており、115・116は器面に縱方向のケズリのような痕跡を留める。121は口縁部の1/2、胴部の1/4が遺存していた。器面には縱方向のケズリの整形痕が残る。口唇部には棒状工具による縱方向と横方向の押し引き文が付される。

123は二次的な被熱により器面の剥落が著しいが、条痕がわずかに確認できる。内面は平滑である。口縁が緩やかな波状を呈する。124は内面が二次的な被熱によりボロボロであるが、器面に横方向のナデ整形痕を残す。胎土には砂粒を多く混入する。125は内面に小さな円形の剥離痕があるが全体的に平滑で光沢を有する。外表面は剥脱が著しいがL Rの繩文を施文している。

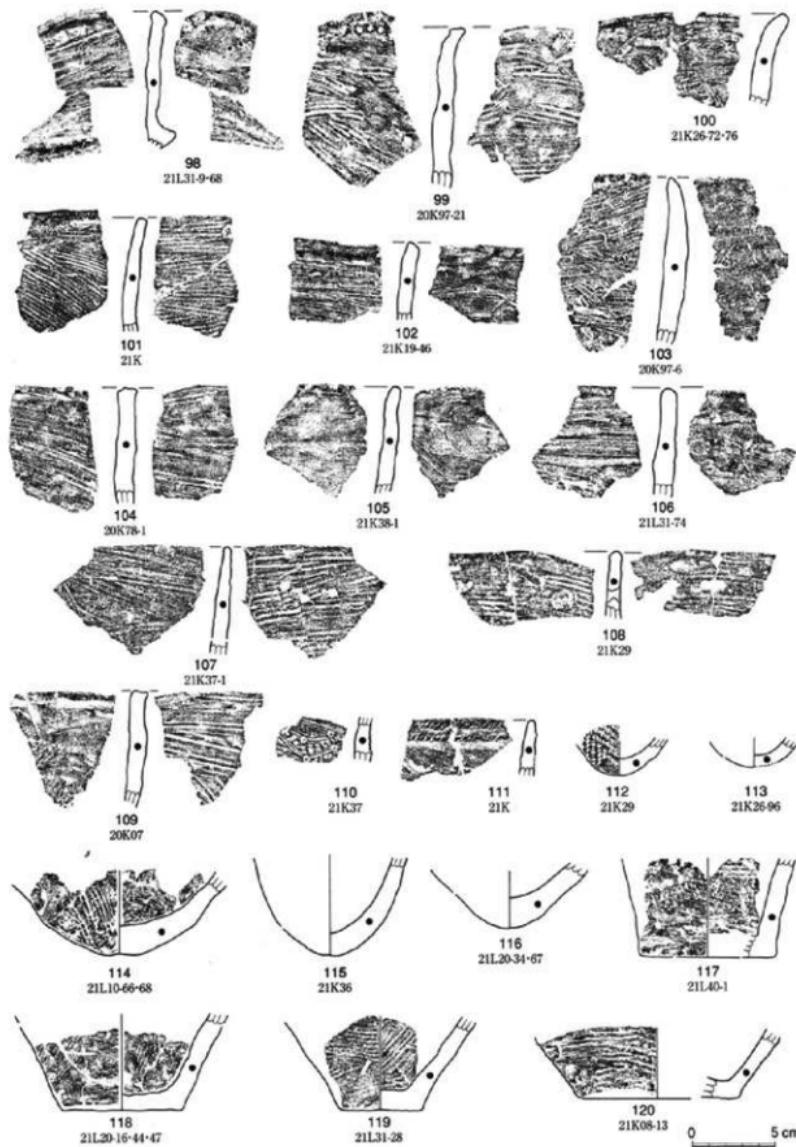
第2群土器 前期の土器

第1類土器 前期前半の土器 (第78図・図版54)

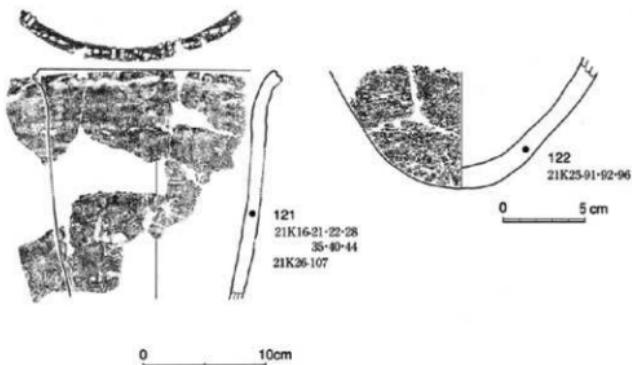
126~128は胎土に纖維を混入し、組紐と沈線で文様が構成される。126は口縁にループ文を施文する。127・128は口唇部に半截竹管を連続して押圧する。口縁部は組紐文を施文後に、平行した2条の半截竹管を斜めに施文する。関山式の範疇で捉えられる土器である。



第75図 遺構外出土繩文土器 (4)



第76図 遺構出土縄文土器（5）



第77図 遺構外出土縄文土器（6）

130～133は縄文のみで文様が施文される土器群である。胎土には纖維を混入し、内面には擦痕が残る。130は口縁部破片で、緩やかな波状を呈し、外反する。132は縄文の施文方向を変えて羽状のように施文している。黒浜式の土器である。

第2類土器 前期後半の土器（第78図・図版54）

134～136・138は胎土に砂粒を多量に混入し、直線と曲線の組み合わせによる沈線で文様を構成する土器である。134・135は口縁部で、口唇部に棒状工具により刻み目を施文する。器形は共に内湾し、135は緩やかな波状を呈する。136・138は胴部破片である。これらは諸磯B式の土器である。

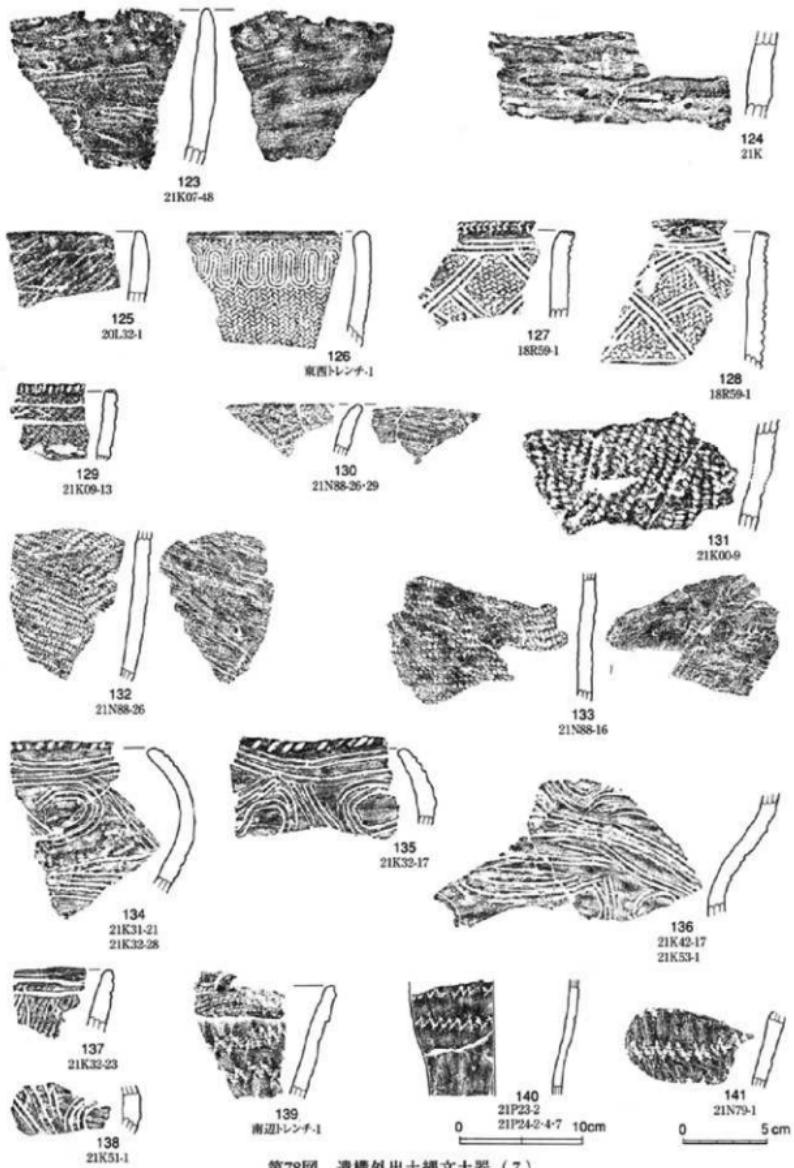
137は口縁に2条の平行沈線を巡らせ、縄文施文後に縱方向に曲線の沈線で文様を描く。

第3群土器 中期の土器

第1類土器 中期前半の土器（第78～83図・図版48・54～59）

139は口唇部に線状の刻み目を付す。口縁部は有段状で、その有段部に斜めに貝殻の背面を押圧して口縁部文様帯を構成する。胴部には貝殻またはヘラ状工具をコンパスのように動かして鋸歯状の文様を施文する。140・141は胴部破片で、文様の施文の手法は139と同様である。阿玉台式の土器の範疇で捉えられる土器である。

142～163、167～186、189～203、205～208は口縁部である。142は把手部で、棒状工具による刺突と押圧で施文している。胎土には石英や雲母を多量に混入する。143は耳状把手の突起部で、沈線と刺突文が付される。144は口縁部文様帯を隆帶と渦巻文で区画し、窓枠状区画の内側を先端の尖った工具で縄文施文のように埋めている。隆帶には沈線を刻む。隆帶の下部には無文帯を挟んで口縁部文様帯と同じ意匠の文様が配される。口縁部の内側は内傾する。146は16mmの無文部において、口縁に隆帶を貼り付け、下方向からの規則的な刺突で波形文を作出する。胎土には石英と雲母を多量に混入する。隆帶以下の胴部文様帯にはR Lの縄文を施文する。146・148・149は中空の把手状の隆起を付けた口縁である。文様は隆帶と太沈線で構成され、胎土には石英と雲母を多量に混入する。147は把手が波状となり、口縁部文様帯を



第78図 遺構外出土縄文土器（7）

隆帯で区画する。隆帯で区画された内側は無文である。胴部は垂下する沈線と縄文が付される。150は把手状突起が付く口縁で、口縁部には太沈線を縱に施文する。焼成は堅微である。151・152は中空の把手を有する口縁部で、隆帯と沈線で文様を構成する。胎土には石英と雲母を多量に混入する。

152~157・161・166・181は隆帯と沈線で文様を構成する土器群である。

155は口唇部に幅15mmほどの無文部を意識したように配し、その下に隆帯を貼り付けている。156は口唇部が屈曲して外反し、口縁部は内湾する。胎土に雲母と石英を大量に混入する。また、口縁部の垂下する沈線の上に粘土塊を貼り付けてCの字状に隆帯を配する。166は胴部破片で、上下に縦・斜め方向に沈線を配した文様を沈線で区画した隆帯を巡らせて、その隆帯上にも短沈線を配する。胎土には雲母と石英等の砂粒を多量に混入する。181は口縁部が内湾し、粘土を帶状に貼り付けて隆帯とし、その隆帯の中程に沈線を描く。粘土帶は垂直・斜め・渦巻状に貼り付け、その後に斜め方向の沈線で埋めている。

159は口唇部に隆帯を回し、縦方向に規則的に押圧してデコボコにし、上から見ると波状を呈する。

160は口唇部に隆帯を貼り付けて肥厚させ、その上面を平坦に調整する。口唇直下には太沈線を2条巡らせ、その下側の1条から斜め下方向に沈線が続く。胎土には雲母と石英などの砂粒を多量に混入する。

164・165・182は隆帯・沈線・縄文で文様が構成される土器である。

164は隆帯と沈線で区画した内を沈線を施文する区画と単節LRの縄文を施文する区画で文様を構成する。165は隆帯で文様を区画し、区画された内を太沈線と無節Rの縄文で埋めている。縄文施文後に曲線を描く沈線を施文している。164・165はともに胎土に多量の雲母と石英等の砂粒を含む。182は破片のため全容は未詳だが直線と渦巻文で文様を構成し隆帯と隆帯の間に単節RLの縄文を施文する。

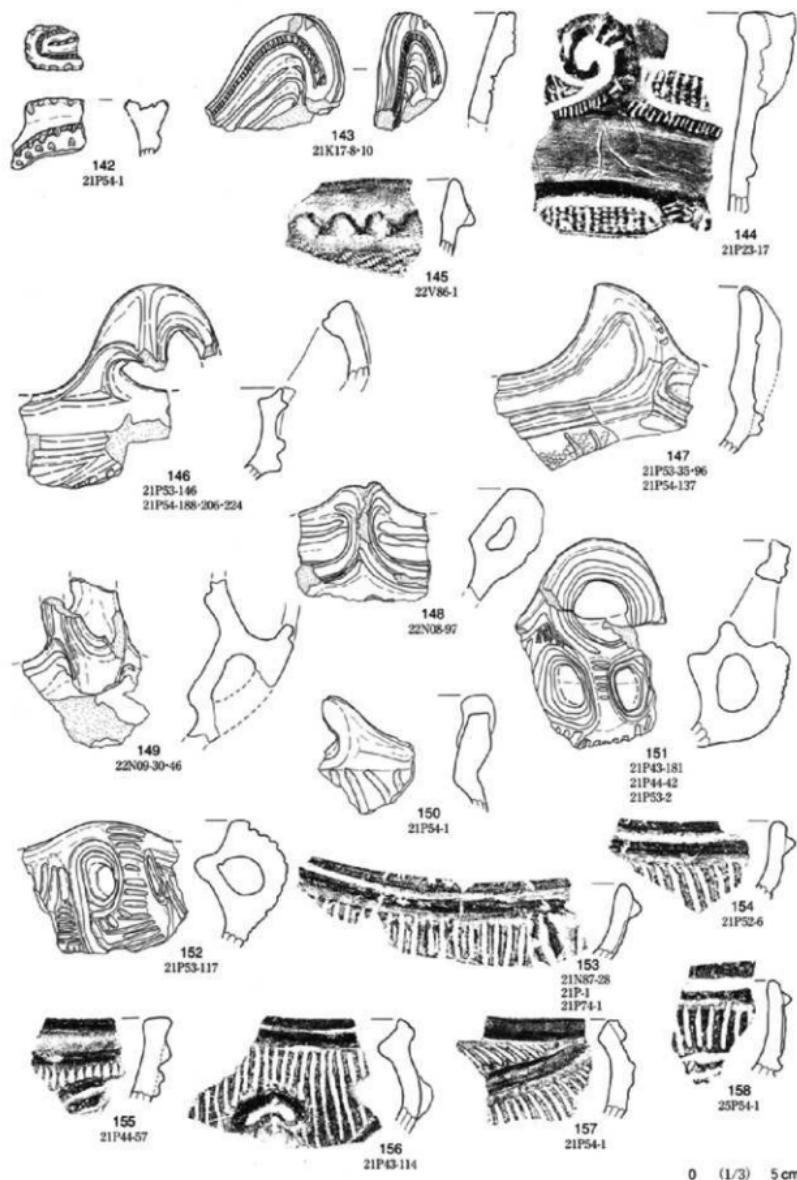
167・168・171は隆帯・交互刺突・沈線で文様が構成される土器である。

167・168は口縁部が波状を呈し、口唇部が肥厚する。168は口唇部が屈曲して外反する。171は交互刺突文が無文帯を挟んで2段となり、口縁部文様帯となる。その下に隆帯を貼り付けて胴部文様帯と区分し、胴部には単節LRの縄文を施文する。

170・172・175~179・184は隆帯・交互刺突文・縄文で文様が構成される土器である。

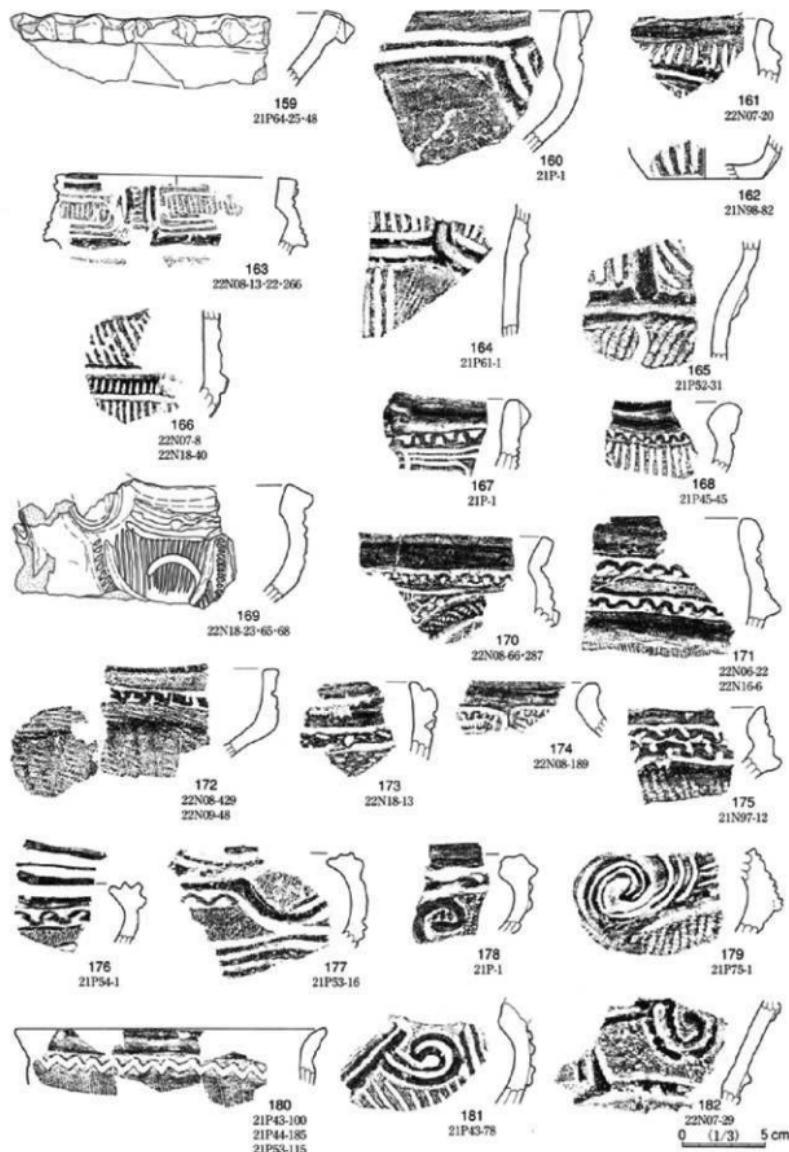
170は口縁部が屈曲して外反し、頭部に上下方向から棒状工具で交互に刺突を加えて波状の線形を描く文様帯を構成し、それ以下の胴部には隆帯を貼り付けた上にLR縄文を施文する。隆帯で区画された内側にも縄文が施文されている。172は口縁部が強く屈曲して内湾する。口唇から1.2cmほどの無文部をおいて1条の沈線を配し、170と同様に上下方向からの刺突によりクランク状の中華の文様に似た意匠の文様を作出する。175は口唇部が内削ぎ状に尖り、くの字に屈曲する。屈曲部には隆帯を貼り付け、口縁部文様帯を区画する。口縁部文様帯は斜め下方向からの棒状工具による刺突が3段加えられる。隆帯以下の胴部には無節Rの縄文を施文する。176は口唇部が鶴の鶴冠状に広がり、器形は内傾する。口唇の上面には2条の横状を呈する溝みがあり、口縁は綺やかな波状となる。口唇外面には隆帯が巡り、隆帯下の幅の狭い無文部には細い粘土帶を蛇行させながら貼り付けている。その下に細かい縄文を約1cmの幅で施文する。胎土には雲母、石英等を多量に混入する。177は二次的な被熱により器面の剥落が著しく、器面の色調も他の上器と較べて淡い黄褐色である。器形的には176と同様である。口縁部文様帯と胴部文様帯は、胎土貼り付けによる隆帯と、その上下を含む3条の沈線で区画される。口縁部文様帯は、蛇行する隆帯と縄文の施文と細い粘土帶の貼り付けで構成される。179は口縁部に近い部位の破片である。

180は口縁が外反し、頭部に棒状工具で鋸歯状の沈線を施文する。胴部には縦に細い沈線が施文される。



0 (1/3) 5 cm

第79図 遺構外出土繩文土器 (8)



第80図 遺構外出土繩文土器（9）

沈線と縄文で文様が構成されるタイプの土器には、183・188・193・195・197～204・206がある。

183は口縁部が無文で、頸部に3条の沈線を巡らせ胴部には縄文を施文する。195・197・202は口縁部が波状を呈し、195は口縁部が強く屈曲して内湾する。198は口縁部が内湾し、口唇部は外反する。胎土には雲母砂粒を多量に混入する。

縄文・沈線・粘土帯の貼り付けで文様が構成されるタイプの土器には、187・190～192がある。

187は口縁に近い部位に縄文を施文した上に連弧文のように粘土帯を貼り付けており、胴部には3条の沈線を巡らせて文様帯を区画する。その下位には縦位に沈線を重ねさせている。190と191は接合しないが同一個体と考えられる。ともに頸部に3条の沈線を巡らせ、単節R Lの縄文を方向を変えて施文して羽状の様な文様とし、その上に蛇行する粘土帯を貼り付け、粘土帯の中央には沈線を作出する。

縄文・沈線・交互刺突で文様を構成するタイプの土器には184と196がある。

184は口縁部破片で、口唇部に交互刺突文を配し、沈線で区画した中には複節の縄文を施文する。196は文様構成は184と同様だが、縄文は無節の撲糸しを施文している。

186は中空の把手の付いた口縁部である。189はU縁部が内湾する。口縁部文様帯は隆帯と渦巻文と沈線で構成される。

194は緩やかな波状を描く口縁部で、口縁部文様帯は隆帯と蕨手文と沈線で構成される。

沈線と撲糸文で文様が構成されるタイプの土器には、203・204・206がある。

203・206は口縁部で、口縁部に沈線が2条巡り、203ではU字状に湾曲した沈線と撲糸文が頸部以下に施文される。206は口唇部が鶴冠状に広がり、口縁部は内湾する。口縁部には撲糸文が施文され、その下に沈線が巡り文様帯を区画している。204は胴部破片である。曲線を描く3条の沈線と撲糸文で文様が構成される。

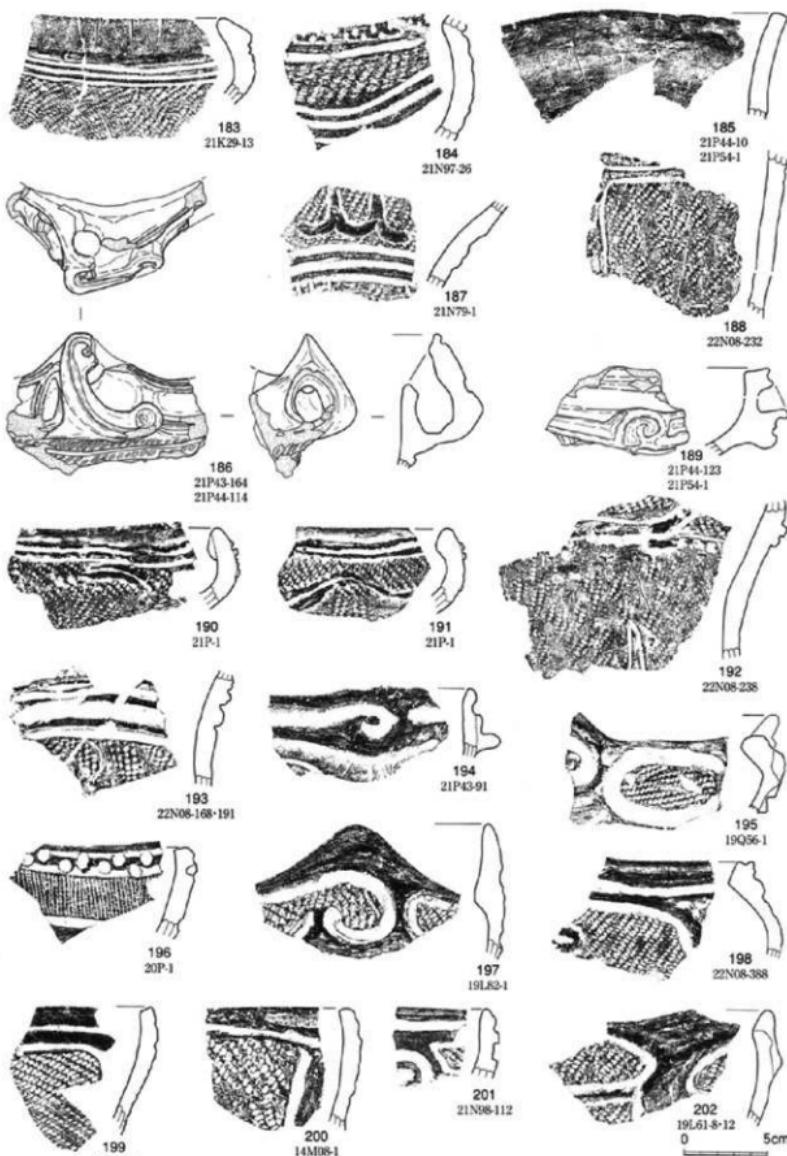
207・208は隆帯と沈線で文様が構成されるタイプの上器である。207は胴部破片である。先端の尖った工具で細い沈線を描き、粘土を貼り付けた隆帯に爪先のような工具で刻み目をいれている。208は口縁部は無文で胴部文様帯との間は隆帯をめぐらせて区画し、胴部には櫛状工具により蛇行する文様が施文される。

209～211は底部である。209は無文で沈線が斜位に施文される。210は単節の縄文R Lが底部近くまで施文され、3条の沈線が垂下する。211は胴部下半まで単節の縄文R Lが施文され、それ以下は無文である。185・212～221は無文土器である。185は深鉢である。213・218は口縁部が肥厚し、213は外反する。219～221は口縁部が内湾する。219は推定で口径は23.6cmである。220は口唇部が外反する。口径は推定で30.0cmである。この3点はともに浅鉢である。221は口唇部が尖った形状を呈する。

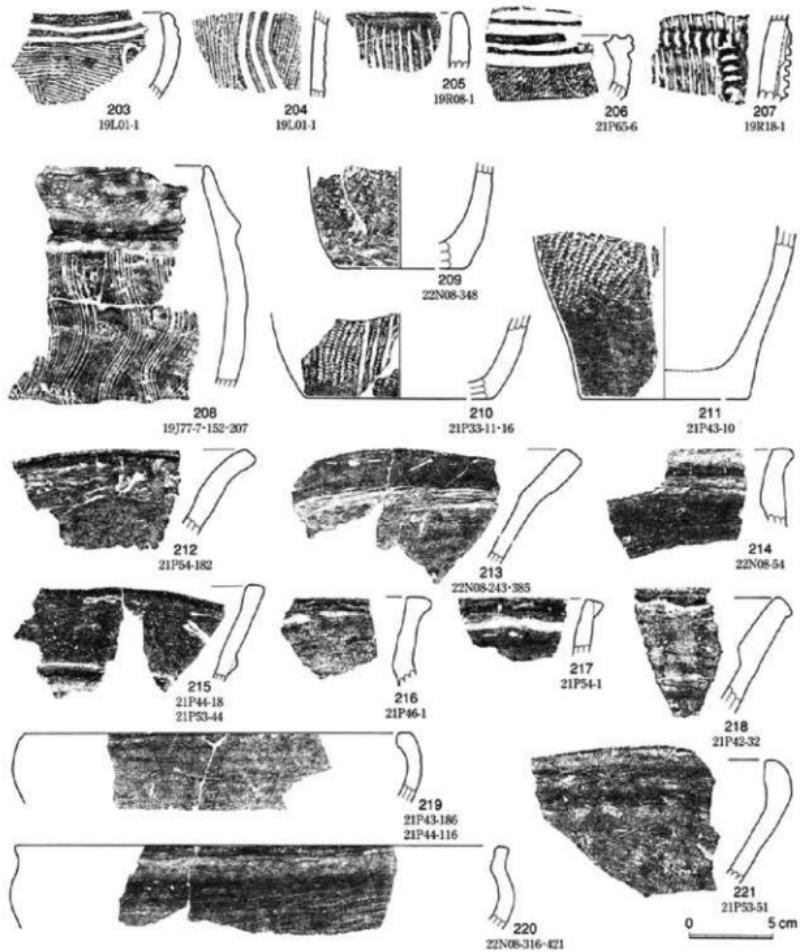
222は沈線で文様が描かれる。窓枠状に3条の沈線で区画された中に2条の鋸歯状の沈線が施文される。耳状の突起には蕨手文が沈線で施文される。

第2類土器 中期後半の土器（第83図・図版47・48）

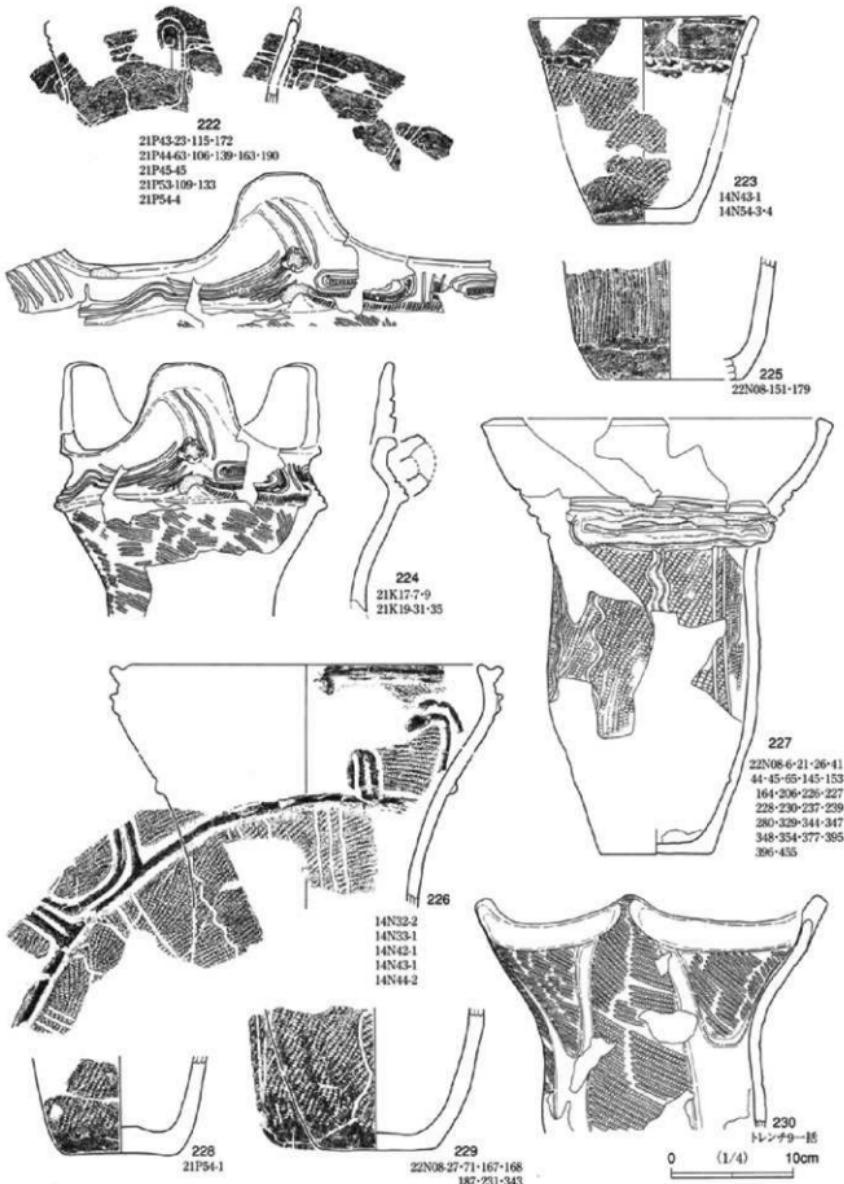
223の口縁部は無文で、頸部に上下からの交差刺突による刺突文が施文され、胴部には単節の縄文R Lが施文される。口径は推定で18.5cm、高さは16.6cmである。224は口縁部で1/2ほどが遺存していた。3単位の耳状突起が着くと考えられる。口縁部には蛇行する平行沈線による文様の区画と、渦巻状に沈線を巡らせて、沈線の間に刻み目を施文する区画に分かれる。その文様の境目には粘土をアーチ状にした装飾が付されている。胴部には単節R Lの縄文が施文される。225は底部に近い部位の破片である。1/5が遺存



第81図 遺構外出土縄文土器 (10)



第82図 遺構外出土繩文土器 (11)



第83図 遺構外出土繩文土器 (12)

していた。文様は櫛状工具により施文されている。226はキャリバー型の器形で、口唇部の外側や頭部に太い隆帯を配して文様帶の区画とし、口縁部文様帶内は太い隆帯を貼り付けており、単節R Lの繩文を施文している。頭部の隆帯以下の胴部には、垂下する沈線と縄文が施文される。径は推定で29.2cmである。227は口縁部を無文帯として残し、頭部には沈線と4単位の突起が着く。胴部は隆帯の貼り付けて縄文と沈線で文様を構成する。口径は27.0cm、高さは34.8cmである。228と229は底部である。228は底部内面が盛りあがっている。229は直線、蛇行線の沈線が付される。230は、器形はキャリバー型で口縁部文様帯が消滅し、4単位の突起が口縁部に着く。その突起を統ぶようにY字状の擦り消し部が配される。口径は27.0cmである。

第4群土器 後期の土器

第1類土器 (第84・85図・図版59~61)

沈線と刺突文で文様が構成されるタイプの土器には231・233・235・237・238・241がある。

231は胴部破片で、何条もの沈線で文様を構成し、その間に棒状工具により刺突を加えている。器面は平滑で光沢を留めている。233、235、238は突起の着く波状口縁で、折れ曲がった沈線と竹管による円形刺突文で文様が構成されている。241は口縁部の突起部分で、突起の上面には渦巻文が作出されている。

繩文と沈線で文様が構成されるタイプの土器には234・236・239・243~245・248~253・255~257がある。255は口唇部が内削ぎ状に尖る。256は口縁が内傾する。257は口縁部が有段状である。

繩文と沈線と刺突文で文様が構成されるタイプの土器には246・249・254がある。ともに口縁部が突起するもので、249・254は波状口縁である。

口縁部に無文帯が有り、1条の沈線で口縁部と胴部文様帯を区画し、胴部文様帯に沈線を施文するタイプの土器には258・259・261・267がある。

258は口縁部に2.4cmほどの無文部を残して頭部から櫛状工具を蛇行させて文様を描き、その後に沈線を1条巡らせている。内面は平滑で光沢を残す。262は同様の意匠の文様を付す胴部破片である。259は口縁部に3.6cmほどの無文部を残して1条の沈線を巡らせ、胴部に鋸歯状に沈線を施文する。263は同様の意匠の文様が施文された胴部破片である。267は3.4cmの無文部を残して1条の沈線を巡らせ、胴部に櫛状工具により集合沈線を施文する。260・269は口縁部に沈線を巡らせないタイプの土器で、260は無文部を残した下から櫛状工具による集合沈線を施文する。口縁部が外反する。269は胴部破片のため小明な点が多いが、外反した器形のくびれ部に3条の棒状工具による擦ったような沈線を施文する。

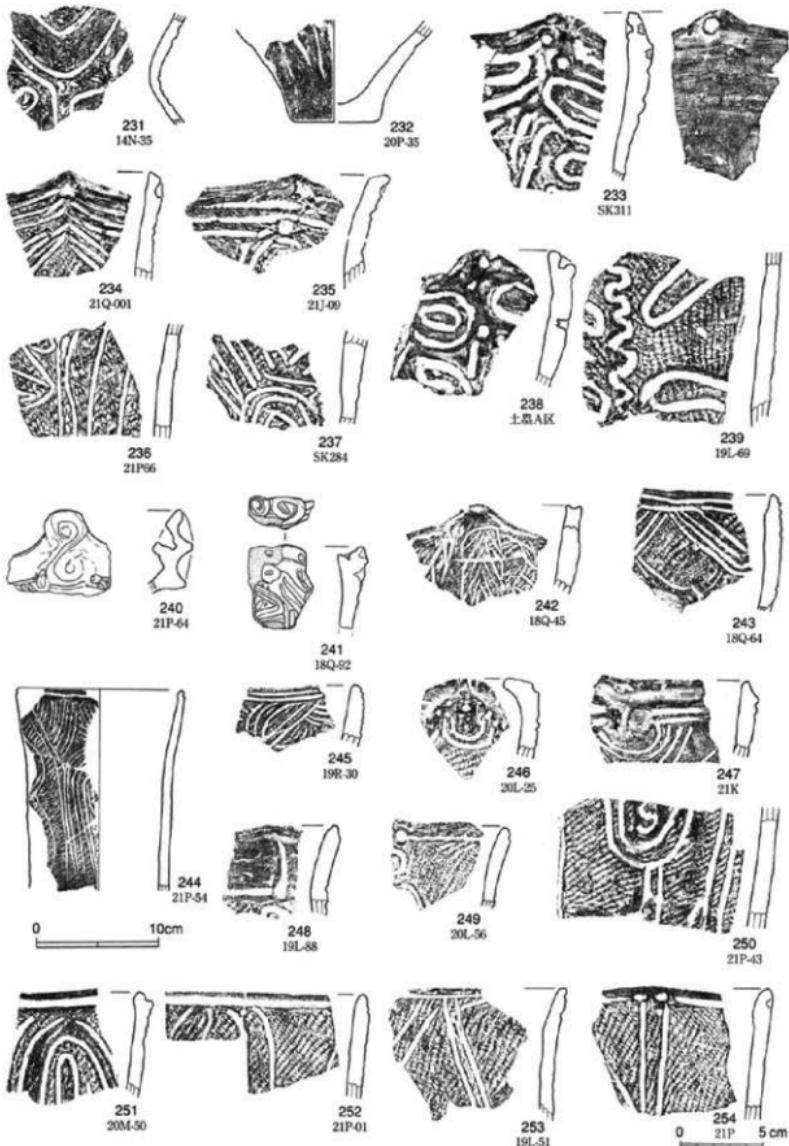
261は縄文を施文後に、口唇直下に沈線を1条巡らせ、さらに口唇部の1点から放射状に複数の工具による沈線を施文する。

264は半截竹管と考えられる工具で逆ハの字を描き、縫杉文のような文様を施文する。266も逆ハの字の文様を縫に重ねて描き、その文様と文様の間には櫛状工具による蛇行した沈線を施文する。

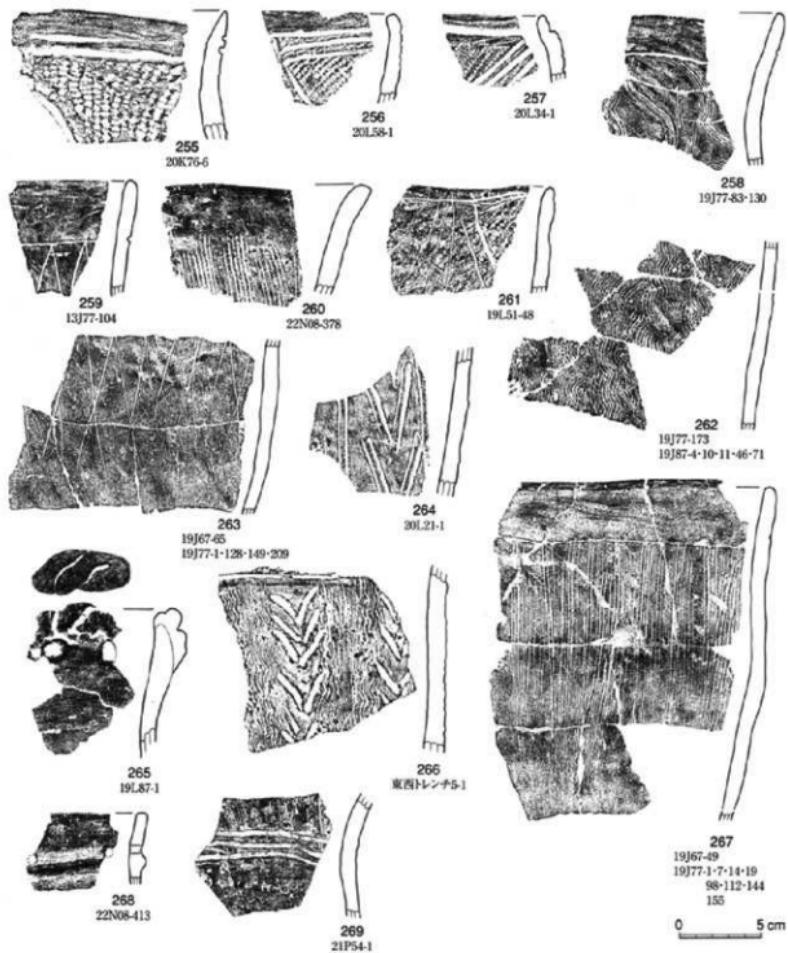
265は口縁部破片で、ひねった粘土帯を貼り付けて文様としている。268は無文土器で、口縁部と胴部を分ける隆帯を巡らせ、その隆帯の上側に径5mmの円形の穿孔が4cmの間隔で見られる。有孔鈎付土器の可能性がある。

第2類土器 (第86~89図・図版61~65)

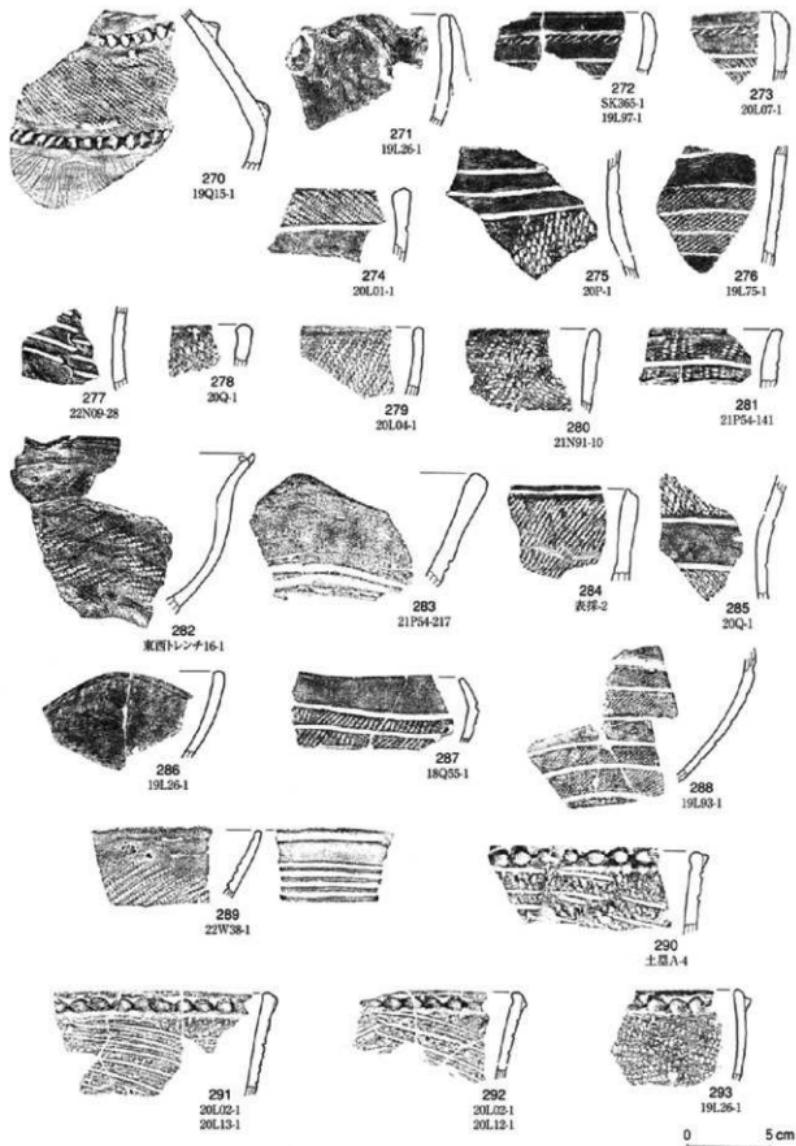
無文部と縄文施文の部分に隆帯を貼り付けて区画し、その隆帯に刻み目を付けて文様構成したタイプの土器には270がある。270は胴部破片であるが内傾して屈曲した器形である。



第84图 遗構外出土縄文土器 (13)



第85図 遺構外出土繩文土器 (14)



第86図 遺構外出土繩文土器 (15)

無文帯・沈線・繩文から文様を構成するタイプの土器には272・273～276・281・287・310・312がある。

272, 273は口縁部に無文帯を残し、2条の沈線で区画した文様帯に斜めの短沈線を施文し、その下に幅の狭い文様帯を配して単節L R繩文を施文する。ともに器面が黒色処理されたかのように内外面とも黒色を呈する。274は口縁部に2.3cmの繩文を施文する文様帯を配し、沈線で区画する。沈線で区画された胴部は無文である。275, 276は胴部破片で横位に巡らせた沈線で区画した中に繩文を施文する。口唇部は外削ぎ状を呈し、内傾する。281も同様な文様構成をとるが繩文原体の粒の大きさや施文密度に差が見られる。287は口縁部に無文帯を残し、器厚は薄く内外面とも丁寧なミガキが加えられる。

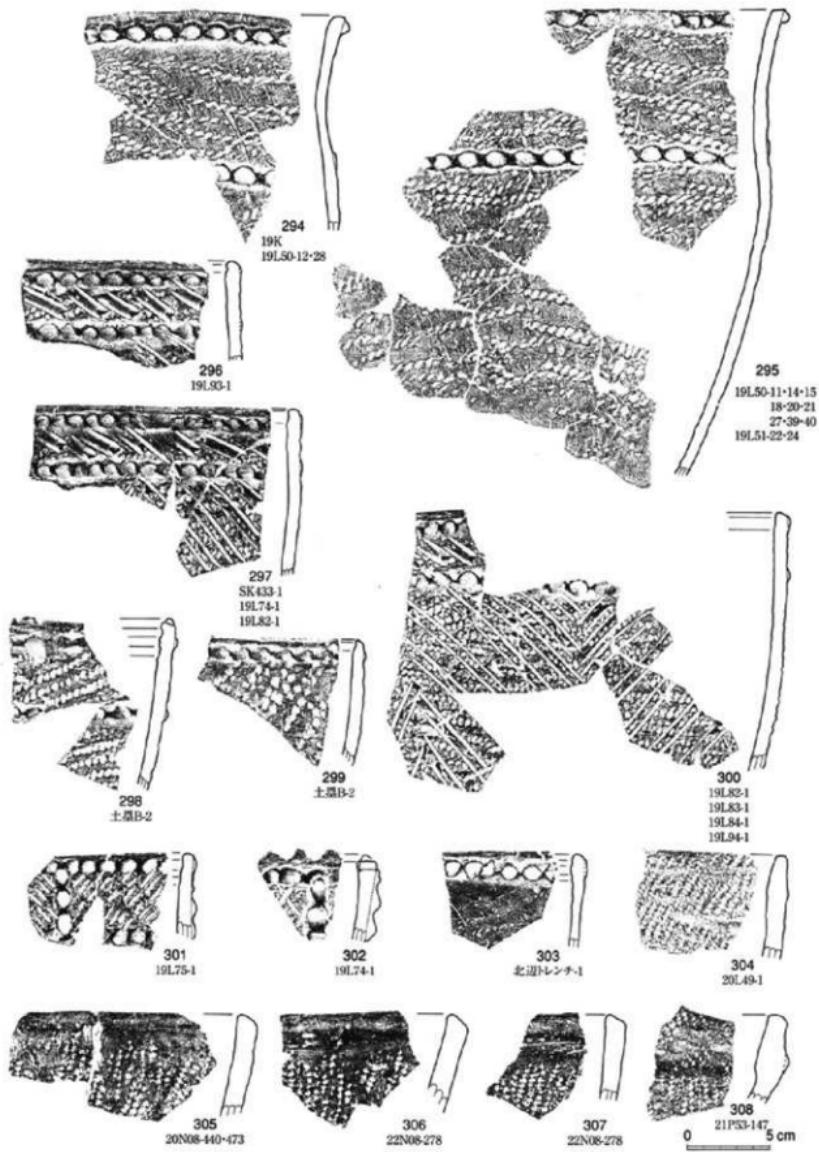
隆帶・繩文で文様を構成するタイプの土器には293～295・298・299・303がある。

293～295は口唇部に粘土帯を貼り付け、指頭による押圧を連続して加えて口唇部の文様とし、それ以下の部位には繩文を施文する。294, 295, 298は粘土帯による隆帶を頭部にも加えている。器形は294, 295は口縁部が外反する。298の口縁部には小突起が付き、298, 299, 303の口縁部内面には幅広の沈線状の溝みが付される。

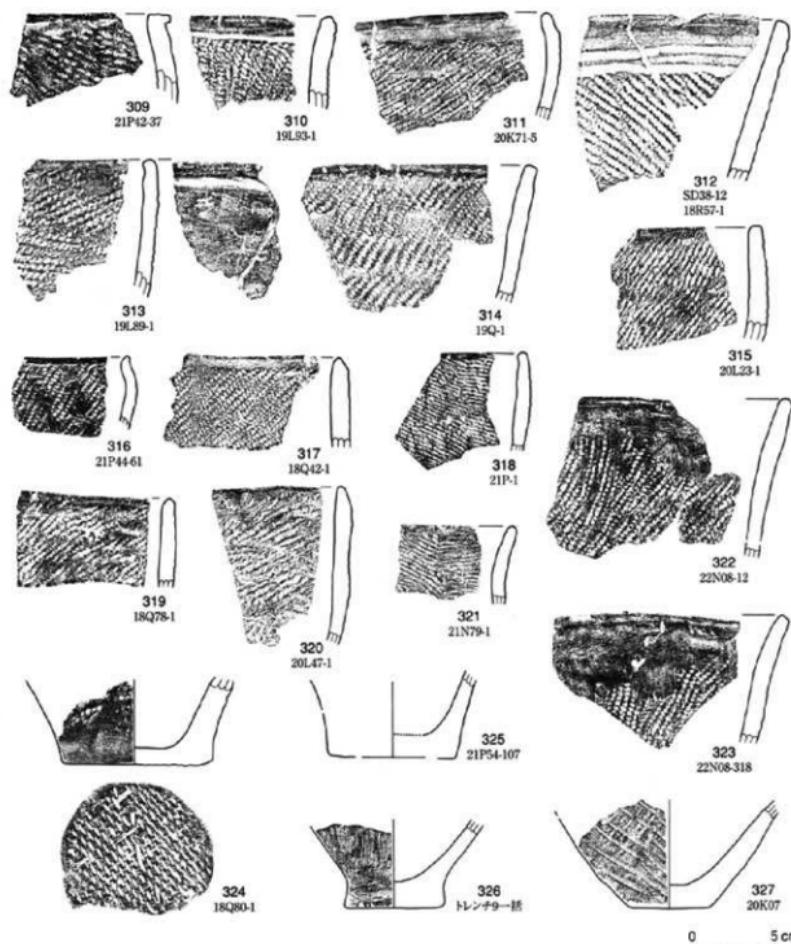
隆帶・繩文・沈線で文様が構成されるタイプの土器には290～292・296・297・300～302がある。

290～292は口唇部に隆帶を貼り付け、規則的に押圧を加えて梢円形の文様を作出する。口縁部は繩文施文後に斜位の沈線を工具で施文する。また、口唇内面には太沈線の溝みが1条巡り、器面はよく研磨されている。290, 292は棒状工具により沈線が描かれている。291は櫛状工具によって施文されている。296, 297, 300は接合はしないが同一個体と考えられる土器で、口唇部と頸部に隆帶を巡らせ、繩文施文後に半截竹管状の工具により斜位に沈線を描いている。301は口唇部と頸部に隆帶を巡らせ、その間をさらに縦方向に隆帶を貼り付けている。隆帶に挟まれて区画された口縁部文様帯には短沈線が斜位に施文される。302は口唇部上に粘土帯を貼り付けて刻み目を付し、繩文施文後に斜格子の文様を付して、その後に口縁部に横1条と口縁部から縦方向へ1条の粘土帯を貼り付け、指頭の押圧により文様を付けている。

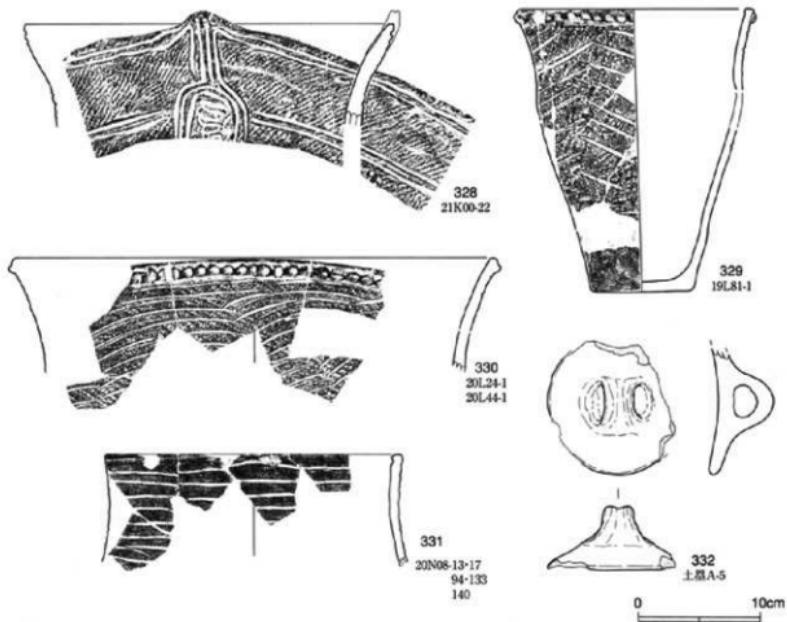
繩文のみを施文するタイプの土器には279・280・282・284・289・304～309・311・313～322・327がある。279・280は、斜行繩文を施文する。279は口唇部内面に有段状の稜が巡る。282は、口唇部が摘み上げ状に尖り、その一部が内側に折れて口唇部が洋む。器形は口縁部が外反して開き胴部が窄まる。単節の繩文しRを斜位に施文した後にヘラ状工具でケズリ整形を加える。284は無節Rの繩文を施文する。口唇部は外削ぎ状を呈し、有段状をなす。289は単節繩文R Lを施文する。内向は、口唇部には竹管の表面側で擦ったような極状の沈線が1条巡り、14mmの無文部をおいて半截竹管の断面側で引いたような平行した5条の沈線が見られる。それ以下については未詳である。304は、波状口縁と考えられ、一部が緩い曲線を描く。器面には単節の繩文R Lが施文され、その上をヘラ状工具で部分的に撫でている。305, 306, 307は接合はしないが同一個体と考えられる。口唇部は外削ぎ状である。二次的な被熱を受けており器面が剥落している。胎土には赤褐色のスコリアが多く混入されている。308は波状口縁で単節の繩文L Rが施文される。また、口唇下15～40mmの間には粘土の貼り付けによる隆帶を巡らせ、内側はU字状の溝みが巡る。309は口唇部が板状の物で潰されたように平滑となり、潰された粘土が底状に外側にはみ出している。文様は繩文施文のみである。310～312は口縁部に無文部を残し、310では沈線を1条、312では太沈線を2条巡らせる。311は口縁部の外面に極状の溝みを巡らせる。器形的には口縁が内湾する。313は繩文を斜位、横位に施文する。口縁内面には極状の溝みが1条巡る。316は口唇部が摘み上げ状を呈し、外反する。口縁の器形は内湾する。胎土に雲母を混入する。318, 321は無節の繩文Rを施文する。318では口縁内面に



第87図 遺構外出土繩文土器 (16)



第88図 遺構外出土縄文土器 (17)



第89図 遺構外出土縄文土器 (18)

樋状の窪みが僅かに見られる。322、323は接合はしないが同一個体と考えられる。口縁部に不整の無文部を残す。

324～327は底部である。324は内面が二次被熱しており器面の剥落が著しい。底部外面には網代痕が残る。327は条痕のような擦り痕が残る。

無文の土器は271・286である。271は波状口縁である。隆帯を貼り付ける他は無文である。286も波状口縁で浅鉢であろう。

沈線と無文の土器は283である。波状口縁で頸部に2条の沈線が巡る。

328は推計で口径30.2cmを測る。口縁部の1/2が遺存していた。口縁部に突起が付くが、平縁である。器形は外反する。文様は縄文と沈線で、沈線は口唇部と頸部に縄文施文後に2条単位で巡らせ、突起部には3個の円形刺突と垂下する沈線と、蛇行する沈線で文様を施文する。頸部の2条の沈線下にも円形刺突が見られる。329は口唇部に隆帯を貼り付け、精円文を連続して施文する。その後に縄文を施文し、その後に綾杉文のように沈線を施文する。ほぼ完形で口径は19.6cm、高さは22.8cmである。頸部がくびれ、口縁部が外反する器形である。330は大型の深鉢の口縁部で、1/5ほどが遺存していた。文様構成は329と同様である。331は口縁内面に樋状の窪みが1条巡り、平行して1cm間隔で沈線を施文する。332は蓋状の土製品で、把手が付く。径は推定で11.2cmで、高さは5.2cmである。胎土には赤橙色のスコリ

アを多量に混入する。裏側には二次的な被熱がみられ、赤褐色化しており器面が剥落している。中世居館跡の土塁中から出土したものである。

(2) 土製品 (第90図・図版65)

1～7は早期の撚糸文系土器の胴部破片を利用した円盤である。2は無節Lの撚糸を施文している。3は単節のR L, 3は単節のL Rの撚糸をそれぞれ施文する。4は単節のR Lを施文する。5～7は器面が擦れていてはっきりと読みとれないが、撚糸文を施文した土器片を利用して作られている。8は胴部破片で、両端が平行になるほどに摩滅しており、上下端は破損している。大形の円盤片と考えられるが、土器片を何かに使用して摩滅した結果であるかもしれない。これらの土器は第1群第1類の撚糸文系土器で、夏島式か稻荷台式の土器を利用してしたものと考えられる。9は表裏に条痕を施文した土器片を利用した円盤である。10も条痕文系土器を利用して穿孔を施したものであるが1/2が欠損している。共に胎土に纖維をわずかに含む。これらの土器は第1群第3類・条痕文系土器の茅山下層式の土器である。11～13は土器片錠である。14は円盤である。共に第3群第2類、加曾利E式の土器片を利用している。

第12表 遺構外出土円盤計測表

種別第90回	出土地点	遺存度	直径(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	備考
1	21K	完形	2.65	0.79	5.90	撚糸文
2	20K	完形	3.34	0.74	9.52	撚糸文
3	21K26-10	完形	4.04	0.61	11.66	撚糸文
4	21L31-12	完形	4.45	0.65	13.93	
5	20L04-1	完形	2.75	0.53	5.24	
6	21L10	完形	2.95	0.76	9.29	
7	21K08	完形	3.78	0.86	15.68	
8	21K12-13	完形	5.94	0.62	23.61	破断面研磨・精円形
9	21K28	完形	5.13	0.85	30.81	条痕文
10	21K29	50%	3.50	0.87	8.54	有孔円板・条痕文

第13表 遺構外出土土器片重計測表

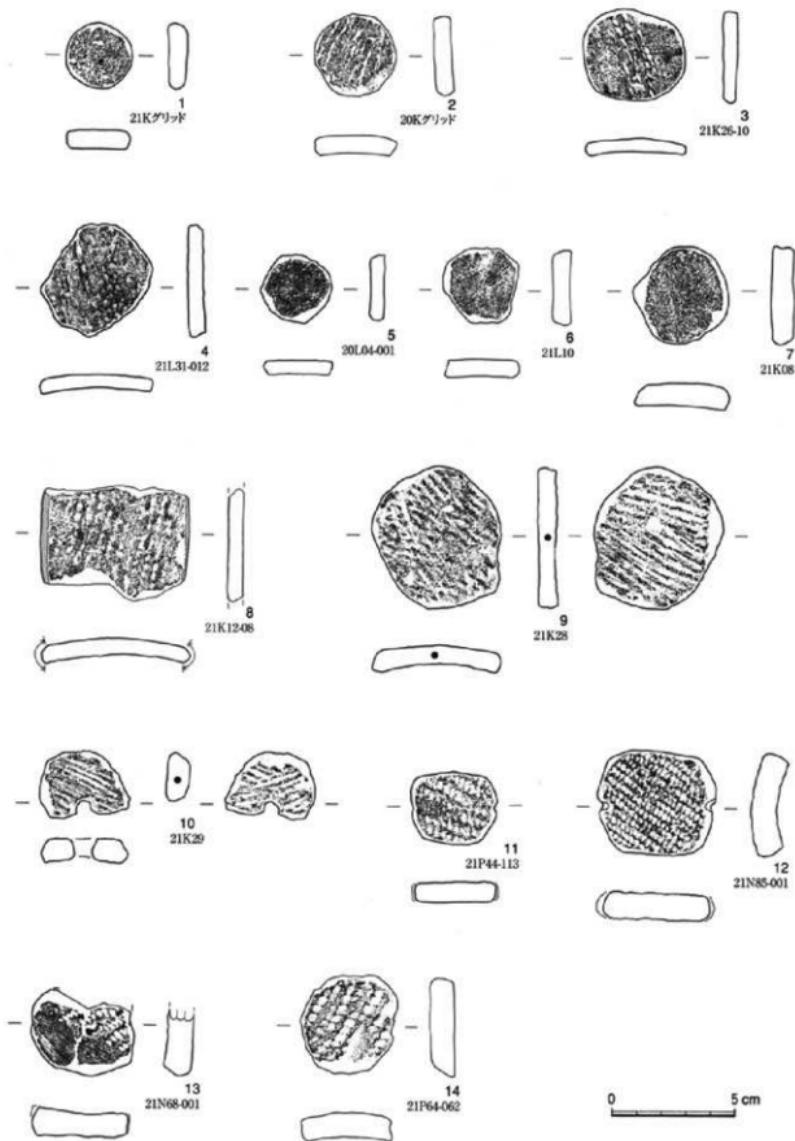
種別第90回	出土地点	遺存度	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	質量(g)	備考
11	21P44-113	完形	3.32	2.91	0.85	11.57	
12	21N85-1	完形	4.46	4.14	1.14	29.20	
13	21N68-1	80%	4.05	2.77	1.24	16.21	
14	21P64-62	完形	3.60	4.00	1.05	19.21	

(3) 石器 (第91～108図、第14表、図版67～74)

ここで扱う石器は、旧石器時代の石器と明らかに後世の所産と思われる砥石を除き縄文時代石器として報告する。これらの石器は本遺跡出土縄文土器の主体である縄文早期～後期の各時期のものであると把握される。石器の分布としては、21K区でチャート製の石鏃・楔形石器と剥片が多量に出土しており、石器製作が行われていた集中区として把握される。但し、その分布は広範囲、散漫で特定の石器製作跡として把握されなかった。この石器集中区は縄文時代早期の遺構および縄文土器の集中分布範囲と一致し、縄文時代早期の所産である可能性が高い。なお、一部、尖頭器・石鏃・磨製石斧等に他時代・時期のものが含まれる可能性がある。以下、各器種ごとにについて説明していく。

尖頭器 1は尖頭器である。黒色緻密質安山岩を石材として先端と基部が欠損している。基部両端を深く抉り舌部を作り出している。形態から見て縄文草創期の尖頭器であろう。

石鏃 石鏃は基部の形状をもとに概ね5類に分類した。



第90図 遺構外出土土製品

1類：基部が逆V字状・逆U字状に深く抉り込み細長い脚部を有するもの（2～6・8）。

2～4は安山岩製の石鎚である。2は先端部を欠損し、基部が逆V字状に深く抉れ片脚部がやや突出する。3は基部が逆V字状に抉れ片脚及び先端部を欠損する。4は両側縁先端がやや抉れ先端部が錐状に細くなる。5はチャート製のもので、両側縁が膨らみ脚部が内弯して尖る。6は黒色緻密質安山岩製のもので両側縁が膨らみ、基部は逆V字状に抉れ脚部が尖る。8は玉髓製で先端部及び基部を欠損するが、おそらく脚部が錐状に突出するものであろう。

2類：基部が浅く山形に抉り込み短い脚部を有するもの（7・9～14）。

7は左側縁下半部が膨らみ脚部が肩が張る。或いは石匙の可能性もある。9は先端部・片脚端部を欠損するが、平面形態は左右非対称型で片脚部が膨らむ。10～14はチャートを石材とする石鎚である。10は薄い剥片素材のもので基部・両側縁周辺に調整加工が認められる。11はやや長身なもので、両側縁が直線的で基部は円味を持って浅く抉れる。12は細身のもので基部は浅く直線的に抉れ脚部端部は尖る。13はやや厚味のある剥片素材のもので調整加工は周辺に留まる。14は長身細身で細身で基部は浅く抉れる。調整加工は精緻である。

3類：基部が部分的に抉れる或いは弧状に僅かに抉れるもので明確な脚部を有さないもの（15～21）。

15はチャート製のものでやや長身である。基部は弧状に抉れ脚部端部は尖る。16やや長身なもので先端を欠損するが、両側縁上半部が内湾して先端部が鈍角となるものであろうか。17は黒曜石製のもので、右側縁が直線的で左側縁は円味を持ち器体形状は左右非対称となる。18はチャート製の長身のもので、両側縁が部分的に抉れる。19は先端を欠損し基部は浅く弧状に抉れる。20は薄手のもので調整は精緻である。21は基部が部分的に抉れ器体が左右非対称である。

4類：基部が平基或いは凸基となるもの（22～31）。

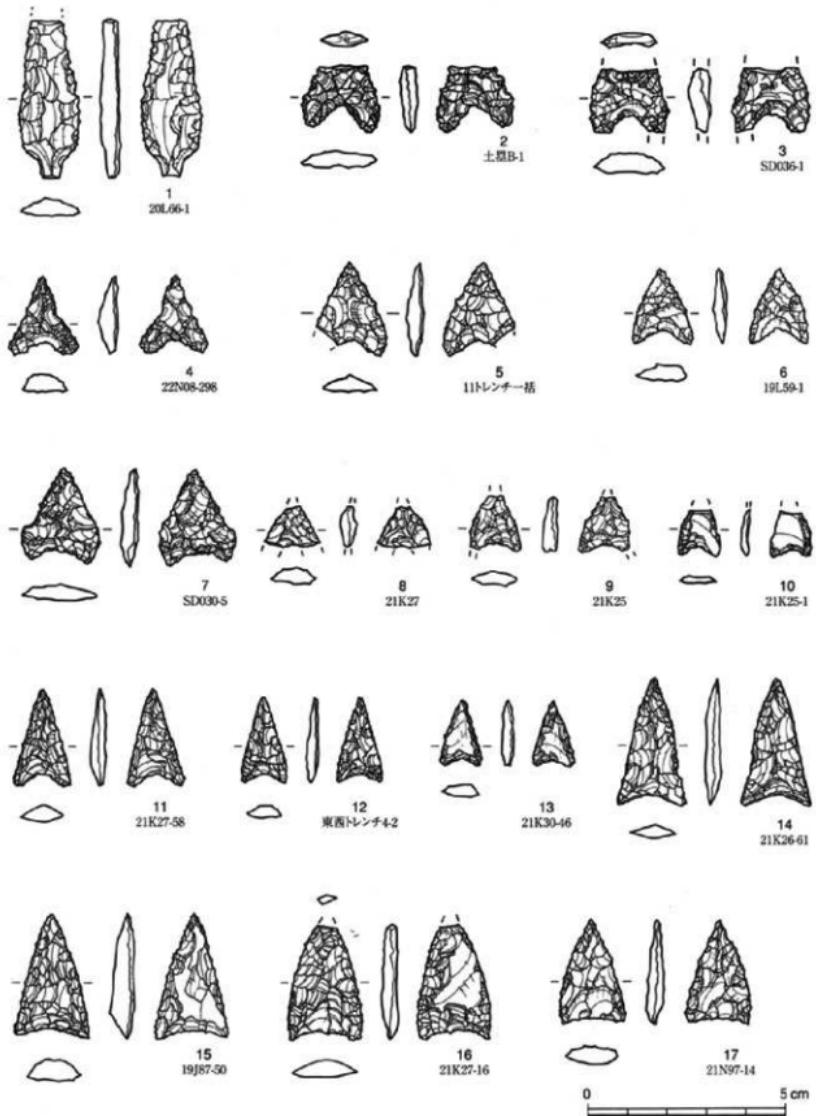
22・23が平基のものである。22は黒曜石製のもので片脚を欠損するが基部は直線的であろう。23は石英製の厚みのあるもので、先端及び片脚を欠損する。24～31が凸基のものである。24はやや厚みのあるもので基部が円味をもって膨らむ。25は小型のもので欠損した先端部を再加工したものであろうか。26は右側縁部を大きく欠損し形状が明確ではないが、基部片側が突出する形態を呈するものか。27は剥片素材のもので周辺のみに調整が留まる。28は先端部を欠損し基部は円味をもって突出する。29は先端部が鈍角となり基部は錐歯状に突出する。30は厚味のあるもので基部側には平坦な剥離面が残存している。31は側面及び基部が円味をもって膨らむものである。

5類：未完成的なもの（32～40）。

32は背面に自然面を残し裏面に素材面を大きく残す。33は背面に自然面が残置し片側縁及び基部に細部調整が見られる。34も両側縁及び基部に部分的な細部調整が認められる。35は薄手の素材の周辺部に細部加工がある。36は黒曜石製で基部及び片側縁に部分的な細部調整が見られる。37はいわゆる赤玉石と呼ばれる玉髓製のもので、38はホルンフェルス製のもので幅広平坦加工が認められる。39は背面に自然面を大きく残す素材の周縁に細部加工が連続している。40はチャート製の小柄円錐を素材とするもので、片側縁部の平坦調整が顕著である。

楔形石器 41～92は楔形石器である。楔形石器は概ね剥片或いは角礫状の素材から両極技法が行われるもの（41～59）と小柄円錐の素材から両極技法が行われるもの（60～92）とに分類することができる。

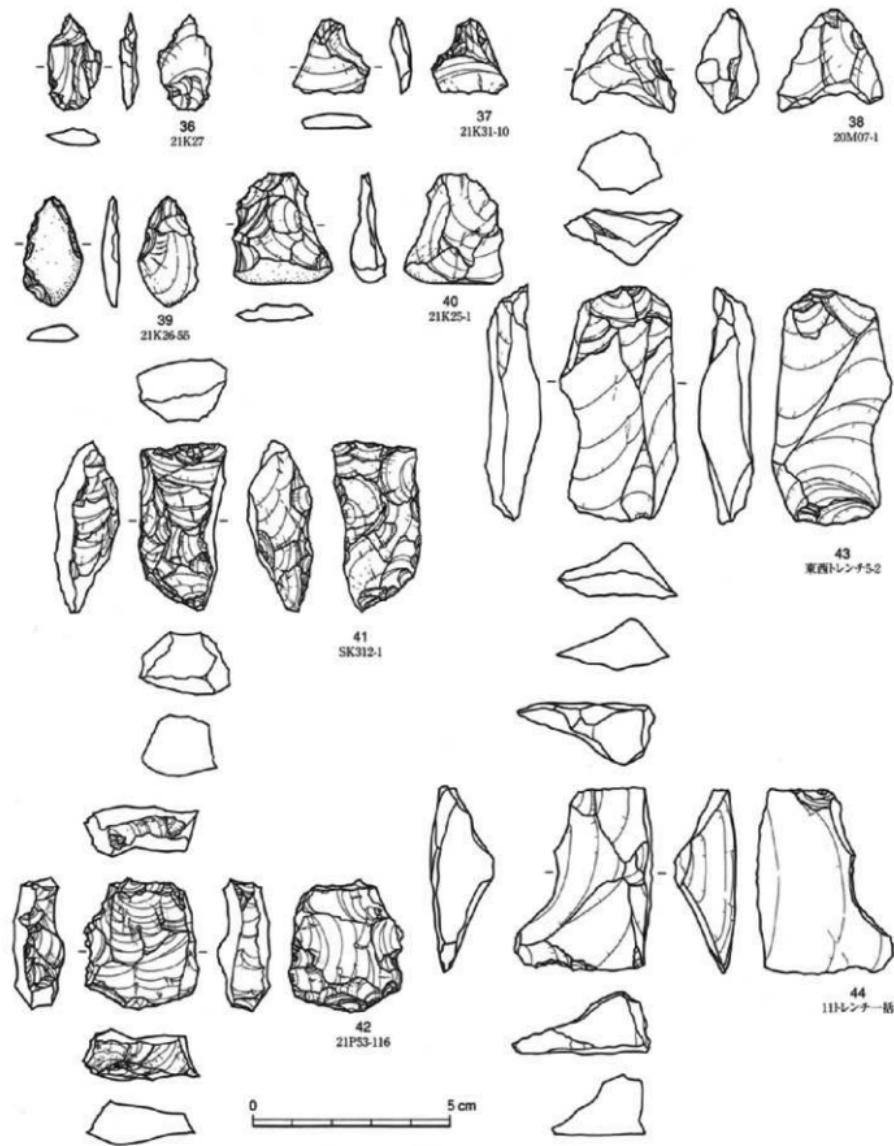
41は玉髓製で上下端部が線状となり裏面で左右方向からの両極技法が認められる。42は黒曜石製で上下



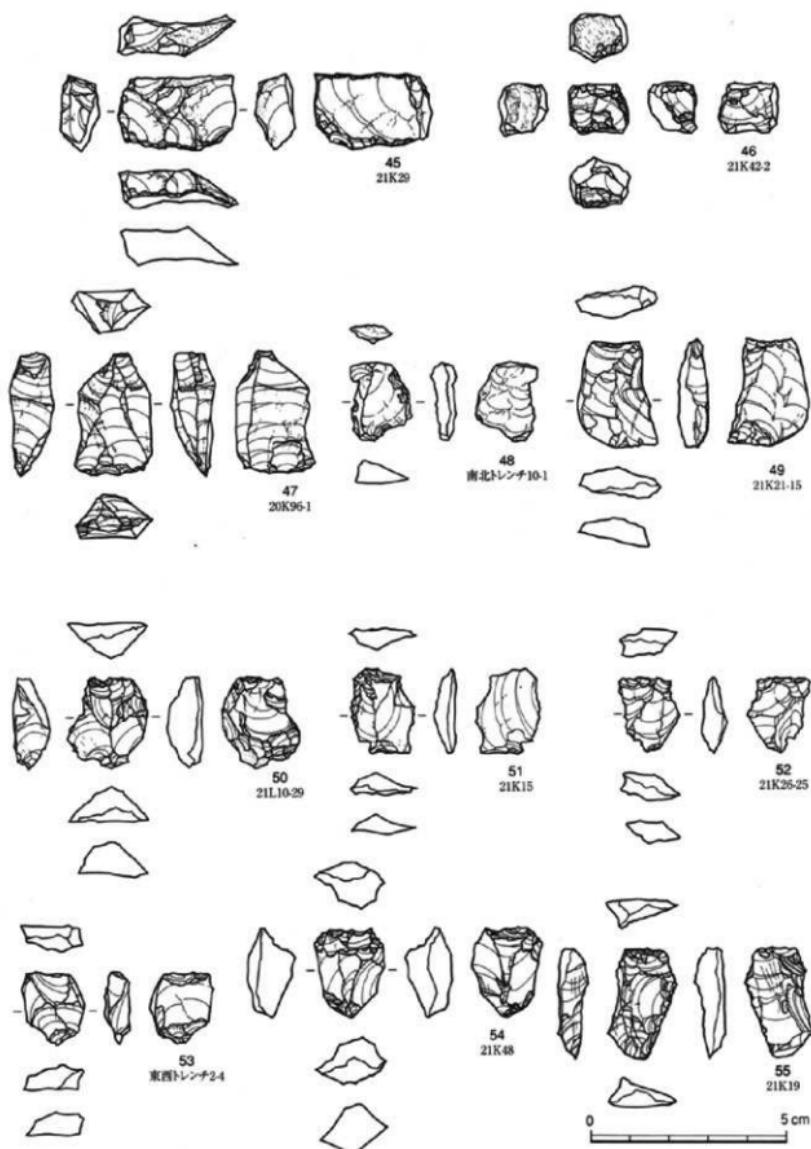
第91図 遺構外出土繩文石器（1）



第92図 造構外出土縄文石器（2）



第93図 遺構外出土縄文石器（3）



第94図 遺構外出土縄文石器（4）

の半円面からの両極剥離、裏面で左右から両極剥離が認められる。43はホルンフェルス製のもので上下端部の階段状剥離が見られる。44は黒色頁岩製で表面下端部に潰れが、裏面下端部に階段状剥離が看取される。45は上下端部の潰れが顕著である。46はいわゆる赤玉石製のもので上下端部の潰れが見られる。47は上下からの加熱により両側面に上下方向からの細長剥離が認められる。48は正巻製で上下端部及び側縁に潰れが見られる。49はチャート製で上下端部の潰れと階段状剥離が顕著である。50～52はいずれも剥片素材のもので上下端部の潰れと微細な階段状剥離が看取される。53は背面で上下方向からの剥離、裏面で上下端部の階段状剥離が認められる。54は珪質頁岩製のもので上端は階段状剥離、下端部は潰れが顕著である。55は黒曜石製のもので上下端部の階段状剥離が認められ、背面右側縁には細部加工が連続する。56は上下端部方向からと左右方向からの両極技法が認められる。57は黒曜石製で上下端部の潰れが顕著である。58は流紋岩製のもので、上下が線状となり階段状剥離と上下方向からの剥離が認められる。59は亜角螺旋状のもので上下端から加熱が認められる。

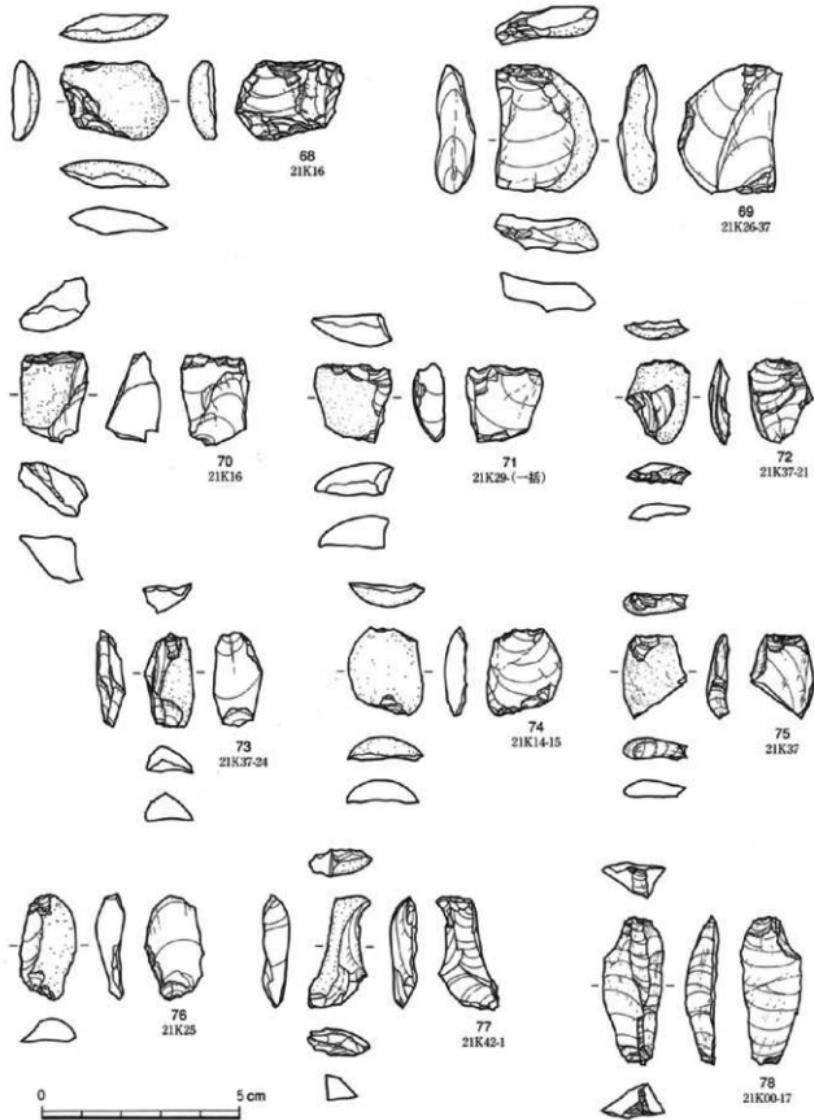
60～68はチャート製のものである。60は上トが線状となり側縁から上端に自然面を残す。61は上端が面、下端が線状となり下端部の階段状剥離が顕著である。62は表面に自然面を大きく残し上端部に潰れが認められる。63・64は共に上下が線状となり上下端部の潰れと階段状剥離が認められるものである。65は上端が面、下端が斜めに線状となっている。66は表裏に自然面が見られ扁平な小精円彫素材のものである。67は上端が点状、下端が線状となる。68は素材の短軸方向からの両極技法が認められ、上下端部の潰れが顕著である。69は緑色凝灰岩製のもので上下端部の潰れと階段状剥離が見られる。裏面左側縁にも潰れと階段状剥離が見られ左右方向からの両極技法も看取される。70～86はチャート製である。70・72は上端が線状となり潰れと階段状剥離がみられ、下端は点状に近くなる。71は上トが線状で潰れと階段状剥離が顕著である。73はやや細身のもので表面左側縁で下端からの細長剥離が見られる。74・75は表面が自然面で覆われ上下端部の潰れが認められるものである。76は上端が点状、下端が線状に近いものである。77は上トが線状となるもので、表面右側縁を縦方向に欠損する。78は長身のもので上下端部に潰れと階段状剥離が見られ、表面右側には上下方向からの脚の長い剥離が認められる。79～81も長身のもので、表面に自然面を残し、上下端部に潰れと表裏面或いは側面に細長い剥離が認められるものである。82は上端が点状となり下端部は線状となり、上端の潰れが顕著である。83・84は上トが点状となり上下端部に潰れが認められる。85は厚味のある精円彫を素材に両極技法が行われたもので、上端の潰れが認められる。86は下端を欠損するが、楔形石器から剥がされたものであろうか。87は砂岩製のもので上端は点状、下端は線状となりそれぞれ潰れが見られる。88はチャート製のもので、表裏に自然面を残し扁平精円彫素材として両極剥離が行われている。上下は線状となり潰れとやや脚の長い階段状の剥離が顕著である。89は石英斑岩せいである。やや丸味のある彫を素材として、上下方向及び左右方向から両極技法が行われている。90～92はチャート製であり、いずれも表裏面に自然面を残すものである。90は上端が線状となり、下端が点状となるもので上下端部の潰れと上端からの階段状剥離が認められる。91は上端が線状となり上端の潰れと階段状剥離が見られる。下端部は自然面状に打痕が認められる。92は上下端部が線状となり、端部が斜めに切断されたような階段状剥離が見られる。

削器 93・94は削器である。93は扁平彫を裁断した素材の下端部に抉入した急角度調整により刃部を作られている。94は縦長剥片を素材にして背面の右側縁に連続した細部加工により刃部を作出している。

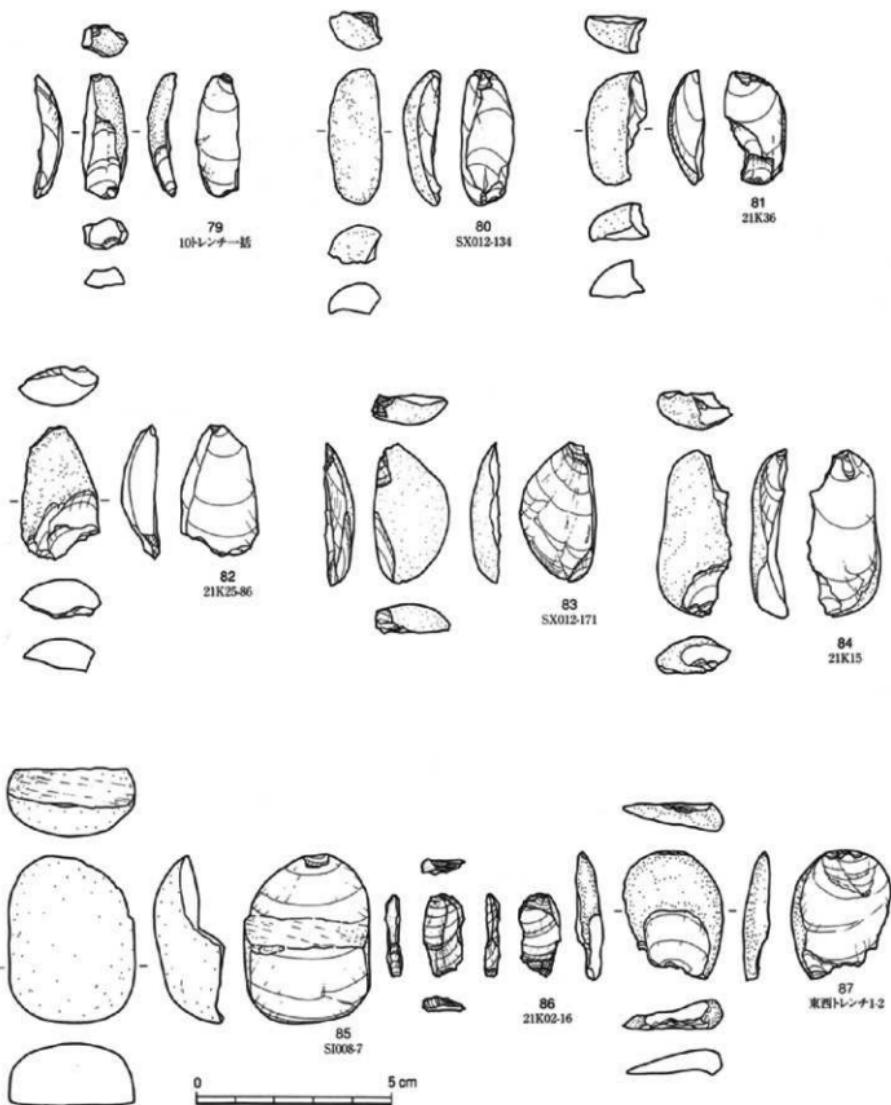
石核 95～99は石核である。95は上面の打面を廻るように打点が設定されて剥片剥離が進行している。



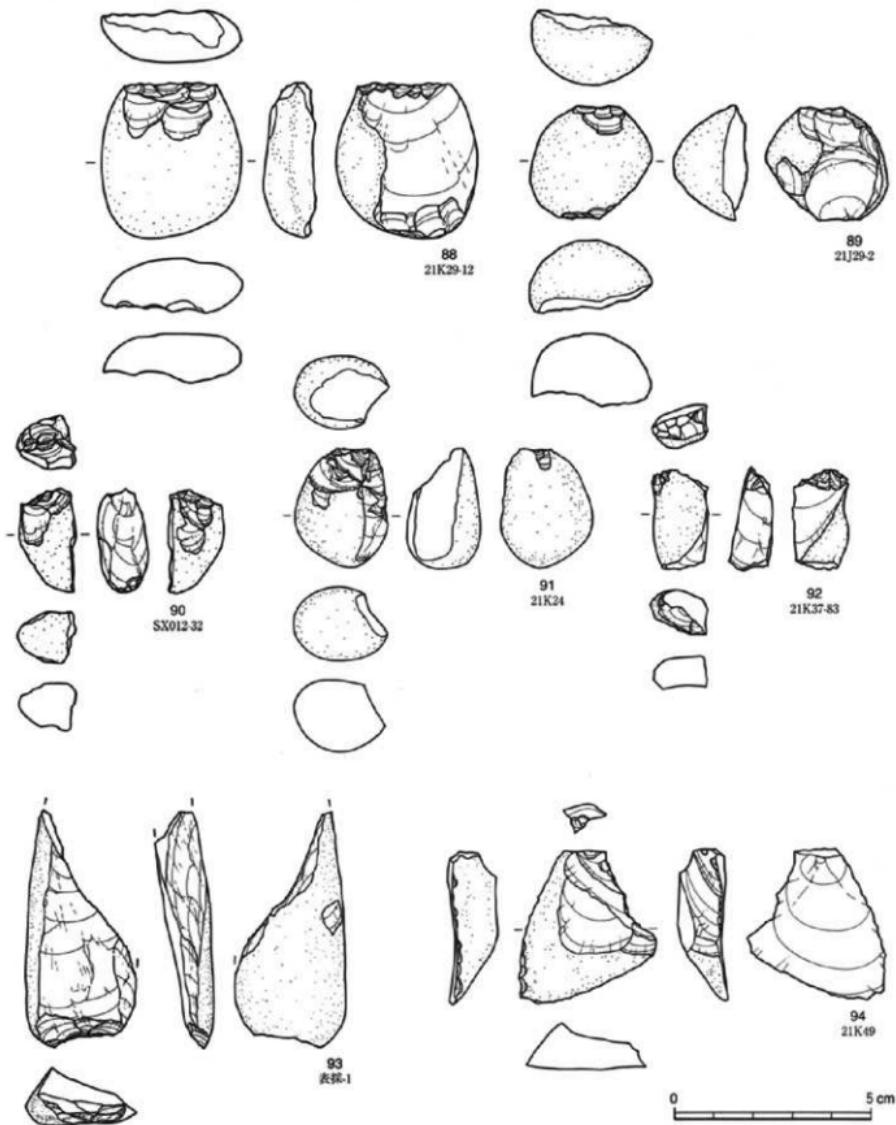
第95図 遺構外出土縄文石器（5）



第96図 遺構外出土網文石器（6）



第97図 遺構外出土縄文石器（7）



第98図 遺構出土縄文石器（8）



第99図 遺構外出土縄文石器（9）

96は梢円窓を分割して石核素材として、分割面からの剥片剥離を基調としながらも、90度の打面転移を繰り返して残核は賽子状となる。97は正面で上面を打面とした剥片剥離が、裏面で下方向からの剥片剥離が看取される。98は亜角窓の節理の平坦な面を作業面として上下からの剥片剥離作業が認められる。99は角窓を石核素材として、上面の窓面を打面からの剥片剥離が連続する。

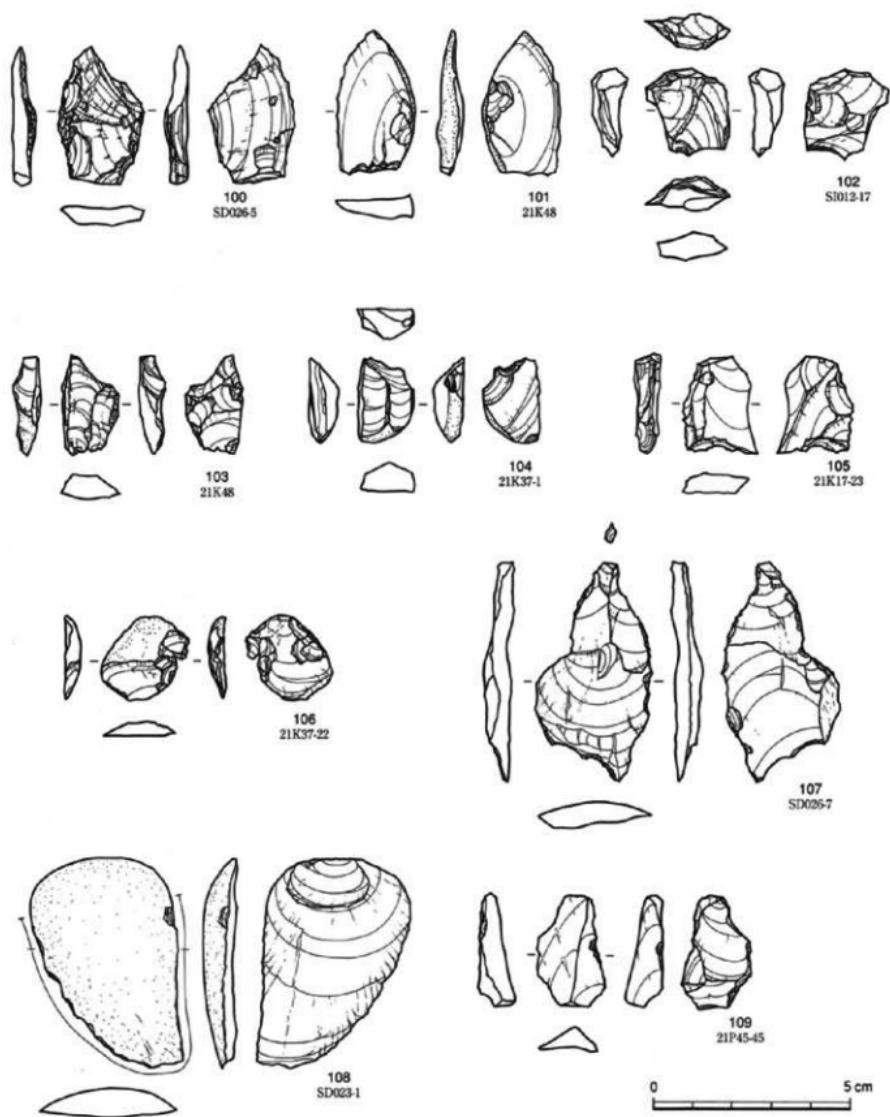
R剥片 100～107はR剥片である。1007は背面側縁に細部加工が認められる。101は下端部に細部加工が連続する。102は背面下端部や裏面右側に疎らな二次加工が見られる。103は裏面側縁からの平坦な加工が認められる。104は上端で器体を切断するような急角度の調整が背面から裏面方向に施されている。105は下端部に及び背面右側縁に調整か看取される。106は裏面側縁に平坦調整が見られる。107は器体の鋭い周縁に疎らに挿入した細部調整が認められる。

U剥片 108・109はU剥片である。108は器体周縁に微細剥離痕が連続する。109は背面右側縁に集中した微細剥離痕が見られる。

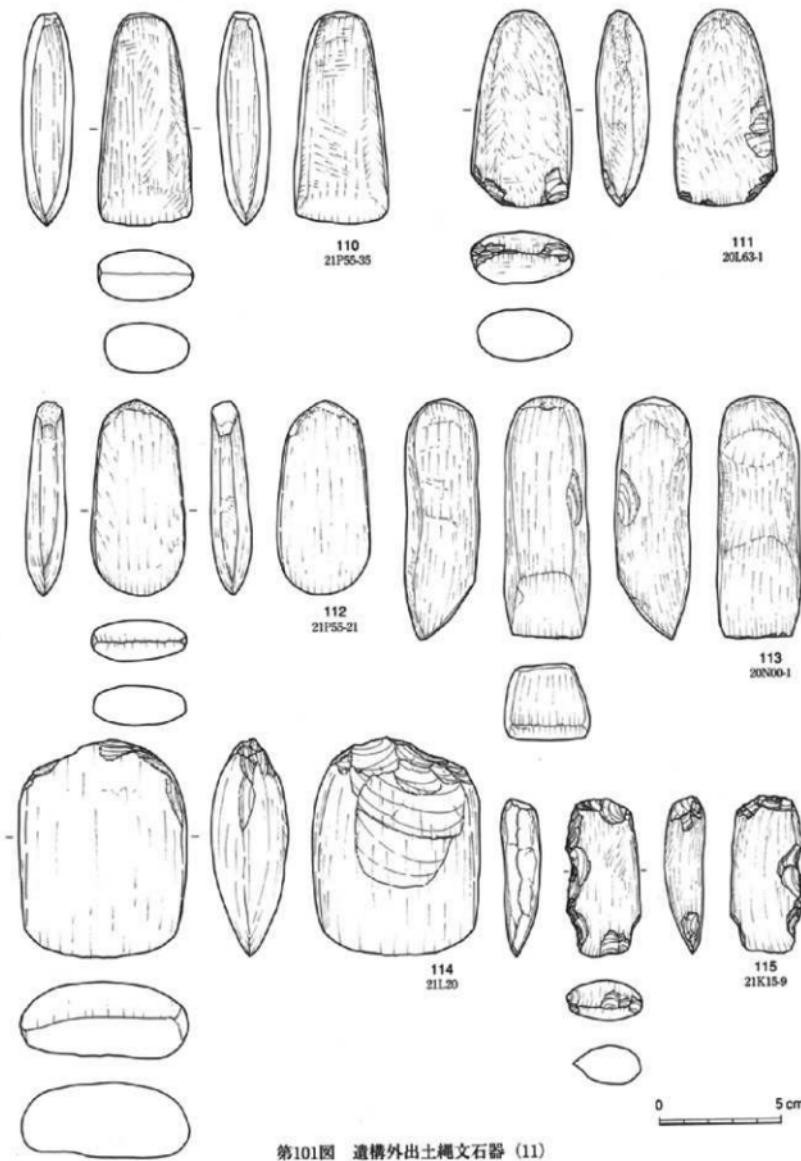
磨製石斧 110～118・124は磨製石斧である。110・111は緑色凝灰岩製のものある。110は全面が研磨され、刃部は直線的である。111は刃部が円味を持ち、端部は細かな剥離が認められる。112は安山岩製のもので、扁平して刃部は凹くなる。113は角柱状の器体で、器体中央が研磨されて挿入している。弥生時代の所産の挿入片刃石斧であると思われる。114は大型のもので、刃部の再加工が行われる器体が寸詰まりとなる。刃部は始刃状となり、弥生時代の始刃状石斧の可能性が高い。115は小型扁平鍬を素材に先端部を研磨により鋭くして刃部としている。116も小型鍬を素材にして、先端部を片刃状に研磨している。117は刃部の破片、118は基部の破片である。126は下端部を欠損するが磨製石斧の未成品であろうか。

打製石斧 119～123・125～130は打製石斧である。119～123は縛石斧の範疇に入るものである。119・120は砂岩製で幅広となる下端部に急角度の調整加工を施し刃部を作出している。121は扁平梢円窓の下端部に調整加工を連続させて円味のある刃部を作出している。122は特異な形状であるが、扁平窓素材の下半部を欠損したのち、欠損部からの平坦剥離が顕著である。未成品的なものと考えられる。123は刃部側のみの破片であるが、下端を幅広な剥離で鋭角にし、その向からの細部調整により直線的な刃部が作られている。125～130はいわゆる分銅型或いは内湾する胴部をもつ打製石斧である。125は砂岩製で刃部の摩耗が顕著であり胴部の挿入部も摩耗している。刃部は直線的である。126は器体がやや幅広で刃部を一部欠損するが刃部は円味をもつと思われる。127は大型のもので基部側を大きく欠損するが胴部の抉りが深く刃部は直線的である。128は基部のみの欠損品であるが、内湾する胴部を持ち撥型の打製石斧となるものであろうか。129・130は胴部下半部～刃部が残存している欠損品で、129は円味のある刃部、130は直線的な刃部となっている。

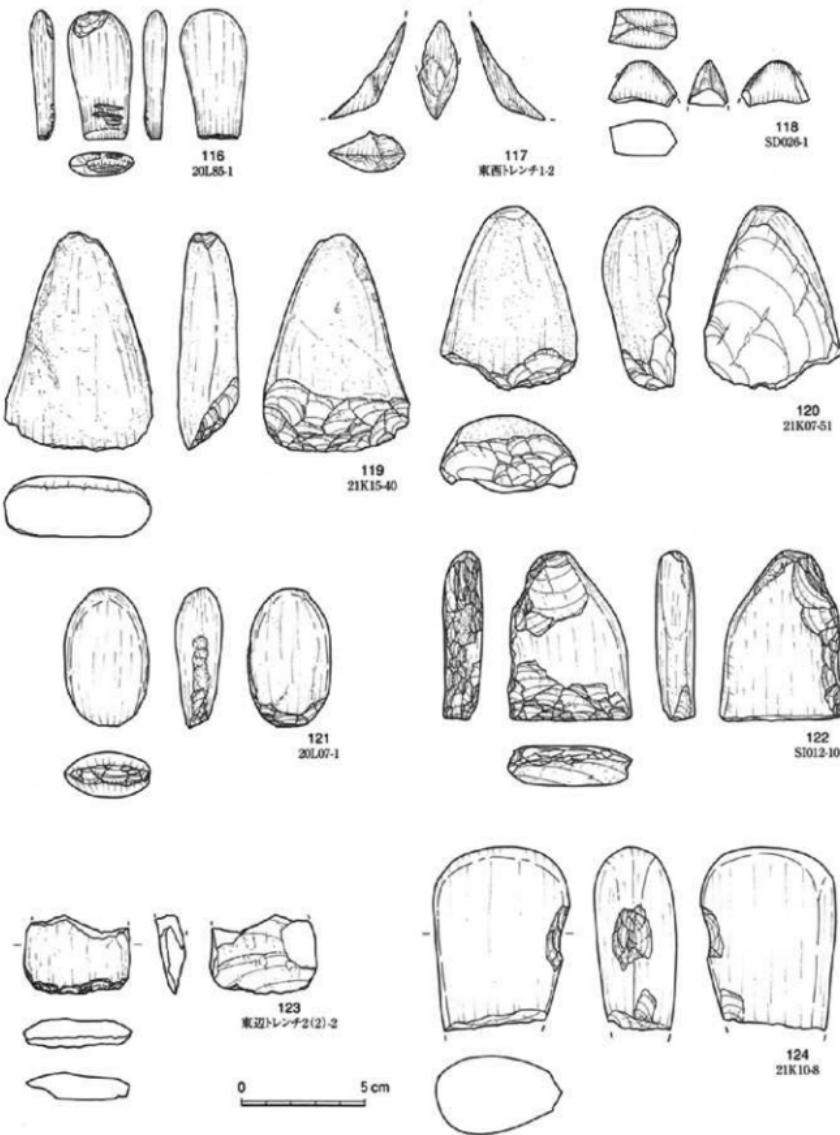
磨石 131～150は磨石である。磨石としたものは擦り面をもつ石器すべてを磨石として総称する。従って窓み部や敲打痕が擦り面をもつ石器に複合されるものも磨石に含めた。131～135は擦り面と窓み部があるもので、いわゆる凹石の機能が複合されているものである。131は表面・側面に1か所、裏面に1か所の窓み部があり、下端部には敲打痕が観察される。器体平面形は略三角形を呈する形態が特異なものである。132は表裏面に浅い1か所ずつの窓み部があり、表裏面の擦り面が顕著である。133は表面の平坦な面に窓み部が観察される。134は表面の棱上に細長い敲打痕が、裏面に細長い窓み部が観察される。135は表面・側面と裏面に窓み部がみられ器体中央部で欠損する。擦り面が顕著で擦り部は平坦となっている。136は大型の磨石で擦り面は全面に及ぶが表裏面の擦り面が顕著である。137は小型で扁平なものである。138は



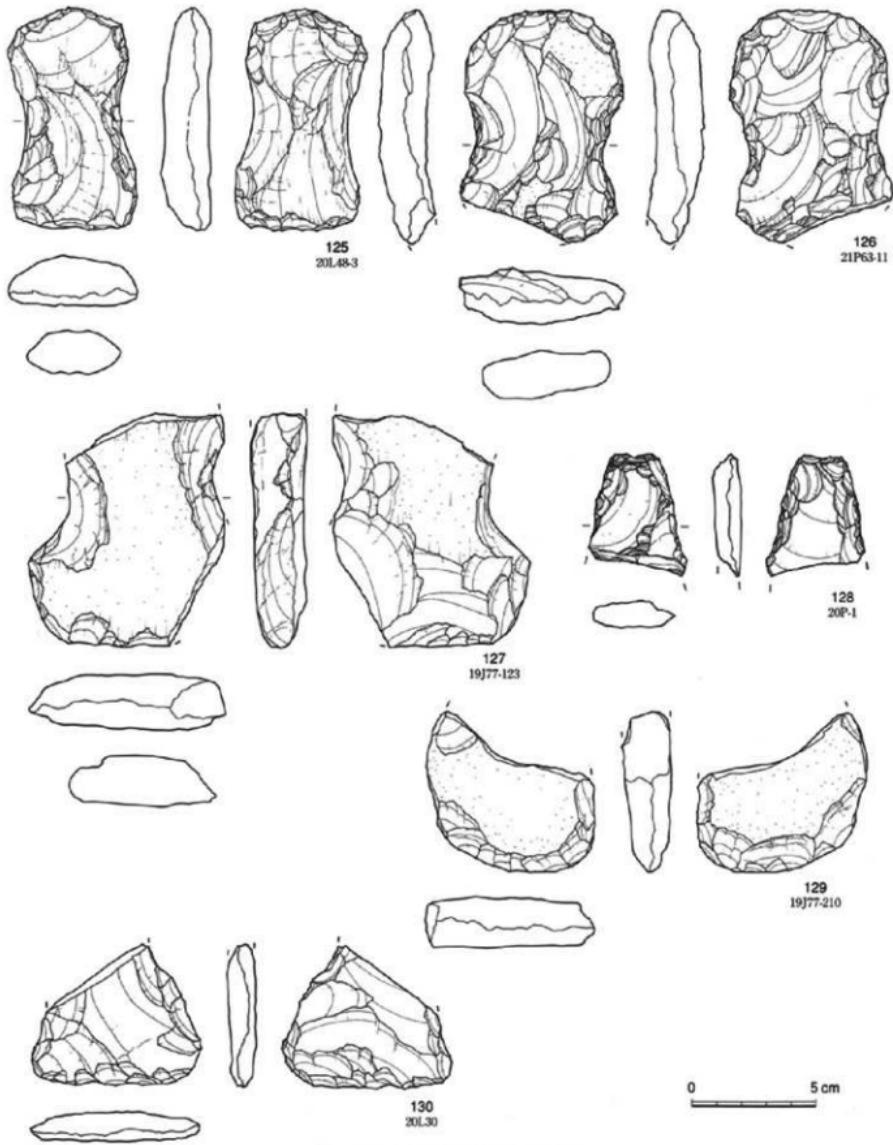
第100図 遺構外出土縄文石器 (10)



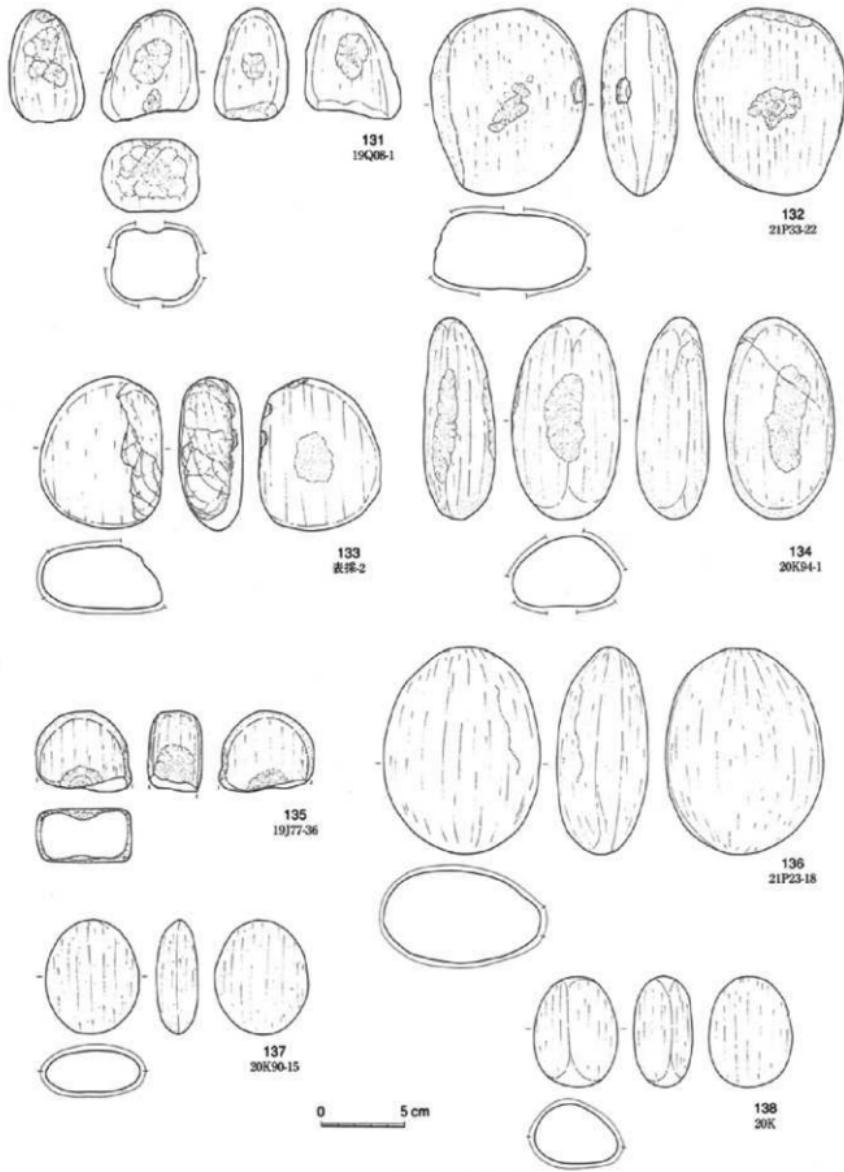
第101圖 遺構外出土繩文石器 (11)



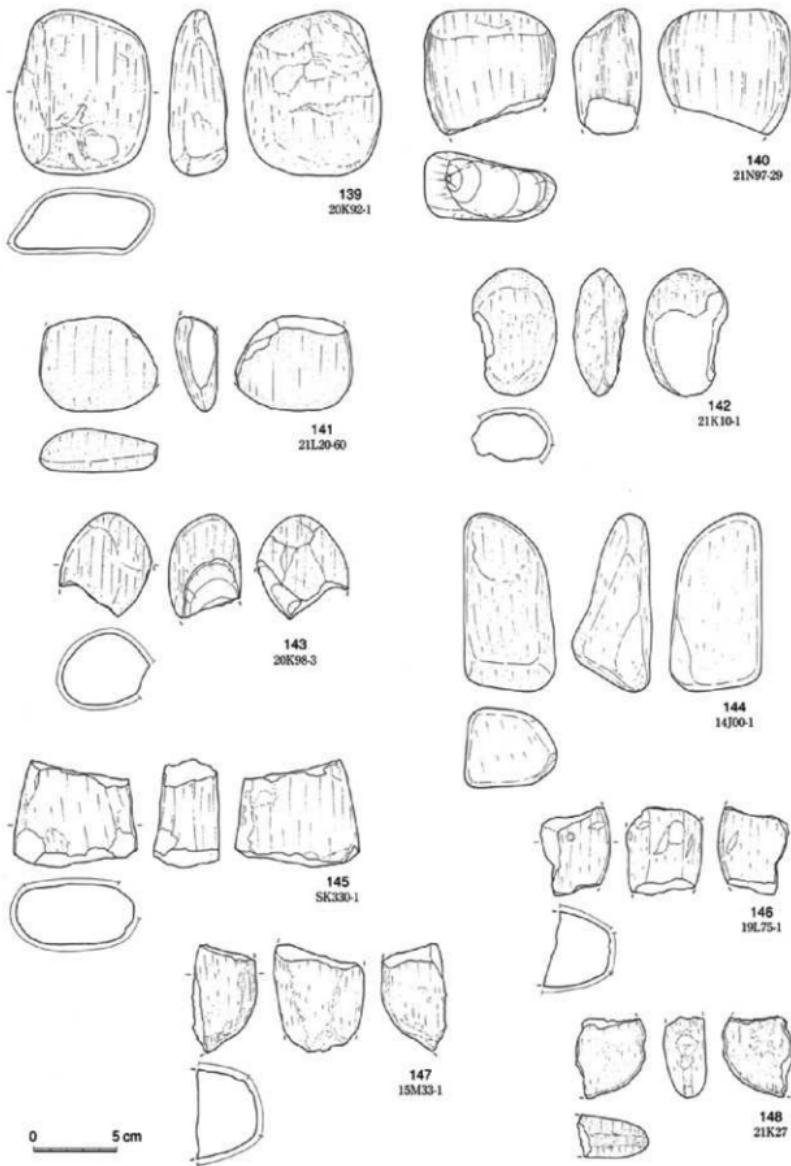
第102図 遺構外出土縄文石器 (12)



第103図 遺構外出土縄文石器 (13)



第104図 遺構外出土縄文石器 (14)



第105図 遺構外出土縄文石器 (15)

小型で横断面が略三角形を呈している。139は横断面が平行四辺形となり表裏面・側面に擦り面が見られ表裏面の擦りが顕著で、平面形は不整長方形になる。140も器体形状が不整長方形で、各面が擦り面となるが上端面にも擦りが及ぶ。141は表裏面の擦りが著しく端部が尖っている。142は安山岩製で表面から側面の擦りが顕著で平坦な面で構成される。143は器体を大きく欠損するが、擦り面が全面に及ぶものか。144は亞角様の素材の平坦な各面に疎らな擦りが認められる。145は上下端部を欠損し、表裏面のみが擦り面となっている。146~148は磨り石の部分的な欠損品で、それぞれ器体平面形は不整円形・梢円状になるものであろうか。146は擦り面が表裏面と側面に認められるもので、147・148は擦り面が表裏面に留まるものである。149は厚味のあるもので表裏面の擦りが顕著である。150は円形状の磨り石の破片であり、裏面の擦りが顕著である。

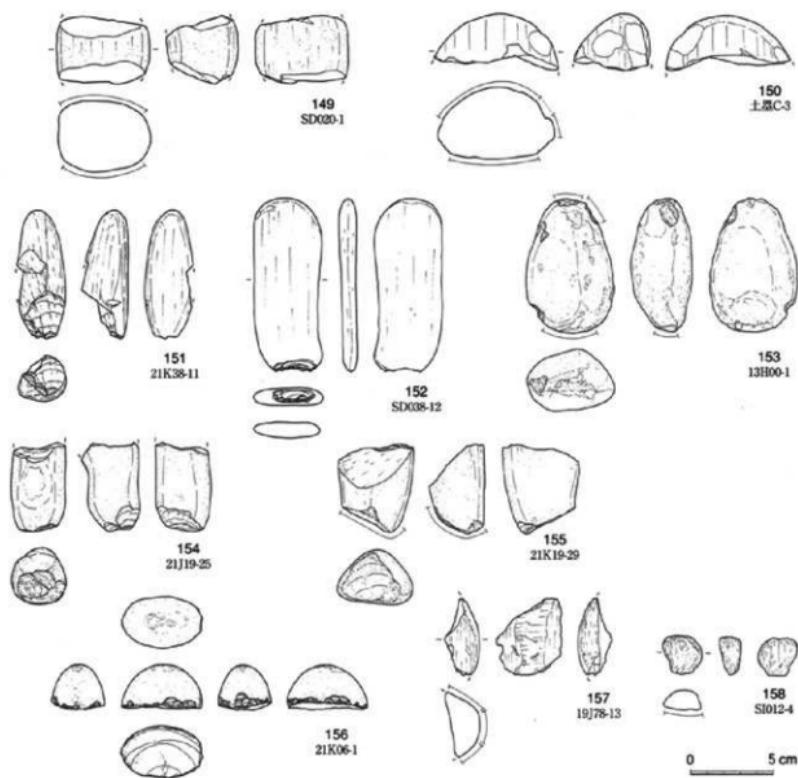
敲石 151~156は敲石である。151は棒状のもので下端部が縦に剥離され、その端部に敲打痕が確認される。152は扁平なもので下端部に抉入した急角度調整と細部加工が見られ、その端部に潰れが看取される。153は器体平面形が長梢円形状のもので上下端部に敲打痕状の潰れが顕著である。154は棒状の形状をして下端部に数回の剥離痕と僅かな潰れが認められる。155も下端部に広い急角度剥離が施され、その端部に潰れが連続する。156は截断された格円縫の分割面の端部に敲打による細部加工と潰れが看取される。

浮子 157・158は浮子である。2点とも軽石製であり、157は面取り状に擦り面が観察される。158は小型の不整円形状のものである。

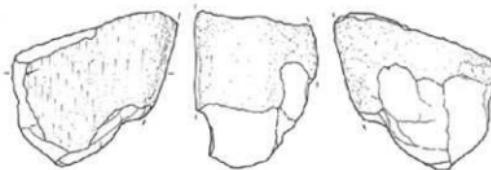
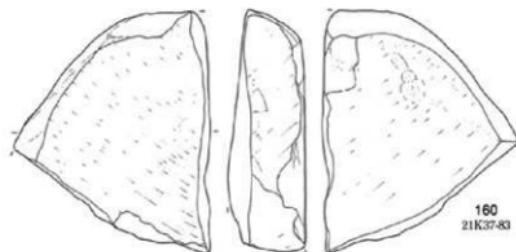
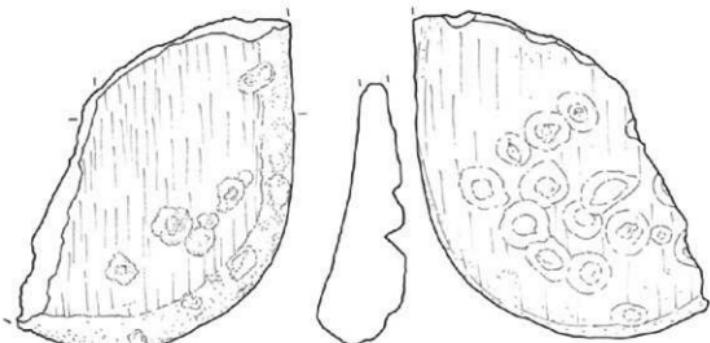
石皿 159~168は石皿である。159は安山岩製であり器体の約1/3程残存している。表面が縁辺から角度をもって窪んで研ぎ面となっている。裏面には凹部が多数観察される。160は砂岩製のもので、中央部に向かって浅く窪む平坦な研ぎ面をもつものである。161・162は縁辺部の破片で、急角度に抉入する研ぎ面が認められる。163は破片3点が接合したもので、表面は縁辺から浅く窪む研ぎ面となり、裏面には凹部が認められる。164も縁辺部のみの破片であるが、完形品はやや小型のものと想定される。165は砂岩製のもので抉入した研ぎ面が見られる。166は欠損品であるが、縁辺部と研ぎ面に直線的な後が認められるもので、平面形状も側縁から下端部にかけて稜をもっている。167は縁辺部のみの破片であるが、表裏面が研ぎが顕著で縁辺部は尖る。168はいわゆる雨垂れ石と呼ばれるもので、表裏面に深い凹部が観察される。

第14表 縄文時代石器組成表

	有吉大原部	石錐	楔形石器	削器	石核	R剥片	U剥片	磨製石斧	打製石斧	磨石	砾石	浮子	石皿	計
チャート	0	23	45	0	0	20.5	0	0	0	0	0	0	0	73
ホルンフェニックス	0	1054.06	320.13	0	0	37.18	0	0	0	0	0	0	0	1174
安山岩	1	7.27	29.24	0	27.73	0	37.18	0	0	0	0	0	0	27
凝灰岩	3.17	6.62	0	0	0	0	0	201.44	432.18	1399.2	0	0	3076.06	3596.62
玉髓	0	0	4.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.8
珪質頁岩	0	2.68	31.06	0	0	3.31	0	0	0	0	0	0	0	37.9
鈣石	0	0	3.0	0	20.40	2.4	0	0	0	0	0	0	0	2.4
黒色頁岩	0	0	29.2	0	43.6	1	0	0	0	0	0	0	0	53.8
黒曜石	0	13	4	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	21
砂岩	0	20.79	18.15	0	16.63	4.43	3.30	0	0	0	0	0	0	61.69
石英	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石英斑岩	0	1.02	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.02
粘板岩	0	0	18.62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18.62
頁岩	0	0	0	0	0	0	0	91.96	40.8	0	0.03	0	0	212.79
成枚岩	0	0	7.4	16.98	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24.38
綠色礫灰岩	0	0	8.57	0	0	0	0	244.38	0	0	0	0	0	252.95
計 点	3.12	1091.09	367.81	20.23	107.95	27.49	19.57	1223.46	1113.32	7093.13	564.85	10.33	5359.42	17349.67

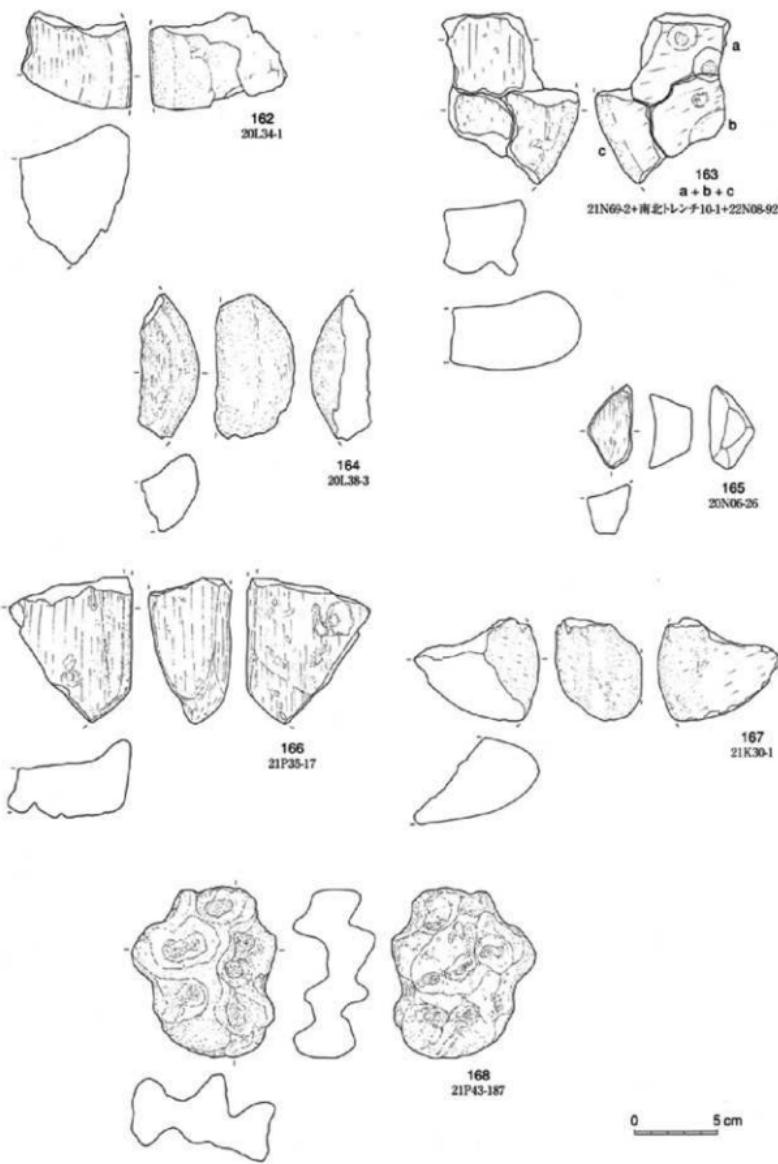


第106図 遺構外出土縄文石器 (16)



0 5 cm

第107図 遺構外出土繩文石器 (17)



第108図 遺構外出土縄文石器 (18)

第15表 繩文時代石器属性表(1)

No	捕獲番号	遺物番号	器種	石材	最大長		最大幅		最大厚		重量	旧遺傳番号	新遺傳番号	備考
					cm	cm	cm	cm	cm	cm				
1	1	S2002-0007	磨石	石多面磨	760	580	285	140	2.0	1.70	540.80	S2007	繩文中期住用磨	
2	1	S2003-0002	磨石	石手磨	242	171	98.3	4.3	1.1	1.11	4.31	S2003	繩文中期住用磨	
3	1	S2004-0012	磨石	石手磨	264	140	95.6	4.0	1.0	2.07	52.04	S2004	繩文中期住用磨	
4	2	S2004-0011	磨石	石手磨	311	162	99.1	6.21	2.1	2.21	52.04	S2004	繩文中期住用磨	
5	1	S2004-0010	石研磨	石手磨	285	153	120	1.9	1.0	1.40	4.87	S2004	繩文中期住用磨	
6	1	S2004-0009	石研磨	石手磨	275	143	119	1.9	1.0	1.39	4.87	S2004	繩文中期住用磨	
7	1	S2004-0006	石研磨	石手磨	230	132	94.3	6.56	2.0	6.56	52.04	繩文中期住用磨		
8	2	S2004-0014	石研磨	石手磨	302	218	95.7	3.02	1.0	3.02	52.04	繩文中期住用磨		
9	3	S2004-0017	石研磨	石手磨	193	144	93.9	2.30	1.0	2.30	52.04	繩文中期住用磨		
10	4	S2004-0008	石研磨	石手磨	725	4.0	205	91.96	2.0	2.0	52.04	繩文中期住用磨		
11	1	S2004-0005	石研磨	石手磨	270	140	98.0	6.00	2.0	6.00	52.04	繩文中期住用磨		
12	1	S2007-0029	石研磨	石手磨	179	8.5	95.2	2.0	1.0	2.0	52.04	繩文中期住用磨		
13	2	S2007-0030	石研磨	石手磨	85	53	21.3	112.00	2.0	2.0	52.04	繩文中期住用磨		
14	1	S2007-0005	石研磨	石手磨	37	19.1	1.96	9.55	2.0	2.0	52.04	繩文中期住用磨		
15	2	S2170-0002	磨石	石研磨	257	304	97.7	4.80	2.0	4.80	S2170	繩文中期住用磨		
16	3	S2170-0001	磨石	石研磨	8.8	5.3	3.6	27.97	2.0	2.0	S2170	繩文中期住用磨		
17	4	S2170-0002	磨石	石研磨	206	140	97.9	2.0	2.0	2.0	S2170	繩文中期住用磨		
18	5	S2195-0007	磨石	石研磨	155	140	95.0	1.50	1.0	1.50	S2195	繩文中期住用磨		
19	6	S201-0020	磨石	石研磨	25	1.8	9.80	2.80	2.0	2.80	S201	繩文中期住用磨		
20	7	S2195-0001	石研磨	石手磨	192	14	95.4	105.00	2.0	2.0	S2195	繩文中期住用磨		
21	8	S2180-0001	石研磨	石手磨	131	8.0	9.30	0.38	2.0	0.38	S2180	繩文中期住用磨		
22	9	S2002-0003	石研磨	石手磨	290	94.0	9.20	268.00	2.0	2.0	S202	繩文中期住用磨		
23	10	S2002-0004	石研磨	石手磨	250	11.0	9.20	250.00	2.0	2.0	S202	繩文中期住用磨		
24	11	S2002-0005	石研磨	石手磨	250	11.0	9.20	250.00	2.0	2.0	S202	繩文中期住用磨		
25	12	S2002-0006	石研磨	石手磨	270	20.0	9.45	1.14	2.0	1.14	S202	繩文中期住用磨		
26	13	S2002-0001	石研磨	石手磨	163	20.3	9.56	1.72	2.0	1.72	S202	繩文中期住用磨		
27	14	S2002-0002	石研磨	石手磨	198	12.8	9.53	0.92	2.0	0.92	S202	繩文中期住用磨		
28	15	S2002-0003	石研磨	石手磨	241	18.0	9.48	1.01	2.0	1.01	S202	繩文中期住用磨		
29	16	S2002-0004	石研磨	石手磨	259	12.0	9.45	0.62	2.0	0.62	S202	繩文中期住用磨		
30	17	S2002-0005	石研磨	石手磨	259	20.1	9.45	1.41	2.0	1.41	S202	繩文中期住用磨		
31	18	S2002-0006	石研磨	石手磨	132	3.2	9.48	0.57	2.0	0.57	S202	繩文中期住用磨		
32	19	S2002-0007	石研磨	石手磨	136	3.2	9.37	0.51	2.0	0.51	S202	繩文中期住用磨		
33	20	S2002-0008	石研磨	石手磨	120	3.0	9.23	0.36	2.0	0.36	S202	繩文中期住用磨		
34	21	S2002-0009	石研磨	石手磨	245	12.0	9.40	0.68	2.0	0.68	S202	繩文中期住用磨		
35	22	S2002-0010	石研磨	石手磨	257	11.0	9.45	0.62	2.0	0.62	S202	繩文中期住用磨		
36	23	S2002-0011	石研磨	石手磨	165	16.0	9.30	0.67	2.0	0.67	S202	繩文中期住用磨		
37	24	S2126-0001	石研磨	石手磨	322	12.1	9.40	1.52	2.0	1.52	S2126	繩文中期住用磨		
38	25	S1987-0050	石研磨	石手磨	317	18.0	9.63	0.40	2.0	0.40	S1987	繩文中期住用磨		
39	26	S2127-0016	石研磨	石手磨	292	18.0	9.40	2.17	2.0	2.17	S2127	繩文中期住用磨		
40	27	S2127-0015	石研磨	石手磨	282	16.0	9.48	1.50	2.0	1.50	S2127	繩文中期住用磨		
41	28	S2127-0014	石研磨	石手磨	270	15.0	9.48	1.77	2.0	1.77	S2127	繩文中期住用磨		
42	29	S2127-0013	石研磨	石手磨	177	1.45	9.40	0.83	2.0	0.83	S2127	繩文中期住用磨		
43	30	S2127-0012	石研磨	石手磨	255	1.62	9.39	0.97	2.0	0.97	S2127	繩文中期住用磨		
44	31	S2127-0011	石研磨	石手磨	201	1.40	9.36	0.90	2.0	0.90	S2127	繩文中期住用磨		
45	32	S2127-0010	石研磨	石手磨	170	1.35	9.35	0.58	2.0	0.58	S2127	繩文中期住用磨		
46	33	S2127-0009	石研磨	石手磨	170	1.35	9.35	0.58	2.0	0.58	S2127	繩文中期住用磨		
47	34	S2127-0008	石研磨	石手磨	347	1.55	9.50	1.70	2.0	1.70	S2127	繩文中期住用磨		
48	35	S2127-0007	石研磨	石手磨	149	0.90	9.39	0.72	2.0	0.72	S2127	繩文中期住用磨		
49	36	S2127-0006	石研磨	石手磨	174	1.00	9.33	0.52	2.0	0.52	S2127	繩文中期住用磨		
50	37	S2127-0005	石研磨	石手磨	199	1.20	9.40	1.07	2.0	1.07	S2127	繩文中期住用磨		
51	38	S2087-0001	石研磨	石手磨	159	1.21	9.45	0.97	2.0	0.97	S2087	繩文中期住用磨		
52	39	S2126-0005	石研磨	石手磨	250	1.60	9.45	0.81	2.0	0.81	S2126	繩文中期住用磨		
53	40	S2126-0015	石研磨	石手磨	240	1.60	9.45	0.81	2.0	0.81	S2126	繩文中期住用磨		
54	41	S2126-0003	石研磨	石手磨	166	1.72	9.80	1.94	2.0	1.94	S2126	繩文中期住用磨		
55	42	S2126-0019	石研磨	石手磨	220	1.70	9.70	1.87	2.0	1.87	S2126	繩文中期住用磨		
56	43	S2126-0012	石研磨	石手磨	221	1.32	9.52	1.45	2.0	1.45	S2126	繩文中期住用磨		
57	44	S2126-0001	石研磨	石手磨	232	1.31	9.56	1.45	2.0	1.45	S2126	繩文中期住用磨		
58	45	S2126-0002	石研磨	石手磨	237	1.31	9.53	1.44	2.0	1.44	S2126	繩文中期住用磨		
59	46	S2126-0003	石研磨	石手磨	246	1.36	9.43	1.00	2.0	1.00	S2126	繩文中期住用磨		
60	47	S2086-0001	石研磨	石手磨	199	1.96	9.52	1.30	2.0	1.30	S2086	繩文中期住用磨		
61	48	S2087-0001	石研磨	石手磨	264	2.68	9.46	7.22	2.0	7.22	S2087	繩文中期住用磨		
62	49	S2126-0005	石研磨	石手磨	260	1.40	9.40	1.68	2.0	1.68	S2126	繩文中期住用磨		
63	50	S2126-0006	石研磨	石手磨	250	1.40	9.40	1.68	2.0	1.68	S2126	繩文中期住用磨		
64	51	S2126-0001	石研磨	石手磨	429	9.95	1.65	16.51	2.0	16.51	S2126	繩文中期住用磨		
65	52	S2125-0116	石研磨	石手磨	340	9.95	1.30	12.54	2.0	12.54	S2125	繩文中期住用磨		
66	53	S2125-0112	石研磨	石手磨	221	1.32	9.52	1.45	2.0	1.45	S2125	繩文中期住用磨		
67	54	S2125-0100	石研磨	石手磨	232	1.31	9.56	1.45	2.0	1.45	S2125	繩文中期住用磨		
68	55	S2125-0101	石研磨	石手磨	237	1.31	9.53	1.44	2.0	1.44	S2125	繩文中期住用磨		
69	56	S2125-0102	石研磨	石手磨	246	1.36	9.43	1.01	2.0	1.01	S2125	繩文中期住用磨		
70	57	S2125-0103	石研磨	石手磨	239	1.31	9.53	1.44	2.0	1.44	S2125	繩文中期住用磨		
71	58	S2125-0104	石研磨	石手磨	232	1.31	9.56	1.45	2.0	1.45	S2125	繩文中期住用磨		
72	59	S2125-0105	石研磨	石手磨	228	1.36	9.51	0.91	2.0	0.91	S2125	繩文中期住用磨		
73	60	S2125-0106	石研磨	石手磨	235	1.31	9.55	1.30	2.0	1.30	S2125	繩文中期住用磨		
74	61	S2125-0107	石研磨	石手磨	230	1.31	9.56	1.45	2.0	1.45	S2125	繩文中期住用磨		
75	62	S2125-0108	石研磨	石手磨	235	1.31	9.56	1.45	2.0	1.45	S2125	繩文中期住用磨		
76	63	S2125-0109	石研磨	石手磨	187	1.62	9.67	1.97	2.0	1.97	S2125	繩文中期住用磨		
77	64	S2125-0110	石研磨	石手磨	239	1.30	9.59	1.30	2.0	1.30	S2125	繩文中期住用磨		
78	65	S2125-0111	石研磨	石手磨	240	1.35	9.75	1.75	2.0	1.75	S2125	繩文中期住用磨		
79	66	S2125-0112	石研磨	石手磨	232	1.30	9.56	1.30	2.0	1.30	S2125	繩文中期住用磨		
80	67	S2125-0113	石研磨	石手磨	235	1.30	9.56	1.30	2.0	1.30	S2125	繩文中期住用磨		
81	68	S2125-0114	石研磨	石手磨	232	1.30	9.56	1.30	2.0	1.30	S2125	繩文中期住用磨		
82	69	S2125-0115	石研磨	石手磨	194	3.86	0.65	2.00	2.0	2.00	S2125	繩文中期住用磨		
83	70	S2125-0116	石研磨	石手磨	130	1.14	0.41	0.62	2.0	0.62	S2125	繩文中期住用磨		
84	71	S2125-0117	石研磨	石手磨	240	2.20	0.50	1.07	2.0	1.07	S2125	繩文中期住用磨		
85	72	S2125-0118	石研磨	石手磨	130	0.85	0.50	0.51	2.0	0.51	S2125	繩文中期住用磨		
86	73	S2125-0119	石研磨	石手磨	239	1.86	0.60	0.60	2.0	0.60	S2125	繩文中期住用磨		
87	74	S2125-0120	石研磨	石手磨	235	1.75	0.60	0.62	2.0	0.62	S2125	繩文中期住用磨		
88	75	S2125-0121	石研磨	石手磨	231	2.61	0.60	0.68	2.0	0.68	S2125	繩文中期住用磨		
89	76	S2125-0122	石研磨	石手磨	230	1.90	0.60	0.57	2.0	0.57	S2125	繩文中期住用磨		
90	77	S2125-0123	石研磨	石手磨	230	2.17	0.60	0.71	2.0	0.71	S2125	繩文中期住用磨		
91	78	S2125-0124	石研磨	石手磨	235	2.07	0.60	0.67	2.0	0.67	S2125	繩文中期住用磨		
92	79	S2125-0125	石研磨	石手磨	235	1.75	0.60	0.61	2.0	0.61	S2125	繩文中期住用磨		
93	80	S2125-0126	石研磨	石手磨	231	1.96	0.62	0.57	2.0	0.57	S2125	繩文中期住用磨		
94	81	S2125-0127	石研磨	石手磨	231	1.61	0.50	0.63	2.0	0.63	S2125	繩文中期住用磨		
95	82	S2125-0128	石研磨	石手磨	232	1.80	0.60	0.67	2.0	0.67	S2125	繩文中期住用磨		
96	83	S2125-0129	石研磨	石手磨	232	1.80	0.60	0.67	2.0	0.67	S2125	繩文中期住用磨		

第15表 繩文時代石器属性表(2)

No.	辨別番号	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	旧遺構番号	新遺構番号	備考
									CIB	CBB	
78	79	ZIB25-19-P	橢形石器	ナホト	7.00	1.00	0.70	2.62			
99	77	ZIB42-0001	橢形石器	ナホト	2.80	1.00	0.68	2.06			
100	78	ZIB03-0017	橢形石器	ナホト	1.76	1.00	0.60	1.94			
101	79	ZIB3-2-7	橢形石器	ナホト	3.26	1.12	0.75	2.23			
102	80	SND2-0134	橢形石器	ナホト	3.47	1.42	0.60	4.65		SND012	
103	81	ZIB3-2-8	橢形石器	ナホト	2.92	1.00	0.67	1.87			
104	82	ZIB75-0096	橢形石器	ナホト	3.67	1.00	0.69	3.21			
105	83	SND2-0177	橢形石器	ナホト	3.38	1.07	0.79	5.80		SND012	
106	84	ZIB154-CIP	橢形石器	ナホト	4.27	1.00	0.67	6.84			
107	85	SND8-0005	橢形石器	ナホト	3.30	1.00	0.75	2.79			
108	86	ZIB154-0008	橢形石器	ナホト	2.88	1.00	0.68	2.00			
109	87	ZIB154-2-12	橢形石器	ナホト	3.50	1.04	0.73	4.13			
110	88	ZIB29-0012	橢形石器	ナホト	3.82	1.56	1.00	26.14			
111	89	ZIB29-0002	橢形石器	石英岩	2.91	3.10	1.00	16.92			
112	90	SND2-0002	橢形石器	ナホト	1.62	1.00	1.00	5.82		SND012	
113	91	ZIB34-0010	橢形石器	ナホト	3.65	2.30	1.05	15.00			
114	92	ZIB34-0013	橢形石器	ナホト	3.25	2.14	1.00	11.81			
115	93	新石器	橢形石器	成岩石	5.98	1.84	1.00	15.96			
116	94	ZIB45-19-P	橢形石器	貝丘	3.91	3.48	1.28	13.25			
117	95	ZIB44-0163	石椎	黒曜石	1.99	1.24	2.31	8.96			
118	96	ZIB55-0008	石椎	カルシフィルス	2.80	3.15	3.00	27.21			
119	97	ZIB36-5-7	石椎	黒曜石	1.65	1.22	2.13	7.67			
120	98	ZIB36-5-8	石椎	成岩石	1.79	1.50	2.11	10.45			
121	99	ZIB17-0015	石椎	貝丘	2.66	2.45	2.20	20.46			
122	100	SND8-0006	石椎	黒曜石	1.54	2.21	0.65	4.43		SND006	
123	101	ZIB48-A/P	石椎	貝丘	3.62	1.83	0.69	5.43			
124	102	SND8-0007	石椎	成岩石	2.22	2.11	0.60	3.33		SND007	
125	103	ZIB48-2-9	石椎	ナホト	2.35	1.89	0.65	4.29			
126	104	ZIB37-0000	石椎	貝丘	2.15	1.45	0.65	3.49			
127	105	ZIB37-0022	石椎	ナホト	1.50	1.81	0.67	3.43			
128	106	ZIB37-0022	石椎	ナホト	1.13	1.21	0.65	1.81			
129	107	SND8-0007	石椎	ナホト	1.60	1.98	0.61	2.97		SND007	
130	108	SND8-0008	石椎	ナホト	1.30	1.50	0.60	2.17		SND008	
131	109	ZIB45-0005	打削石器	ナホト	2.50	1.20	0.67	1.59			
132	110	ZIB29-0005	打削石器	成岩石	4.79	1.00	2.10	124.18			
133	111	ZIB43-0003	打削石器	結晶巖灰岩	8.09	1.20	2.21	102.29			
134	112	ZIB45-0003	打削石器	成岩石	8.02	1.81	1.72	95.92			
135	113	ZIB50-0003	打削石器	砂岩	10.02	3.58	5.19	233.91			
136	114	ZIB45-0004	打削石器	砂岩	8.51	1.00	3.15	20.29			
137	115	ZIB45-0009	打削石器	砂岩	5.23	1.66	1.00	20.78			
138	116	ZIB38-0003	打削石器	砂岩	5.23	1.66	1.00	20.78			
139	117	東西洋レシニア系	打削石器	砂岩	1.98	3.07	1.65	4.61			
140	118	ZIB36-0008	打削石器	成岩石	1.89	1.78	1.68	9.77		SND008	
141	119	ZIB15-0010	打削石器	砂岩	8.82	1.30	2.02	166.06			
142	120	ZIB37-0051	打削石器	砂岩	8.50	1.00	3.15	102.39			
143	121	ZIB37-0051	打削石器	砂岩	5.63	3.42	1.82	50.09			
144	122	SND12-0010	打削石器	安山岩	6.90	5.00	1.00	42.75		1-2-12 鹿之山	
145	123	東西洋レシニア系	打削石器	砂岩	3.20	3.34	1.20	17.18			
146	124	ZIB36-0008	打削石器	砂岩	7.45	1.50	3.05	206.61			
147	125	ZIB48-0003	打削石器	砂岩	9.94	2.24	2.15	127.47			
148	126	ZIB37-0051	打削石器	砂岩	9.92	2.75	2.75	117.73			
149	127	ZIB27-0123	打削石器	砂岩	9.47	8.61	2.06	200.80			
150	128	ZIB-0009	打削石器	砂岩	4.98	4.64	1.22	25.76			
151	129	ZIB27-0210	打削石器	安山岩	6.32	6.95	2.12	16.94			
152	130	ZIB30-0171	打削石器	砂岩	5.81	6.90	1.26	48.69			
153	131	ZIB37-0051	打削石器	砂岩	6.75	6.98	4.93	275.1			
154	132	ZIB37-0052	打削石器	砂岩	11.80	3.30	4.84	166.99			
155	133	ZIB44-0002	磨石	砂岩	9.26	7.42	3.65	205.50			
156	134	ZIB36-0004	磨石	石英岩	12.20	6.60	4.43	204.36			
157	135	ZIB17-0036	磨石	安山岩	4.91	5.82	3.32	125.25			
158	136	ZIB25-0016	磨石	砂岩	22.85	9.60	5.60	1000.00			
159	137	ZIB37-0051	磨石	砂岩	17.80	9.60	5.60	1000.00			
160	138	ZIB-0009	磨石	砂岩	6.79	5.00	2.60	179.02			
161	139	ZIB36-0001	磨石	砂岩	10.07	8.42	3.65	248.49			
162	140	ZIB37-0052	磨石	砂岩	7.07	6.04	4.25	386.03			
163	141	ZIB37-0056	磨石	砂岩	5.80	7.15	2.63	152.41			
164	142	ZIB37-0057	磨石	砂岩	7.75	7.15	2.64	163.10			
165	143	ZIB37-0059	磨石	砂岩	6.48	6.53	4.47	166.59			
166	144	ZIB36-0003	磨石	砂岩	10.70	5.60	4.90	276.38			
167	145	SND30-0001	磨石	砂岩	6.35	7.50	4.00	271.93		SND30	
168	146	19-75-0001	磨石	安山岩	3.80	4.25	4.60	132.99			
169	147	ZIB36-0001	磨石	安山岩	6.56	4.00	4.56	144.28			
170	148	ZIB37-0057	磨石	砂岩	6.77	4.00	2.63	179.02			
171	149	SND2-0001	磨石	砂岩	4.19	6.65	4.65	147.51		SND001	
172	150	19-76-0003	磨石	安山岩	3.85	7.55	4.60	61.09			
173	151	ZIB38-0003	磨石	砂岩	9.98	8.06	4.48	421.54			
174	152	ZIB36-0001	磨石	泥灰岩	7.85	2.95	2.80	66.52			
175	153	SND30-0012	磨石	泥灰岩	10.80	4.30	1.00	200.05		SND30B	
176	154	ZIB37-0055	磨石	泥灰岩	5.45	3.30	3.65	80.00			
177	155	ZIB36-0009	磨石	砂岩	5.85	4.63	3.41	90.31			
178	156	ZIB36-0009	磨石	砂岩	2.75	4.85	3.10	51.96			
179	157	ZIB36-0009	磨石	砂岩	4.66	2.16	4.01	7.99			
180	158	19-75-0013	磨石	砂岩	2.83	2.40	1.79	2.11		SND012	
181	159	ZIB37-0054	磨石	泥灰岩	20.19	1.75	3.65	1296.00			
182	160	ZIB37-0083	磨石	砂岩	14.74	12.04	4.76	1140.00			
183	161	19-71-0006	磨石	泥灰岩	9.50	9.90	7.66	372.34			
184	162	20-34-0001	磨石	砂岩	5.75	7.10	8.00	308.17			
185	163	21-58-0002	磨石	泥灰岩	19.43	8.21	4.00	265.70			
186	164	19-75-0003	磨石	砂岩	10.00	8.00	4.00	244.28			
187	165	22-58-0002	磨石	砂岩	10.00	8.00	4.00	244.28			
188	166	20-38-0003	磨石	泥灰岩	8.70	3.70	4.00	333.89			
189	167	22-58-0002	磨石	砂岩	5.10	2.81	3.10	41.39			
190	168	22-58-0002	磨石	砂岩	8.85	7.80	5.25	224.82			
191	169	21-52-0017	磨石	泥灰岩	10.00	7.50	5.25	308.63			
192	170	21-58-0003	磨石	泥灰岩	10.00	8.00	4.00	279.57			
193	171	21-52-0017	磨石	砂岩	5.22	5.20	3.75	111.52			

第3節 古墳時代から奈良・平安時代

1 概要

松崎Ⅲ遺跡では古墳時代の遺構としては、円墳1基のみが検出されたのみで、遺物は検出されなかった。奈良・平安時代では、住居跡が5軒検出された。19Lグリッドに1軒、南西側の21K・21Lグリッドに4軒であり、いずれも同一台地上の南側斜面に面して位置する傾向がみられる。また、藏骨器を埋納した土坑を1基検出した。検出した位置は、住居跡と同一の台地上であるが、小さな谷津を1つ挟んだ東側にあたる。

2 古墳時代

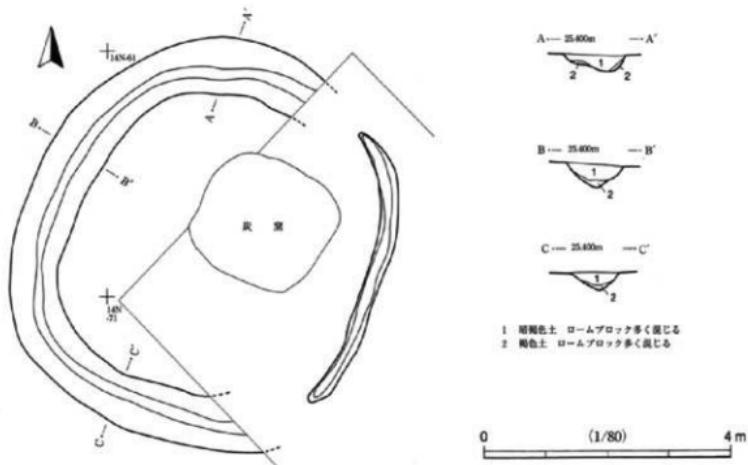
(1) 古墳

松崎Ⅲ遺跡で検出された古墳時代の遺構は円墳1基のみである。

SD004（第109図、図版20）

南と北東から侵入する二つの谷の、南から北へ延びる谷に東面し、北西から南東に下る緩い傾斜面に立地する。出土遺物がなく時期は特定できない。北側に隣接する松崎Ⅱ遺跡に同規模の円墳1基（SM001）が所在し、その規模や形態が近似することから、SB004は円墳と判断した。主体部は検出されなかつたが、松崎Ⅱ遺跡のSM001には周溝の内側に掘られた方形の主体部が検出されている。中央部の隅柱状の掘込みは、北総地域に多く見られる近世以降の炭窯であり、この炭窯が主体部を壊している可能性がある。

遺構の規模は周溝の外周で長径6.6m、短径（推定）6.3mで、周溝は幅0.7~0.9m、深さ0.3~0.4mである。南東側の一画は、この遺構の検出が下層本調査の開始後であったために周溝の原状を失っている。この周溝の覆土中には松崎Ⅱ遺跡のSM001と同様にロームブロック、ローム粒が多く混入することから、周溝の内側にロームを盛ったことが推測され、それが崩落して周溝内に堆積したものと考えられる。



第109図 古墳時代円墳

3 奈良・平安時代

(1) 壁穴住居跡

SI005 (第110図・図版20)

北側から南側に緩く傾斜する台地の、平坦面から傾斜面に変わる肩口に位置する。土軸はほぼ東西で、傾斜の方向と直交する。カマドは東側の壁の中ほどにある。住居跡の平面形はほぼ正方形で、一辺3.2mを測る。確認面からの深さは0.9mである。北東隅からカマドにかけて覆土中から炭化材がまとまって出土し、北西隅から南東隅にかけての床面直上で焼土塊を7か所検出したことから、焼失住居と考えられる。床面の四隅には径0.1m～0.2m、深さ0.2m～0.3mを測る柱穴と考えられるビットが5基ある。カマドと向かい合う西側壁下の中ほどにあるビットは、出入りのための梯子を据えたと考えられるもので、径0.2m、深さ0.2mを測る。床面に硬化面は見られない。壁溝は幅0.1m、深さ0.05m～0.1mで、カマドの部分を除いて巡る。カマドは天井部が失われて左右の袖部だけが残る。袖部は幅0.9m、奥行き0.7mである。カマド内側の燃焼部から煙道に変わる付近で土製支脚が1点出土し、その上に重なるように須恵器の壺の破片などがまとまって出土した。

出土遺物 (第110図・図版75)

図示できた遺物は7点である。

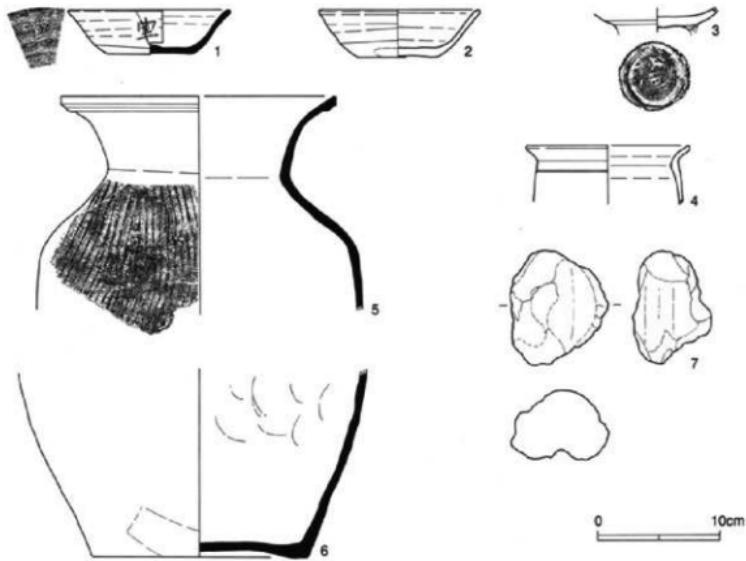
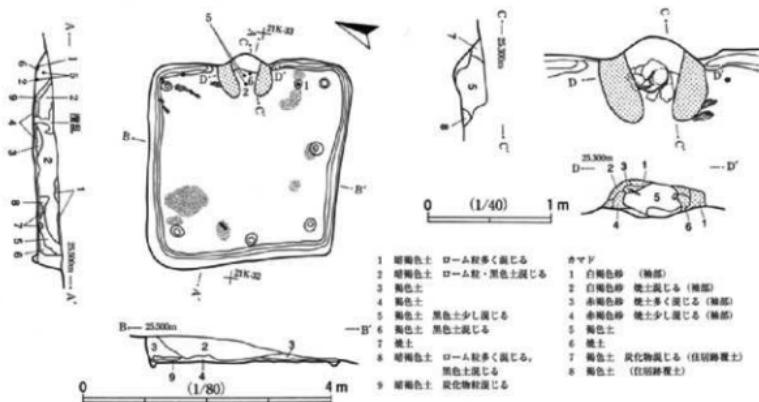
1は完形の須恵器の壺で、カマド右側の床面から口縁を上にした正位の状態で出土した。体部外面には「里」に類似した焼成後の線刻が施されている。色調は灰褐色から明褐色で、口径12.81cm、底径6.9cm、器高は3.6cmである。調整はロクロ調整で、底部は回転糸切り後に回転ヘラ削りを加える。体部下端は回転によるヘラ削りで調整している。胎土中には細砂粒の他に、赤褐色スコリア・雲母を混入する。内面は二次的な被熱による痘状痕の剥離痕がある。

2は土師器の壺である。色調は赤褐色を呈し、口径12.6cm、底径6.3cm、器高は3.8cmである。胎上・調整・内面の被熱は1と同様である。3はカマド内から出土した土師器の高台付の壺の底部破片である。色調は茶褐色を呈する。高台部は欠損し、割れ口はかなり摩滅している。器高は残存部で2.0cmである。調整はロクロ調整で、内面は丁寧なヘラミガキを加え、外表面は底部を切り離した後に底面から体部下端にかけて回転ヘラ削りを加えた後に高台を貼り付けている。4は土師器の小型壺の口縁部破片で、口径は復元で12.9cmである。口縁は「く」の字状である。色調は赤褐色で内外面ともヨコナデで調整している。胎土中には石英・長石・雲母・赤褐色スコリアを混入する。

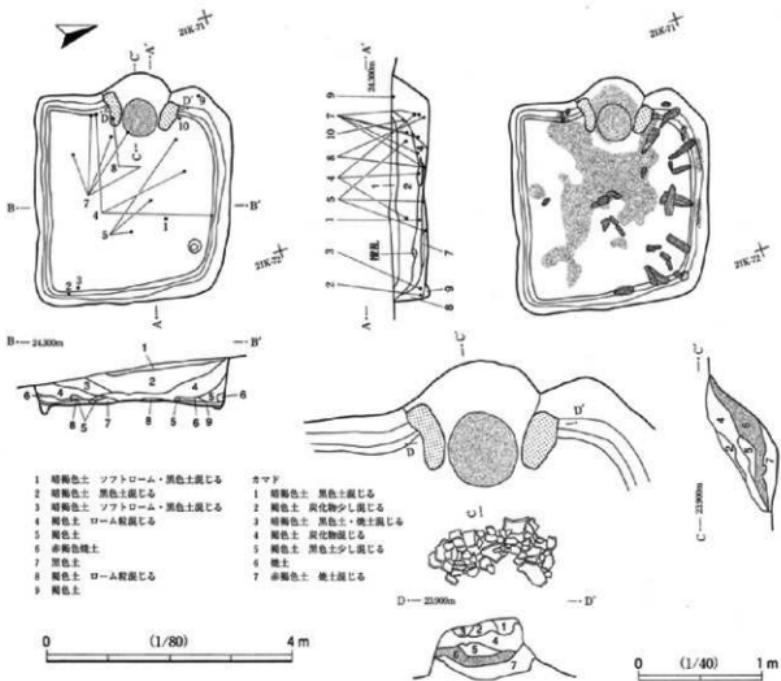
5・6は須恵器の壺で、共にカマド内から出土した。二次的な被熱が著しく器面が剥落している。5は上半分で、色調は外表面が赤褐色、内面は暗褐色を呈する。調整は口縁部から頸部は内外面ともヨコナデ、体部は外表面に叩き目が残る。内面はナデを加えている。口径は22.3cm、残存高は17.2cmである。胎土には石英・長石・赤褐色スコリア、砂粒等を混入する。6は下半部で、色調は外表面とも暗褐色を呈する。底径は17.4cm、残存高は15.3cmである。調整は、内面はヘラナデで、叩き絞めの際の當て具痕が残る。外表面はヘラ削りである。外底面は上げ底状である。7はカマド内から出土した土製支脚の破片である。

SI006 (第111図・図版20)

南側の谷に面した台地平坦面の、北から南に緩く傾斜する肩口に位置する。土軸は北西から南東で傾斜と直交する。カマドは西側の壁の中ほどにある。住居跡の平面形はほぼ正方形で、一辺3.0～3.4m、深さ0.8mである。床面に硬化面は見られない。



第110図 S I O O 5 住居跡



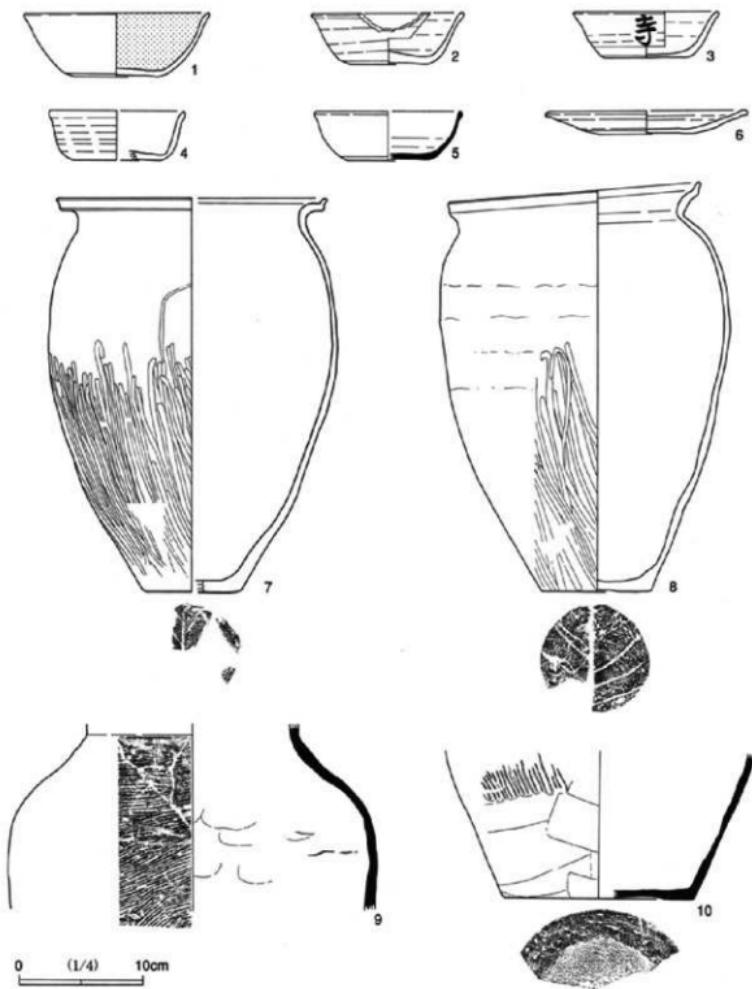
第111図 SI 006 住居跡

全体に広く、焼土塊、北側で炭化した構築部材が放射状に床面から浮いた状態で出土した。焼失住居の可能性が考えられるが、床面には火熱を受けた痕跡は見られない。柱穴は無く、北東隅近くに径0.2m、深さ0.4mのピットが1か所ある。壁溝はカマドの部分を除いて巡り、幅0.2m、深さ0.1mを測る。カマドは天井部は失われているが、左右の袖部及び底面の火床部が検出された。袖部は幅1.2m、奥行き1.0m。内部からは若干の土器片が出土した。

出土遺物（第112図、図版75）

遺物は土師器の壺・皿・甕、須恵器の壺などが出土した。

1～4はロクロ調整の土師器である。1は内面に黒色処理が施された壺で、住居中央の少し北へ寄って、床面から0.1cmほど浮いた状態で出土した。口径14.8cm、底径6.5cm、器高は5.2cmである。口縁部から体部にかけての3～4か所が打ち欠かれている。底面は回転ヘラ削りで調整されている。2は口縁部の一部を打ち欠かれた壺で、東側壁際の床面直上から出土した。口径12.0cm、底径6.2cm、器高4.2cmである。底面は1と同様に回転ヘラケズリで調整されている。3は体部外面に「寺」の墨書きがあり、2に近接した位置から出土した。口縁部の一部に欠損があるがほぼ完形である。口径11.5cm、底径7.4cm、器高は



第112図 S I 006 住居跡出土遺物

3.7cmである。底面に回転糸切り痕が残る。底部と体部の境の体部は回転ヘラ削りで調整されている。1・2・3とも、胎土に石英・長石・雲母・赤褐色スコリア・砂粒等を含む。4は覆土中層から破片で出土したものが接合したもので、全体の30%程度の遺存度である。口径は10.8cm、底径7.0cm、器高4.0cmである。底面は回転糸切り後に回転ヘラ削りで調整されている。5は須恵器の壺である。床面と覆土中層から出土した破片が接合した。口径は11.6cm、底径6.5cm、器高4.0cmである。色調は内外面とも淡灰褐色で、調整は底面と体部下端は手持ちヘラ削りで調整されている。6はロクロ調整の土師器の壺である。口径15.4cm、底径7.0cm、器高4.0cmである。全体の20%程度の遺存度であり、出土位置は不明である。調整はロクロ調整で、底面は回転糸切り後に回転ヘラ削りで調整されている。胎土は1・2・3の壺と同様である。

7・8は常規型の土師器壺で、カマド南側付近の覆土中層下部から出土した。口縁部の一部を欠くが全体の90%以上が復元できた。口縁端部は短く立ち上がって外反する。口径21.4cm、底径7.8cm、器高は32.0cmである。調整は内面がヘラナデ、外面は口縁部がヨコナデで、口縁部以下はナデで調整している。底面に木葉痕が残る。胎土には石英・長石・雲母・赤褐色スコリア・砂粒を混入する。8はカマド前の床面及びカマドの袖上から破片が散らばった状態で出土したが、ほぼ完形に復元できた。口径20.1cm、底径8.8cm、器高は31.6cmである。調整は7と同様であるが、胎土中には粗い砂粒が多く含まれる。9は須恵器壺の体部破片であり、カマドの右側の住居確認面から出土した。遺存部分の器高は15.0cmで、色調は淡灰褐色である。胎土には石英・長石・雲母・砂粒等を混入する。調整は外面には叩き目が、内面には当て具痕が残る。頸部はナデで調整している。破片の割れ口はかなり摩耗している。10は須恵器壺の底部と体部の破片である。色調は暗灰褐色で、底径は復元で15.4cmである。調整は、内面はナデ、外面は叩き目が残る。体部の下半は幅の広いヘラによる斜め方向の削りを加える。胎土には石英・長石・雲母・粗い砂粒を混入する。

S1011 (第113図、図版21)

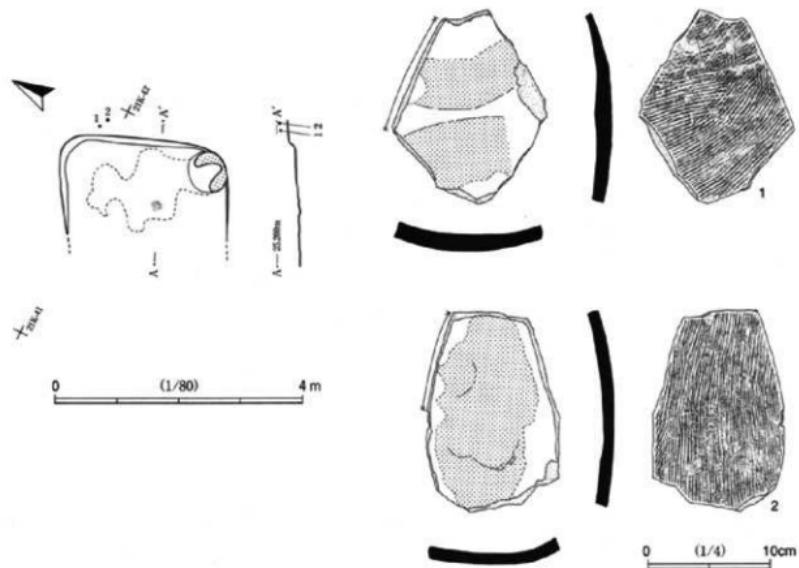
台地の平坦面から斜面に変わった肩口に位置する。検出面は東から西に緩く傾斜し、東側の壁は傾斜には直交する。谷側の西側壁は遺存していなかった。カマドは南東隅にあるが、天井部は失われて左右の袖部の下部が残るのみである。住居跡の平面形は正方形と推定され、一辺2.7mほどになるであろう。確認面からの深さは0.1m。柱穴は検出されなかった。カマドの前から北側にかけては床面に硬化面が認められた。その硬化面の中央付近に0.18m×0.18mの範囲で被熱した痕跡が認められた。

出土遺物 (第113図、図版75・76)

遺物は土師器の壺片が少量と、東壁に近接した住居外から須恵器壺の胴部片が2点出土した。1・2は須恵器壺の胴部破片である。共に内面の一部に使用による磨耗痕が認められる。他の部分に比べてその部分には光沢がある。また、1・2ともに割れ口の一部に摩滅して扁平で直線的になっている部分がある。これは砥石のように使用された結果と考えられる。色調は、1は外面が黄褐色を帯びた灰色で、一部に二次的被熱を受けた痕跡があり、淡茶褐色に変色している。内面は明るい色調の灰色を呈する。2は内外面とも薄墨を流したような暗灰色を呈する。胎土は、1は細砂粒を混入する。2は石英・砂粒を混入している。調整は1・2とともに外面には叩き目痕が残り、内面はナデが施される。

S1012 (第114図、図版21)

台地平坦部にあって、東側の縄文早期の住居跡S1014と重複し、その一部を壊している。住居のカマド

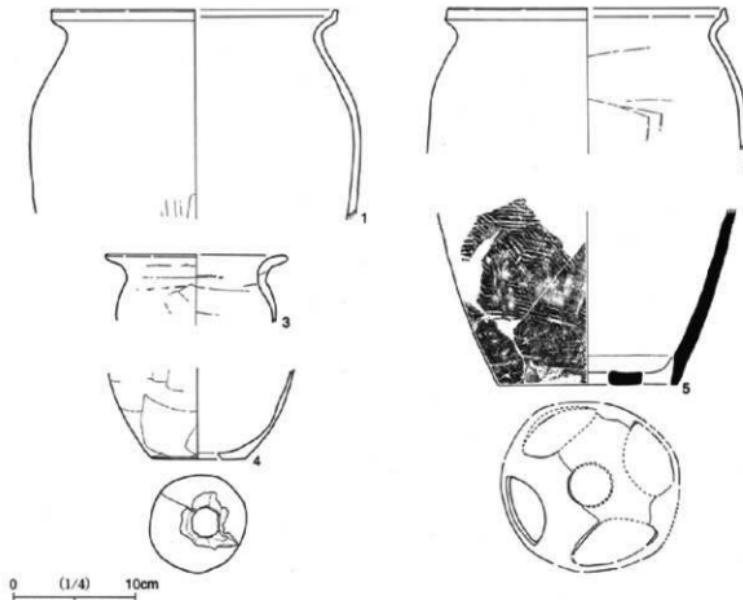
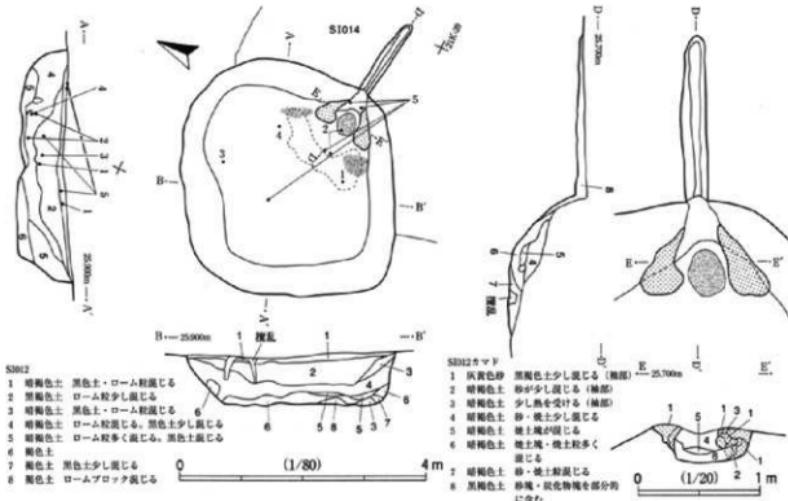


第113図 S I O 1 1 住居跡

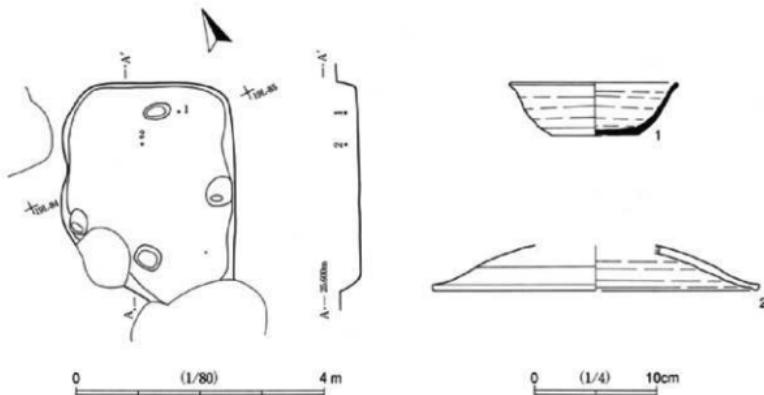
は南東隅で検出された。住居跡の平面形はほぼ正方形で、 $3.6\text{m} \times 3.8\text{m}$ 、深さ 0.8m である。柱穴は検出されなかった。カマドの前の床面には帯状に硬化面がある。カマドの左右の袖部付近に焼土塊が2か所みられた。カマドは天井部が失われていたが、左右の袖部、底面の火床部及び住居跡の外側に長く伸びる煙道を検出した。煙道の幅は 0.2m で、深さは 0.1m 、長さは 1.3m である。

出土遺物（第114図・図版76）

出土遺物で図示できたのは土師器の壺と須恵器の瓶のみである。1・2は常総型の土師器壺である。共に床面から $20\sim30\text{cm}$ 浮いた覆土中層から下層にかけて出土した。口径は1が 22.4cm 、2は 23.1cm である。調整、胎土ともに共通で、調整は口縁部の内外面はヨコナデ、口縁部以下の中面はヘラナデ、外面は下半部に手持ちヘラ削り後にナデを加える。胎土には雲母・石英・長石・砂粒を混入する。3・4は土師器の小型壺である。3は口縁部から胴部にかけての破片で、覆土中層から出土した。口径は 14.4cm である。調整は、口縁部の内外面には丁寧なヨコナデ、体部内面はヘラナデ、外面は手持ちヘラ削り後にナデを加える。色調は暗褐色で、胎土に石英、長石、雲母、砂粒を混入する。4はカマド付近の床面直上から出土した胴部下半である。内外面ともに二次的な被熱で器面の剥落が著しい。底径は 7.8cm である。調整は内面がヘラナデ、外面が手持ちヘラ削りで、焼成後に底面中央に直径 2.5cm ほどの穿孔がなされている。胎土には石英、長石、砂粒を混入する。5は須恵器の瓶の胴部下半で、確認面及び覆土中層から出土した4片が接合した。調整は内面がナデ、外面は叩き目が残り、底部に近い部分には手持ちによるヘラ削りを加え



第114図 S I 0 1 2 住居跡



第115図 SK411 住居跡

る。底部には穴が5孔設けられている。

SK411 (第115図)

中世居館跡の西区の土壘に囲まれた内側に位置するため、中近世の土坑と重複する。このために遺構の上層部は搅乱されていると考えられるが、この遺構にはカマドが検出されず、調査時は土坑と考えたが、豊穴住居跡としておく。遺構は北東から南西に長い方形で、長辺3.6m、短辺2.9m、深さ0.3mを測る。床面には四辺に1か所ずつ計4か所の柱穴と思われるピットがある。ピットの深さは北東側が0.6m、東側が0.2m、南西側が0.4m、西側が0.5mである。

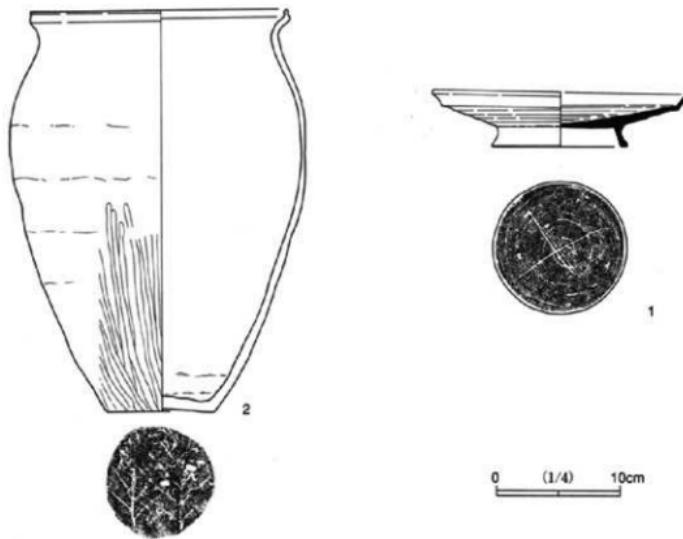
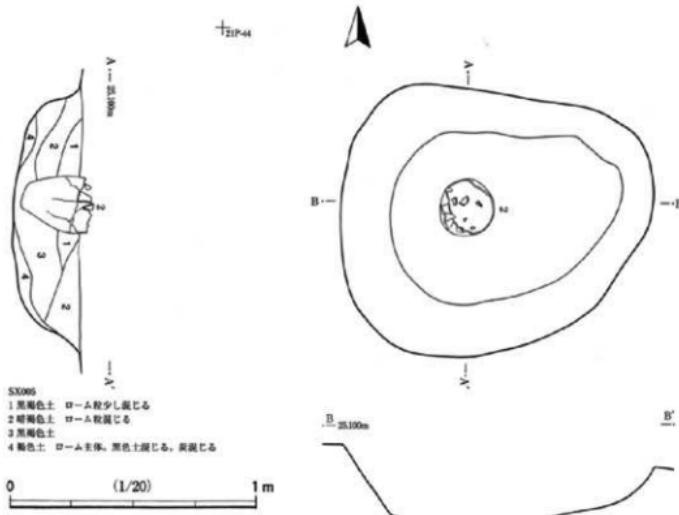
出土遺物 (第115図・図版76)

図示できた遺物は2点である。1は須恵器の壺である。口径13.5cm、底径7.0cm、器高4.3cmである。内外面とも暗褐色を呈し、胎土に石英・長石・砂粒を混入する。調整は外面は回転ヘラ削り、内面はナデが施されている。底面は回転ヘラ切りである。2は土師器の蓋である。口径は復元で26.0cm、器高は3.6cmである。内外面とも明褐色を呈し、胎土には石英・長石・赤褐色スコリア・砂粒を混入する。調整は回転ヘラ削りで、内外面とも丁寧なミガキを加えられている。

(2) 蔽骨器を埋納した土坑

SX005 (第116図、図版21)

奈良・平安時代の住居跡が検出された台地とは谷津を一つ挟んだ、東側の台地基部付近で検出された。この台地は幅が60mで、80mほど北西へ延びる舌状台地で、検出されたのはその東斜面である。検出された土坑墓は平面形がやや東西方向に長く、長辺は1.25m、短辺1.1mで、深さが0.3mの不整円形の土坑である。覆土下層には炭化物の混入が見られ、覆土中には中央やや西寄りに土師器の壺が口縁部を上にし、土坑の底面から3cmほど浮いた正位の状態で出土した。また、壺の中からは高台付の土師器盤が出土した。



第116図 SX 0 0 5 藏骨器を埋納した土坑

これらは土師の盤と甕から成る埋納された骨器と考えられ、本跡は土坑墓と判断される。なお、甕の中の土を薄いにかけたが、少量の炭化物が検出されたのみで、人骨等の検出は無かった。

出土遺物（第116図・図版76）

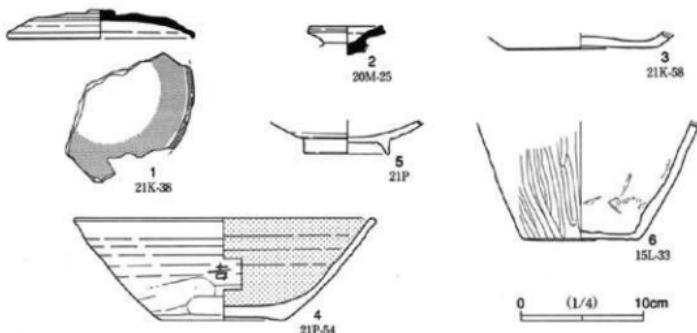
1は須恵器の高台付盤である。調整はロクロ調整で、高台の接合部付近の体部は回転ヘラ削り、底外面は回転ヘラ削りで調整している。口縁部は屈曲して外反する。外反した口縁部の約2/3は欠損しており、割れ口は滑らかに加工されている。また、高台内の外底面には「×」字状の3条の擦ったような焼成後の線刻が施される。口径は20.4cm、底径10.8cm、器高4.2~4.6cmである。胎土には雲母が多く含み、石英・長石・赤褐色スコリア・砂粒を含む。

2は常総型の土師器甕である。口径20.4cm、最大径23.8cm、器高32.6cm、底径は8.6cmである。口縁部端が短く立ちあがって外反する。内面はヘラナデ、口縁部はヨコナナデで、外面は口縁部から頸部はヨコナナデ、頸部以下の体部上半は手持ちヘラ削りの後にナデ、下半はハラミガキで調整している。外底面には木葉痕が残る。1・2とも9世紀前葉に比定される。

（3）遺構外出土遺物（第117図、図版76）

遺構外出土の遺物はさほど多くないが、図示し得たものは以下の土器6点である。

1・2は須恵器の蓋である。1は約1/2が遺存していた。口径14.9cm、器高は2.3cmで、つまみの径は2.3cmである。外面はロクロ調整後回転ヘラ削り、つまみにはヨコナナデを加える。内面はヨコナナデで調整している。内面の口縁部から2cmほどの間が丸く煤けているような色調を呈することが特徴の一つに挙げられる。胎土には石英・雲母・スコリア・砂粒を含む。常陸新治産であろうか。2はつまみ部分である。遺存する器高は2.3cmである。胎土には石英、長石、砂粒を混入する。3は土師器坏の底部付近の破片で、盤状を呈するものである。底径12.3cm、残存高は1.25cmである。色調は内外面とも淡褐色を呈する。胎土には長石・石英・スコリア・砂粒・白色針状物（海綿骨針）を混入する。底部内面は丁寧なナデを加え、光沢がある。底部外面は回転ヘラケズリで調整している。僅かに残っている体部にも回転ヘラ削りの調整



第117図 奈良・平安時代遺構外出土遺物

痕が見られる。4はロクロ調整の土師器の鉢である。体部外面に「吉」の字の焼成後の線刻が施されている。口径は23.8cm、底径9.9cm、器高8.2cmである。内面は黒色処理されており、外面の口縁部から3cm近く下までも擦れ痕が全周の半分位まで及んでいる。胎土には石英・長石・雲母・スコリア・砂粒と白色針状物（海綿骨針）を混入する。調整は内面が横位のヘラミガキ、外面は体部下半に手持ちヘラ削り、底面には手持ちヘラケズリが施される。5は土師器の高台付皿である。高台部分と体部の一部のみ遺存し、割れ口はかなり摩滅している。底径は6.6cm、残存する器高は2.8cmである。色調は内外面とも淡褐色を呈する。胎土は石英・長石・スコリア・砂粒を混入する。内面は回転のヘラミガキ、外面も回転の丁寧なヘラナデで調整している。外底面は手持ちヘラ削りで調整している。6は常緑型の土師器壺の底部および胴部の破片である。胎土には石英・長石・雲母・スコリア・多量の粗い砂粒を混入する。内面はヘラナデ調整、外面の体部は手持ちヘラケズリ後にヘラミガキを加える。底部外面は無調整である。

第4節 中・近世

1 概要

中・近世の遺構は遺跡の台地上のほぼ全域から検出されている。検出された遺構の中で居館跡は、3条の土塁と2条の溝によって区画され、13世紀初頭から15世紀末までのおよそ300年間に亘って営まれた。土塁に囲まれた内側からは掘立柱建物跡をはじめとして多数の土坑や地下式坑が検出され、居館跡の南東の斜面には台地地形を伴う墓域も検出された。本節では便宜上、中世居館跡内及び周辺の遺構と、それ以外の地点の遺構に分けて記述する。

2 居館跡（第118図、図版22・23）

居館跡は南側の谷に面する台地平坦部にあり、平坦部が東西約120m、南北140mの、北に広く、南に行くにしたがって窄まる逆台形状の形をした台地上に立地する。台地は東側でこの台地基部の広い台地と繋がっている。台地の標高は26~28mで、東側の傾斜は比較的緩やかであるが、それ以外の方は旧水田面との比高差が約15mの急峻な崖となっている。

居館跡は標高25~28mの南東へ緩く傾斜する台地上に位置し、3条の土塁と2条の溝によって区画されている。また、その中ほどをほぼ南北に走る土塁・溝を境にして東・西の2区に分かれる。東区には土坑・地下式坑・掘立柱建物・構列・火葬墓などの遺構が集中する。西区はその両半には土坑などの遺構が見られるが、北半では遺構の検出は希薄となる。居館跡は、遺構が幾重にも重複したものがあることなどを考慮すると、ある程度の継続期間が想定される。出土した陶磁器の製作年代は13世紀初頭から15世紀末までのおよそ300年間に亘るものであり、居館跡もほぼこの時期に営まれたものと考えられる。

土塁を巡る溝は2条あり、外側をめぐる溝の外周は1辺55m前後、土塁の内側の幅や土塁の内側をめぐる溝の内周で南北40m、東西45mを測り、溝に囲まれた区域の内法は1,800m以上になる。中ほどをほぼ南北に走る土塁・溝を境にした東・西2区の内法は、東区は南北40m、東西30mで1,200m、西区は南北35m、東西10~13mで400mほどである。南東側の台地斜面にかかる部分は、造成後も斜面緑地として保存される計画のため発掘調査は実施していない。

この居館跡はその西側に十分な台地平坦部があるにも関わらず、台地中央部ではなく南東側の斜面に寄った位置に占地している。

居館跡と外部との間には出入り口が設けられていたはずであるが、上述の南東側の未調査部分を除くと、外周を溝が途切れなく巡ることから、溝からはその位置を特定できない。また、溝を跨ぐ架け橋の痕跡や土橋も検出されなかった。一方、土塁には東区の北側と西区の北西側に途切れた部分があり、この部分に居館跡内への出入り口があったと推測される。

（1）土塁・溝状遺構

前述したように居館跡の内外を区画するように土塁と溝が巡っている。土塁は3条に区切れており、土塁の外周に沿って溝が巡る。溝は2条あり、1条は前記のとおり土塁の外周を巡り、他の1条は土塁と共に土塁に囲まれた区画を二分するように土塁の内周に沿って巡っている。土塁には便宜上A・B・Cと個別の番号を付して記述する。

土塁A（第118・119図、図版24）



第118図 中世居館跡全体図

居館跡の南縁を東から西へ直線的に延びて、やがて北へ折れてその端が不明瞭となる土壙である。東側の端は未調査であるが調査範囲外へ更に続いている。この土壙は居館跡を巡る土壙の中で最も規模の大きいもので、土壙の断面形は南東端では皿を伏せたような緩やかな曲線を描く部分と、土壙上部が平坦な部分がある。長さは約60m、裾の幅は現況で3~5m、高さは土壙内部の遺構検出面から最大約1.5m、居館跡の外側からは約1mである。土壙の旧地表面からの現存高は約0.5mである。旧表土を残して外側から内側に向かってハードロームブロックやローム粒を混入する暗褐色土を積み上げ構築されている。

南西側では旧表土を0.2m削り下げる構築面としており、高さは東端より0.4m低い。外側は旧表土を0.5~0.6mほど掘り込み溝(SD025)が構築されている。SD025の底面からの土壙の高さは1.3mを測る。内側は地山を階段状に削って整形された部分もあり、土壙内側の遺構検出面は地山を1m以上掘り込んで整地している箇所もある。遺物は西側から寛永通寶が1点出土した(第141図19)。

土壙B(第118・119図、図版25)

居館跡の中央やや西よりの位置にあって直線的に南北に伸び、居館跡を東西に区切る土壙である。この土壙を境にしてその東西で造構の密度が異なる。土壙の東縁側に沿って溝(SD026)が構築されている。北端は東方向へ約11m、西方向へ7mほど伸びてT字状を呈して途切れています。東端の土壙Cとの間隙は約4mである。南北方向は直線的で、長さ約35m、裾の幅3~6m、高さ0.5mである。土壙の南端近くはクランク状に土壙の西縁側の幅が6mほどに広くなり、土壙Aの手前7mほどで途切れる。遺物は構築土上層中から寛永通寶2点が出土した(第141図18・21)。

土壙C(第118・119図)

居館跡の北東から東側を、途中で南へ折れながら巡る。北西端の土壙Bとの間隙は約4mである。東端は調査範囲外となるため未詳である。長さ30m弱、裾の幅2~3.5m、高さ0.3~0.6mである。土壙の縁に沿って外側を溝(SD025・SD027)、内側を溝(SD026・SD027)が巡る。遺物は天保元寶1点が出土した(第141図2)。

SD025・SD027溝状遺構(第118・119・139図、図版24)

居館跡の外周を一巡する溝である。調査区の端である東と南東の溝の続きが調査範囲外へ延びるために不明瞭である。土壙Cの北東隅以南の外側の部分はSD027として調査した。全長は160mあり、幅1.5~2.5m、深さ0.2~0.8mである。遺物はSD027の南側から常滑産の広口瓶、SD025からは砥石が2点出土した。

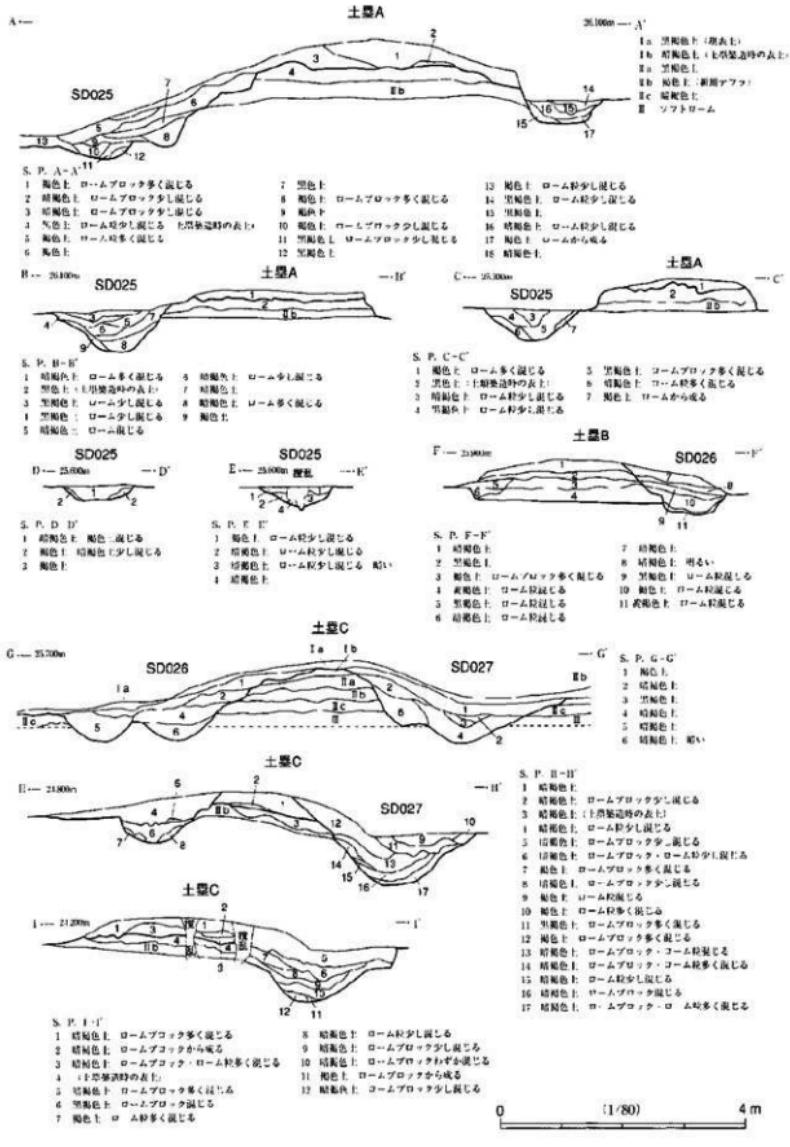
SD026・SD027溝状遺構(第118・119・137・139図、図版25)

居館跡の東側の土壙B・Cに囲まれた内側を巡る。全長は80m弱で、幅1~2m、深さ0.4mである。土壙Cの北東隅以北の内側の部分はSD027として調査した。遺物はSD026から常滑産の片口の鉢底部破片・甕の口縁部破片、砥石が出土した。

(2) 堀立柱建物跡(第120~124図、図版25)

居館跡内で堀立柱建物跡とした造構は4棟である。ここで堀立柱建物跡とした基準は、①柱間の距離がほぼ等しいこと。②梁と桁の交差する角度が90°であること。③柱穴の深さが概ね0.5mを超えるような深いものであることをとした。

従って、①と②の基準に適合しても③の要件を満たないものについては基本的に除外し、柱の組み方も調査時の判断を変更したものがある。建物の配置や規模に規則性は認められないが、東区の土壙と溝に囲まれた内側の、東西20m、南北40mの範囲に集中しており、西区にはみられない。なお、柱穴状の掘り



第119図 土壌・溝セクション図

込みが多くある点を考慮すると、他にも掘立柱建物跡が存在したことが想定される。

図化にあたって、土坑内にピットがある場合、土坑に伴うものか、土坑と重複しているのか不明な場合がほとんどである。重複が明瞭なものを除いて、一律に土坑に伴うように表現している。なお、重複する土坑同士は、互いの輪郭の大きさを揃えてそれを表現した。接する土坑・ピットの上端が不連続な場合は一律に重複すると判断した。

長さ・深さの表示は、原則として0.1m単位としている。深さは、開口部で何カ所か標高を測定している場合、標高の高い方から測る。たとえば、遺構検出面からほかの遺構の底面にかけて開口する場合、遺構検出面から測るという具合である。

SB001 (IJSB016) (柱穴にSK368・SK403・SK404) (第121図、図版25)

東区の北西に位置し、19L-59・68~69・78~79・89、19M-50~60グリッドに所在する。SB016は、平面形はほぼ南北に長い1間×4間で、方位はN-10°-Eである。規模は北西角の柱穴が不明瞭ではつきりしないが、梁行4.1m、桁行10.1mを測る。柱穴は9基とも円形で径0.3~0.7mで、深さは0.1~0.6mである。桁方向の柱間は北側4基の柱間は約2.6mであるが、南側2基の柱間は1.8~1.9mである。遺物はSK368から平安時代以降の上部器窓の破片が出土した(第141図11)。

SB002 (IJSB006) (柱穴にSK268・270・273・278・303・384・385) (第122図、図版25)

20M-10~12・20~22・31グリッドに所在する。2間×3間で、主軸方向はW-29°-Nである。規模は梁行3.6mで、桁行は6.4mである。桁方向の柱間は1.8mである。梁行の柱間は1.7~1.9mである。北側隅の柱穴は長辺0.6m、短辺推定0.5mの方形である。他の柱穴は円筒形で、径は0.3~0.8mで、深さは0.6~0.8mである。遺物はSK278の覆土中から元豊通寶が1点出土した。

SB003 (IJSB007・008) (柱穴にSK309~311・317・323~324・335・374・376~380) (第123図、図版25)

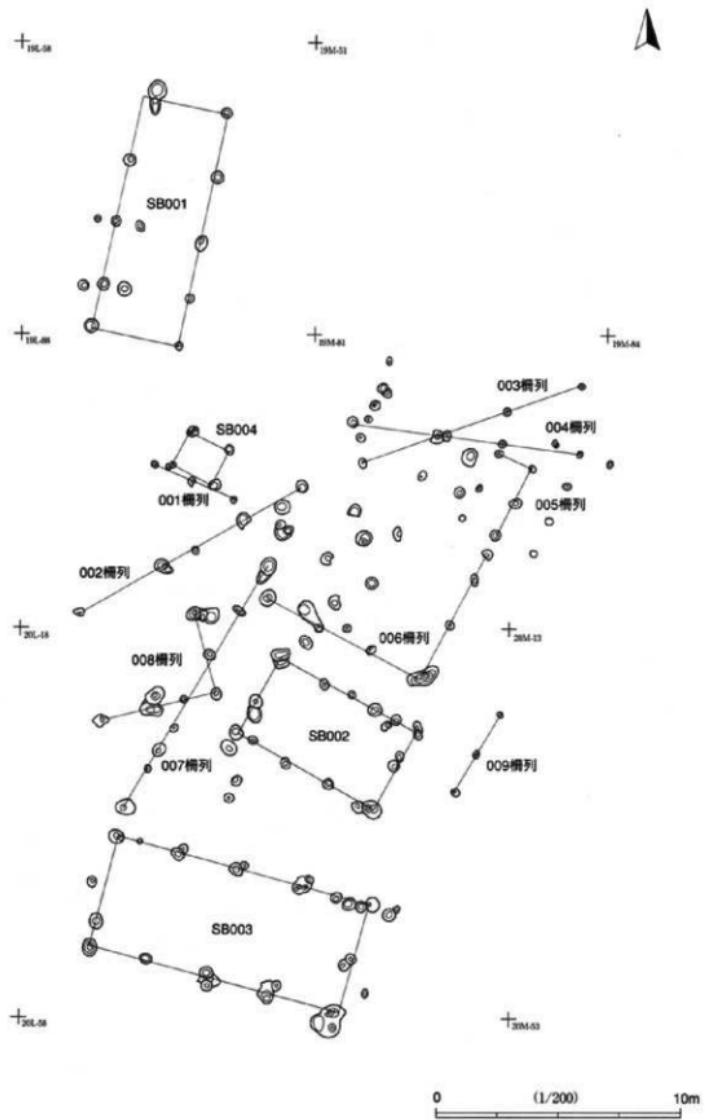
20L-38~39・48~49・20M-30~31・40~41グリッドに所在する。2間×4間で、主軸方位はE-14°-Sである。規模は梁行が4.6~4.7mで、桁行は10.0~10.6mである。梁行の柱間は東側で2.3m、桁行の柱間は2.3~3.0mである。柱穴は円筒形で、径は0.4~0.7mで、深さは0.6~0.9mである。また、東側には柱痕と考えられる掘り込みが梁行に沿ってあることから、庇の存在が想定される。遺物はSK309から常滑産片口鉢の底部付近の破片、SK311の覆土中から常滑窯の頸部から肩部にかけての破片が出土した(第137図20)。

SB004 (IJSB001) (柱穴にSK371) (第124図)

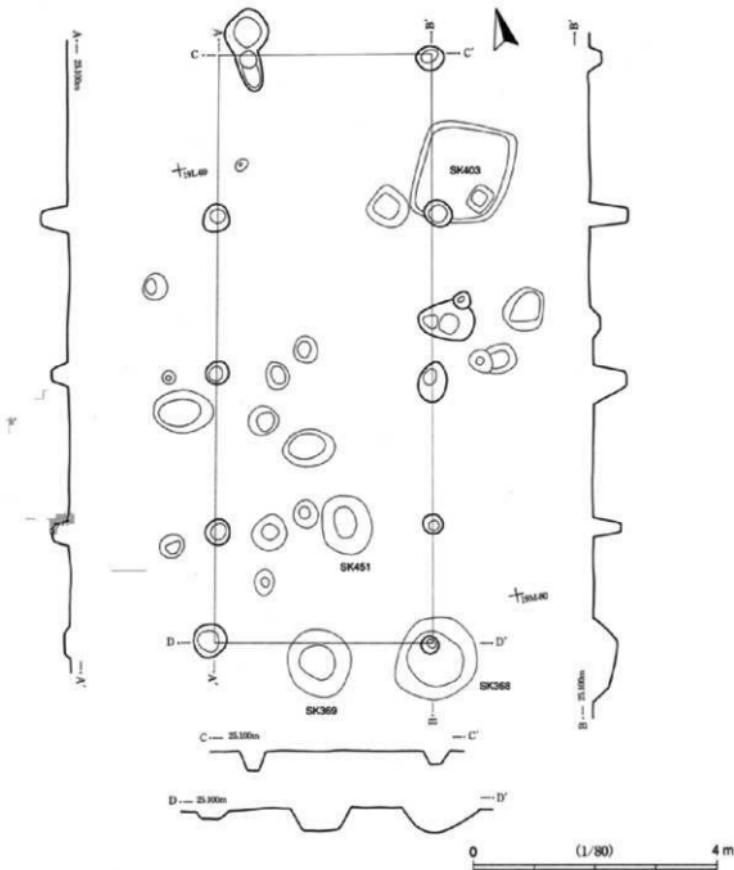
19L-89・99、19M-90グリッドに所在する。平面規模は1間×1間で、一辺が1.6~1.8mの正方形である。主軸方向は北東である。柱穴は円筒形で径は0.2~0.4mで、深さは0.5~0.6mである。南側の直近に3基の柱穴からなる001構列がある。

(3) 構列 (第121・125~127図)

居館跡内の東区には掘立柱建物跡とともに構列が検出されている。構列は調査の時点では、掘立柱建物跡と同じくSBとして調査している。ここで構列としたものの基準は、基本的に①直線的に、等間隔に柱穴が並ぶこと。②柱穴の深さが0.3m以上であることとしたが、基準にそぐわないものもこれに含めたものがある。これらの基準に即して抽出した遺構は以下の9列である。この中には、掘立柱建物跡とその



第120図 挖立柱建物跡・構列配置図

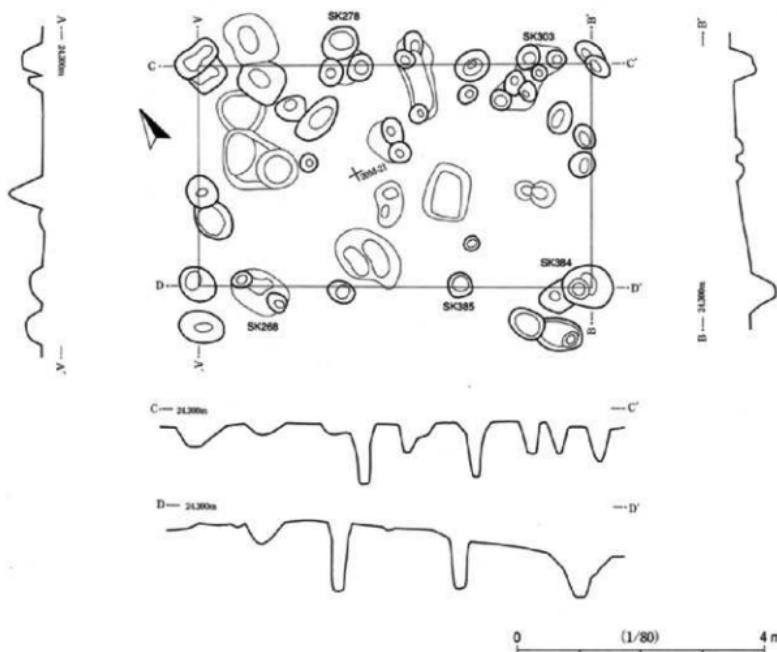


第121図 SB001掘立柱建物跡

方位が合うものと合わないものがあり、一時期に構築されたものではなく、いくつかの時期に亘って営まれたものと考えられる。また、その用途についても様々なものがあったのではないかと考えられる。

001櫛列（第124図）

19L-99, 19M-90グリッドに所在する。SB004の南側に近接している。この櫛列は3基の柱穴から成り、全長は3.6mで、柱間は1.7~1.9mを測る。柱穴の平面形は円形で径は0.3mで、深さは0.5~0.6mである。



第122図 SB002 捜立柱建物跡

る。遺物は出土しなかった。

002柵列（第125図）

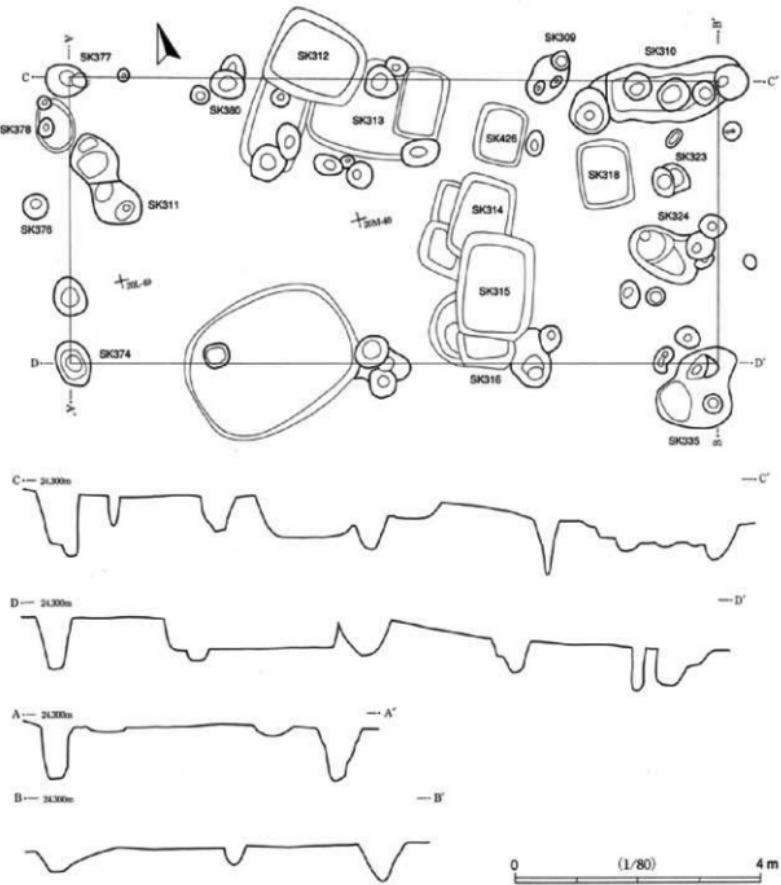
19L-08グリッドから北東方向へ直線的に10.4mほど延びる柵列で、柱穴は4基である。柱間は3.6mである。柱穴の平面形は円形で、径は0.4~0.6mで、深さは0.4~0.7mである。柱穴の中心を結ぶ線に沿って2本の柱穴状の掘り込みがあり、支柱穴の可能性がある。003柵列とはその方位を若干異にするが、同一の柵列となる可能性がある。遺物は出土しなかった。

003柵列（第125図）

19M-91から19M-83グリッドへと北東方向へ9.6m延びる柵列で、柱穴は4基である。柱間は3.6mである。002柵列と同様な数値を示す。柱穴の平面形は円形で、径は0.2~0.3mで、深さは0.3~0.4mである。遺物は出土しなかった。

004柵列（第125図）

19M-81~93グリッドに所在する。北東から南西に9.4m延びる。柱穴は4基で、003柵列と交差することから時期に差があると考えられる。柱間は2.3~3.6mとやや規則性に欠ける。柱穴の平面形は円形で、

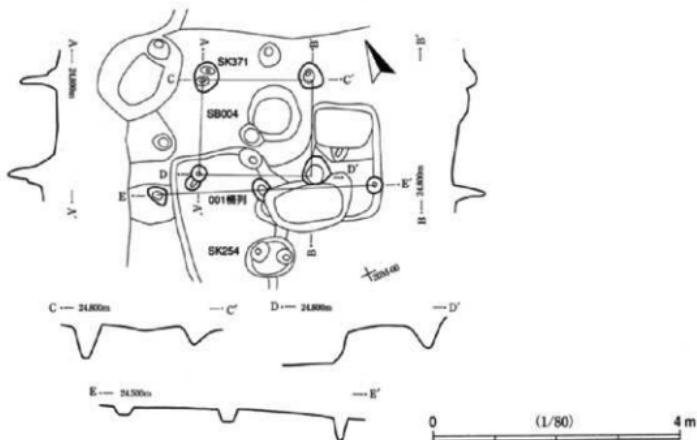


第123図 SB003掘立柱建物跡

径は0.2~0.4mである。深さは0.5~0.8mで、径は小さいが深い。遺物は出土しなかった。

005櫛列（第125図）

19M-91グリッドから92グリッドへと東南方向へ延びて、南西方向へ直角に折れ、20M-02グリッドまでを005櫛列とした。方位を一にして006櫛列がさらに南西へ延びるが柱間寸法が異なるので006櫛列とは区別した。005櫛列と006櫛列は、SB002掘立柱建物跡とその方向に同一性が認められる。全長4.6mの比較



第124図 SB004 掘立柱建物跡・001構列

的短い構列で、006構列とともに築地塀のものと考えられる。柱穴は4基で、柱間は1.5mである。柱穴の平面形は円形で、径は0.2~0.3mである。深さは0.3~0.6mで、北西端の柱穴が0.6mと最も深い。遺物は出土しなかった。

006構列（第126図）

005構列と対をなすように位置する。20M-02から20M-12グリッドへと南西方向へ延び、そこから直角に北西方向へ折れて20M-00グリッドへ延びる。全長は12.6mで、柱穴は7基である。柱間は北西の1本が1.2mである以外は2.3mである。柱穴の平面形は円形で、径0.3~0.4m、深さ0.4~1.2mである。両端と構列が折れる部分の柱穴の深さはいずれも1.1m、1.2m、0.9mと深い。遺物は隣接するSK276から皇宋通寶1点と元祐通寶2点が出土した（第141図12・13）。

007構列（第126・137図）

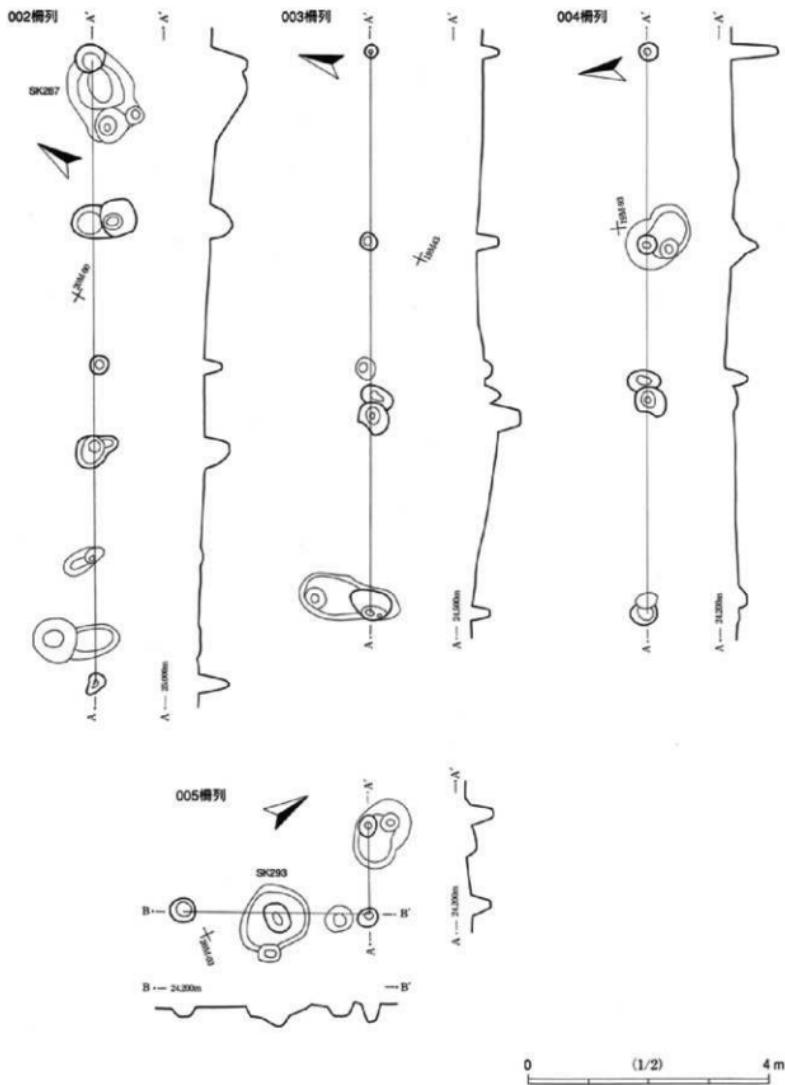
20M-00グリッドから20L-29グリッドに所在する。全長は11.6mで、柱穴は6本で、柱間は2.2~2.4mである。柱穴の平面形は円形で、径0.4~0.6m、深さ0.4~0.8mである。005・006構列とはクランク状になるがその方位や角度は一致している。また、SB002とも同様である。遺物はSK262から常滑産甕もしくは広口壺の底部破片が出土した。

008構列（第127・139図）

20L-09から20L-18グリッドにかけて所在し、途中で直角に折れる。007構列と重複することから時間差があることが想定される。全長は8mで、柱穴は5基である。柱穴の径は平均が0.4mで、深さは0.5~1.0mである。遺物はSK259から磁石の破片が出土した。

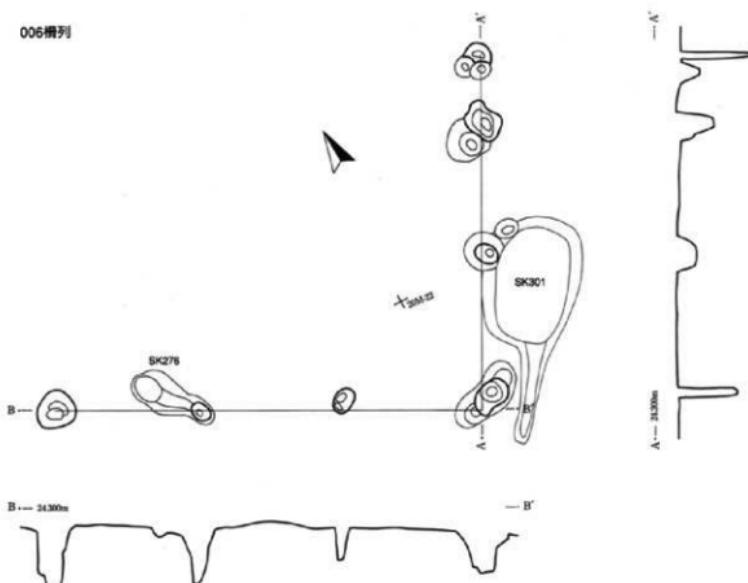
009構列（第127図）

20M-23グリッドに所在する。柱穴は3基で、全長3.8mである。柱穴は径0.2~0.3m、深さ0.2~0.4mで

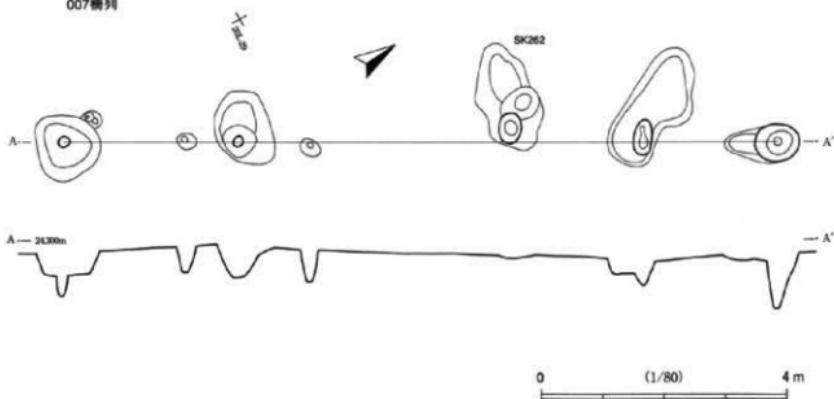


第125図 002・003・004・005横列

006横列

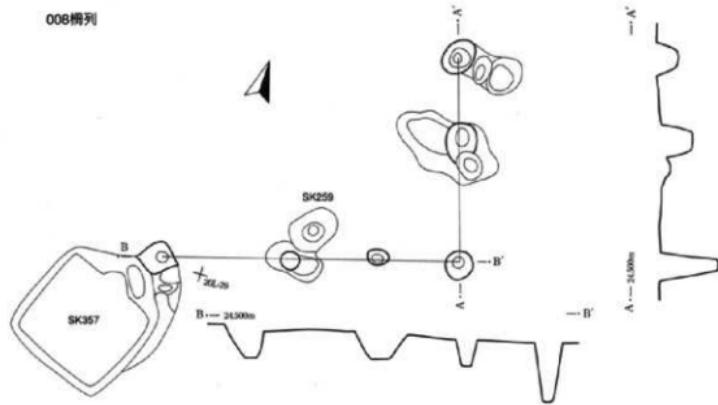


007横列

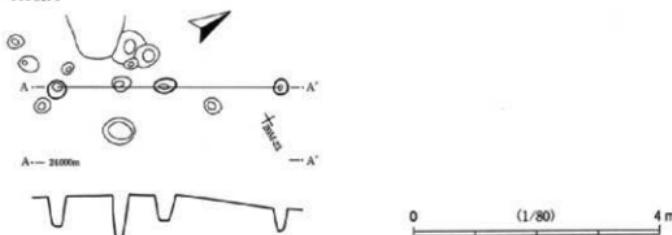


第126図 006・007横列

008横列



009横列



第127図 008・009横列

ある。遺物は出土しなかった。

(4) 地下式坑

SK344 (第128図、図版26)

屋敷内の東区の南西に位置し、SK343・345・346と重複し、SK346の一部を壊して掘られている。出入り口部は北東側に付されている。出入り口の幅は約1.0mで、階段状の中段が主室の北東壁面に認められた。主室は北西から南東に長い隅丸方形で、底面は平坦である。壁の一部には天井部の地山のハードロームの一部が残っており、その部分がオーバーハングしている。確認面から底面までは2.7mあり、底面の長辺2.6m、短辺2.2mである。天井部の地山は大部分が崩落していた。遺物は中央寄りの底面直上で、乳白色の灰の分布が3か所、南西の壁下には骨粉の分布が1か所検出された。

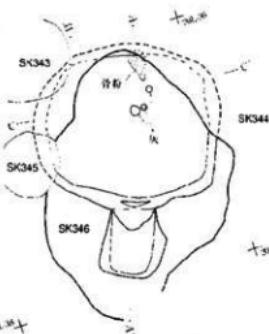
SK356 (第128図)

居館跡の東区の中央やや南西寄りに位置し、SK247・340・355・409と重複する。南側に6m離れて

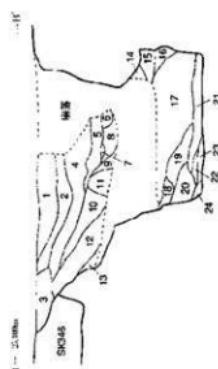
SK344



100m



100m



100m

C - 210mm

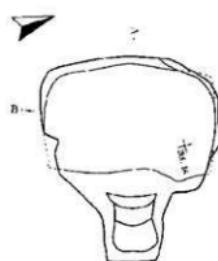
— C' —

1. 黒褐色 ローム材少しある
2. 黒褐色上 ローム粉わずか混じる
3. 黑褐色下 ローム粉少しある
4. 粘土層上 ローム粉少し混じる
5. 粘土層下 ロームブロック多く混じる
6. 粘土層上 ロームブロック多く混じる
7. 黑色上
8. 黑褐色上 ロームブロック多く混じる
9. 粘土層上 ロームブロック少し混じる
10. 粘土層下 ロームブロック少し混じる
11. 黑褐色上
12. 黑褐色下 ローム粉ロック少し混じる
13. 粘土層上 ローム粉混じる
14. 黑色上 ワーム粉少し混じる
15. 黑褐色上 ロームブロック混じる
16. 黑褐色下 ローム粉多く混じる
1. 黑色上 ローム粉多く混じる
16. 黑褐色上 ローム粉混じる
19. 黑褐色上 ロームブロック多く混じる
20. 黑褐色下 ローム粉少し混じる
21. 黑褐色上 ロームブロック多く混じる
22. 黑褐色下 ローム粉少し混じる
23. 黑褐色上 ローム粉わずか混じる
24. 粘土層上

SK356



100m



B - 210mm

— B' —



0 (1:80) 2m

第128図 地下式坑 SK344・356

SK344が位置する。主室の平面形は北東から南西に長い長方形を呈する。確認面から底面までの深さは2.0mで、底面の長辺2.5m、短辺は1.6mである。出入口部は南東側に設けられており、幅約1.0m、深さ1.2mである。天井部は崩落しており、確認できなかった。遺物は出土しなかった。

(5) 火葬施設・火葬墓

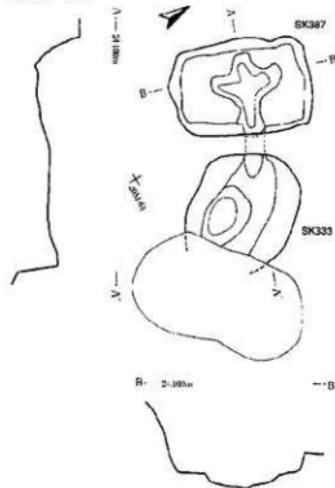
SK333・SK387 (第129図)

中世居館跡内の南東端、土壘Aの内側の裾の直下に位置する。調査時は別個の遺構番号を付けていたが、単一の火葬施設であることがわかった。遺体を焼くための燃焼部 (SK387) は北東から南西に長い方形で、長辺1.2m、短辺0.8m、深さ0.3mである。底面の中央には深さ0.1mほどの溝が十字形に掘られている。底面の直上と溝からは焼土と炭化物が多く検出された。空気を送る通風口 (SK333) は南東側が他の土坑と重複している。平面形は不整の楕円形で、北西から南東に長く、長径1.0m以上、短径0.75m、深さは0.25mである。底面は皿状に窪んでおり被熱した痕跡が認められた。燃焼部と通風口の間にはトンネル状の横穴（通気孔）が貫通している。穴の径は0.15mで、断面形は上下に長い楕円形を呈している。

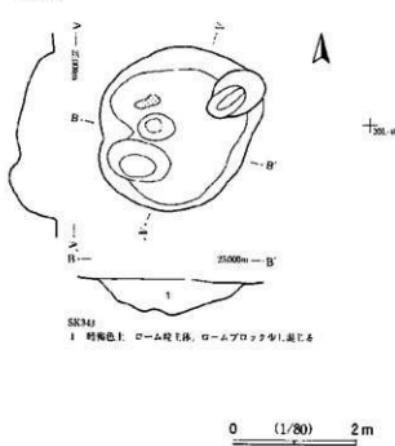
SK343 (第129図)

中世居館跡の土壘Aから3m離れた内側に位置する。北側には地下式坑 (SK344) が隣接して所在する。やや不整の円形で、径1.3m、深さ0.3mを測る。底部の北西寄りには骨粉・炭化物粒の薄い散布が認められたことから火葬墓と考えられる。北東壁にかかる柱穴状のピットは深さ1.2m、骨粉・炭化物粒の散布範囲の南側のピットは深さ0.1m、南西壁のピットは深さ0.2mである。

SK333・387



SK343



第129図 火葬施設・火葬墓平面図

(6) 方形堅穴状遺構・土坑

居館跡内には平面形が正方形や隅丸方形、不整形の土坑が多数検出された。ここでは遺物が検出されたものや形態に特徴があるもののみを図示した。これらの土坑のうち、その形態が他の土坑に比べて規模が比較的大きいこと、柱穴等のピットが検出されることが少ないと、底面が水平であること、規模はその一辺が概ね2m以上を測る等の特徴を有するものについては方形堅穴状遺構として区別することができる。方形堅穴状遺構は合計18基に上る。居館跡内での分布を概観すると、西区には存在せず東区の南西から南側に集中する傾向がみられる。他では北から東側の土器Cの内側の溝(SD027)に近い部分に分布域がある。

SK253 (第130図)

居館跡内東区の中央、19L-99に所在する方形堅穴状遺構である。北側でSK254と重複する。平面形は平行四辺形のように少し拉げており、規模は長辺が2.1m、短辺は1.52mを測る。深さは0.6mである。底部は平坦で柱穴も検出されなかった。南東から北西方向に主軸を置き、主軸はE S -33° - W Nである。覆土中にはロームブロックを多く混入する。

SK254 (第130図)

南側がSK253に切られる方形堅穴状遺構である。平面形は長方形で、南北に長い。規模は長辺が推定で2.4m、短辺が1.5mである。深さは0.12mと浅い。主軸はN-15° - Eである。北から東側にかけて重複するピットはSB004・001横列の柱穴である。

SK256 (第130図)

19L-99、19M-90に所在する方形土坑である。北西から南東に長い方形で、長辺1.8m、短辺0.8m、深さ0.5m。出土遺物はない。

SK257 (第130図)

19L-99、19M-90に所在する方形土坑である。SK256、SB004・001横列の柱穴と重複する。北東から南西に長い方形で、長辺1.9m、短辺1.2m、深さ0.5m。出土遺物はない。

SK263 (第130図)

20L-19に所在する方形土坑である。北東から南西に傾いた隅丸の正方形で、一辺1.5m、深さ0.3m。遺物は常滑窯片口鉢の破片が出土地した。

SK267 (図130・141図)

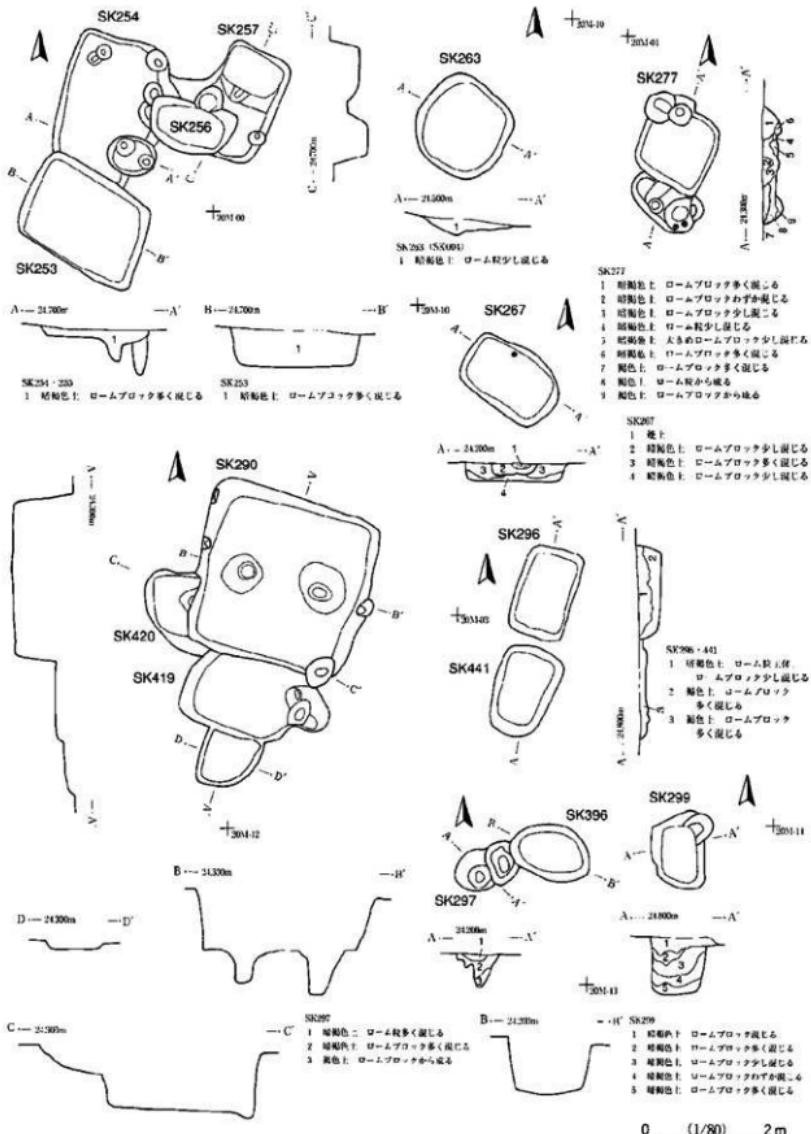
20M-10に所在する。北西から南東に長い方形で、長辺1.7m、短辺1.1m、深さ0.3mを測る。土層断面を見ると、中央に小さく浅い土坑が掘られていることがわかる。遺物は皇宋通寶が1点出土した。

SK277 (第130・141図)

20M-01に所在する方形土坑である。南側で不整形土坑を切っている。北東から南西に傾いた正方形で一辺1.2m、深さ0.3mを測る。遺物は皇宋通寶、治平元寶が1点ずつ出土した。

SK290 (第130・141図)

中央部の東に寄った、地形的には北西から南東へ向かって緩く傾斜するところに位置する方形堅穴状遺構である。南側でSK419を切っている。西側に重複するSK430との新旧関係は不明である。平面形は一辺が2.85mの正方形で、深さは0.96m。主軸方位はN-19° - Eである。底面には東西に並んで2基のピットがあり、底面からの深さは東側のピットが0.75m、西側のピットは0.5mである。この他には南東の隅に



第130図 方形堅穴状遺構・土坑（1）

ピットが一基あり、底面からの深さは1.81mである。また掘り込みの東壁の中央部に一基と、西壁の北側に二基の壁に掛かって掘られたピットがある。これらのピットもこの遺構に付帯するものと思われる。深さは東壁のピットでは確認面から0.64m、北壁では北側のピットが0.38m、南側のピットは0.76mである。覆土中には上層から下層までの各層にハードロームが含まれていた。遺物は天聖元寶が1点出土した。

SK419（第130図）

東区中央部の中央からやや東寄り、20M-01・02に所在する方形土坑である。北側でSK290に切られており、南側でも浅い土坑が一基重複しているが、これらの新旧関係は不明である。また、東壁には柱穴状のピットが3基重複している。東壁と南壁でも土坑と切り合う。推定で一辺が2.0m、深さは0.2mほどである。出土遺物はない。

SK420（第130図）

19M-91、20M-01に所在する方形土坑である。SK290と切り合っているため形状は断定はできないが方形としておく。一辺0.8m以上、深さ0.4mを測る。出土遺物はない。

SK296（第130図）

19M-93、20M-03に所在する方形土坑である。北東から南西に長い方形で、長辺1.5m、短辺0.9m、深さ0.4mを測る。出土遺物はない。

SK441（第130図）

20M-03に所在する方形土坑である。北東から南西に長い方形で、長辺1.5m、短辺1.0m、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。

SK297（第130・136図）

20M-02に所在する2基の不整円形土坑が切り合ったものである。東側はSK396と切りあう。東側の土坑はほぼ円形で径0.5~0.7m、深さ0.5mを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗の体部破片が1点出土した。西側の土坑はほぼ円形で径0.7m、深さは0.5mである。出土遺物はない。

SK396（第130図）

20M-02に所在する不整円形土坑である。東西に長い椭円形で長径1.3m、短径0.9m、深さ0.9m。出土遺物はない。

SK299（第130・139図）

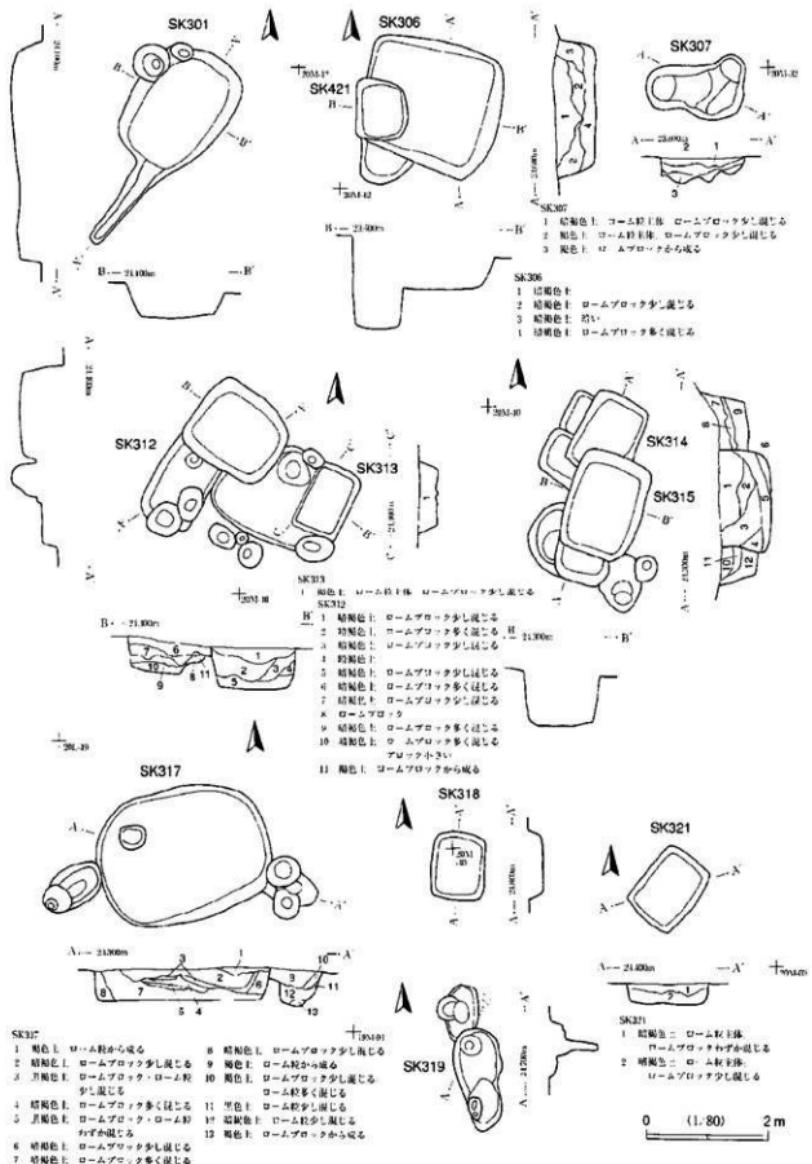
20M-03・13に所在する方形土坑である。2基の土坑が切り合う。南北に長い方形で長辺1.3m、短辺0.9m、深さ1.0m、東側の小さい土坑は深さ0.9m。遺物は磁石が1点出土した。

SK301（第131・137図）

東区中央からやや東寄りに位置する方形土坑である。北西側で006横列の柱穴と重複する。一辺2.1m×1.56mの隅丸方形で、深さは0.5mである。主軸方位はN-32°-Eである。南隅では南西方向へ縦長く溝状に延びている。長さ1.64m、幅が0.4m、深さは0.3mほどで、遺構に近い北側の方が4cmほど深くなる。遺物は常滑産広口壺の口縁部から肩部にかけての破片が出土した。

SK306（第131・136図）

東区の南東端に位置する方形竪穴状遺構である。南西側にSK421が重複するが、新旧関係は不明である。一辺2.02m×2.24mのはば正方形で、深さは0.74m、底面は水平である。主軸方向はN-18°-Sである。遺物は龍泉窯系青磁碗の破片が出土した。



第131図 方形堅穴状遺構・土坑(2)

SK421 (第131図)

20M-32に所在する方形土坑である。SK306と切り合う。南北に長い方形で長辺1.0m、短辺0.8m、深さ1.5m。出土遺物はない。

SK307 (第131・139図)

20M-21・31に所在する。不整形で、長辺1.6m、短辺0.9m、深さ0.4mを測る。遺物は砥石が1点出土した。

SK312 (第131・137図)

20L-39、20M-30に所在する南北2基の方形土坑が切り合うものである。南側の土坑には底面に1基、南角に2基のピットがある。北側の土坑は北西から南東方向に長い方形で、長辺1.6m、短辺1.4m、深さ0.7m。南側の土坑は北東から南西に長い方形の土坑で、長辺1.5m、短辺0.5mである。遺物は常滑産片口鉢が出土した。

SK313 (第131図)

東区の中央部から少し南寄りに位置する方形土坑である。北側及び東隅にはピットが重複しており、北側のピットはSB003の柱穴である。規模は長辺2.1m、短辺1.54m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

SK314 (第131図)

20M-30・40に所在する方形土坑である。SK315に切られる。西壁に方形の土坑が2基重複する。北東から南西に長い方形で長辺1.2m、短辺1.0m、深さ0.7mを測る。出土遺物はない。

SK315 (第131図)

20M-40に所在する方形土坑である。SK314・316を切っている。北東から南西に長い方形で、長辺1.7m、短辺1.2m、深さ0.9mを測る。出土遺物はない。

SK316 (第131図)

20M-40に所在する方形土坑である。SK315に切られる。また東西に土坑が1基ずつ切り合う。北東から南西に長い方形と思われ、長辺0.5m以上、短辺0.9m、深さ0.6mを測る。東側に重複する円形土坑は径0.3m、深さ0.4mである。西側に重複する円形と思われる土坑は径1.2m、深さ0.5mである。出土遺物はない。

SK317 (第131図)

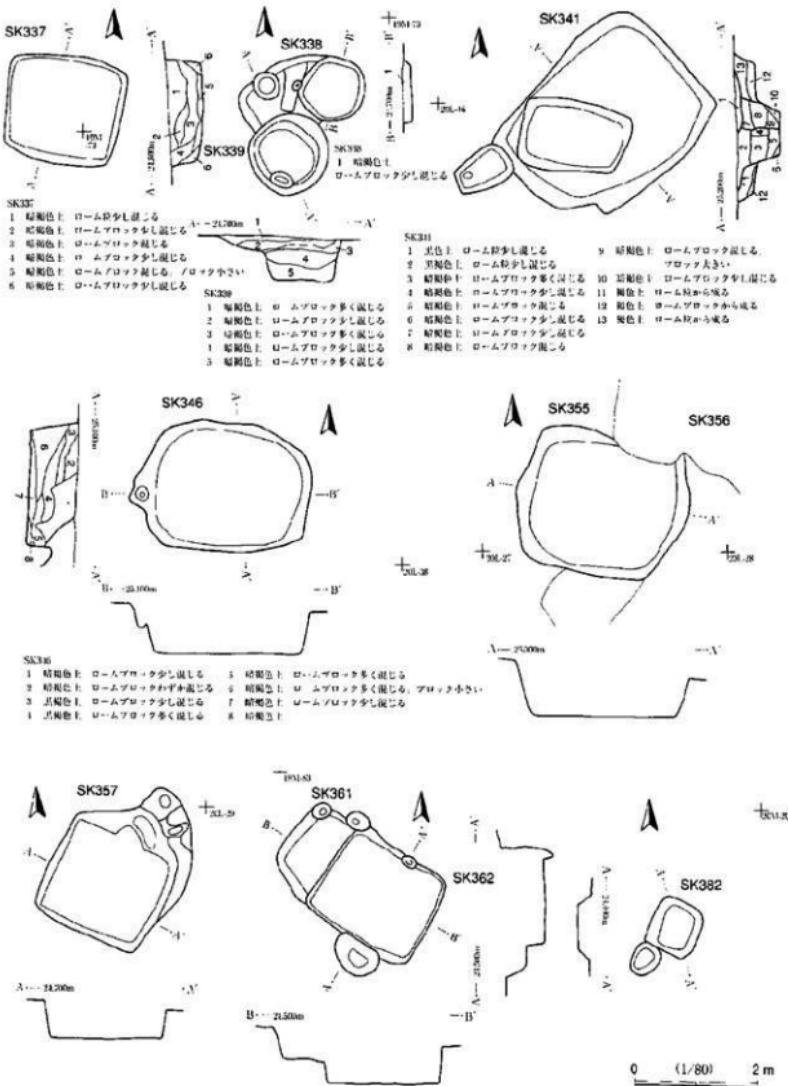
東区南側の土壘Aの直近に位置する方形堅穴状造構である。南東及び南西側にピットが重複し、北西側の底面にもピットが一基あるが、南東と底面のピットはSB003の柱穴である。新旧関係はSB003よりこの造構の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、長辺2.86m、短辺2.20m、深さは0.52mである。主軸方向はS-11°-Nである。

SK318 (第131・136・138図)

20M-30・31・40・41に所在する方形土坑である。南北方向に長い方形で、長辺1.2m、短辺0.9m、深さ0.2mを測る。底面の東隅のピットは深さ0.1m。遺物は龍泉窯系青磁碗の破片及び刀子1点が出土した。

SK319 (第131・139図)

19M-91に所在する。北側で円形の土坑と切り合う。南北に長い指円形で、長径1.6m、短径0.8m、深さ0.2m。北隅に1基、南隅に2基ピットがあり、北隅のピットは深さ0.7mである。遺物は砥石が1点出土した。



第132図 方形堅穴状遺構・上坑（3）

SK321（第131図）

19M-82に所在する方形土坑である。北東から南西に長い方形で、長辺1.3m、短辺0.9m、深さ0.3mを測る。出土遺物はない。

SK337（第132図）

東区北東側の土壠CとSD026の直近に位置する方形堅穴状遺構である。一辺が1.9m×1.8mで、深さは0.6mである。主軸はN-6°-Eである。底面には柱穴等の施設は確認されず、覆土中にはハードロームブロックが全層にわたって混入していた。

SK338（第132図）

19M-72に所在する不整円形土坑である。SK339と重複する。3基以上の土坑が切り合ったものである。東側の上坑は円形で径1.0~1.1m、深さ0.1mである。西側の大形の土坑は不整形で、南北1.0m以上、東西1.2m以上、深さ0.2mである。東側のピットの深さは0.3mである。小形の土坑は円形で、径0.4m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

SK339（第132図）

19M-72に所在する不整円形土坑である。SK338と切り合う。円形で径1.3m、深さ0.7mである。南壁のピットは深さ0.1mである。出土遺物はない。

SK341（第132図）

東区南西側の上壠Aと溝（SD025）の直近に位置する方形堅穴状遺構である。南側にはこの遺構よりも新しい土坑が重複しており、南西隅にも1基、僅かに重複した土坑が所在している。一辺3.1m×2.5mの長方形で、深さは0.3mである。南東側はやや張り出す。主軸はE-45°-Nである。遺構内に重複している土坑は一辺が1.8m×1.2mの長方形で、底面はこの方形堅穴状遺構よりもさらに0.4m深く、確認面からは0.7mである。南西隅の土坑は0.9m×0.64mの長方形で、深さは0.3mである。出土遺物はない。

SK346（第132図）

東区南西側の上壠Bから8m内側に位置する方形堅穴状遺構である。すぐ南側に隣接して地下式坑（SK344）が所在し、SK344より古い。一辺3.0m×2.16mの隅丸方形で、深さは0.8mである。主軸方位はほぼ東西方向である。底面には柱穴等の施設は検出されなかった。出土遺物はない。

SK355（第132図）

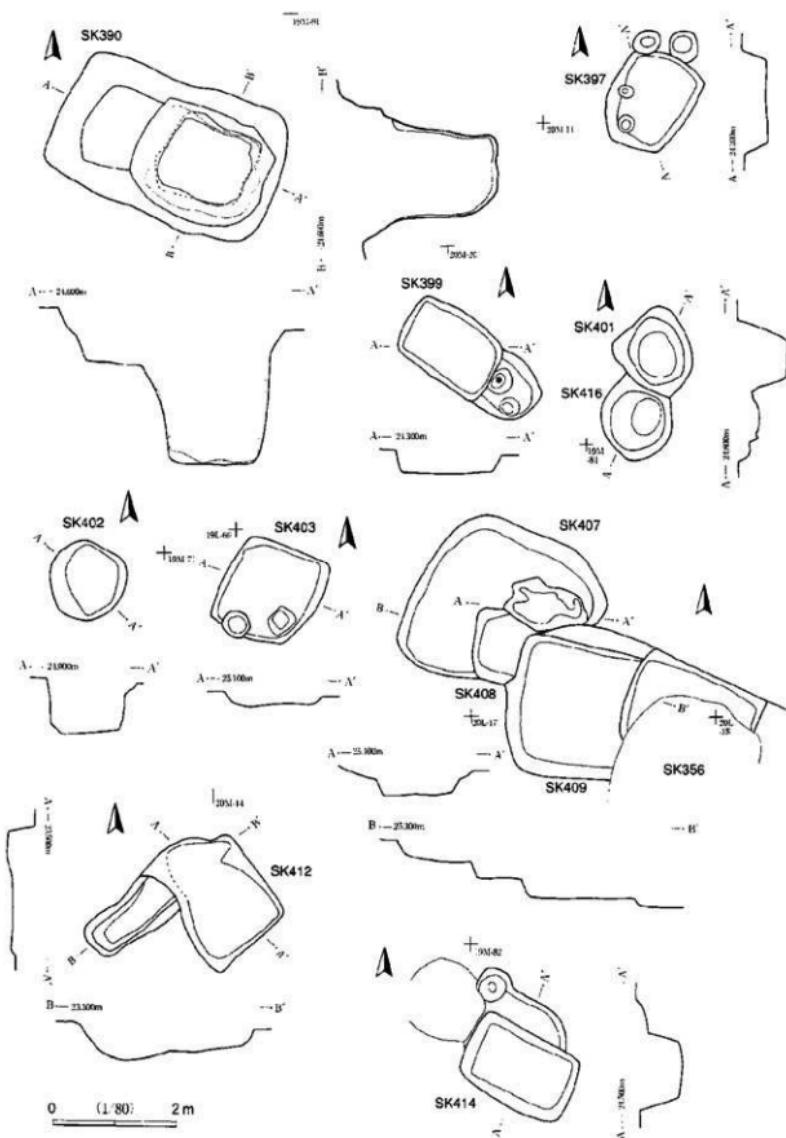
東区南西側にあり、SK346から2mほど北寄りに位置する方形堅穴状遺構である。北側は地下式坑（SK356）が重複し、南側でも土坑が1基重複する。平面形は正方形に近く、一辺が2.75m×2.3m、深さは0.8mである。重複する土坑との新旧関係は不明である。底部施設は検出されなかった。出土遺物はない。

SK357（第132図）

東区中央から少し南西に寄った所に位置し、北側で008横列の柱穴が隣接する。この土坑は平面形は正方形にちかく、北側の壁の中央がカマボコ状に張り出している。規模は一辺が2.0m×1.84mで、深さは0.6m、主軸はN-25°-Eである。出土遺物はない。

SK361（第132図）

19M-83に所在する方形土坑である。南東側はSK362、北側隅と北東壁にピットが1基ずつ重複している。遺存する北西壁は1.2m、深さ0.5mである。出土遺物はない。



第133図 方形堅穴状遺構・土坑(4)

SK362 (第132図)

東区北東部の溝 (SD026) 付近に位置する方形堅穴状遺構である。規模は長辺1.9m, 短辺1.7m, 深さは0.64mである。北西側はSK361, 南側に十坑1基が重複する。北壁の中央からやや東に寄った壁には柱穴と考えられるピットが1基ある。このピットは径0.25m, 深さ0.16mである。出土遺物はない。

SK382 (第132図)

20L-29に所在する方形土坑である。南西隅で土坑と重複する。北東から南西に長い方形で長辺0.9m, 短辺0.8m, 深さ0.2m。出土遺物はない。

SK390 (第133図, 図版26)

19M-90に所在する粘土貼土坑である。北西から南東に長い方形で、長辺1.9m, 短辺1.1mを測る。西側の深さは0.5mで、東側は方形に深く掘られている。規模は長辺2.2m×短辺1.9m, 深さ1.10mを測る。壁面と底面には全体に黄白色の粘土が貼り付けられていた。粘土の厚さは2~8cmで、底面には壁面より厚く粘土が貼られていた。出土遺物はない。

SK397 (第133図)

20M-01・11に所在する方形土坑である。北壁で2基の土坑と切り合う。北東から南西に長い方形で、長辺1.4m, 短辺1.4m, 深さ0.4m。底面の西側にピットがあり、深さは北側から0.9m, 0.3mを測る。出土遺物はない。

SK399 (第133・136・141図)

20L-29, 20M-20に所在する。2基の方形土坑が切り合ったものである。北西側の土坑は北西から南東に長い方形で、長辺1.6m, 短辺1.1m, 深さ0.4mである。南東側の土坑も北西から南東に長い方形で、長辺1.0m以上、短辺1.0m, 深さ0.2mである。底面にピットが2か所あり、北側のピットは径0.4m, 深さ0.3m、南側のピットは径0.3m, 深さ0.5mである。遺物は龍泉窯系青磁碗の体部破片、治平通寶が1点出土した。

SK401 (第133図)

19M-71に所在する不整円形土坑である。SK416と切り合う。径1.4m, 深さ0.9mを測る。出土遺物はない。

SK416 (第133図)

19M-71・81に所在する不整円形土坑である。SK401と切り合う。円形で径1.2m, 深さ0.4mを測る。出土遺物はない。

SK402 (第133図)

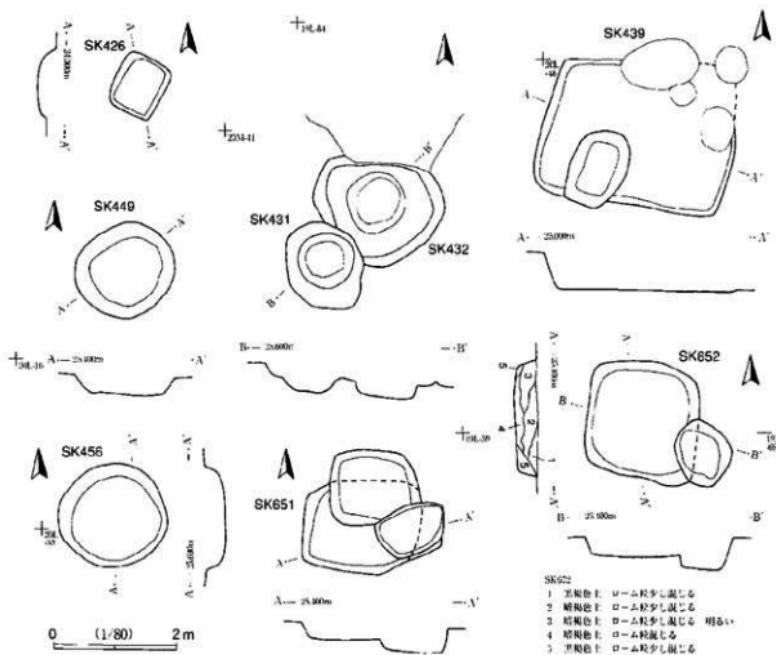
19M-60・70に所在する不整円形土坑である。径1.3m, 深さ0.9mである。出土遺物はない。

SK403 (第133図)

東区北部に位置する方形堅穴状遺構である。南東隅が張り出す、やや変形した四角形を呈するもので、規模は一辺1.6m×1.6m, 深さ0.16mほどである。南側には柱穴状のピットが2基所在するが、この遺構に伴うかどうかは不明である。出土遺物はない。

SK407 (第133図)

東区西部端の上界B、溝 (SD026) の近くに位置する方形堅穴状遺構である。南西側でSK408・409と重複する。推定で一辺が2.8m×2.7mの方形で、深さは0.20~0.25mを測る。出土遺物はない。



第134図 方形堅穴状遺構・土坑（5）

SK408（第133図）

20L-07に所在する方形土坑である。SK407・SK409、北東側で遺構番号の付されていない土坑と切り合う。南北から少し東へ傾いた方形と思われ、南北方向の一辺が1.2m、深さ0.3mである。北東側の土坑の深さ0.4mである。出土遺物はない。

SK409（第133図）

東区西部端の上塙B、溝（SD026）付近に位置する方形堅穴状遺構である。北西側でSK407・408と重複し、南東側でSK356と重複する。規模は、推定で一辺が2.4m×2.2mの方形で、深さは0.65mである。主軸方位はほぼ東西方向である。また、東側にももう1基方形堅穴状遺構が存在していたと推定され、そちらは推定で一辺2.16m×1.6mの方形に近い形状で、深さは0.7mで、こちらの底面はSK409よりもやや深い。出土遺物はない。

SK412（第133図）

東区東端の調査範囲の境界付近に位置する方形堅穴状遺構である。地形的には西から東に向かって緩やかに傾斜して下がる。一辺2.06m×1.56mのやや不整形の方形で、深さは0.3mと比較的浅い。北西側には

南西へ延びる細長い土坑が1基重複している。出土遺物はない。

SK414 (第133図)

東区中央からやや北東寄りに位置する方形堅穴状遺構である。北西から南東へ向かう緩い傾斜地に立地する。遺構の北側は10cmほど地山を削平し、平坦に整地した痕跡を留めており、この周辺には遺構が集中している。北側は土坑と重複する。一辺1.9m×1.24mの長方形で、深さは0.5~0.56mである。底面は平坦ではなく中央がやや窪んでいる。出土遺物はない。

SK426 (第134図)

20M~40Mに所在する方形土坑である。北東から南西に長く、長辺1.0m、短辺0.8m、深さ0.3mを測る。出土遺物はない。

SK431 (第134図)

19L~84・94に所在する不整円形土坑である。SK432と切り合う。北西から南東に長い椭円形で、長径1.5m、短径1.3m、深さ0.5mである。出土遺物はない。

SK432 (第134図)

19L~84・94に所在する不整円形土坑である。SK431と切り合う。東西に長い不整円形で長径2.1m、短径1.8m前後、深さ0.7m。出土遺物はない。

SK373 (第134図)

20L~48に所在する方形土坑である。SK439と切り合う。北東から南西に長い方形で長辺1.3m、短辺0.8m、深さ1.1mである。出土遺物はない。

SK439 (第134図)

東区の南にあたり、土塁Aの直近に位置する方形堅穴状遺構である。遺構内の東壁際と北東隅のピットはSB003の柱穴、南西側にはSK373が重複する。北壁にも別の土坑が重複している。一辺3.8m×2.5m、深さは0.6mである。出土遺物はない。

SK449 (第134図)

20L~06に所在する不整円形土坑である。北東から南西にやや長い椭円形で、長径1.6m、短径1.5m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

SK456 (第134図)

20L~24・34に所在する不整円形土坑である。円形で径1.7m、深さ0.3m。出土遺物はない。

SK651 (第134図、図版26)

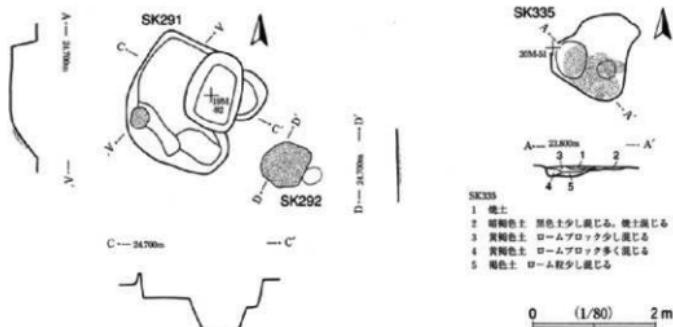
東区北西端にあって、SD026(溝)がほぼ直角に曲がる場所の直近に位置する方形土坑である。3基の土坑が重複しており、北東隅に重複している土坑より古い。東壁の土坑との新旧関係には不明である。推定であるが一辺が1.9m×1.6mの方形で、深さは0.26mである。底面は硬化している。出土遺物はない。

SK652 (第134図、図版26)

東区北西端にあって、SK651のすぐ南側に隣接して位置する方形堅穴状遺構である。東壁に土坑が1基重複している。一辺1.9m×1.9m、深さは0.4mである。底面は硬化している。出土遺物はない。

(7) 焙土遺構

SK291 (第135図)



第135図 居館跡内焼土遺構

東区中央部からやや北東寄り、遺構の密集する場所に位置する。北東隅には土坑が重複する。平面形は北東から南西に長い不整な方形で、南壁下の底面は階段状を呈する。長辺2.1m、短辺1.8m、深さ0.5mである。西側隅で焼土を検出した。土坑内で火を焚いたものか、単に焼土を廃棄したものは不明である。出土遺物はない。

SK292（第135図）

SK291の東側に位置する。不整形で一辺0.7m×0.8m、深さ0.1mを測る。焼土は確認面で検出された。出土遺物はない。

SK335（第135図）

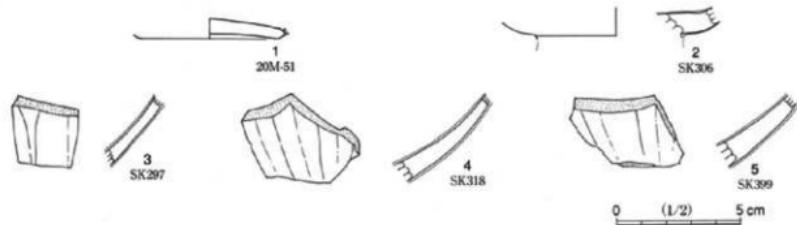
東区南東端の土塁Aの内側に位置する。SB003の柱穴が重複する。規模は北西から南東に長く、長径1.9m以上、短径1.1m、深さ0.2mである。南側に焼土塊、山砂塊と焼土粒が散った範囲が見られた。出土遺物はない。

（8）出土遺物（第136～141図、図版77～79）

第136図は中国陶磁器を図示した。

1は白磁皿の底部破片である。内外面とも施釉されることから白磁皿IX-1類（13世紀代）にあたるものである。内面体部と底部との境には弦線状の段を有する。底径5.6cm、現存高1.85cmである。胎土は灰白色で黒色の粒子を含む。釉はやや青みを帯びた灰白色である。

2～5は龍泉窯系青磁碗である。2はSK306から出土した底部から体部下端の破片で、外面は無文のものである。内面底部と体部との境には段を有する。胎土は灰色、釉はオリーブ灰色である。3～5は鎌倉弁文碗である。3はSK297から出土した体部破片で、幅の広い片切彫りの鎌倉弁をもつが、鎌は不明瞭である。胎土は灰色、釉はオリーブ灰色である。4はSK318、5はSK399から出土した体部下半の破片で、釉が厚いため鎌は不明瞭である。共に胎土は褐色がかった灰色である。釉は青みを帯びた明緑灰色で、内外面とも貫入が見られる。



第136図 居館跡内出土青磁・白磁

第137図に図示した陶器は全て常滑産である。

6は片口鉢Ⅰ類の体部下半から高台部の破片で、内面は磨耗が著しい。体部外面下端には回転ヘラケズリが1段施される。高台は貼り付けによるもので断面三角形であるが、部分的に変形している。高台径10.6cm、現存高5.75cmで、胎土は灰色で、砂粒を含む。

7～18は片口鉢Ⅱ類である。7は土星A区から出土したもので、口縁部から体部の破片である。口縁部はヨコナデによって仕上げられ、端部は上方に突出し沈線状を呈する。体部外面は縱方向にヘラナデが施され、部分的に横方向のナデが入る。体部内面は横方向のナデによって仕上げられている。口径28.4cm、現存高は11.4cmである。胎土は灰黄褐色で、砂粒を含み、黒色の鉄分の吹き出しが多く見られる。6a型式（1250～1275年）にあたるものである。

8・9は口縁部から底部付近で、ともに7型式（1300～1350年）にあたるものである。9はSK312から出土したものである。共に口縁部から体部内面はヨコナデ。体部外面は縱方向のヘラナデが施される。口縁端部は角形で端面に沈線が巡り、内面体部から底部の境には段を有する。9は体部内面に輪積痕を消すために指頭による押圧を施している。8の底部は無調整である。8は口径20.0cm、底径10.2cm、器高6.5cm、9は口径18.85cm、現存高5.1cmである。共に胎土は淡赤褐色で、内面には降灰釉が掛かる。10は口縁部から体部の破片で、8～9型式（1350～1450年）にあたるものである。口縁端部は角形で、端面は平坦で弱く外側に張り出す。口縁部から体部内面はヨコナデ、体部外面は縱方向のヘラナデが施される。口径32.1cm、現存高5.35cmである。胎土は淡赤褐色で、砂粒・石を含む。

11・12はともに注ぎ口が遺存するもので、口縁部の端面が外側に張り出す。これらは9型式（1400～1450年）にあたるものである。口縁部と体部外面の境の段は口縁端部を外側につまみ出すようにヨコナデを施した際に生じたものである。体部外面はヘラナデ及び指頭による押圧、内面はナデが施される。注ぎ口は口縁部を外側に張り出し、口縁端部の両端をつまみ上げて成形するもので、幅は両端が遺存する12で約4.5cmである。12は遺存する注ぎ口は2か所であるが、3か所を持つものである可能性が高い。また、11の注ぎ口内面及び12の同じく1か所には径約8mmの円形の押印が施されている。11は口径34.1cm、現存高6.6cm、12は口径34.0cm、現存高7.7cmである。ともに胎土には淡赤褐色・砂粒・小石を多く含む。

13～15は10型式（1450～1500年）にあたるもので、口縁端面が外側及び内側に張り出すものである。13・15は注ぎ口付近の破片で、体部外面は縱方向のヘラナデが施される。体部内面は、13は横方向のナデ、15は斜め方向のナデが施される。13は推定口径35.2cm、現存高4.75cm、15は推定口径24.4cm、現存高

27.4cmである。胎土はともに灰褐色ないしは黒褐色で、砂粒を多く含む。14は口縁部から体部下端の破片で、SK263から出土したものである。体部外面は縱方向のヘラナデ、内面は斜め方向のヘラナデが施され、外面は指窪による押圧が加えられているため判然としないが、共にハケ目状の痕跡をもつものである。体部外面下端はヘラケズリが施される。口径35.1cm、現存高11.6cmで、胎土は暗赤褐色で砂粒、小石を多く含む。

16~18は体部から底部であり、いずれも内面は使用による磨耗が著しい。16はSK309から出土したもので、体部外面はヘラによるナデもしくはケズリ、内面はヨコナデが施される。底部は無調整である。内面は降灰釉が掛かる。底径18.9cm、現存高5.4cmで、胎土は淡褐色である。17は体部外面には縱方向、内面は横方向のヘラナデが施される。底部はナデが加えられている。底径13.7cm、現存高8.55cmである。胎土は淡赤褐色で砂粒を含み、黒色の鉄分の吹き出しが多く見られる。18はSD026から出土したもので、体部外面は縱方向のヘラナデ、内面の調整は降灰釉により判然としない。底径13.0cm、現存高5.3cmである。胎土は赤褐色で、砂粒を多く含む。

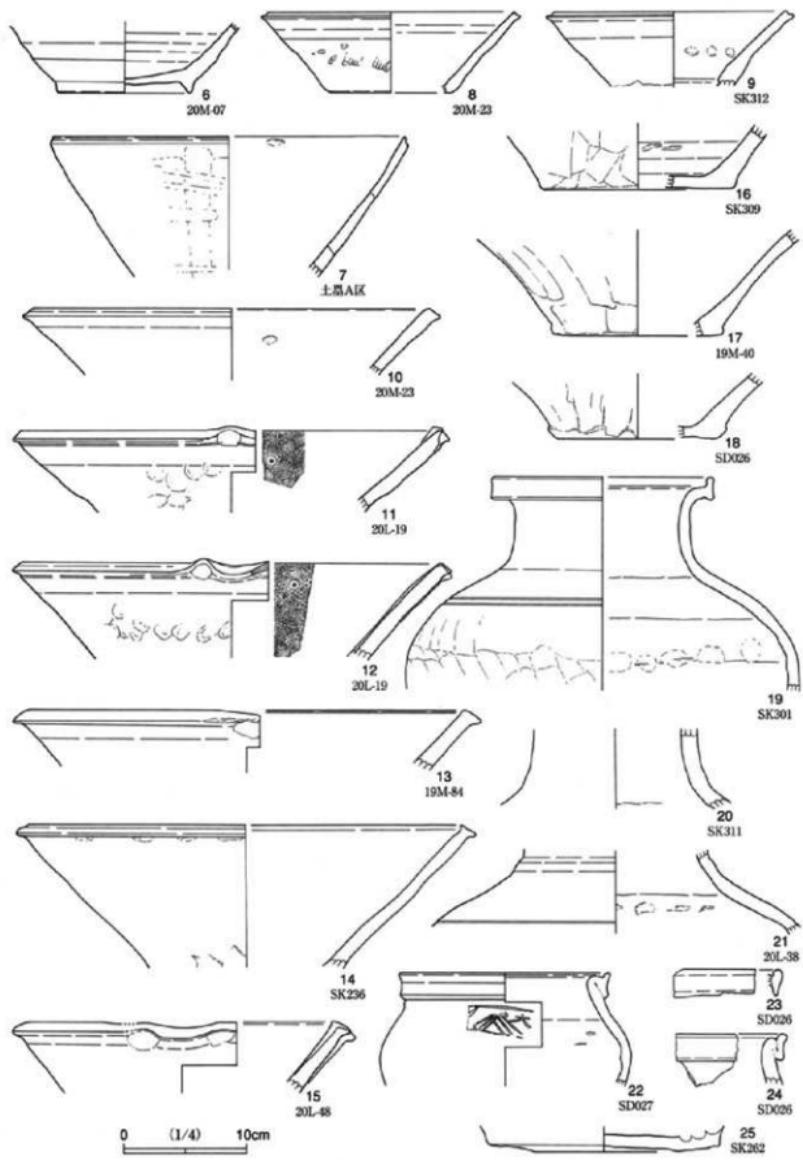
19~21は長頸形の広口壺である。19はSK301から出土したもので、断面形が受け口状の口縁帯をもつもので、5~6a型式（1220~1275年）のものである。肩部には櫛描きによる2条の平行沈線が巡る。口縁部から頸部は内外面ともヨコナデ、外面は縱方向のナデを施した後に肩部は横方向のナデが加えられる。胴部内面は粗いヨコナデが施される。口縁部及び外肩部付近には部分的に降灰釉が掛かる。口径17.5cm、現存高17.1cmである。胎土は暗赤褐色で、器表面には黒色の鉄分の吹き出しが多く見られる。20はSK311から出土した頸部の破片で、5~6a型式のものである。胎土は暗赤褐色である。21は頸部から肩部にかけての破片で、6a~7型式（1250~1350年）のものである。外面はヨコナデが施され、遺存部分の下端にはヘラ描きによる沈線が1条見られる。内面には頸部はヨコナデ、肩部はナデが施される。外面は降灰釉が厚く掛かる。胎土は灰色である。

22は不識壺と呼ばれる、壺をごく小形にしたような広口壺で、SD027から出土したものである。折り返しで作られた口縁帯が頸部に寄着したもので、9型式にあたるものである。外面はヨコナデが施され、肩部には押印が1か所施文されている。内面は口縁部から肩部はヨコナデ、胴部は横方向のナデが施されている。口径17.0cm、現存高9.3cm、胎土は赤褐色で、砂粒を含む。

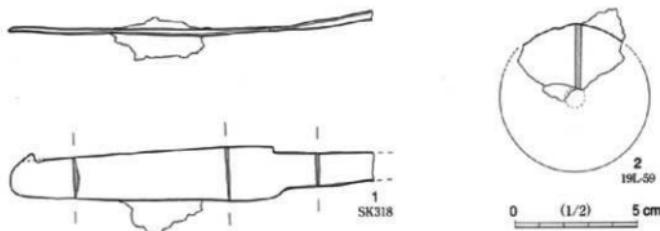
23・24は壺もしくは広口壺の口縁部付近の破片である。23はSK026から出土した。下端が垂下した受け口状の口縁帯部分で、5~6a型式にあたるものである。上端部付近には降灰釉が掛かる。胎土は暗赤褐色である。24は折り返しで作られた口縁帶付近で、9型式にあたるものである。上端部付近及び外面には降灰釉が掛かる。胎土は暗赤褐色である。25はSK262から出土した壺もしくは広口壺の底部である。外面は横方向のナデ、内面はナデが施され、胴部との接合部分付近は横方向のナデが加えられる。底部は無調整である。器表面は暗赤褐色で、底部外面は選元が不完全なため明褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。第138回は鉄製品を図示した。

1は刀子で、茎端部を欠損する。現存長14.9cm、幅2.2cm、刃部長11.2cm、重量24.77gである。2は紡錘車の破片で、復元径6.0cm、厚さ0.2cm、復元孔径0.8cm、重量8.43gである。

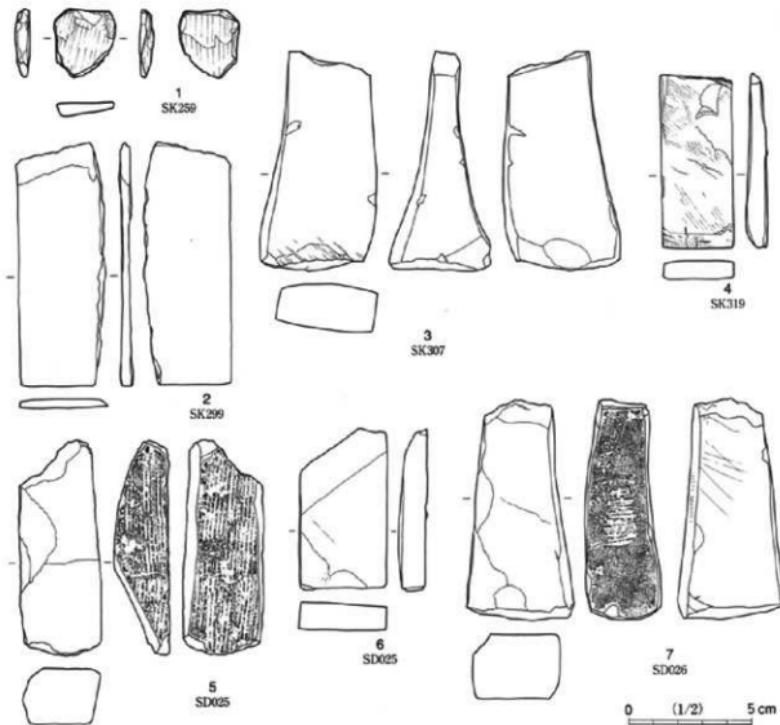
第139~140回は居館跡内出土の砥石である。この内、1~7は居館跡内の遺構から出土したもので、1~4は土坑内、5~7は溝内からの出土である。5~7には櫛齒状工具痕が残り、7には被熱した痕跡が残る。8~15は居館跡内の遺構出土の砥石である。



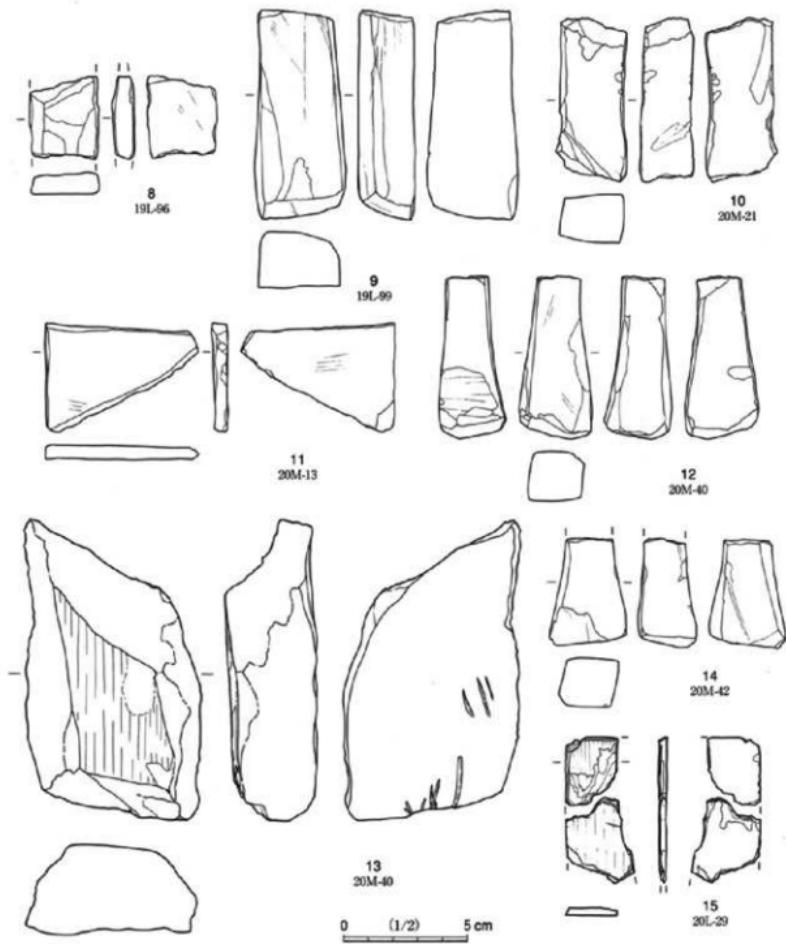
第137図 居館跡内出土陶器



第138図 居館跡内出土鉄製品

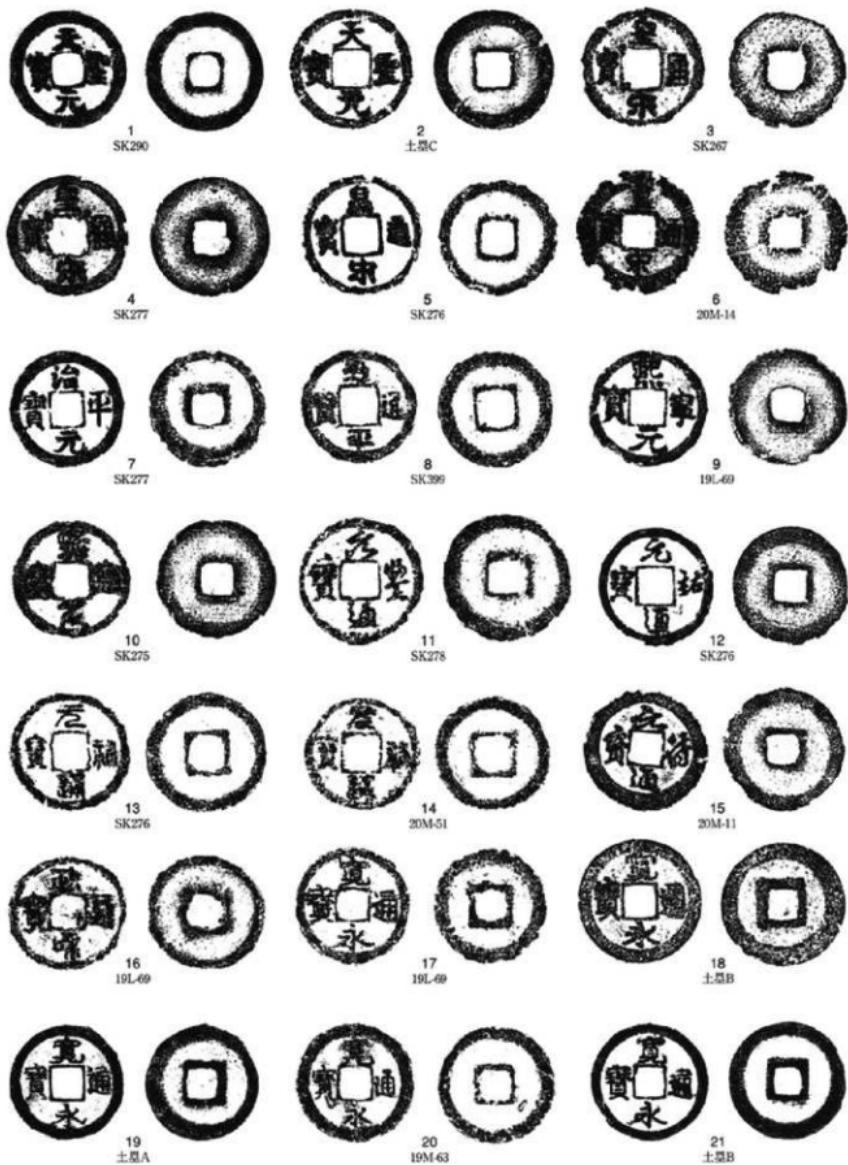


第139図 居館跡内出土砥石（1）



第140図 居館跡内出土銭石（2）

第141図は居館跡内出土銭貨で、21枚が出土した。計測表は第19表に掲げた。居館跡内の土坑およびグリッドから出土した銭貨は、その初鑄が北宋時代の12世紀の前葉から13世紀の初頭のものである。また、寛永通宝も5枚出土したが、そのうちの2枚が古寛永、3枚が新寛永である。



第141図 居館跡内出土銭貨

第16表 中世居館跡出土砥石一覧表

擇回 番号	番号	遺構・出土地點 遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
					cm	cm	cm	g	
22	1	SK259-0001	砥石	凝灰岩	2.80	2.30	0.6	4.19	
22	2	SK259-0002	砥石	凝灰岩	10.10	3.66	0.6	28.39	
22	3	SK307-0002	砥石	流紋岩	9.02	4.86	4.2	16079	
22	4	SK319-0001	砥石	凝灰岩	7.10	2.99	1.0	31.5	
22	5	SD025-0004	砥石	流紋岩	8.80	3.42	2.4	8.024	脚踏状工具
22	6	SD026-0005	砥石	凝灰岩	6.65	3.65	1.2	41.09	
22	7	SD026-0006	砥石	流紋岩	9.05	4.45	3.1	158.25	脚踏状工具痕,被擦
23	8	19L96-0002	砥石	流紋岩	3.36	2.88	1.0	12.20	
23	9	19L99-0001	砥石	流紋岩	8.53	3.75	2.3	109.42	
23	10	20M21-0001	砥石	流紋岩	6.67	2.91	2.2	58.97	被擦
23	11	20M13-0001	砥石	凝灰岩	4.45	6.25	0.7	20.58	
23	12	20M19-0001	砥石	流紋岩	6.61	3.05	2.8	51.29	
23	13	20M40-0001	砥石	砂岩	12.20	7.25	3.8	419.23	
23	14	20M42-0002	砥石	流紋岩	4.31	3.13	2.4	39.01	
23	15	20L29-0001	砥石	粘土岩	6.25	2.80	0.3	5.67	

第17表 中世居館跡出土銭貨一覧表

擇回 番号	番号	遺構番号 出土地點	銭貨名	初鑄年	國・王朝名	直徑(mm)	重量(g)
						mm	
24	1	SK290	天聖元寶	1023年	北宋	24.53	2.17
24	2	上堀C	天聖元寶	1023年	北宋	24.61	1.85
24	3	SK267	皇宋通寶	1038年	北宋	23.72	2.09
24	4	SK277	皇宋通寶	1038年	北宋	24.67	2.44
24	5	SK2/6	皇宋通寶	1038年	北宋	24.00	2.82
24	6	20M-14	皇宋通寶	1038年	北宋	25.53	2.52
24	7	SK277	治平元寶	1064年	北宋	24.05	2.42
24	8	SK399	治平元寶	1064年	北宋	23.92	2.57
24	9	19L-69	熙寧元寶	1068年	北宋	24.35	2.61
24	10	SK275	熙寧元寶	1068年	北宋	24.41	2.59
24	11	SK278	元豐通寶	1078年	北宋	25.93	2.28
24	12	SK276	元祐通寶	1093年	北宋	21.00	2.87
24	13	SK276	元祐通寶	1093年	北宋	24.57	2.16
24	14	20M-31	元祐通寶	1093年	北宋	23.45	2.48
24	15	20M-11	元符通寶	1098年	北宋	24.85	3.13
24	16	19L-69	政和通寶	1111年	北宋	23.43	1.76
擇回 番号	番号	遺構番号 出土地點	銭貨名	種類	鑄造期	直徑(mm)	重量(g)
						mm	
24	17	19L-69	寃永通寶	古寃永	1636~1667	23.75	2.81
24	18	上堀B	寃永通寶	古寃永	1636~1667	25.93	2.96
24	19	上堀A	寃永通寶	新寃永	1697以降	23.54	2.22
24	20	19M-63	寃永通寶	新寃永	1697以降	24.11	1.91
24	21	上堀B	寃永通寶	新寃永	1697以降	24.25	3.08

3 墓域

SK001 (第142~145図、図版26~28・80・81)

墓域は居館跡の約25m東側に位置し、東側と西側を台地に挟まれて、南西に開口する谷頭近くの台地縁辺部に立地する。なお、墓域が検出された場所の谷の下部は松崎地区の調整池の緑地となる予定であるため未調査である。

墓域の範囲は11m×8mほどである。西から東南にかけて、台地斜面を南西に向かって緩く傾斜した斜面の上部を削って平坦面を作り出し、北側の台地上方では地山の斜面に幅1m弱のテラス状の段が設けられている。段の南側には「く」の字形にさらに1mほど一段下がった掘り込みがある。墓域内から検出された土坑は30基以上で、北側の段と東端に1基ある以外は南の谷側に集中してつくられ、重複したものも認められる。土坑の覆土中には焼土・炭化物・骨粉などが混入したものが多く、土坑の周辺からも骨粉の分布が認められたことから土坑墓もしくは火葬墓と考えられる。P11・P23からは火葬人骨が納められた陶器の罐骨器、P16からは棺として用いられたと思われる陶器の甕が出土した(第143図)。このほか人骨と思われるものが14基の土坑から見つかっているが、人骨を採取することができたのは上記のP11・P23のみである。

出土遺物 (第144・145図: 80・81)

遺物は、上記の人骨・陶器の他に図示はしなかったが板磚片と考えられる板状の径5cm未満の小石片が9点出土した。これらの板状の石片には文字等の痕跡は確認できなかった。石の種類は△が縫泥片岩、▲が黒雲母片岩である。また、他に石製品としては砾石が2点出土した。

第144図に図示したのは骨蔵器及び棺として用いられた陶器である。1はP11から出土した骨蔵器で、正位の状態で検出された。常滑産の玉縁口縁甕で、5~6b型式(1220~1300年)にあたるものである。出土時には口縁部の一部が欠け、胴部上半を企囲する一条のビビが入っていた。高さ21.2cm、口径9.2cm、胴部最大径18.1cm、底径8.7cmで、暗赤褐色を呈する。口縁部は折り返して玉縁状に仕上げられている。外面は、肩部は回転ヘラケズリ、胴部はヘラナデと指ナデで調整する。肩部にはヘラ描きによる1条の沈線が施される。底部は無調整である。内面は、肩部は粗い指ナデ、体部は丁寧な指ナデで調整する。口縁部および肩部外面には灰釉が掛かる。2はP16から出土した常滑産の甕の胴部下半である。底部は円形に抜け落ちたように欠損している。底部の割れ口の状態を見ると内側から打ち欠いたものと判断され、土坑に埋置する以前に完全に丸く抜かれていたと考えられる。なお、底部は居館跡東区の遺構集中か所(19L-99グリッド)から出土した破片が接合しており、墓域と居館跡の関係を知る一つの手がかりとなると思われる。なお、この底部破片の内面には何らかの使用による磨耗が見られる。常滑産の甕の底径は19.3cm、現存高28.8cmで、内外面とも暗赤褐色を呈する。内面には輪積み痕が残る。外面はヘラナデ、内面は底部付近に回転ヘラナデが施される以外は、ヘラナデで調整している。

3はP23から出土した骨蔵器で、古瀬戸の灰釉四耳壺で、古瀬戸前Ⅱ期(13世紀前葉)にあたるものである。4の壺の胴部下半を伏せて蓋とし、底面からやや浮いた正位の状態で出土した。出土時には口縁部・耳・高台の一部が欠け、埋置後に土圧で肩部が割れ、下に抜け落ちていた。高さ23.5cm、口径8.7cm、胴部最大径17.9cm、底径7.7cmである。色調は内外面とも淡黄色で、肩部外面から頸部内面にかけてハケ塗りによる灰釉が薄くかかる。口縁部は折り返され玉縁状を呈する。胴部外面は回転ヘラナデで、内面は丁寧にヨコナデして輪積痕を消している。高台は貼り付けによるもので、直立気味である。耳は漸面形が

長方形で、上面にヘラによって刻線を入れ、1～5条の小突線を作り出している。

4はP23から出土した菅原産の底部から胴部下半の破片で、3の蓋として使われたものである。出土時には縦に二つに割れていた。現存高11cm、底径7.8cmである。表面はほぼ褐色で一部黄褐色、内面は暗灰褐色である。胎土中には黒色のスコリアが目立つ。外面は上半で縦方向のヘラナデが施され、ハケ状の工具痕が見られる。下半は横方向の回転ヘラケズリ、内面は横方向のココナデで輪積痕を消し凹凸を調整している。底部外面は無調整である。

5はP30およびその北側から破片で出土した梅瓶型の古瀬戸瓶口類の胴部である。撚引きによる平行沈線が見られることから、古瀬戸(前Ⅲ・Ⅳ期(13世紀中葉～後葉))にあたるものである。現存高19cm、胴部最大径20cmである。色調は内外面とも灰色で、器表面の肩部から胴部にかけていく灰釉がハケ塗りされるが、剥落が著しい。外面はヨコナデ、内面は、肩部は指頭による押圧、胴部はヨコナデが施され、枯土紐の輪積痕が顕著に認められる。

上記のP11・P23から出土した骨蔵器に納められていたのは、いずれも土が付着した火葬入骨のみである。遺存する人骨の量は骨蔵器の容量に比べて少ない。また、焼土や炭化材、灰等は見られなかつた。遺体が焼かれた後に骨を拾って骨蔵器に納められ、後に土砂が流入したものと思われる。人骨はいずれも全身骨のごく一部で碎片化しているため、今回は解剖学的な鑑定を依頼せず、簡単な観察結果と写真(図版81)を掲載することとした。

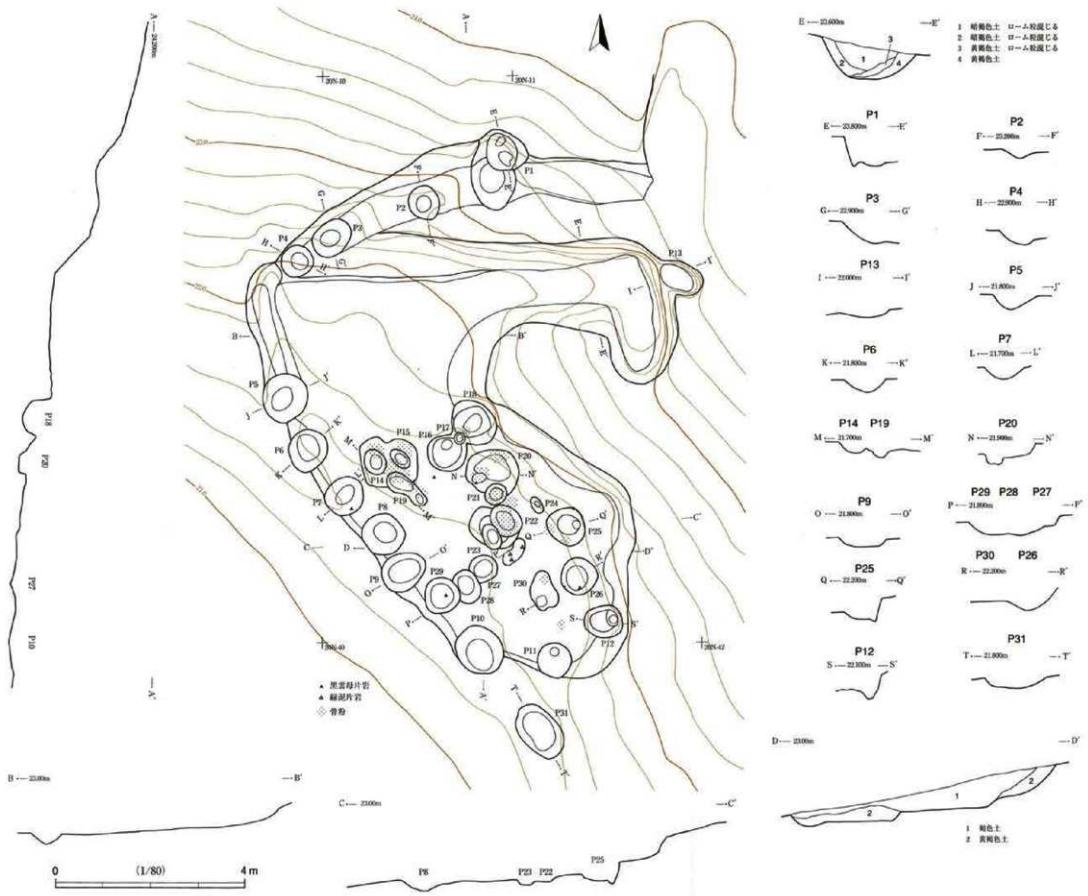
P11から出土した骨蔵器(第144図1)に納められた火葬入骨は総重量173.5gである。頭蓋骨片と四肢骨片がほとんどであるが、ほかに指または中手・中足骨や対骨の破片、脱落歯が少なくとも2個見られる。P23の火葬入骨と同様に火葬骨として遺存しやすい部位と考えられる。1体分の骨としては少ないが、成人的全身骨の一部であろう。骨のほとんどは黒く炭化しており、後述するP23の火葬入骨とは違って収縮や亀裂は認められない。むしろ一部は生焼けで後世に腐朽した可能性がある。遺体は比較的低温で焼かれたものと思われる。頭蓋骨はとても厚い。大腿骨または脛骨は頑丈である。

P23から出土した骨蔵器(第144図3)に納められた火葬入骨は総重量289.4gで、頭蓋骨片と四肢骨片がほとんどである。ほかに指または中手・中足骨や対骨の破片も見られた。これらは火葬骨として遺存しやすい部位と考えられる。1体分の骨としては少ないが、成人的全身骨の一部であろう。骨のほとんどは白色化し、収縮や亀裂、変形が著しい。これは軟部が付着した状態で比較的高温で燃成されたことを示している。詳細な部位同定を行っていないが、頭蓋骨の内板は縫合が閉じている箇所が多いようである。P11の火葬入骨に比べると頭蓋がきわめて薄く、四肢骨も草筋な印象である。

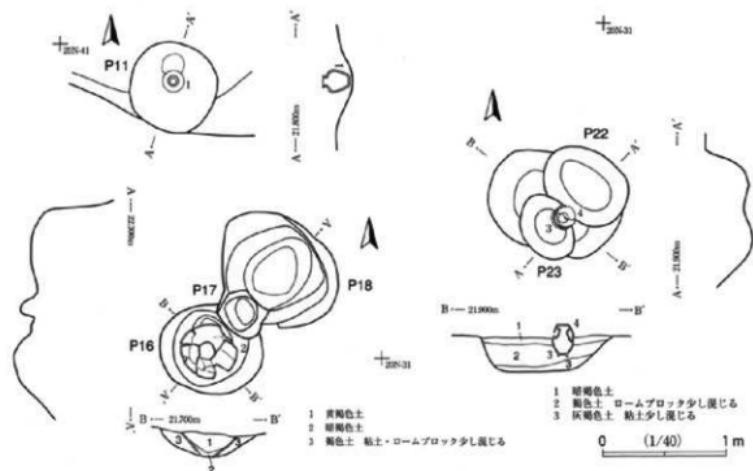
4 台地整形区画

SX012(第146～148図、図版28・82)

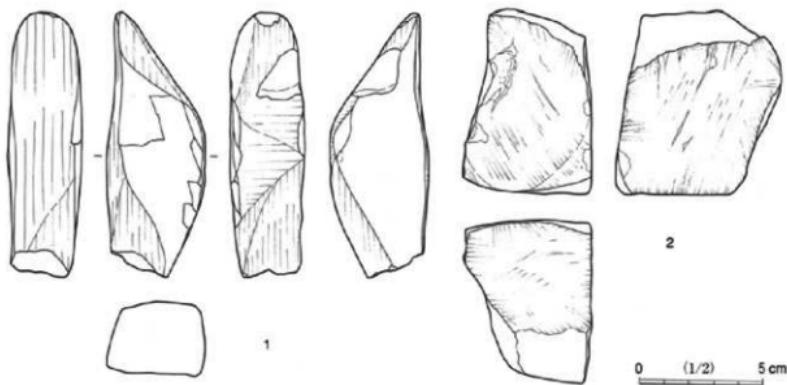
居館跡と同じ台地上の、約50m南西に位置する。南に突き出す台地の肩口付近に位置し、周囲から一段掘り下げて造られた方形の区画で、南側の谷津に面して緩く傾斜して低くなる側は底面が地表面に沿いついて開口するように整形されている。構造の土枠断面からは、自然堆積で埋まったことが分かる。南北に細長く、長さ11m、幅6m、最大深さ0.9mである。底面はほぼ水平で長さ10m、幅4mである。北端に正方形、南端に円形の土坑がある。北端の土坑は1辺2m、深さ0.2mで、底面中央に径0.4m、深さ0.4mのピットが1基ある。南端の土坑は径1.8m、深さ0.8mで断面形は擂鉢状を呈する。壁面の北から西にかけ



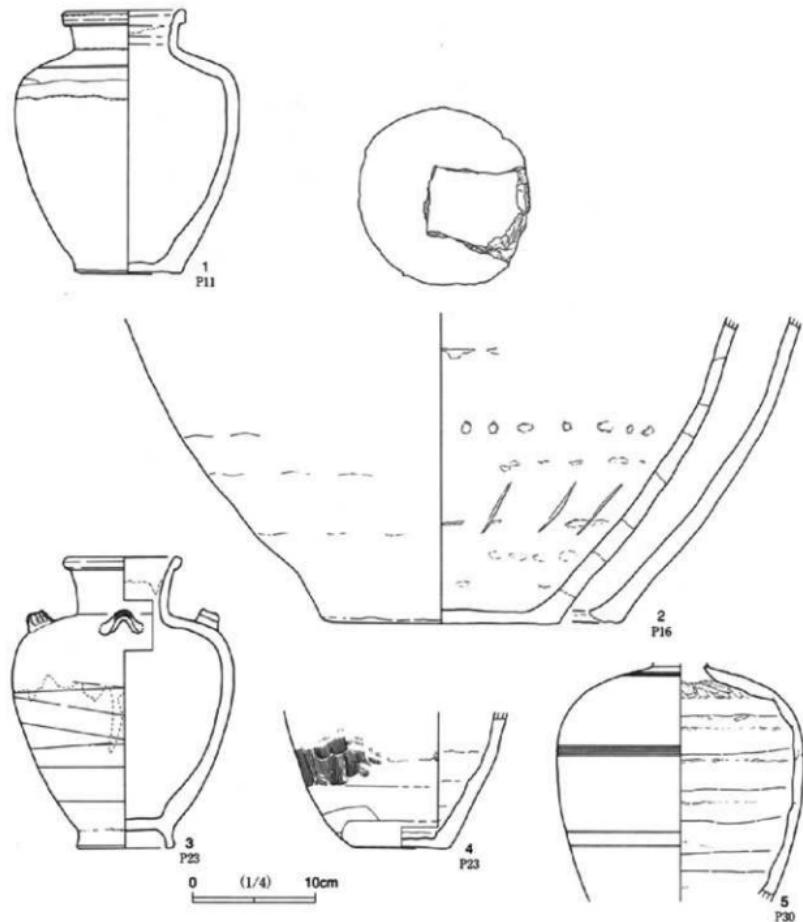
第142図 SK 001 墓域全体図



第143図 SK 001 墓域内土坑遺物出土状況



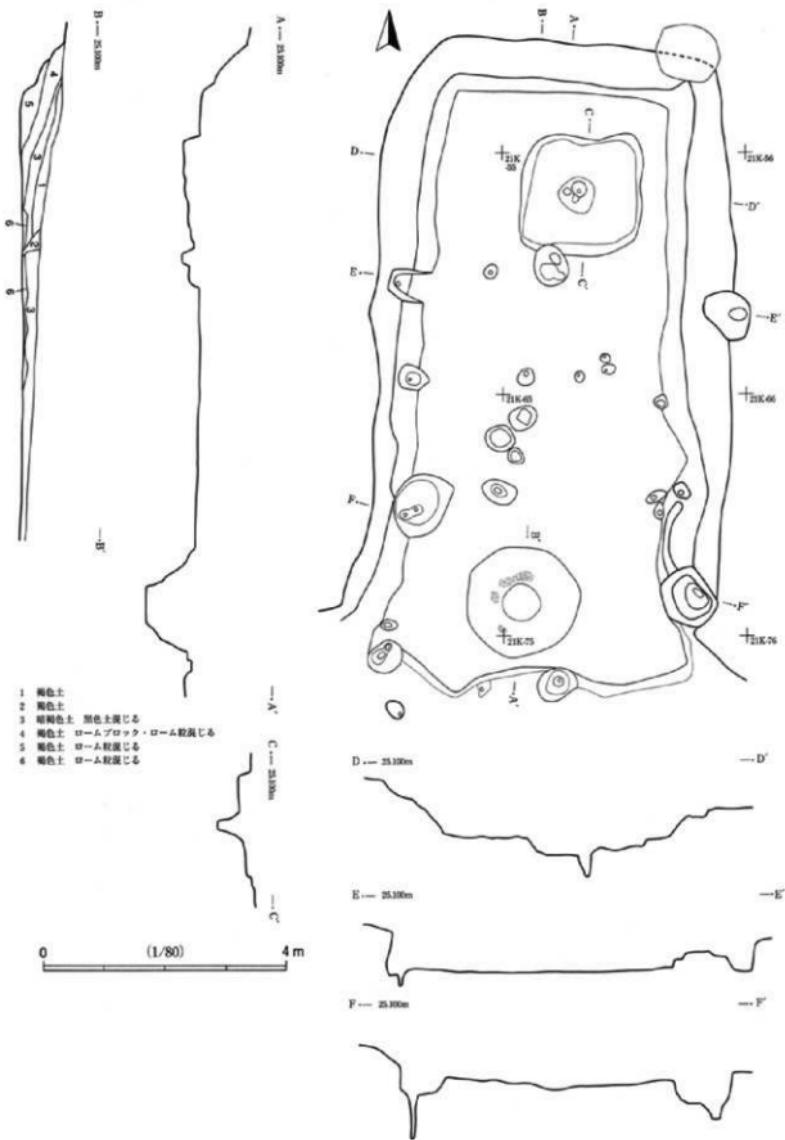
第144図 墓域内出土砥石



第145図 墓域内出土陶磁器

第18表 SK001(墓域)出土砾石一覧表

揮因 番号	遺構・出土地點 遺物番号	器種	石材	最大尺寸			重量 kg	備考
				最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm		
144 1	SK001-0019	砾石	流紋岩	10.80	4.05	3.1	154.97	
144 2	SK001-0018	砾石	砂岩	7.49	6.70	5.2	377.56	



第146図 SX 0 1 2 台地整形区画

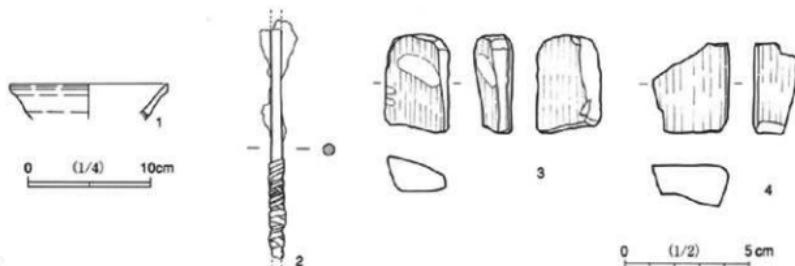
では半円を描くように焼土の散布が見られた。この他に見つかったピットのうちで大形のものは柱穴の可能性もあるが、整然とは並ばない。

出土遺物（第147・148図）

出土した遺物はわずかである。第147図は陶器・鉄錆・砥石を図示した。

1は山茶碗の口縁部から体部破片である。口縁端部はつまみ上げられ、鋸角に仕上げられる。口径12.6cm、現存高2.8cmで、灰白色を呈し緻密な胎土である。南部系尾張型山茶碗第7・8型式（13世紀中葉～14世紀前葉）のものである。2は鉄錆の茎で、両端を折損する。断面形は円形を呈し、下部に幅約2mmほど繊維状のものを巻きつけているのが観察される。現存長9.7mm、径0.45mm、重量6.91gである。

3・4は砥石である。第148図に図示した銭貨のうち1の皇宋通寶は造構内から出土したものであるが、2の永樂通寶は造構の東側に隣接するグリッドから出土したものである。



第147図 SX012台地整形区画出土遺物



第148図 SX012台地整形区画出土銭貨

第19表 SX012出土砥石一覧表

掲図 番号	番号	造構・出土地点 遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量
					cm	cm	cm	g
147	3	SX012-0014	砥石	流紋岩	4.00	2.65	1.4	17.49
147	4	SX012-0037	砥石	砂岩	3.70	3.10	1.7	27.4

SX020・SX021（第149・150図、図版28・82）

SX020は広い台地の南東へ傾斜する緩斜面を、標高24.0mの等高線に沿って地山を削り出した段とその段の東側を600mほど平坦に削り出した区画である。段はほぼ北東から南西方向に僅かに山側に膨らむ緩い弧状に削り出されており、削り出しの深さは0.2~0.4m、全長は32mである。区画内は土坑群から構成され、土坑は方形またはそれに近い形の大形のものと、小さな柱穴と思われるものとがあり、削り出しの段を抉るようにして掘っているものもある。方形土坑の辺の向きは、おおむねSX020の段の方向に平行であり、段を意識して掘られたことを示す。また、土坑には柱穴と思われる小土坑については、SX020の段の方向、もしくは段に対して直角に並ぶないかと検討したが整然と並ぶものは見出せなかった。

SX021はSX020の約5m南側に隣接する。SX020と同様に緩斜面を削り、台地斜面をほぼ南北に走る段と平坦面を作出したもので、区画内は土坑群から構成される。この隣接した台地整形区画は段の方向も互いに呼応しており、同時期かそれほど時間差のない時期の所産と考えられる。段は深さ0.5m、長さ17mの範囲で地山を削り出しており、SX020と同様に緩く山側に膨らむ弧線を描く。第149図で段の東側を開いた破線は、整形で作り出された平坦面に当たる範囲である。また、SX020の北端からは更に2号溝（第151図）が北北東へ約30mほど延びる。幅は広いところで0.8mで、深さは0.8mほどである。溝内からは遺物の出土は無かった。溝は、一部未調査であるが、直線的に延びている。台地整形区画との関係については、多くを語ることはできないが構築の位置や構築の方向などから類推すると何らかの関連があるものと考えられる。

以下、SX021・SX020の区画内に所在する土坑について述べる。

SK500（第152図）

ほぼ南北に長い隅丸方形で、長さ1.4m、幅1.0m、深さ0.5mである。

SK501（第152図、図版29）

北西から南東に長い方形で、長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.5mである。

SK502（第152図、図版29）

ほぼ東西に長い梢円形で、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.1mである。

SK503（第152図、図版29）

北西から南東に長い隅丸方形で、長辺1.5m、短辺0.8m、深さ0.4mである。

SK504（第152図、図版29）

SK503に隣接して所在する。北東から南西に長い方形で、長辺1.3m、短辺0.7m、深さ0.2mである。

SK505（第152図、図版29）

北東から南西に長い方形で、長辺1.4m、短辺0.7m、深さ0.3mである。

SK506（第152図、図版29）

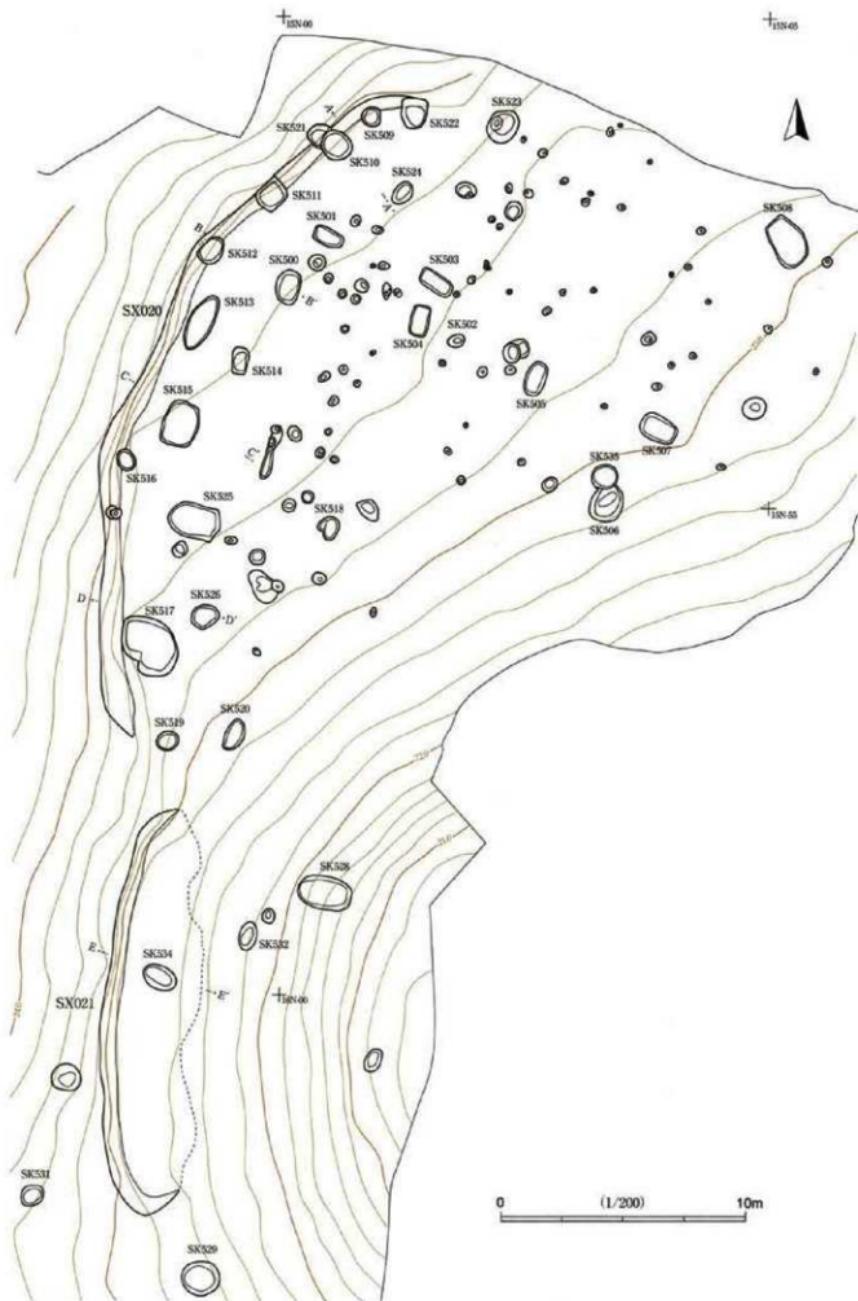
SK535と切り合う。南北に長い梢円形で、長径約1.5m、短径1.3m、深さ0.4mである。底面の中ほどが一段凹む。

SK507（第152図、図版29）

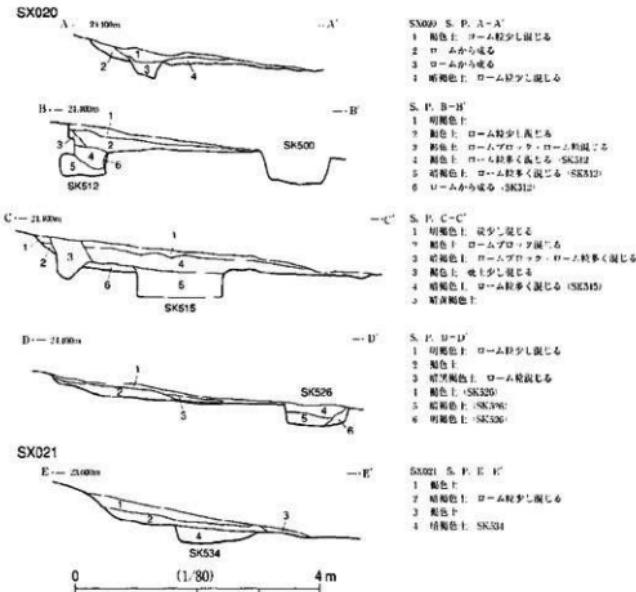
北西から南東に長い方形で、長辺1.5m、短辺0.9m、深さ0.5mである。

SK508（第152図）

北西から南東に長いほぼ方形で、長辺2.0m、短辺1.0m、深さ0.2mである。



第149図 台地整形区画（S X 0 2 0 · 0 2 1）平面図



第150図 台地整形区画 (S X 0 2 0 - 0 2 1) セクション

SK509 (第152図, 図版29)

整形区画の段と切り合う。円形で、径0.8m、深さ0.2mである。

SK510 (第152図, 図版30)

SX020の段に構築されたSK521と切り合う。ほぼ円形で、径1.1~1.2m、深さ0.4mである。

SK511 (第152図, 図版30)

段を掘り込んでいる。北東から南西にやや長い方形で、長辺1.2m、短辺1.1m、深さ0.3mである。

SK512 (第152図, 図版30)

SX020の段を掘り込んでいる。北東から南西に長い楕円形で長辺1.2m、短辺0.9m、深さ0.6mである。

SK513 (第152図, 図版30)

北東から南西に長い楕円形で、長辺2.4m、短辺1.0m、深さ0.2mである。

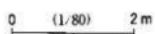
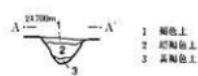
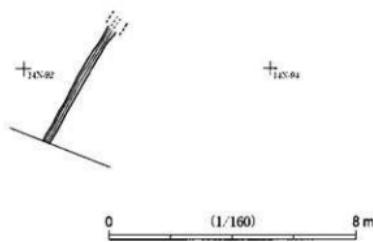
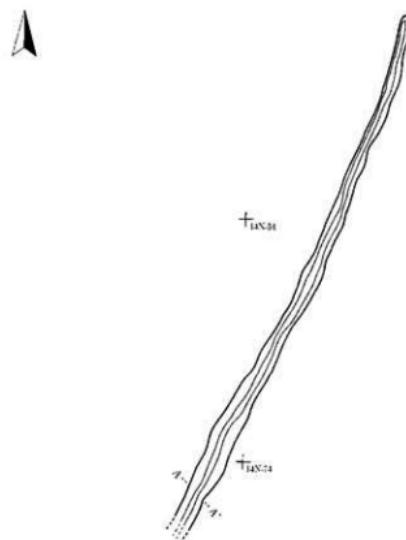
SK514 (第152図, 図版30)

SK513の東側に位置する。長方形を呈し、長辺1.1m、短辺0.76mで、深さは0.2mである。

SK515 (第152図, 図版30)

北東から南西に長い隅丸方形で、長辺1.7m、短辺1.2m、深さ0.5mである。

SK516 (第152図, 図版30)



第151図 2号溝平面図

SX020の段と切り合う。北西から南東に長い楕円形で、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.2mである。

SK517（第152図、図版30）

整形区画の段に接する。北西から南東に長い不整の楕円形で、長径2.8m、短径2.0m、深さ0.8mである。

南西側にくびれがあることから、2基の土坑が重複している可能性がある。

SK518（第153図、図版31）

南北に長い不整形で、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.4mである。

SK519（第153図、図版31）

ほぼ円形で、径0.8~0.9m、深さ0.5mである。

SK520（第153図、図版31）

北東から南西に長い楕円形で、長径1.3m、短径0.7m、深さ0.4mである。

SK521（第152図、図版30）

SX020の段およびSK510と重複する。円形と思われ、径1.0m、深さ0.7mである。北側の壁面には焼土が3か所見られた。

SK522（第152図、図版31）

SX020の段と重複する。南北に長い楕円形で、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.2mである。

SK523（第153図、図版31）

北東から南西に長い楕円形で、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.8mである。底面の北西側が一段凹む。

SK524（第153図、図版31）

北東から南西に長い楕円形で、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.3mである。

SK525（第153図、図版31）

ほぼ東西に長い砲弾形で、長径2.2m、短径1.4m、深さ0.3mである。

SK526（第153図、図版31）

北東から南西に長い不整形で、長径1.1m、短径1.0m、深さ0.3mである。

SK528（第153図、図版32）

ほぼ東西に長い楕円形で、長径2.2m、短径1.4m、深さ0.8mである。

SK532（第153図）

ほぼ南北に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.7m、深さ0.7mである。

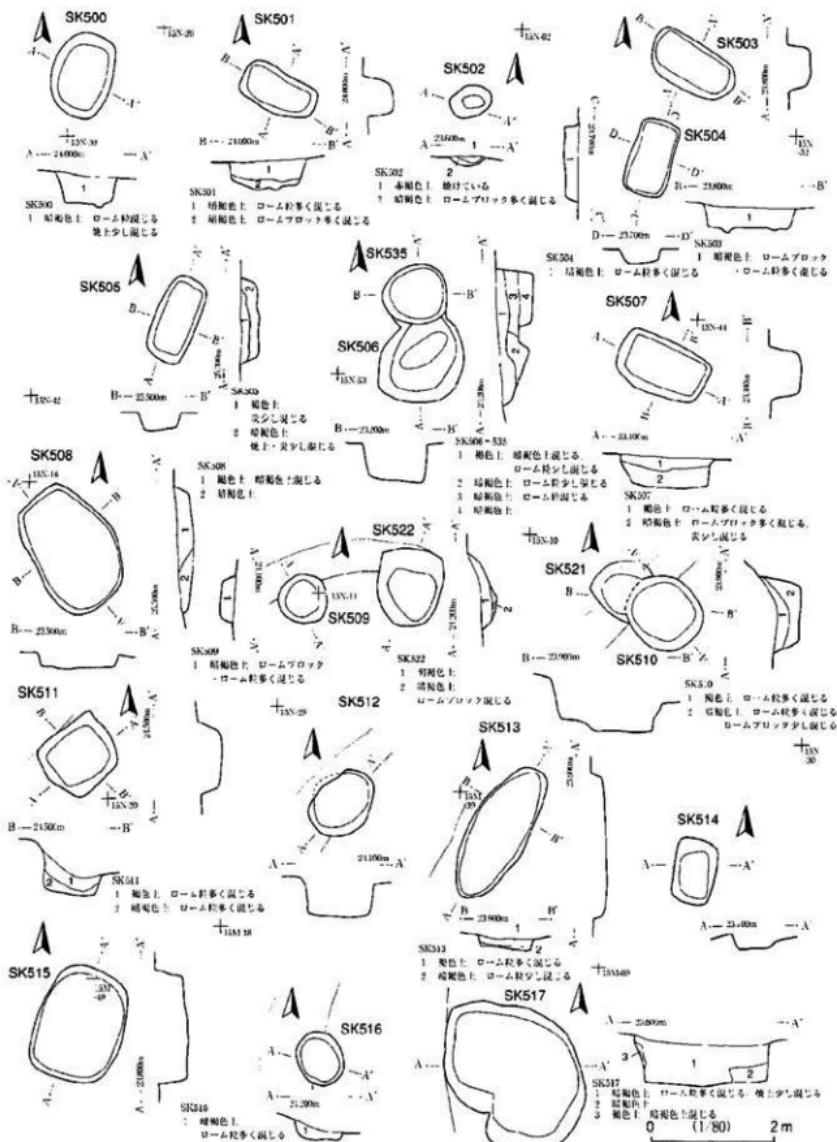
SK534（第153図・図版32）

北西から南東に長い楕円形で、長径1.4m、短径0.9m、深さ0.2mである。遺物は常滑産の片口鉢の口縁部破片が出土した。

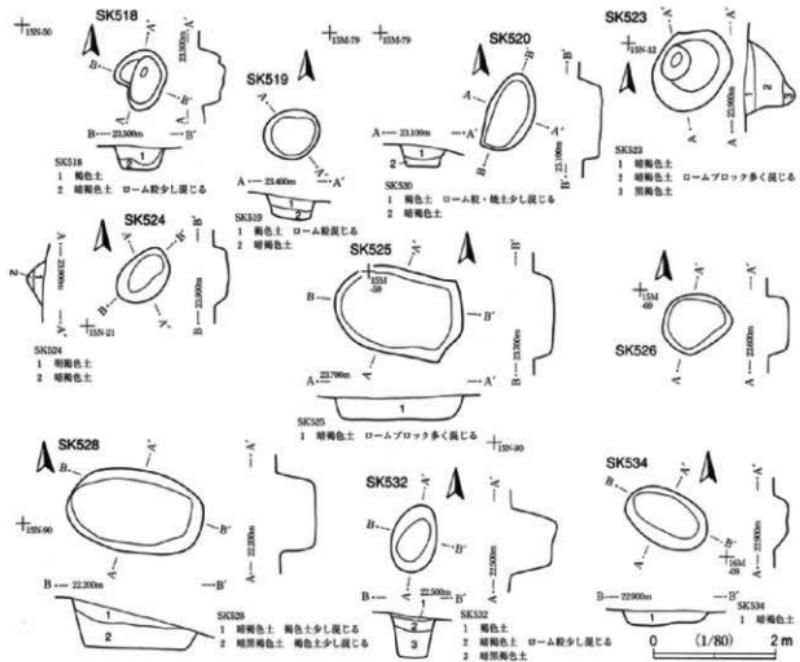
出土遺物（第154~156図・図版82）

遺物は、SX020の区画内から中国青磁の破片が3点、常滑産の壺の破片が1点、温石が1点出土した。SX021からは区画内の土坑（SK534）から常滑産の片口鉢の破片が1点、砥石が1点出土した。この他に図示はしなかったが、SX020・SX021とも近世以降の陶磁器片が出土した。

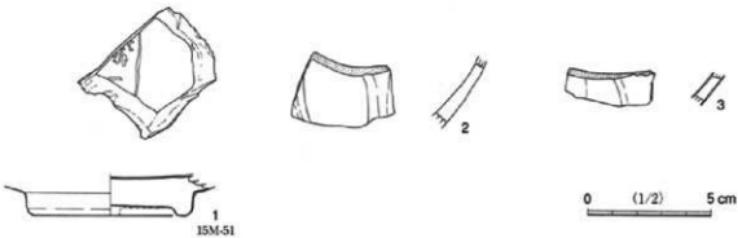
第154図1~3はSX020の区画内から出土した龍泉窯系の青磁碗である。1は底部から高台部片である。体部外面は無文で、底部内面には文字が印刻されているが、判読できない。高台径6.4cm、現存高1.7cmである。釉は灰オリーブ色で、底部外面は無釉である。2・3は蓮弁文碗の体部片である。ともに蓮弁は



第152図 台地整形区画 (SX 020-021) 内土坑 (1)



第153図 台地整形区画（S X 0 2 0 · 0 2 1）内土坑（2）



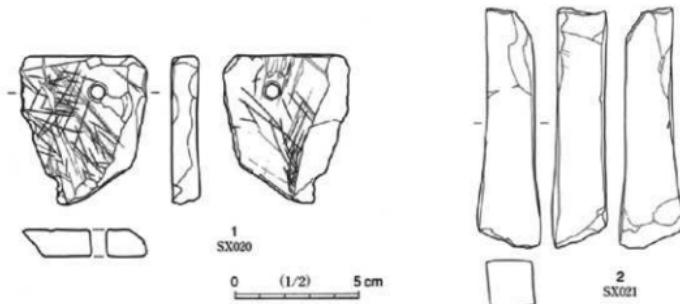
第154図 台地整形区画（S X 0 2 0 • 0 2 1）出土青磁

片切彫りによって表現されている。軸は2は灰オリーブ色、3は灰色である。

第155図4はSX020から出土した常滑産の壺の肩部で、外面はナデが施され、格子状のタタキ目が見られる。内面はヘラナデが施される。胎土は青灰色で砂粒を多く含む。外面はやや光沢のある暗灰色であり、部分的に黄灰色の降灰釉が掛かる。



第155図 台地整形区画（SX020・021）出土陶器



第156図 台地整形区画（SX020・021）出土石製品

第20表 SX020-021出土石製品一覧表

鉢 番号	番号	造構・出土地点 遺物番号	器種	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	新造構 番号	備考
156	1	SX020-0016	温石	滑石	6.05	5.15	1.1	56.85		孔径0.8~0.75cm
156	2	15M99-0001	温石	泥紋岩	9.83	2.63	2.3	71.09	SX021	被熱

第155図 5はSK534から出土した常滑産片口鉢の口縁部で、高台が付く片口鉢Ⅰ類である。色調は暗灰黄色で、砂粒を多く含む粗雑な胎土である。口縁部が肥厚することから、5・6a型式（1220~1275年）のものと考えられる。

石製品では、第156図の1・2が出土した。1は細かな擦痕状のキズが表裏両面に見られることから、温石を砥石としても使用したと考えられる。2は砥石である。

5 挖立柱建物跡・柵列

居館跡以外から検出された遺構についてここで触れる。

SB005（第157図）

台地平坦部にあって、東側に20mほど離れてSX020台地整形区画が位置する。掘立柱建物跡の棟の主軸方向はほぼ北西~南東で、平面形は1間×2間、規模は1.6m×2.8mである。柱穴は円形で径0.2~0.3m、深さ0.3~0.5mである。南西側の2基の柱穴の中には、さらに1基の梢円形の小土坑がある。この土坑は長径0.4m×短径0.2m、深さ0.1mである。出土遺物は無い。

第21表 中世土坑計測表(SX020-021)

整理時 番号	大 グリッド	小 グリッド	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	整理時 番号	大 グリッド	小 グリッド	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
SK470	15M	50	円形	1.2	1.1	0.2	SK507	15N	43	長方形	1.6	0.9	0.5
SK471	15M	61	長方形	1.1	0.9	1.0	SK508	15N	25	長方形	2.0	1.3	0.2
SK472	15M	60	不整形	1.0	0.4	0.4	SK509	15N	0	円形	0.9	0.8	0.2
SK473	15M	41	椭円形	0.9	0.6	0.3	SK510	15N	10	円形	1.2	1.2	0.4
SK474	15M	75	椭円形	1.2	1.0	0.2	SK511	15N	19	円形	1.2	1.2	0.3
SK475	15M	31	椭丸形	1.5	1.2	0.3	SK512	15M	29	円形	1.2	1.2	0.2
SK476	15M	32	椭丸形	2.2	1.7	0.5	SK513	15M	39	椭円形	2.3	1.6	0.2
SK477	15M	22	椭丸形	2.7	1.8	0.3	SK514	15M	39	長方形	1.1	0.6	0.2
SK478	15M	22	椭丸形	2.6	1.9	0.5	SK515	15M	39	長方形	1.9	1.5	0.5
SK479	15M	0	椭円形	1.1	0.9	0.1	SK516	15M	48	椭円形	1.0	0.6	0.2
SK480	15M	10	椭円形	1.5	1.3	0.1	SK517	15M	68	不整形	2.9	1.7	0.8
SK482	15M	44	長方形	1.5	1.1	0.1	SK518	15N	50	円形	1.0	0.6	0.4
SK483	15M	44	円形	1.7	1.6	0.2	SK519	15M	78	円形	0.8	0.8	0.4
SK484	15M	44	正方形	1.6	1.5	0.4	SK520	15M	79	椭円形	1.4	0.6	0.4
SK485	15M	55	椭円形	2.0	0.7	0.1	SK521	15N	10	円形	1.2	1.2	0.7
SK486	15M	61	椭円形	1.5	0.9	1.1	SK522	15N	1	円形	1.3	1.1	0.3
SK489	16M	64	椭丸形	1.2	0.9	0.2	SK523	15N	12	円形	1.4	1.3	0.8
SK490	16M	55	椭丸形	1.6	0.9	0.6	SK524	15N	11	椭円形	1.0	0.7	0.3
SK491	16M	67	椭円形	3.9	1.3	0.4	SK525	15M	68	長方形	2.0	1.4	0.3
SK500	15N	20	長方形	1.4	0.9	0.5	SK526	15M	69	椭円形	1.1	0.9	0.3
SK501	15N	20	長方形	1.3	0.8	0.5	SK528	15N	80	椭円形	2.2	1.4	0.8
SK502	15N	31	円形	0.6	0.6	0.1	SK529	15M	29	円形	1.4	1.3	0.5
SK503	15N	21	長方形	1.4	0.8	0.4	SK530	15M	58	長方形	1.8	0.9	0.6
SK504	15N	31	長方形	1.1	0.6	0.2	SK531	15M	27	椭円形	1.0	0.8	0.4
SK505	15N	42	長方形	1.7	0.7	0.3	SK532	15M	99	椭円形	0.9	0.7	0.7
SK506	15N	43	円形	1.0	1.0	0.6	SK534	15M	98	椭円形	1.5	0.9	0.2
SK507	15N	43	椭円形	1.6	1.3	0.4							

010柵列（第157図）

台地平坦部にあって、北西から南東に4基のピットが並ぶ。当初はこのうち東側の3基を柵列として調査したが、さらにその西側の1基を加えて1つの柵列とした。柵列の両端までの長さは7.4mである。柵列を構成する柱穴状のピットは、平面形はほぼ円形で、径は0.4mで、深さは0.4~0.7mである。各ピット間の距離は2.5mで、ほぼ等間隔である。出土遺物はない。

6 土坑

以下に記載する土坑は、遺跡の北寄りの台地整形区画SX020・SX021の付近及び西側に分布する土坑群である。遺構内からの遺物の出土はほとんど無いが中世の台地整形区画に近接し、他の時期の遺構・遺物も希薄であることから、ここでは中世として取り扱うこととする。

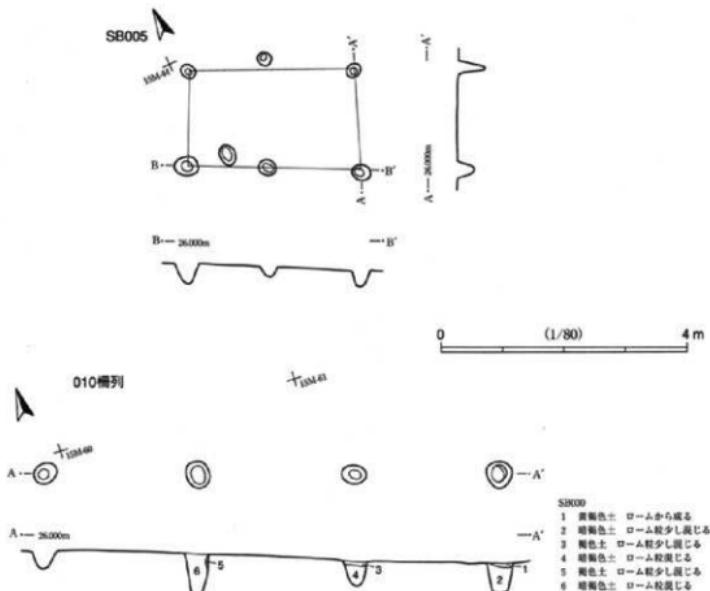
SK470（第158図、図版32）

15M-50に所在する。円形で、径1.2m、深さ0.2mである。底面の東側が一段深く、ほぼ円形で径0.5~0.6m、深さ1.1mである。出土遺物はない。

SK471（第158図、図版32）

15M-61に所在する。SK488と重複する。北西から南東に長い方形であろうか。長辺1.1m前後、短辺1.0m前後、深さ1.1mである。出土遺物はない。

SK488（第158図、図版32）



第157図 SB005 捩立柱建物跡・010構列

15M-61に所在する。SK471と重複する。北東から南西に長い楕円形で、長径1.6m、短径0.9m前後、深さ0.9mである。出土遺物はない。

SK472 (第158図)

15M-60に所在する。ほぼ南北に長い楕円形で、長径1.0m、短径0.4m、深さ0.4mである。出土遺物はない。底面が3段であることから、3基の円形の小土坑が重複している可能性がある。

SK473 (第158図)

15M-31・41に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

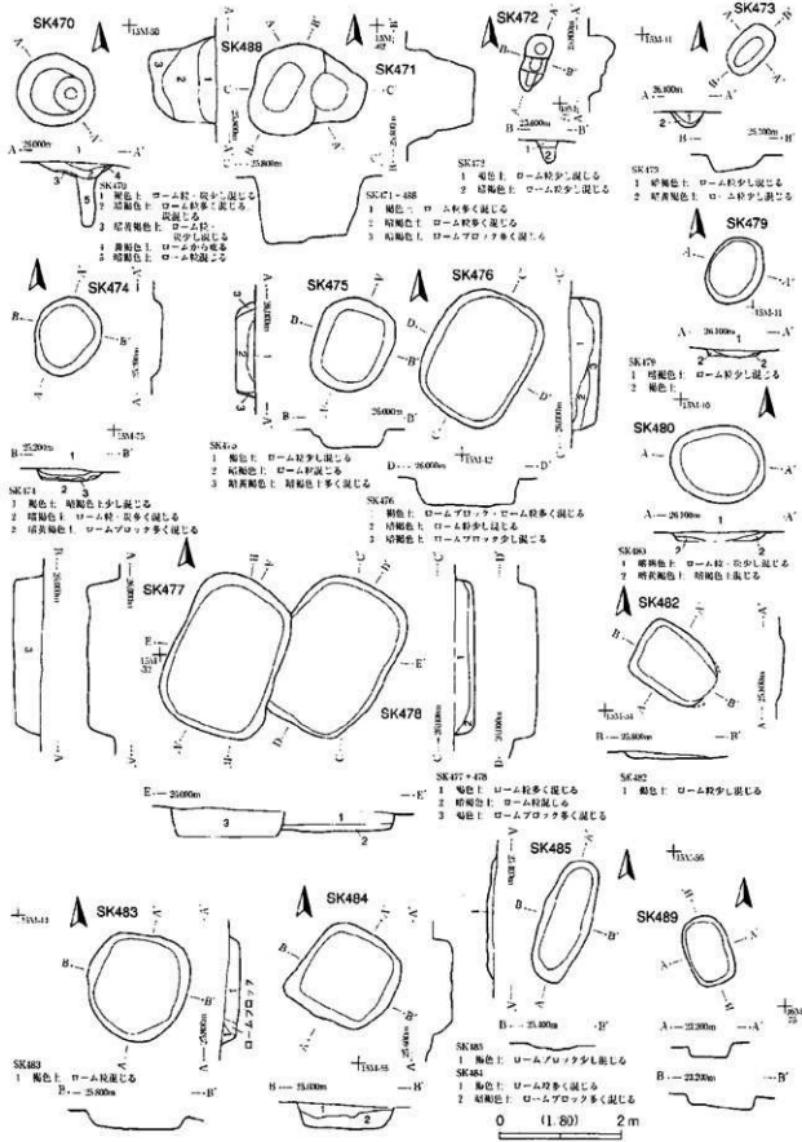
SK474 (第158図、図版32)

15M-75に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

SK475 (第158図、図版32)

15M-31に所在する。北東から南西に長い隅丸方形で、長辺1.4m、短辺1.1m、深さ0.5mである。出土遺物はない。

SK476 (第158図、図版32)



第158図 中世土坑 (1)

15M-31・32に所在する。北東から南西に長い隅丸方形で、長辺2.0m、短辺1.6m、深さ0.3mである。出土遺物はない。

SK477 (第158図、図版32)

15M-22・32に所在する。SK478を切る。北東から南西に長い隅丸方形で、長辺2.3m、短辺1.8m、深さ0.5mである。出土遺物はない。

SK478 (第158図、図版32)

15M-22・32に所在する。SK477と重複する。北東から南西に長い隅丸方形で長辺2.6m、短辺1.8m、深さ0.3mである。縄文土器片、奈良・平安時代の須恵器壺と土師器壺の破片が出土した。

SK479 (第158図、図版32)

15M-00・01に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.1m。出土遺物はない。

SK480 (第158図、図版33)

15L-19、15M-10に所在する。ほぼ東西に長い楕円形で、長径1.6m、短径1.3m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

SK482 (第158図、図版33)

15M-44に所在する。北西から南東に長い方形で、長辺1.3m、短辺1.0m、深さ0.1mである。南東側は地形の傾斜のために堅が無い。出土遺物はない。

SK483 (第158図、図版33)

15M-44に所在する。ほぼ円形で、径1.7m、深さ0.2mである。縄文土器片と奈良・平安時代の須恵器壺の破片が出土した。

SK484 (第158図、図版33)

北東に傾いた正方形で、1辺1.6m、深さ0.4mである。縄文土器片と奈良・平安時代の須恵器片が出土した。

SK485 (第158図、図版33)

15M-55に所在する。北東から南西に長い楕円形で、長径2.1m、短径0.8m、深さ0.1mである。出土遺物はない。

SK489 (第158図、図版33)

16M-64に所在する。北西から南東に長い隅丸方形で、長辺1.1m、短辺0.7m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

SK490 (第159図、図版33)

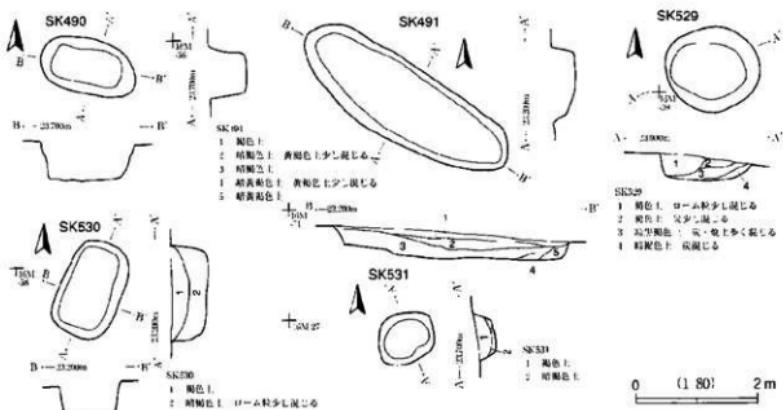
16M-45・55に所在する。ほぼ東西に長い隅丸方形で、長辺1.6m、短辺0.9m、深さ0.6mである。出土遺物はない。

SK491 (第159図、図版33)

16M-67に所在する。北西から南東に長い楕円形で、長径3.9m、短径1.3m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

SK529 (第159図、図版32)

台地整形区画(SX020)の段の南に位置する。平面形はほぼ円形で、径1.4~1.5m、深さ0.5mである。



第159図 中世土坑(2)

出土遺物はない。

SK530 (第159図、図版33)

16M-48.58mに所在する。北東から南西に長い隅丸方形で、長辺1.5m、短辺1.0m、深さ0.6mである。
出土遺物はない。

SK531 (第159図、図版33)

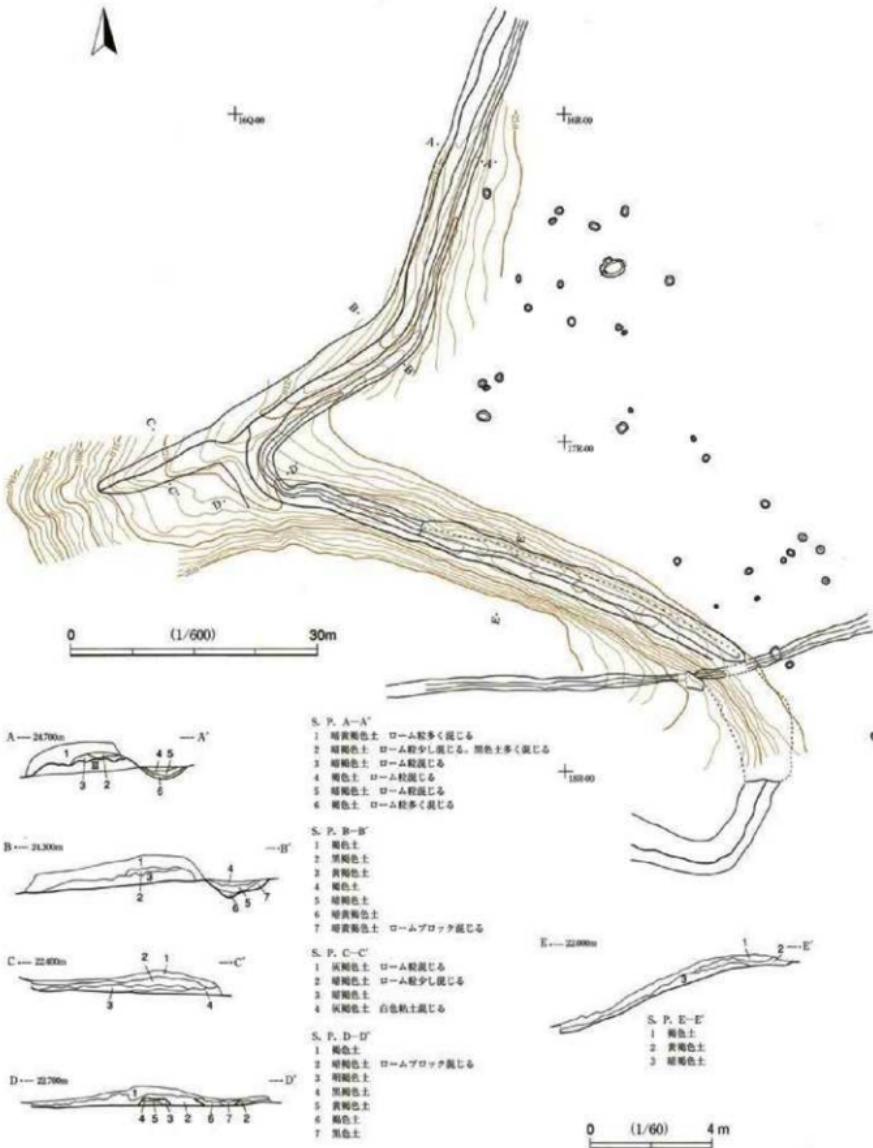
段の西側の段から3m離れた位置に所在する。北東から南西に長い梢円形で、長辺1.0m、短辺0.8m、深さ0.4mである。出土遺物はない。

7 野馬土手・土壘・溝

(1) 野馬土手

SD033 (第160図、図版34・36)

この野馬土手は調査区の東側に位置し、北東及び南西側から谷によって侵食された、台地平坦部が最も狭い部分に立地する。東側に據と思われる溝を作りながら、谷と谷を結ぶように北東から南西にかけて集かれしており、この野馬土手によって台地基部とその北西に広がる台地が分断される格好になる。野馬土手は、南西の小さな谷の方行へと尾根上を西へ緩やかな弧を描きながら続いてゆく。一方、溝は野馬土手を離れて、その南側の谷頭に向かって途中で南東へ方向を変えて谷の上側の縁を巡るように「く」の字形に続いてゆく。野馬土手の幅は4~5mで、高さは0.5~0.9mである。溝は断面が半円形に近い形状で、幅2m、深さ0.4~0.5mである。この溝とは別にもう1条の溝が、西から侵入する谷に向かって直線的に延びている。遺物は出土しなかった。また、SD033の「く」の字に囲まれた内側の緩斜面には土坑が37基検出された。個別の図は掲載しないが、これらの土坑の平面形は、円形・梢円形・隅丸方形・不整形の4種類



第160図 S D 0 3 3 野馬土手

に分けられ、これらの土坑は径0.4~1.8m、深さ0.1~1.0mである。各々の土坑の規模や配置にも規則性はない。いずれの土坑からも遺物は出土しなかった。

(2) 土壘・溝

SD038 (第161図、図版36)

樹枝状に開析された西へと延びる台地の、平坦部の幅が最も狭くなった位置にあって、その台地を分断するようにほぼ南北に走る土壘とその西側に土壘に沿う溝である。土壘は幅4.5~5.3m、高さ0.6m、長さ47.5mである。土壘は溝を掘削した際に出たと思われるロームブロック・ローム粒から成る黄褐色土を厚く盛って構築している。この層の直下の層から北宋錢の天聖元寶が1点出土したが、近世以降の陶器片も同時に出土することから、土壘は近世以降のものと考えられる。また、溝は調査時点で埋まりきっておらず、1mほどの深さで開口していた。断面形は底面から1m前後まではV字状で幅が狭く、そこから掘り込み面にかけては幅が広がる。幅2.3~2.7m、深さ2.2~2.5m、長さ49.3m、底面の幅は南側が0.2m、北側は0.5mであり、南側が狭く北側に行くにつれて少しずつ幅が広がっている。注目されるのは、溝の南北両端が天井を有するトンネル状になっていることである。このトンネルは高さが0.9m、幅が0.7mほどで、天井部はアーチ状を呈し、ともに底面のレベルは溝と同じで、南側のトンネルは溝の向きよりも少し西側に振れた方向に4.0mほど伸びている。その南側はさらに続いていることが想定されるが、調査前に既に削平されていた。トンネル内の覆土は溝と同じで全体に締まりがなく、現代のビン・缶等のゴミが混入していた。北側のトンネルは、溝の向きよりも少し東側に振れた方向に伸びる。高さ0.9m、幅0.7mで、調査した長さは2.0mである。底面は奥に向かって緩やかに0.3mほど高くなる。トンネルの北側延長上には印西市の市道が通っているが、市道の北側までは延びないことは、市道の北側にトレーンチを設定してトンネル底面より深く掘り下げて確認した。こちらのトンネルの覆土は南側と全く異なり、固く締まったロームブロック混じりの暗褐色土が充填されていた。出土遺物は無い。これらのトンネルの性格は不明である。

SD040 (第161図、図版36)

SD038の土壘下に検出された溝で、SD038の土壘と同方向に南北に走る。一部がSD038の溝に切られており、さらにSD041・SD042に切られる。北端は緩やかに曲がって谷の方へ向く。少し途切れでSD043とは方向が一致するが、掘り込みの深さが異なることから別の溝と判断される。幅1.0~1.5m、深さ0.4~0.6m、長さ47.3mである。近世以降の陶器片の他に砥石が出土した。

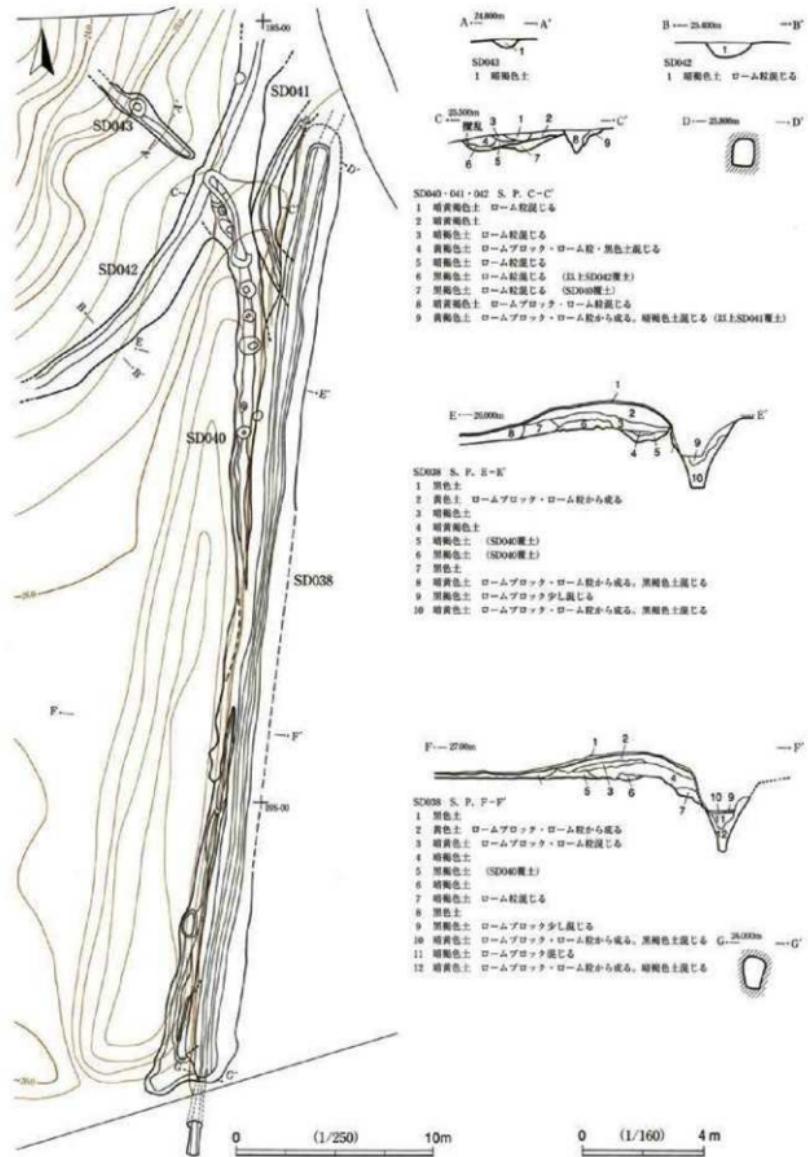
SD041 (第161図、図版36)

SD038の土壘と溝の間にあって「く」の字形に曲がっている。SD038の土壘の下になり、溝に切られて南側は不明となる。北側はさらに続く。幅0.8~1.5m、深さ0.3~0.8m、長さ9.6mである。近世以降の陶器片と礫が出土した。

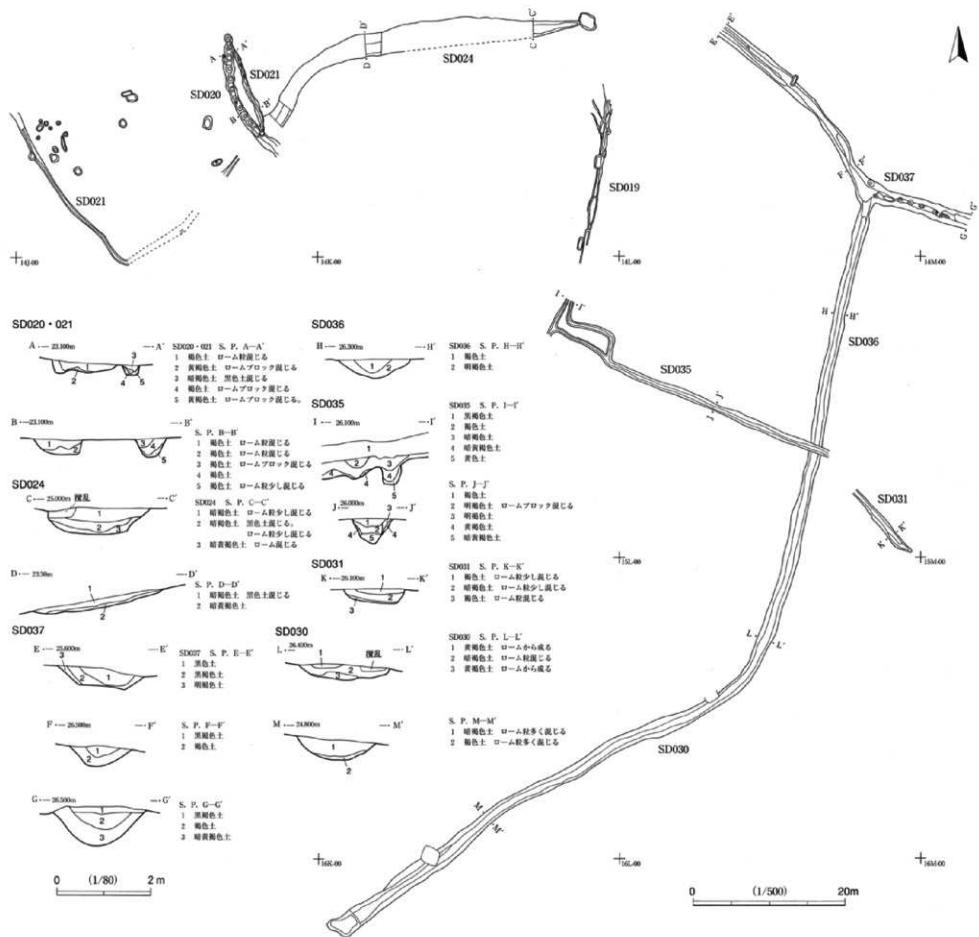
SD042 (第161図、図版36)

SD038の土壘の西側を緩やかな弧を描いて北東から南西へ続く。一部がSD038の土壘の下になる。SD040を切り、SD041に切られている。幅1.1~1.8m、深さ0.2~0.6m、長さ21.5m。近世以降の陶器片が出土した。

SD043 (第161・165図、図版36)



第161図 SD038・040・041・042・043溝



第162図 SD019・020・021・024・030・031・035~037溝

SD040の北端に接するように北西から南東に延びて谷の方へ下がってゆく。幅0.6~1.3m, 深さ0.2~0.3m, 長さ6.0mである。遺物は、寛永通寶1点の他に須忠器片等が出土した。

SD019 (第162図、図版36)

南から侵入する谷の東側の台地の平坦部と斜面部の境に掘られた溝で、台地に沿ってほぼ南北に走る。北側はそのまま真っ直ぐに延びる溝と、北西へ枝分かれした溝に分かれる。断面形は箱形で、幅0.6~0.9m, 深さ0.2~0.3m, 長さは24mである。方形の土坑4基が溝を切っている。南側はSD035となつがっていた可能性がある。

SD020 (第162・164図、図版36・82)

SD019と同じ谷に面し、南から侵入する谷の谷頭付近にあって、標高26mの台地縁辺部と、その一段下のテラス状になった標高約22mの平坦面にかけてほぼ南北に走る。北側と南側でSD021と切り合う。南側は谷に向かって延びている。溝の底面には連続して幅0.8×1.0mの不整形の皿状の土坑があり、横列状を呈する。溝の断面は逆台形で、幅1.0~1.5m, 深さ0.2~0.3m, 長さ19mである。遺物は温石が1点出土した。

SD021 (第162図)

SD019と同じ谷に面し、SD020と同様に南へ開口した標高26mの台地縁辺部と、その一段下の標高22mの平坦面にかかる斜面に掘られている。溝はほぼ直線的に南東に向かい、標高22mのテラス面で東へ角度を変え、SD020と交差してすぐに北へ向きを変えて全体として北側が開いたコの字形に台地を区画する。この溝の断面は逆台形で幅0.5~0.7m, 深さ0.2~0.4m, 長さ63mである。溝で開まれた縦面の内側には土坑が集中する。

SD024 (第162図)

SD019と同じ谷に面し、台地の縁辺部を台地の縁に沿って南西から北東に走る溝である。東端で土坑と切り合う。溝の断面は逆台形で、幅1.2~3.7m, 深さ0.2~0.6m, 長さ44mである。

SD030・SD036 (第162・164図、図版37・82)

台地平坦部を東西に二分するように走る溝で、台地の標高の最も高い尾根状を縫うように逆「く」の字形を描いて走る溝である。北端はSD037と切り合って北西へ折れて延びる。中間でSD035を切る。SD035との交点の南3mほどを境に、南側をSD030、北側をSD036として調査した。SD030の断面形は逆台形で、幅1.5~2.7m, 深さ0.3~0.4m, 長さ130mである。遺物はSD030から砾石が2点出土した。

SD035・SD031 (第162図)

SD036と直交するように台地平坦部を東南東に走る溝である。西端は2条に分かれ、1条はクランク状に、1条はそのまま直進して、ともにSD019と重なる。溝の断面形は逆台形で、幅0.5~1.3m, 長さ45mである。また、SD036と交差した東側はSD031として調査した。SD031の断面形は逆台形で、幅0.6~1.0m, 深さ0.3m, 長さ11mである。

SD037 (第162図)

台地平坦部にあって、SD036が北西へ向きを変えた部分から始まって東へ延びる溝である。断面形は逆台形の部分と半円形の部分があり、幅1.3~2.0, 深さ0.4~0.8m, 長さ33mである。

SD022 (第163図、図版37)

南西から侵入する谷に向かって瘤状に小さく延びた台地の尾根上をほぼ南北に走る溝である。調査は部

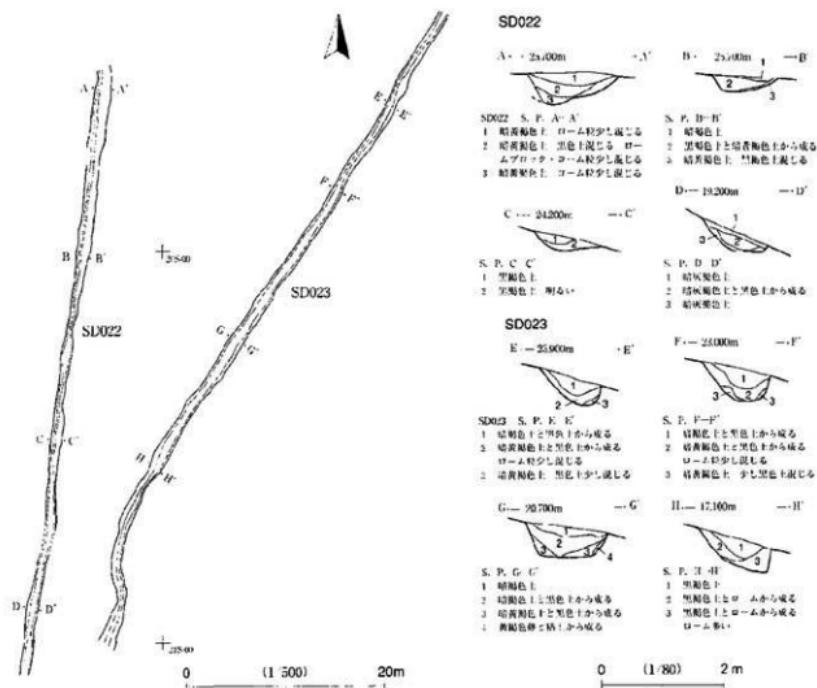
分的に実施した。断面形は半円形で、幅0.6~1.7m、深さ0.3~0.5m、長さ33mである。

SD023(第163図、図版37)

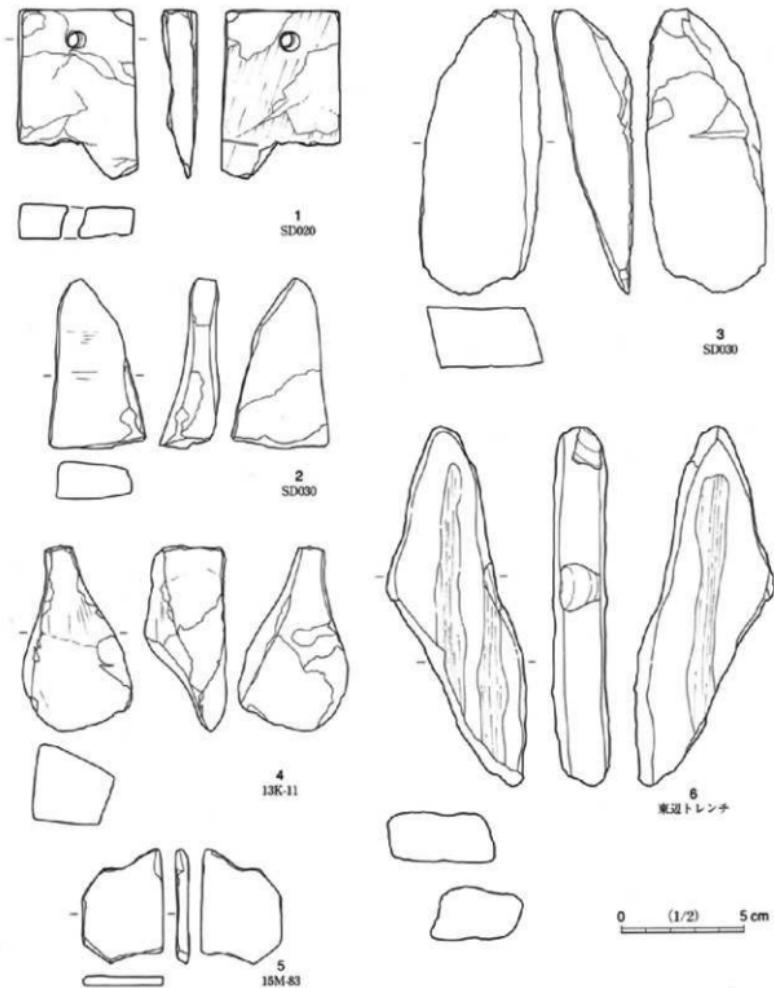
SD022と同じ谷に面し、台地の斜面を横切る形で北東から南西に走る。部分的に調査を実施した。断面形は半円形と逆台形の部分があり、幅0.8~1.5m、深さ0.6~0.7m、長さ74mである。

(3) 溝・グリッド出土遺物

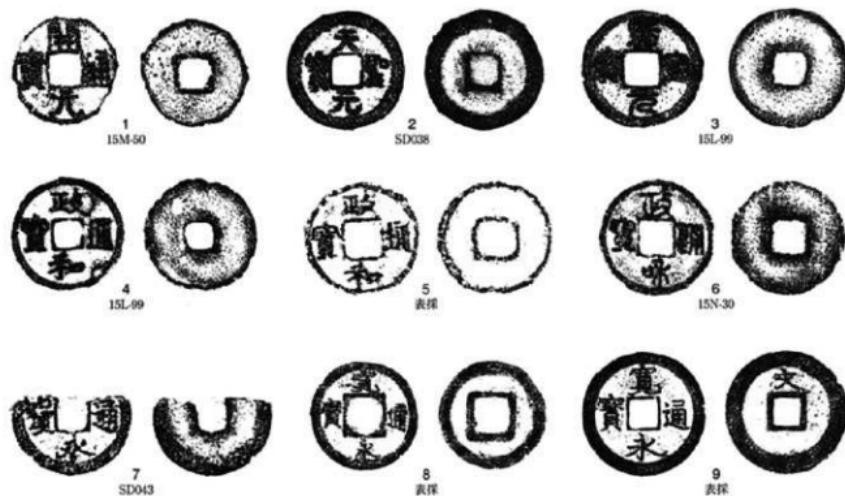
溝からは第164図、第165図に示す様な遺物が出土した。第164図の1は温石で、SD-020の溝中から出土した。先端部に破損が見られる。2~6は砾石である。第165図は表探及び溝・グリッド出土の錢貨を集成した。



第163図 SD022・023溝



第164図 溝・グリッド出土石製品



第165図 溝・グリッド出土銭貨

第22表 溝・溝外出土石製品一覧表

鉢番号	番号	遺構・出土地点 遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	新遺構 番号	備考
					cm	cm	cm	g		
164	1	SD020-0004	温石	粘板岩	5.90	4.90	1.5	68.53		孔径0.8~0.85cm
164	2	15L51-0001	砾石	流紋岩	6.95	4.02	2.5	50.09	SD030	
164	3	SD030-0002	砾石	流紋岩	11.62	5.04	3.3	168.42		
164	4	13K11-0001	砾石	流紋岩	7.61	4.54	3.4	84.82		
164	5	東辺レンチ1-0002	砾石	砂岩	14.71	5.80	2.4	175.52		
164	6	15M83-0002	砾石	凝灰岩	4.69	3.29	0.6	10.53		

第23表 溝・グリッド出土銭貨一覧表

鉢番号	番号	遺構番号 出土地点	銭貨名	初鑄年	国・王朝名	直径(mm)	重量(g)
165	1	15M-50	開元通寶	815年	唐	21.76	2.34
165	2	SD038	天聖元寶	1023年	北宋	24.80	1.81
165	3	15L-99	熙寧元寶	1068年	北宋	24.63	3.74
165	4	15L-99	政和通寶	1111年	北宋	23.34	2.83
165	5	表採	政和通寶	1111年	北宋	23.28	2.11
165	6	15N-30	政和通寶	1111年	北宋	23.23	2.16
鉢番号	番号	遺構番号 出土地点	銭貨名	種類	鑄造期	直径(mm)	重量(g)
165	7	SD043	寛永通寶	古寛永	1636~1667	24.05	1.28
165	8	表採	寛永通寶	新寛永	1667以降	22.51	1.68
165	9	表採	寛永通寶	文錢	1668~1696	25.26	3.18

第3章 まとめ

1 旧石器時代

遺跡内から5文化層にわたって石器類が出土した。出土総点数は108点である。これらの石器群の内、第Ⅰ文化層はⅩ層上部に生活面を持つと推定される石器群で、切断剥離と両極剥離を用いた剥片剥離技術を特徴とする。第Ⅱ文化層、第Ⅲ文化層はⅤ層中に生活面を持つと推定される石器群が出土したが、点数は少ない。第Ⅳ文化層はⅦ層に生活面があると推定され、その特徴としては、基部加工のナイフ形石器と珪質頁岩を多用することが挙げられる。第Ⅴ文化層はⅥ層下部に生活面を持つと推定される。切出形のナイフ形石器を伴い、折断剥離を多用することが特徴で、すべて黒曜石が用いられている。

文化層の概要については、第1表の文化層別石器群概要一覧表のとおりである。文化層は第Ⅰ文化層～第Ⅴ文化層の5文化層に分離できた。第Ⅰ文化層が、質・量ともに充実している。文化層別主要石器は第25図のとおりである。各文化層の石器群の特徴をまとめながら、石器群の位置づけを行うこととする。

(1) 第Ⅰ文化層 (第25図1～9)

Ⅹ層上部に生活面を持つと推定される。黒曜石を主体とし、ナイフ形石器(2)と台形様石器(3・8)を伴う石器群である。剥片剥離技術の特徴としては、折断剥離を多用していること(7～9)と両極剥離が用いられていること(4)である。この石器群と類似するものとしては、八千代市坊山遺跡第6文化層(大野1993)・佐倉市向山谷津遺跡下層(田村ほか1987)・佐倉市大林遺跡第7文化層(田村1989)・印西市新井振Ⅱ遺跡第Ⅰ文化層(新井2004)があげられる。この石器群の中で、坊山遺跡第6文化層は、黒曜石を主体とし、小型の台形様石器が量産される点で最も類似する。他の地域では、東京都武藏台遺跡Ⅹa文化層(横山・川口ほか1984)・神奈川県古岡遺跡群D区B4下部(白石ほか1996)・長野県立科F遺跡(須藤1991)の石器群があげられる。印旛縄年(酒井・宇井2004)の印旛Ⅱ期、田村・橋本縄年(田村・橋本1984)の第Ⅰ期、相模野台地調査報告編年(諫訪間1989・2001)の段階Ⅱに位置づけられる。

(2) 第Ⅱ文化層 (第25図10・11)

Ⅸc層に生活面を持つと推定される。出土点数が少ないとから、石器群の位置づけが困難であるが、撥形をした台形様石器(10)が出土していることから、印旛縄年の印旛Ⅲa期に位置づけられる。

(3) 第Ⅲ文化層 (第25図12・13)

Ⅸa層上部に生活面を持つと推定される。出土点数が少なく、製品が出土していないことから、石器群の位置づけは困難である。出土層位から、印旛縄年の印旛Ⅲb期に位置づけられる。

(4) 第Ⅳ文化層 (第25図14～20)

Ⅶ層に生活面を持つと推定される。基部加工のナイフ形石器(14・15)と珪質頁岩を多用することが特徴である。類似する石器群としては、隣接した遺跡の印西市松崎Ⅰ遺跡第2・3文化層が最も類似する。珪質頁岩を多用していることから、「下総型石刃再生技法」(新田1995)に関連する石器群と思われる。印旛縄年の印旛Ⅳ期2類に位置づけられる。

(5) 第Ⅴ文化層 (第25図21～24)

Ⅵ層下部に生活面を持つと推定される。すべて黒曜石が用いられ、切出形のナイフ形石器(21・22)を伴い、折断剥離を多用すること(23・24)が特徴である。類似する石器群としては、黒曜石を主体として

ナイフ形石器を量産する点で、八千代市権現後遺跡第4文化層（橋本1984）があげられる。印旛編年の印旛V期に位置づけられる。

（6）単独出土（第25図25～28）

単独出土のうち、25～28は、石刃を素材としたナイフ形石器であり、25・26がソフトローム出土で27・28が上層確認時の出土であることから、印旛編年の印旛V期に位置づけられる。

2 縄文時代

遺跡の南側部分にあたる台地上を主として、早期の撫糸文系・条痕文系土器の時期から後期の加曾利B式の時期までの遺構と遺物がみられ、早期、中期では、竪穴住居跡が検出されている。

松崎遺跡群内の遺跡で、早期撫糸文系・条痕文系土器の時期と遺構を検出したのは、松崎Ⅰ遺跡・松崎Ⅴ遺跡・松崎Ⅵ遺跡がある。立地は松崎Ⅲ遺跡を含めて、いずれも谷津（支谷）のもっとも奥まったところではなく、やや手前にあたるという共通点がある。また、台地の縁辺部に広い範囲に分布するという共通点がみられる。

3 古墳時代から奈良・平安時代

古墳時代の遺構としては、遺跡北側の松崎Ⅱ遺跡に隣接する箇所で検出した、円墳1基が検出されたことである。

古墳時代の墳墓である方形または円形の周溝状遺構は、松崎Ⅲ遺跡の北西側に位置する松崎Ⅰ遺跡で方形周溝状遺構を7基、北側にあたる松崎Ⅱ遺跡で円墳を1基検出している。いずれも前期の構築と考えられる。Ⅲ遺跡で検出した円墳がこれらと一緒に群を形成していたとする、群の中でもっとも南側に位置することになる。古墳時代前期の竪穴住居跡は、松崎Ⅰ遺跡・松崎Ⅱ遺跡でまとまって検出している。古墳時代前期の竪穴住居跡は他に、この2遺跡から南へ500mほど離れた松崎Ⅳ遺跡の南部から松崎Ⅴ遺跡の東部にかけて、同じ谷津のもっとも奥をめぐるように3軒検出している。

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡5軒、藏骨器を埋納した土坑1基等を検出した。松崎Ⅲ遺跡で検出した竪穴住居跡のうち4軒は、遺跡の南西部にあたる台地上に集中しており、南側の谷津に面する。この谷津はさらに東に向って深く入り込み、住居跡は奥まった谷津の入口にあたる位置に立地している。ちょうど谷津を挟んで南側にある台地には松崎Ⅴ遺跡があって、松崎Ⅲ遺跡の4軒に向い合うように1軒の竪穴住居跡が見つかっている。同じ谷津の入口を南北から挟むように竪穴住居跡がつくられているようにみえる。

また、松崎Ⅲ遺跡の北西側にあたる松崎Ⅰ遺跡では、東側の松崎Ⅱ遺跡との間を分ける谷津の出口に面する、遺跡北東部の台地先端で1軒の竪穴住居跡を検出した。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、松崎Ⅲ遺跡から400mほど南東へ行った松崎Ⅵ遺跡で11軒まとめて検出している。同時期の竪穴住居跡は、松崎Ⅵ遺跡の立地する台地全体ではさらに多く、台地全体の面積を考慮すると事業区域外の未調査区域を含め、数倍の軒数は存在すると推測される。このように考えると大規模な集落であることも想定される。

松崎遺跡群の南側に位置する印旛沼側からみると、沼から谷津を遡って最初にたどりつく台地に松崎Ⅵ遺跡と松崎Ⅴ遺跡が立地する。これに対して、松崎Ⅰ遺跡・松崎Ⅱ遺跡は、松崎Ⅵ遺跡にくらべて印旛沼

から500m以上遠く離れている。このことが、遺跡ごとの豊穴住居跡の分布の粗密の背景であろうか。

また、藏骨器を埋納した土坑も注目される。藏骨器は、土師器の胴長の甕に土師器の皿を蓋としたと思われる。平安時代の9世紀のものである。

注目されるのは、南に突き出す小さな台地を挟んで、その東側には平安時代の土坑墓があり、西側には中世の墓域（SK001）がある点である。このことから、Ⅲ遺跡の立地する台地は、平安時代以降には墓域とされた可能性が指摘できる。

4 中・近世

（1）居館跡

居館跡は、溝を伴う土壠に開まれた区画の中に、掘立柱建物跡・柵列といった建物跡、カマドや製作工房の跡と思われる焼土造構、葬送のための火葬施設・火葬墓・地下式坑、その他性格不明の方形・円形の土坑が多数検出された。

以上の遺構のうち、焼土造構・火葬施設・火葬墓・地下式坑の数は、数基しか検出されていない。したがって、居館跡の性格を考える上では、掘立柱建物跡・柵列と方形・円形の土坑を検討するべきである。

（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、居館跡の東部の南北40m、東西20mほどの範囲に集中する。その梁または桁の方向は、ほぼ土壠・溝による区画の方向と合っている。このことは、掘立柱建物跡が土壠・溝による区画と同時期であることを示唆していると思われる。

ただし、掘立柱建物跡の中では、SB007・008とSB002・017のグループと、ほかの掘立柱建物跡のグループとで、棟または桁の方向に若干のちがいが見られ、両グループの建設時期に差があるかもしれない。建物の規模においても、SB007・008とSB002・017は、ともに梁行が4間であるのに対して、他の建物は横行の最大が3間である。

SB003・004・005・017の一画では、建物の建て替えがおこなわれていることがわかる。しかし、どの建物が同時に建っていたのかは、不明である。掘立柱建物跡の性格は不明である。

（3）土坑

方形土坑は、規模の面から二つのグループに分かれる。大形のグループは、短辺で1.5m以上あり、小形のグループは長辺で1m以下である。大形のグループは17基、小形のグループは40基前後になる。

大形のグループは、規模からすると墓坑としては大きいと思われる。作業場や住居である可能性が考えられる。小さい方のグループは、墓坑の可能性が高いと思われる。小形のグループは、そのほとんどが南北25m、東西25mの範囲に集中する。また、その長軸または短軸の向きがかなり揃う。

小形の方形土坑が墓坑であるとすると、墓坑が多数存在することになる。墓坑が集中するのであれば、居館跡として記載・報告したこの遺構については、寺院である可能性も視野に入れた検討がもとめられよう。

円形土坑は、径の小さいものは、掘立柱建物跡・柵列をはじめとする柱穴の可能性が高い。墓坑になり得る大きさと考えられる径0.5m以上のものを見てみると、60基前後にのぼる。分布をみると、広く散らばる傾向が看取される。

（4）土壠と溝

土塁と溝の規模を検討したいが、掘立柱建物跡などの遺構の本来の掘り込み面と土塁の構築面の関係が記録からは掴めない。しかし、土塁は、構築面の幅が2m以上、最大5mにもなることから、それなりの高さを持っていたことが想定される。調査時点の土塁の高さでも、溝の底からは1.5m前後あったと推定される。しかしながら、溝の断面形は逆台形であって、防御用としては不十分と判断される。

(5) 出土遺物

遺物の面から検討すると、居館跡からの出土遺物は量的には多くない。その中には、日用の陶器として常滑の甕・すり鉢の大形破片が目につくほか、北宋錢の銭貨も目立つが、奢侈品の中国青磁は小破片だけである。寺院に關係するような仏具の類いや板碑などは、出土していないようである。居館跡の存続時期については、出土した陶磁器の製作年代から、13世紀前葉から15世紀中葉と考えられる。これは、時代的には鎌倉時代後期から室町時代前期のおよそ300年間にあたる。居館跡の性格は、絞り込むことができない。

(6) 台地整形区画

居館跡と同時期の遺構と出土遺物から判断されるのが、居館跡から北側に谷津を越えた南向きの台地斜面に立地する台地整形区画である。ただ、両者の関係は不明である。

松崎Ⅱ遺跡でも溝による方形の区画を検出しているが、土塁を伴わず、区画内には掘立柱建物跡がまばらに見られるだけであり、この居館跡とは、性格を異にすると思われる。

(7) 居館跡と墓域

居館跡の東側斜面部で検出した墓域の年代については、出土した陶磁器の製作年代が13世紀初頭から13世紀の末葉という期間である。一方、居館跡から出土した陶磁器には、13世紀前葉から15世紀中葉の製作年代が与えられる。このことは、居館跡と墓域の営まれた年代や時期がほぼ同時期である事を示唆するものであるが、居館跡から出土した陶磁器は墓域内の火葬墓から出土した遺物よりもその製作年代の上限と下限に幅があることが知られる。この事と居館跡内に火葬施設（SK333・SK387）や火葬墓（SK343）、地下式坑や上坑があることを考え合わせると、墓域や土地利用そのものにも変化があったことを窺うことができる。

(8) 近世の野馬上手

近世の野馬上手は、松崎Ⅲ遺跡の北側に位置する松崎Ⅱ遺跡の南部でも1条検出されたが、松崎Ⅲ遺跡の野馬上手とは離れている。

堀付きの土塁は、遺跡中央に位置する西に向って突き出す台地の東側にあたる付け根に1条築かれていた。堀は台地の付け根にあたる東側に設けられていた。堀の断面形態は中世の城館跡などに見られるV字形の薬研堀に近い。堀の両端にはそれぞれ地山のハードローム層を掘り込んだトンネル状のものが見られた。トンネル状の穴は、北側は崩落の危険があつたため完掘することができず、南側は造成工事により削平されており、規模は不明である。したがって、性格は不明と言わざるを得ない。溝は地境と思われ、土坑の性格は不明である。

松崎遺跡群一帯は、近世において林地や荒蕪地であったことが推測される。

引用・参考文献

- 大野康男 1993「八千代市坊山遺跡」『荒田地区埋蔵文化財調査報告書VI』(財)千葉県文化財センター
- 酒井弘志・宇井義典 2004『印旛の原始・古代・旧石器時代編』(財)印旛都市文化財センター
- 白石浩之ほか『吉岡遺跡群II』(財)かながわ考古学財団
- 須藤隆司 1991「立科F遺跡」『長野県佐久市前山立科F遺跡発掘調査報告書』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 源訪間 順 1989「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第24号 神奈川考古同人会
- 源訪間 順 2001「相模野旧石器編年の到達点」「相模野旧石器編年の到達点」神奈川考古学会
- 田村 隆 1989「佐倉市大林遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』(財)千葉県文化財センター
- 田村 隆ほか 1987「佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡」「佐倉第三工区團地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV』(財)千葉県文化財センター
- 田村 隆・橋本勝雄 1984『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』(財)千葉県文化財センター
- 新田浩一 1995「下絵型石刃再生技法の提倡」『千葉県文化財センター研究紀要16』(財)千葉県文化財センター
- 新田浩一 2004「印西市新井堀II遺跡・前戸遺跡」『印西市道00-026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 橋本勝雄 1984「八千代市権現後遺跡」『荒田地区埋蔵文化財調査報告書1』(財)千葉県文化財センター
- 山岡唐由子 2004「印西市松崎I遺跡」「松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書2」(財)千葉県文化財センター
- 横山祐平・川口 潤ほか 1984「武藏台遺跡I」都立府中病院内遺跡調査会
- 千葉県文化財センター 2003「松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1 -印西市松崎I遺跡-」
- 千葉県文化財センター 2004「松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書2 -印西市松崎I遺跡-」
- 千葉県文化財センター 2004「松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書3 -印西市松崎VI遺跡・松崎Ⅶ遺跡-」

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真 (1/10,000・1989年撮影)



全景（南東から）



遠景（南から）



遺跡西側谷



第Ⅰ文化層 第1ブロック
遺物出土状況（北東から）



第Ⅰ文化層 第1ブロック
東側セクション（西から）



第Ⅱ文化層 第2ブロック
遺物出土状況（南東から）



第Ⅲ文化層 第3ブロック
遺物出土状況（北西から）



第V文化層 第5ブロック
遺物出土状況（北西から）



単独出土 6・11
19S01・11グリッド



第IV文化層 第4ブロック
遺物出土状況（南東から）



単独出土15 18R-82グリッド
遺物出土状況（南西から）



単独出土16 19R-30グリッド
遺物出土状況（北西から）



SI001



SI002



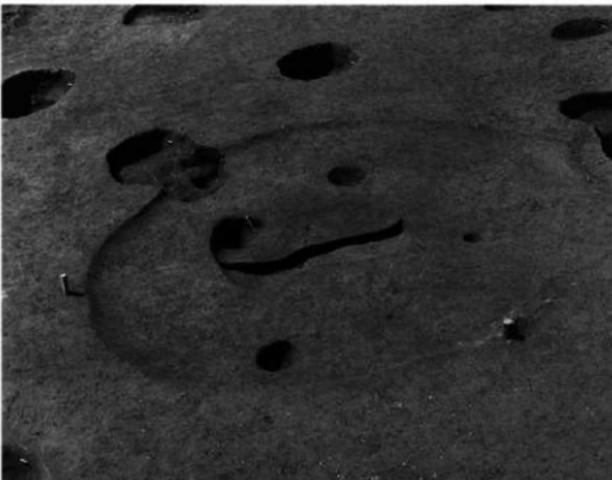
SI003



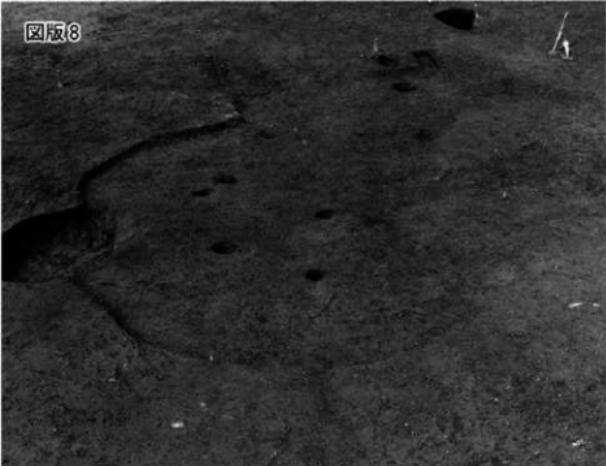
SI004



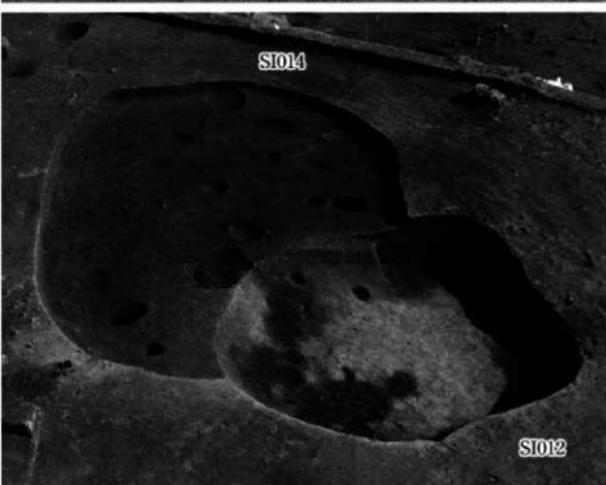
西から
SI007



SI010



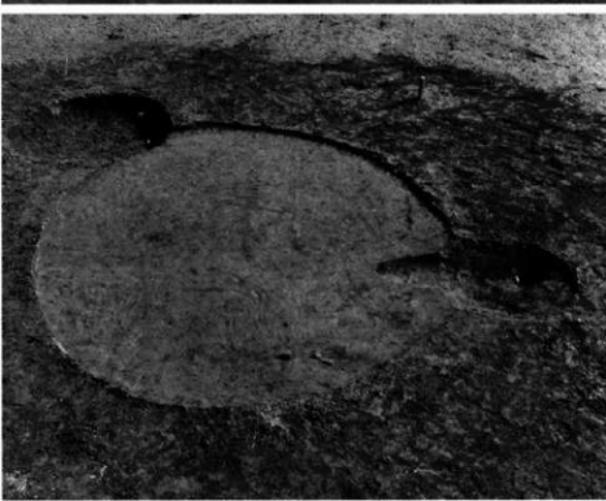
SI013



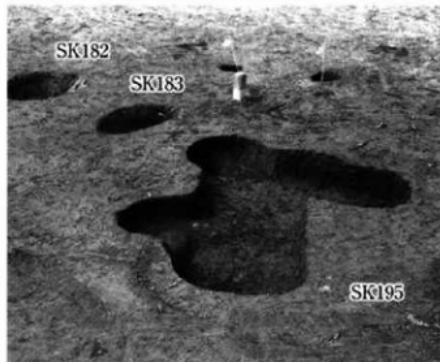
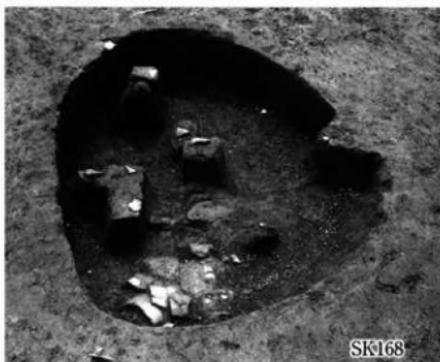
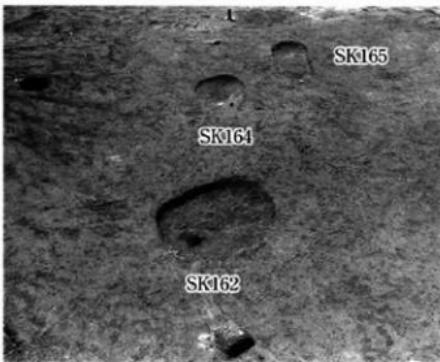
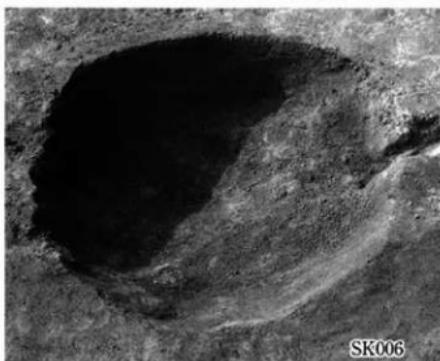
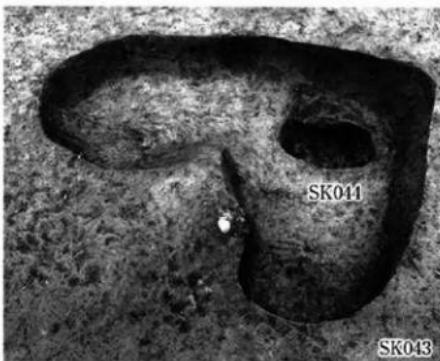
SI012

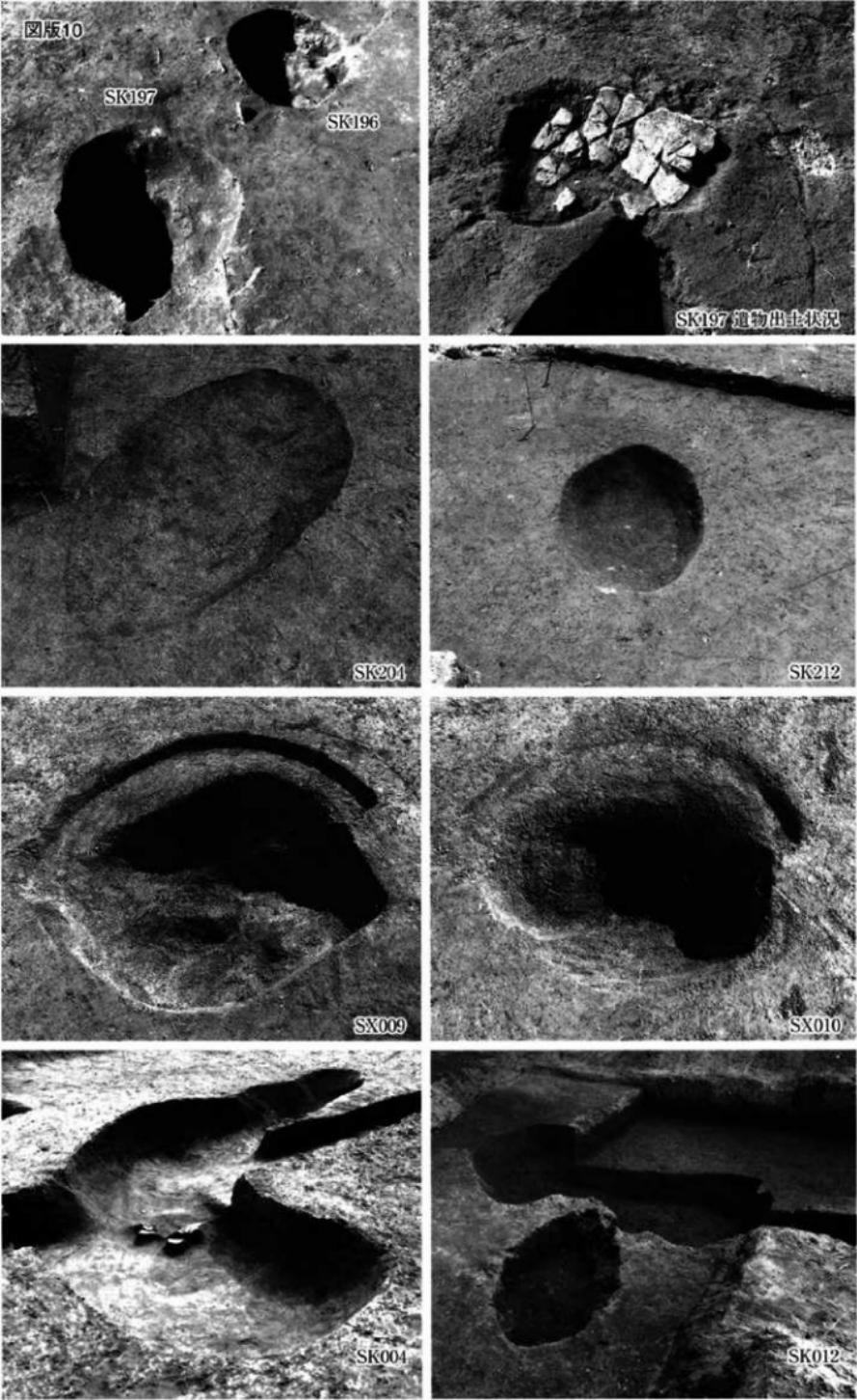


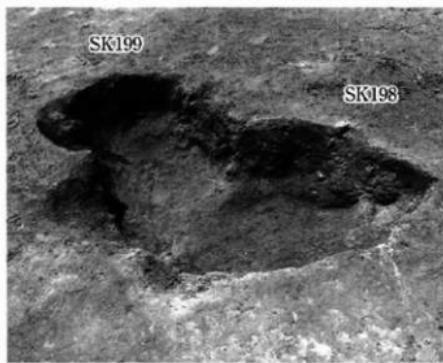
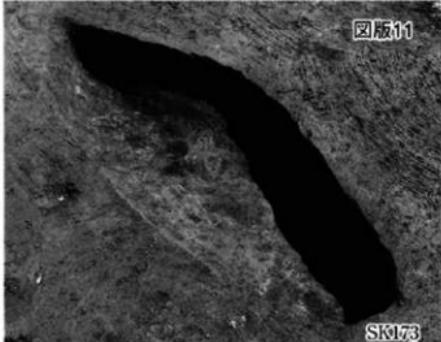
SI014
(遺物出土状況)



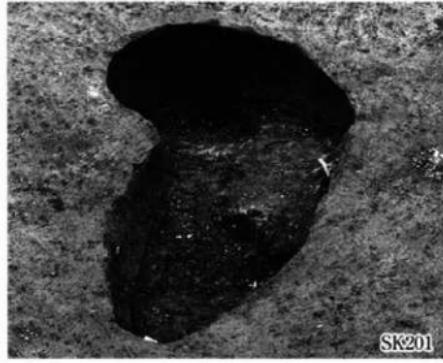
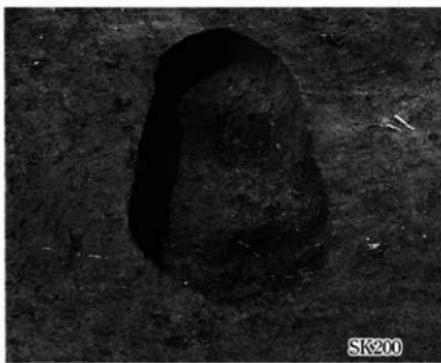
SI015





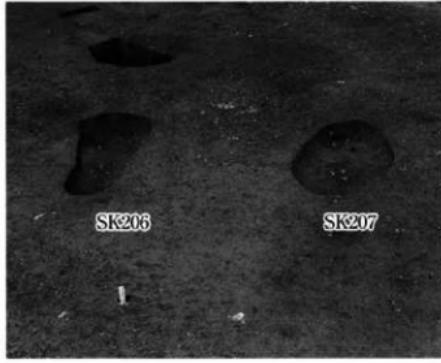


SK198

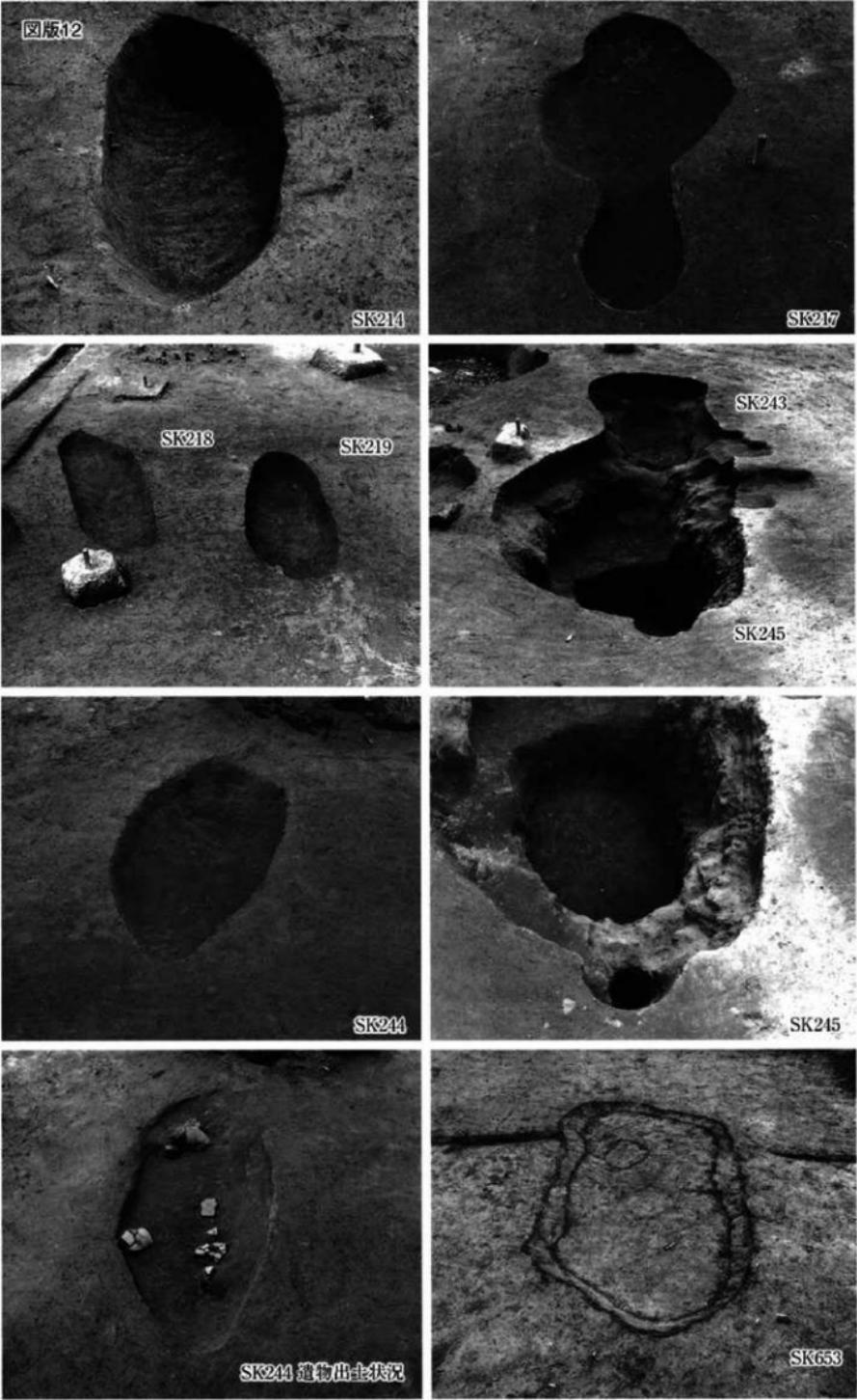


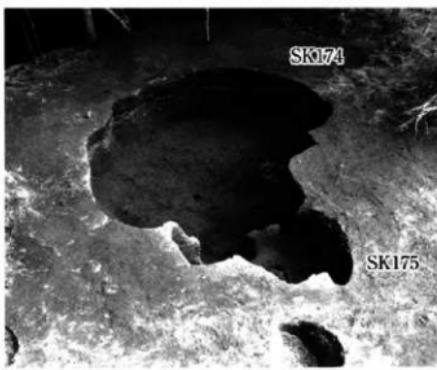
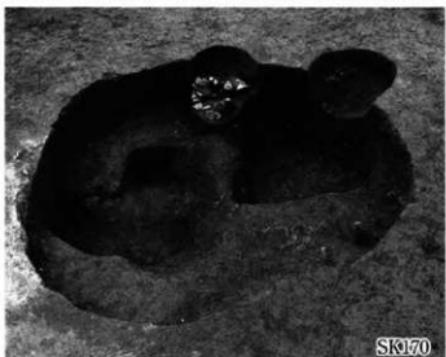
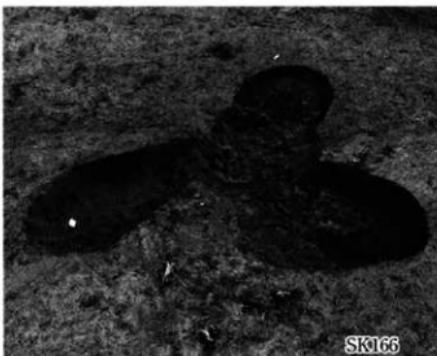
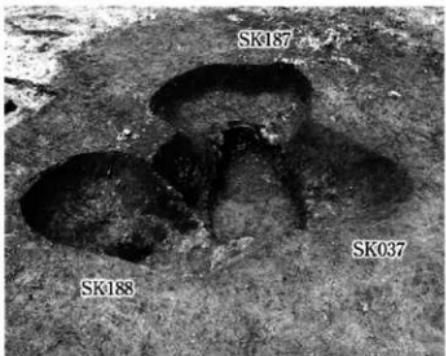
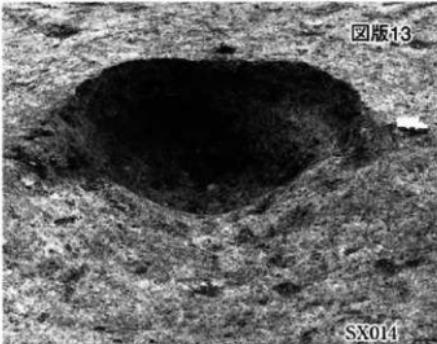
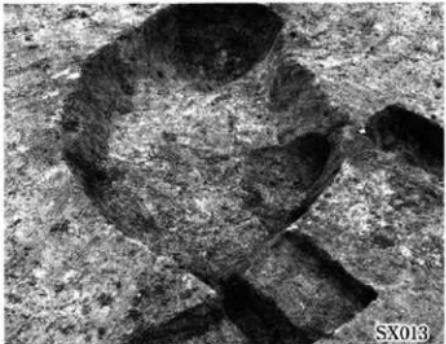
SK206

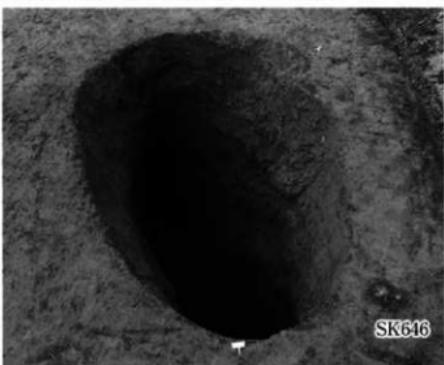
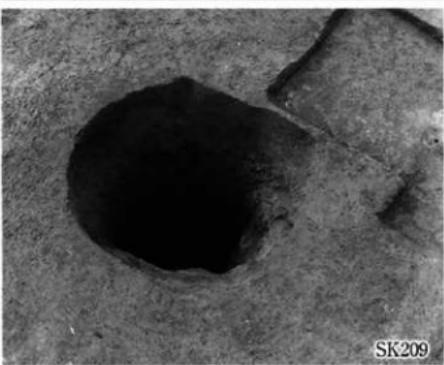
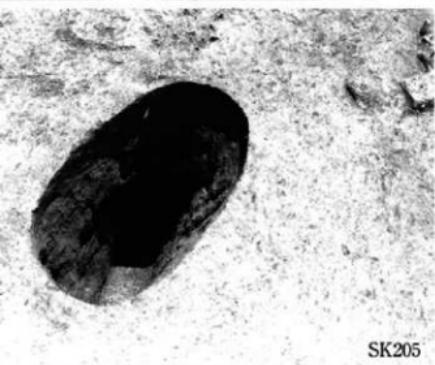
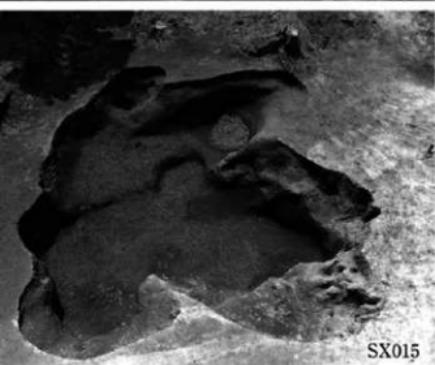
SK207

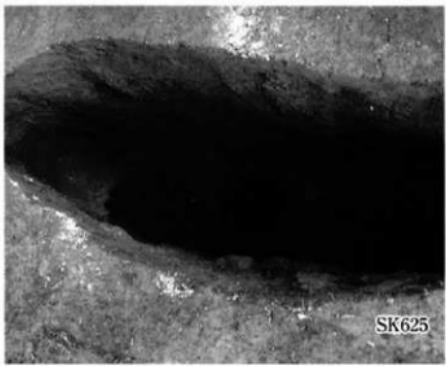
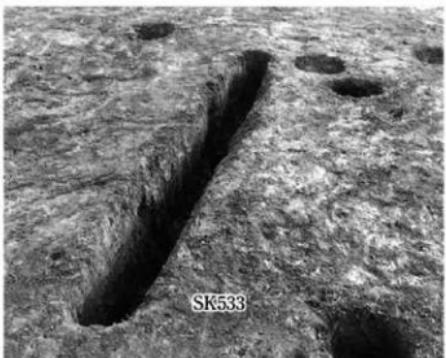
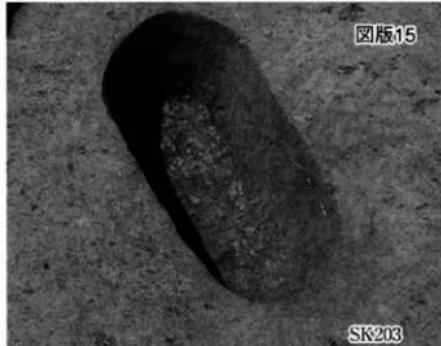
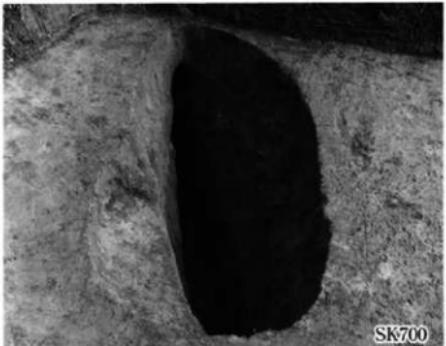


図版12

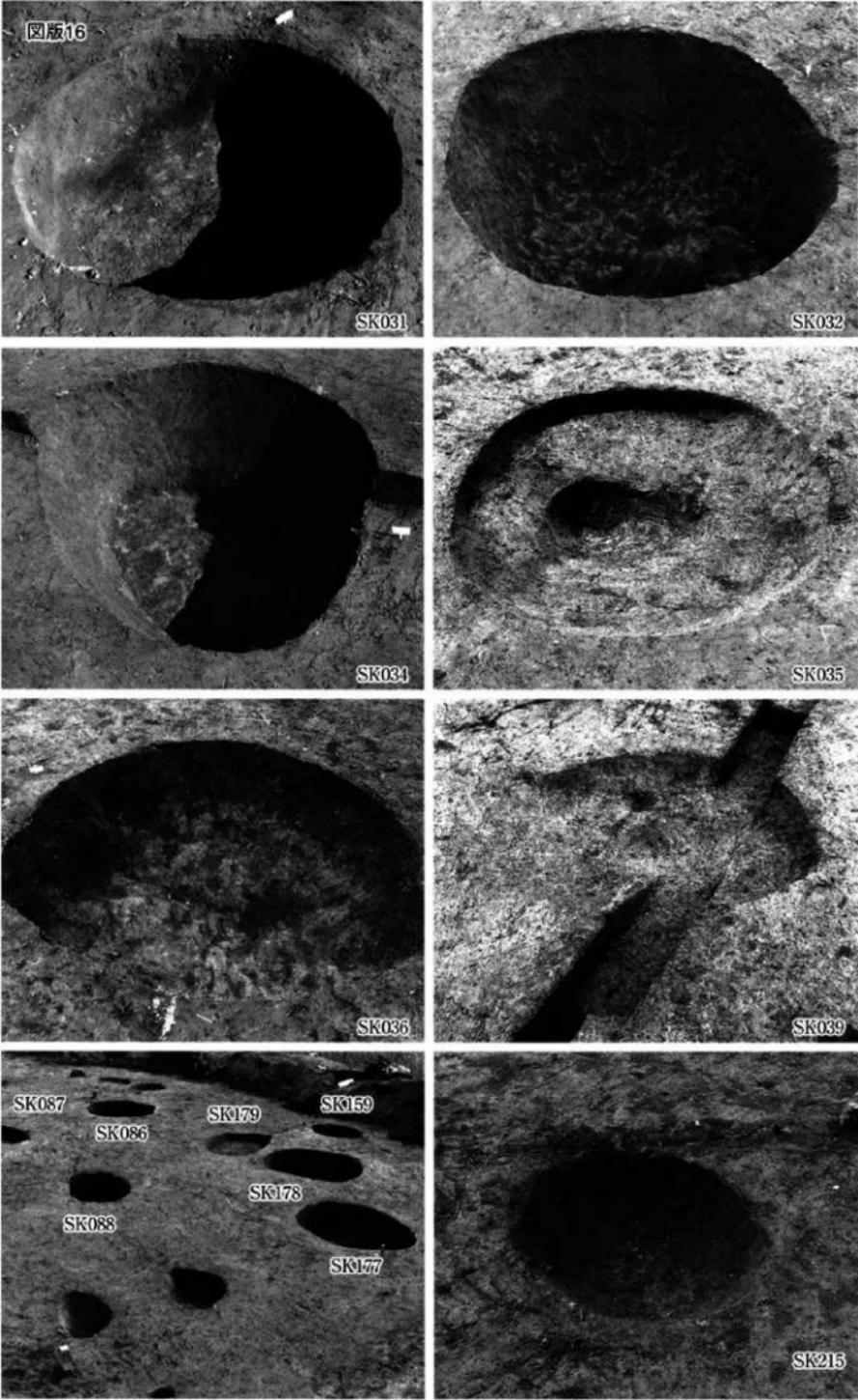


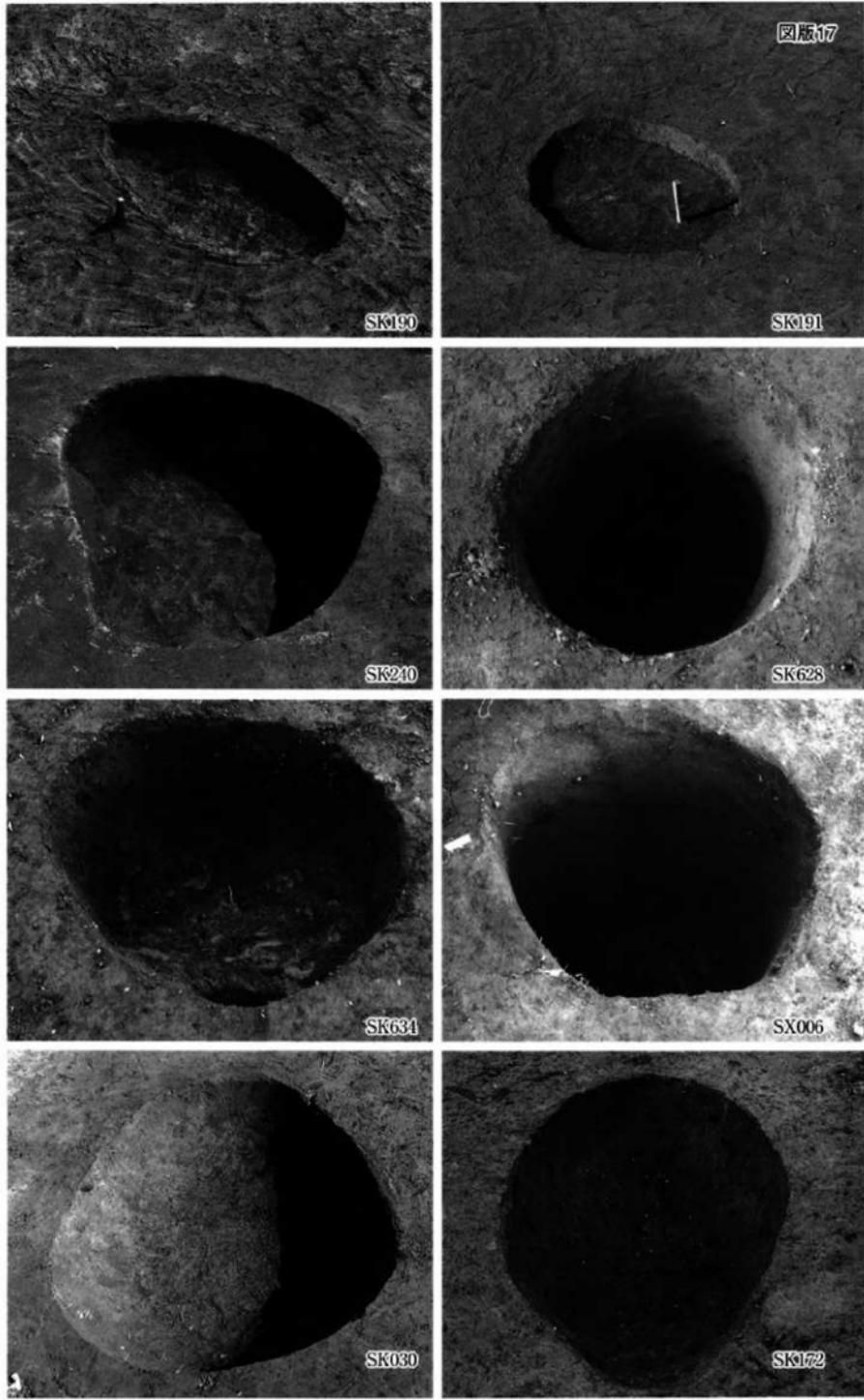


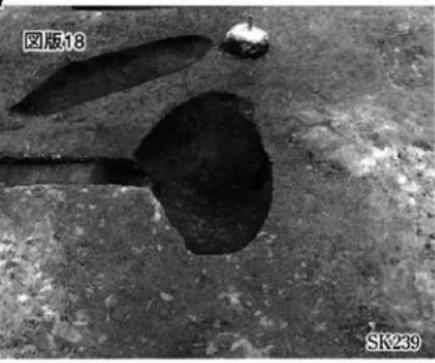




図版16







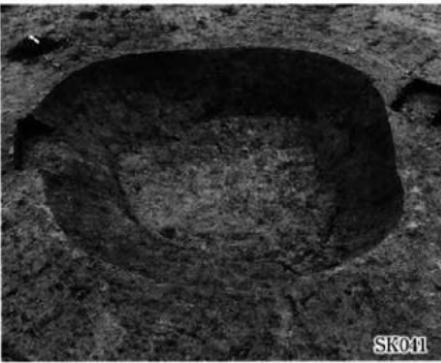
SK239



SK654



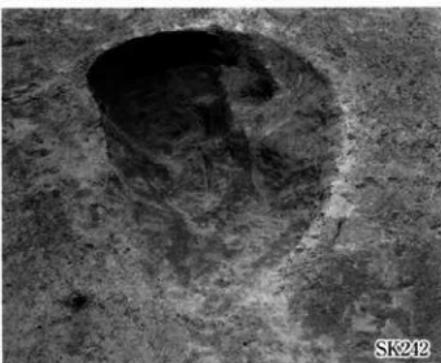
SK011



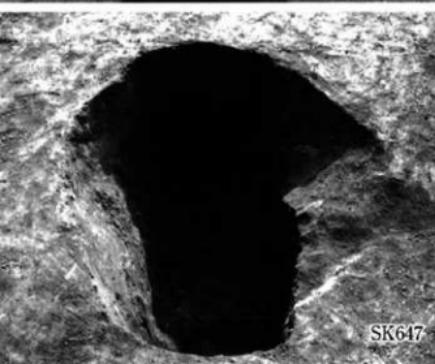
SK041



SK202



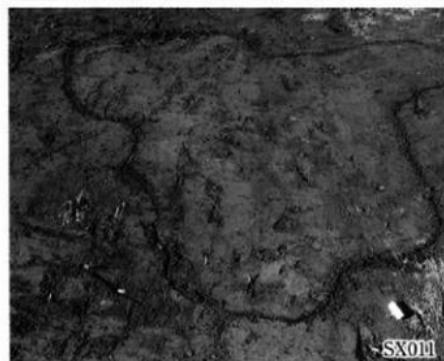
SK242



SK647



SK017

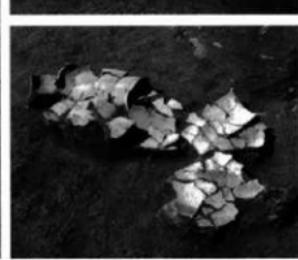




SD004 (古墳)



SI005



SI006

SI011



SI012



SX005





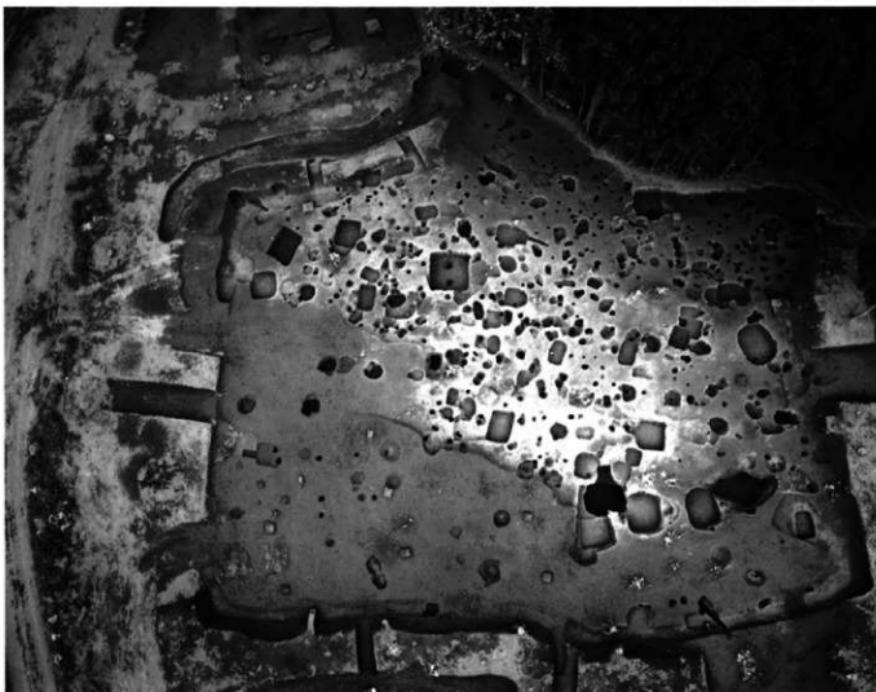
中世居館跡（北から）



中世居館跡（北西から）



中世居館跡（西から）



中世居館跡東区



中世居館跡 土塁A, 溝・SD025 (西から)



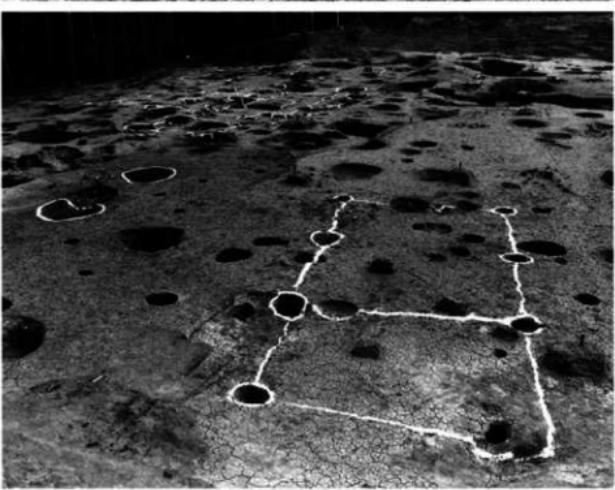
中世居館跡 土塁A, 溝・SD025 (南から)



中世居館跡
土塁A, 溝・SD025土層断面 (南東から)



中世居館跡 土壙B, 溝・SD025・026（北東から）

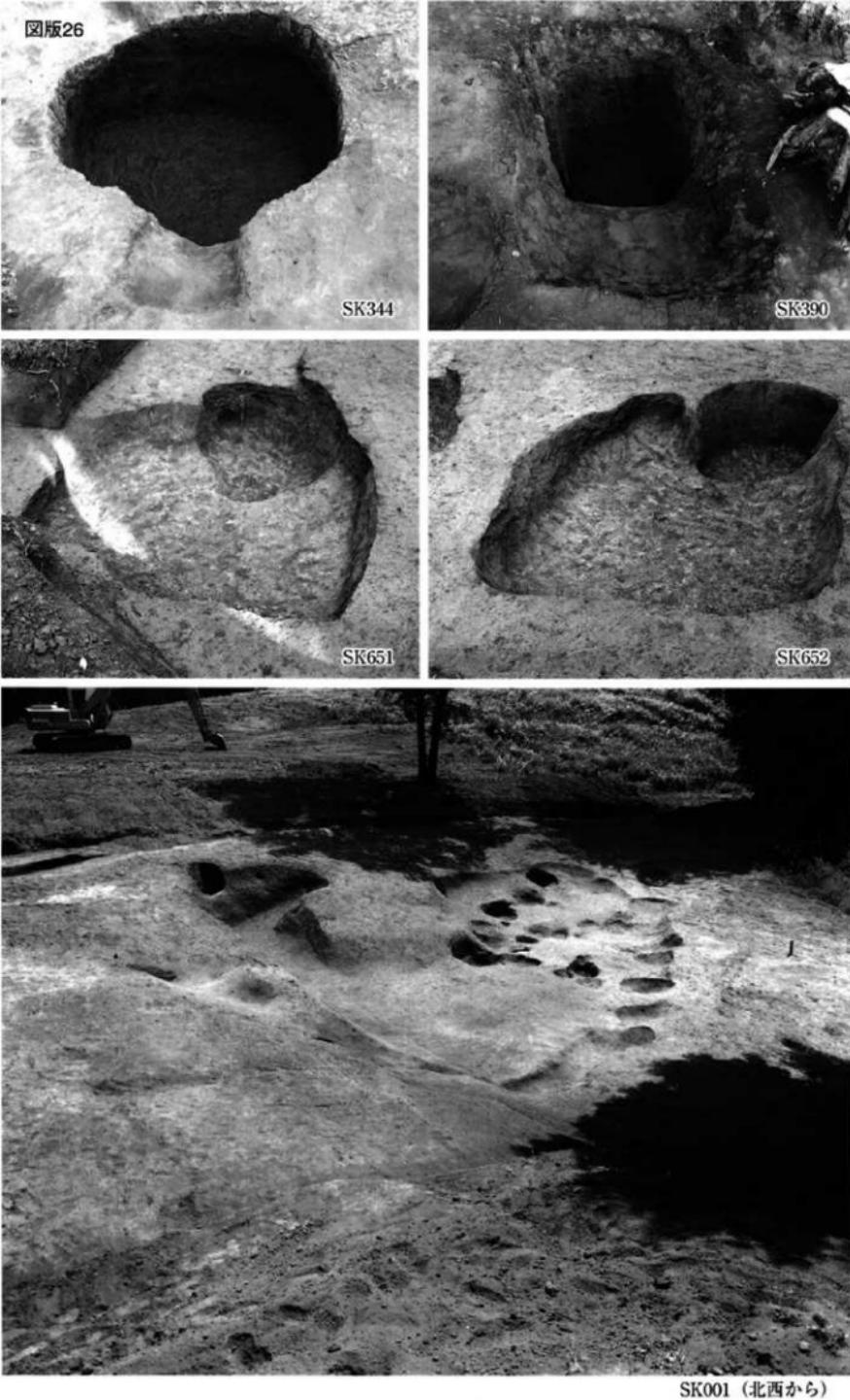


中世居館跡東区内遺構（北から）



中世居館跡東区内遺構（南東から）

図版26



SK001 (北西から)



SK001（南東から）

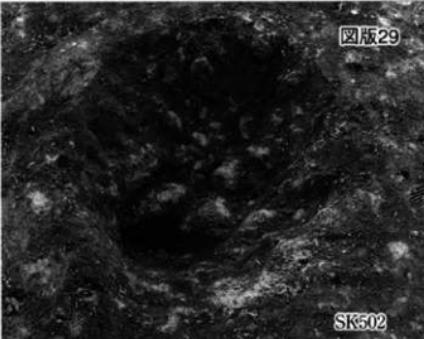


SK001（南東から）





SK501



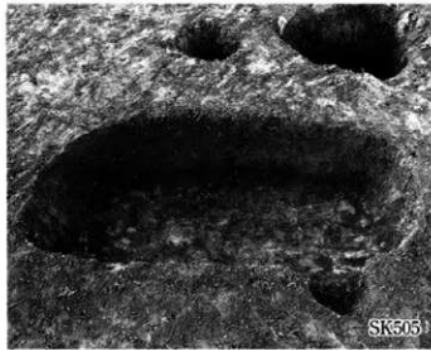
SK502



SK503



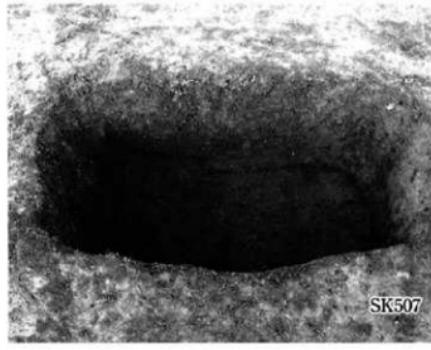
SK504



SK505



SK506

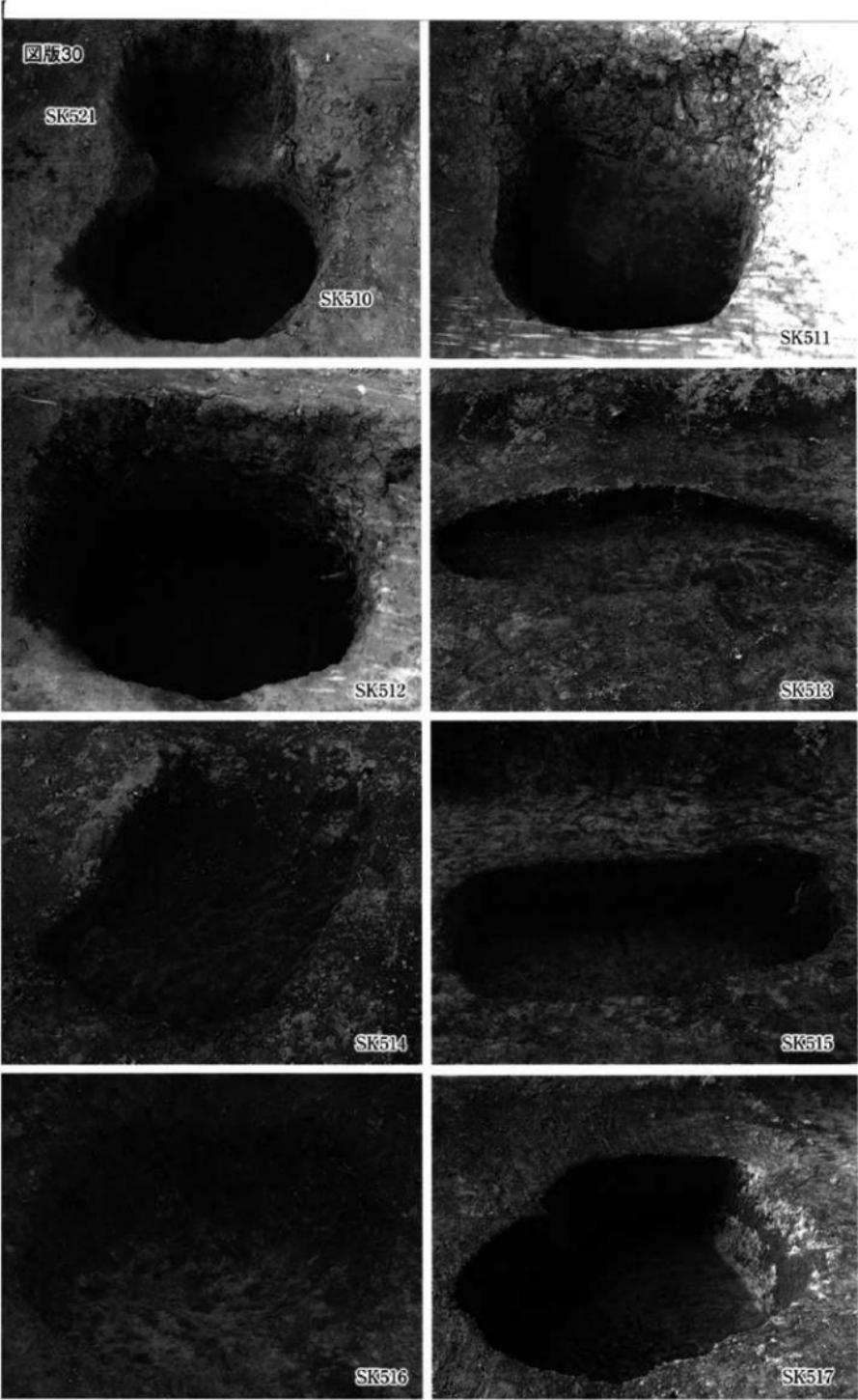


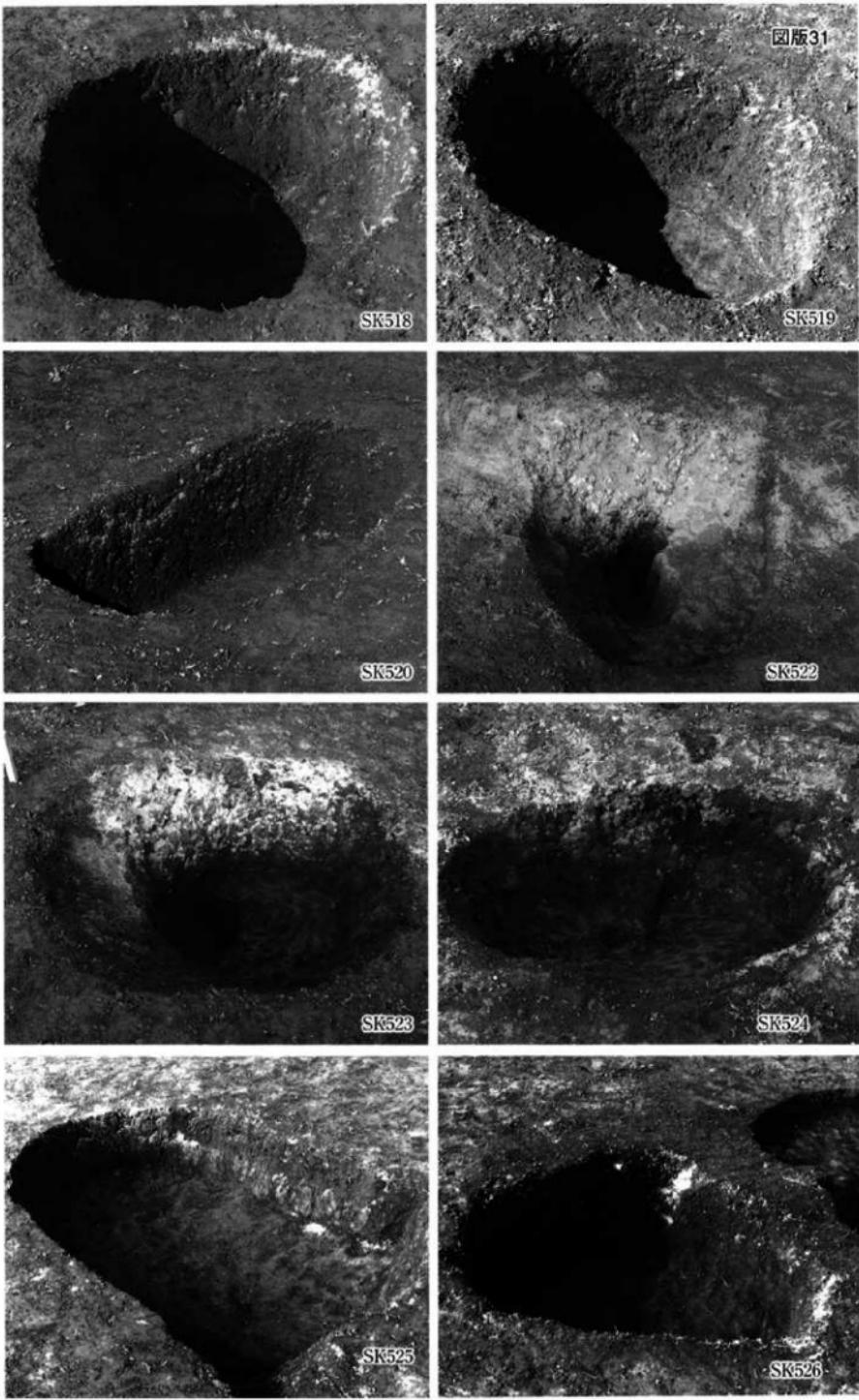
SK507



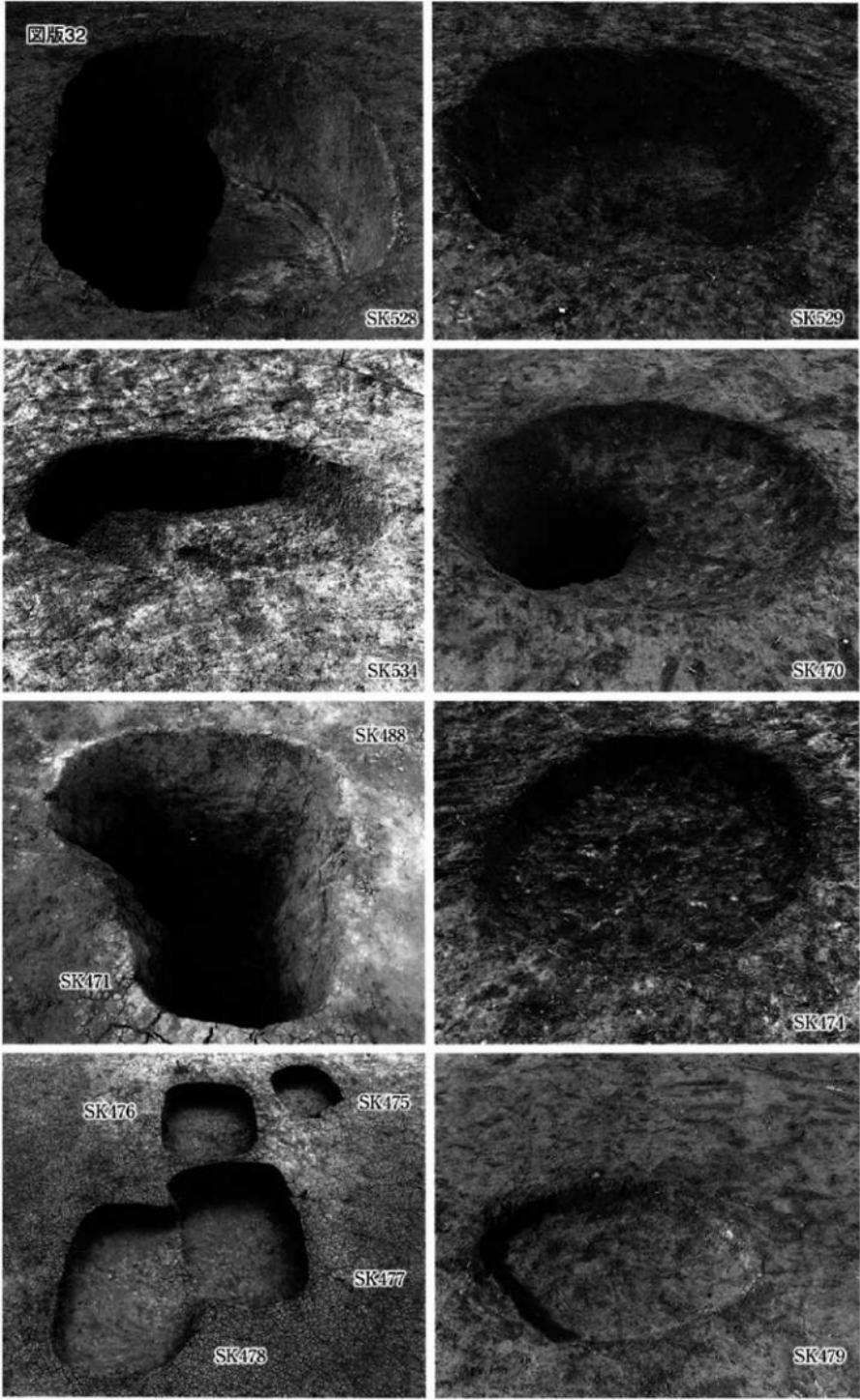
SK509

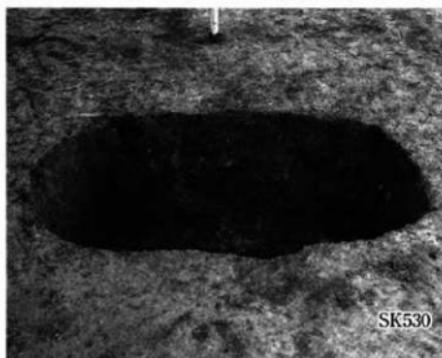
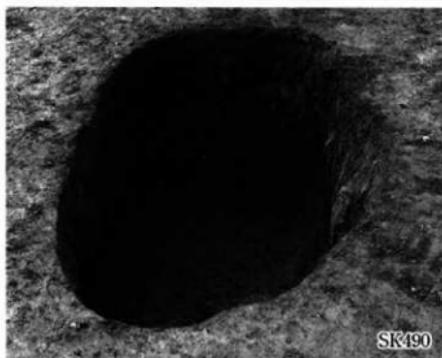
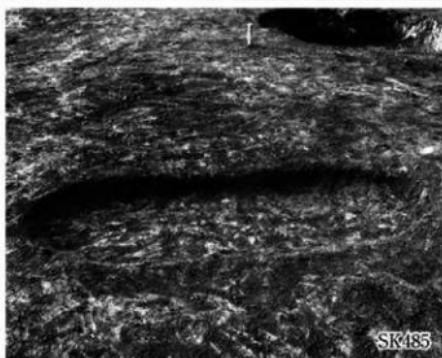
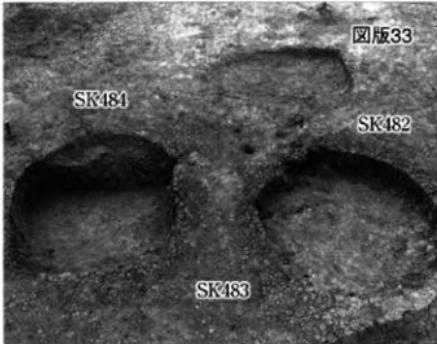
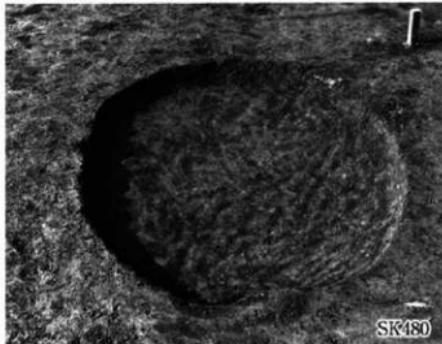
図版30





図版32







野馬土手SD033（北西から）



野馬土手SD033（北東から）



野馬土手SD033（南東から）





SD038・040・041・042・043（北から）



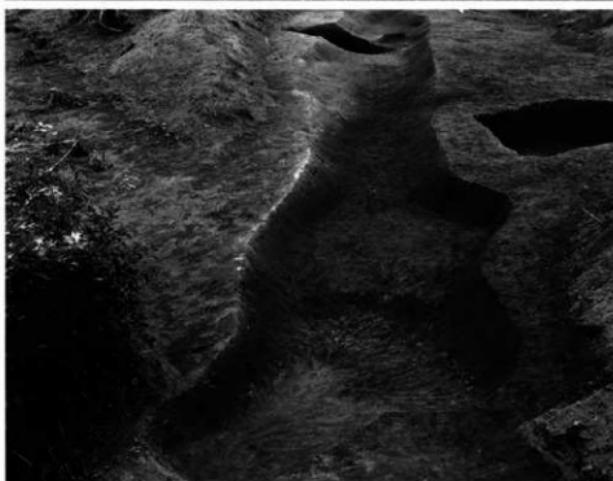
SD019



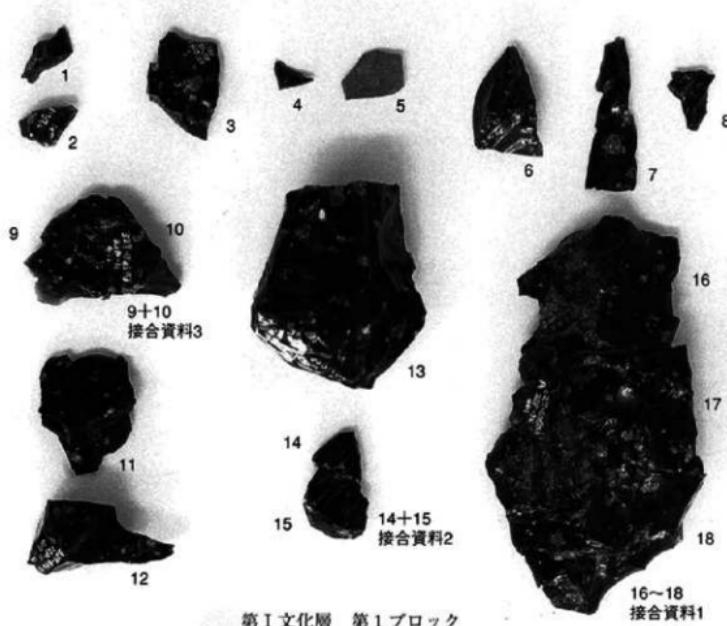
SD020



SD022・023



SD030

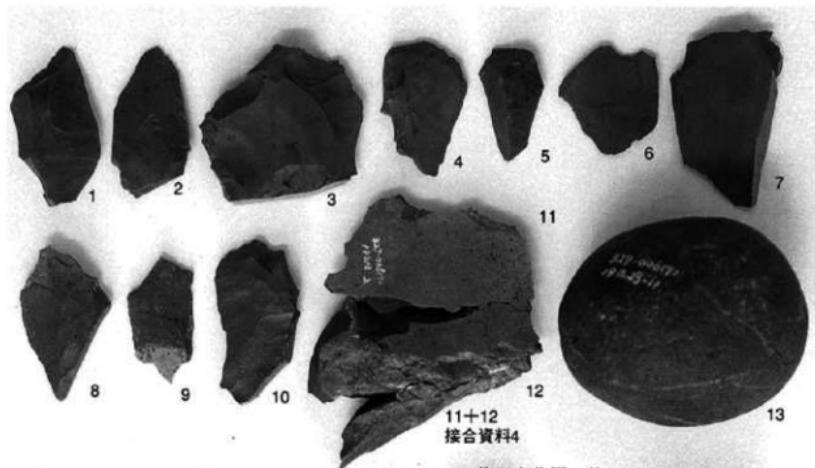


第Ⅰ文化層 第1ブロック

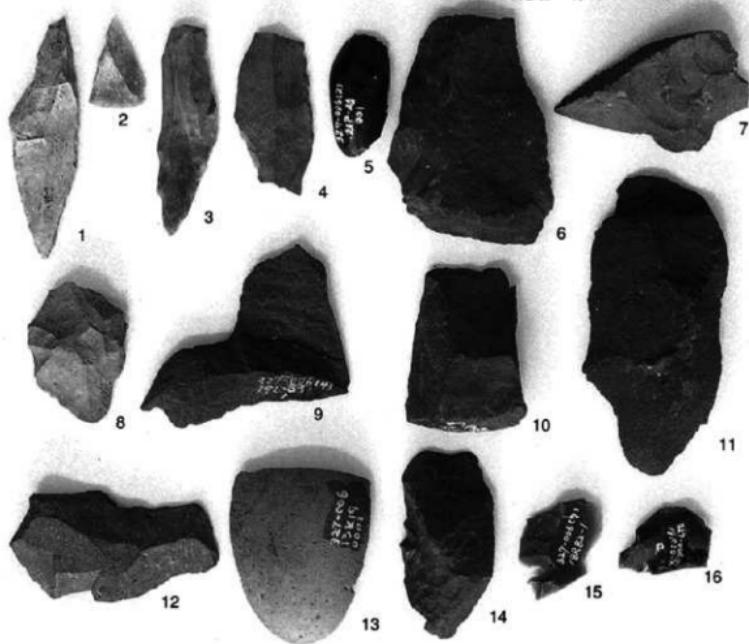


第Ⅱ文化層 第2ブロック

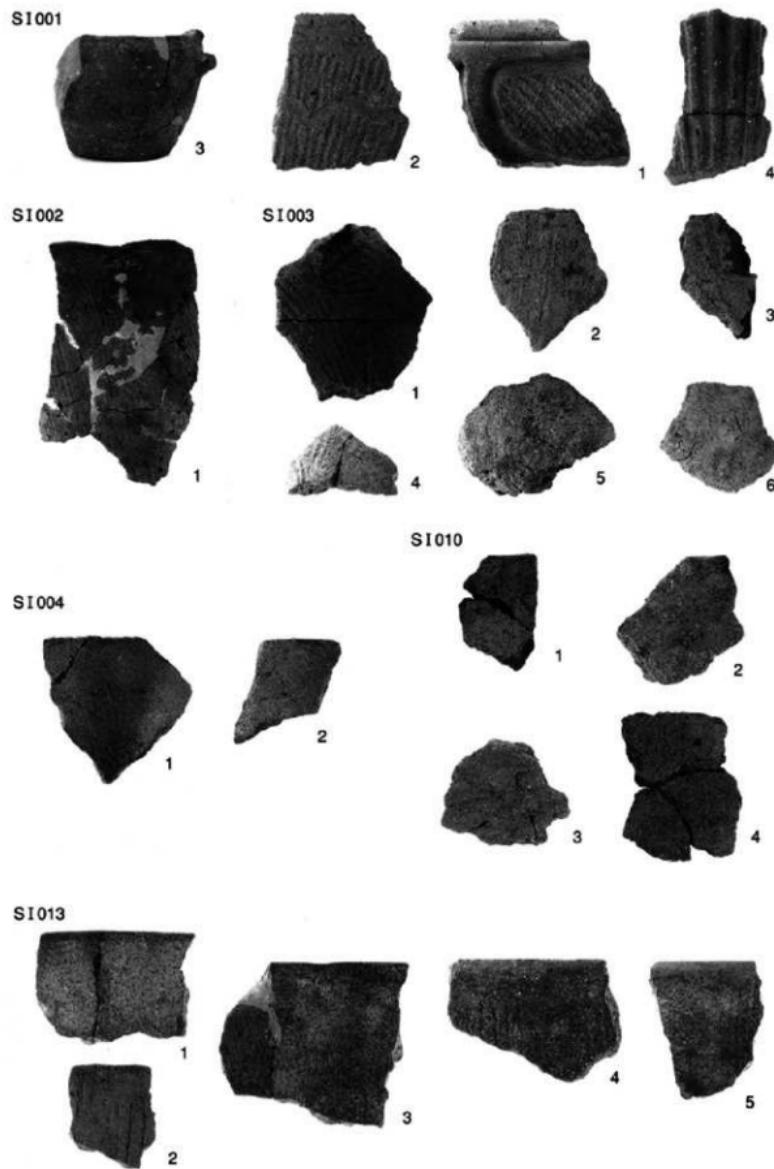
第Ⅴ文化層 第5ブロック



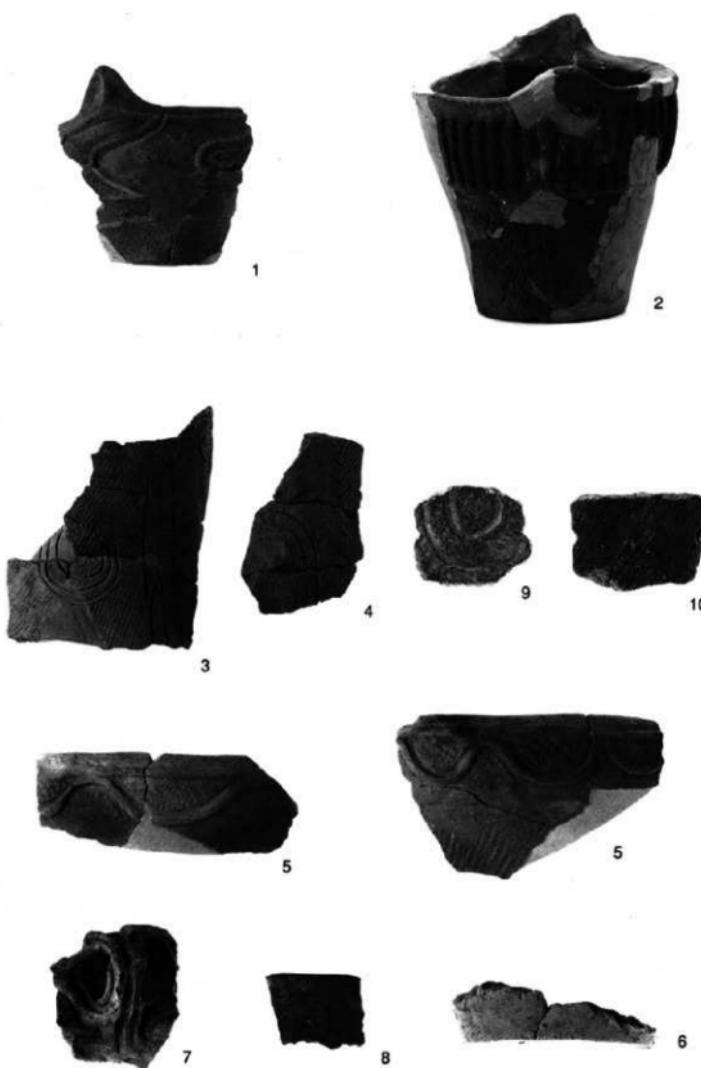
第IV文化層 第4ブロック



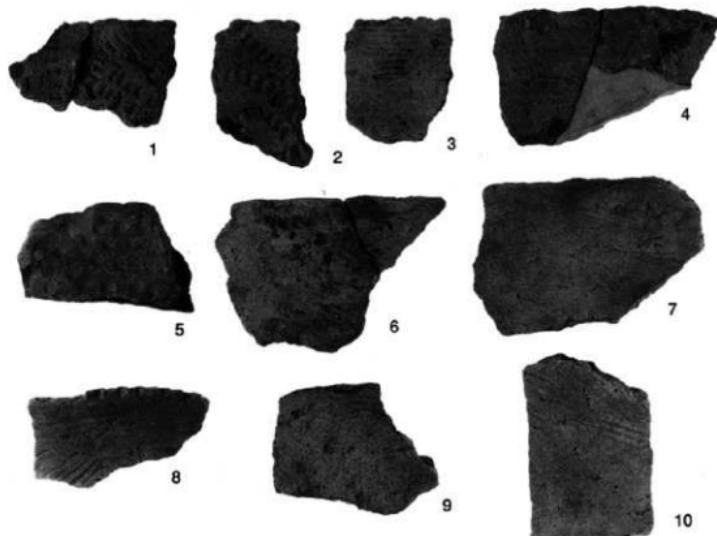
単独出土



縄文住居出土土器 SI001・002・003・004・010・013



SI007出土縄文土器



SI014 出土縄文土器

SK004



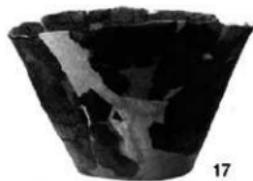
SK043



SK170



SK174



SK244



炉穴出土縄文土器 (1)

SK168



5

SK170



9



6



7



11



12

SK171



13



10



14



15



16

SK187

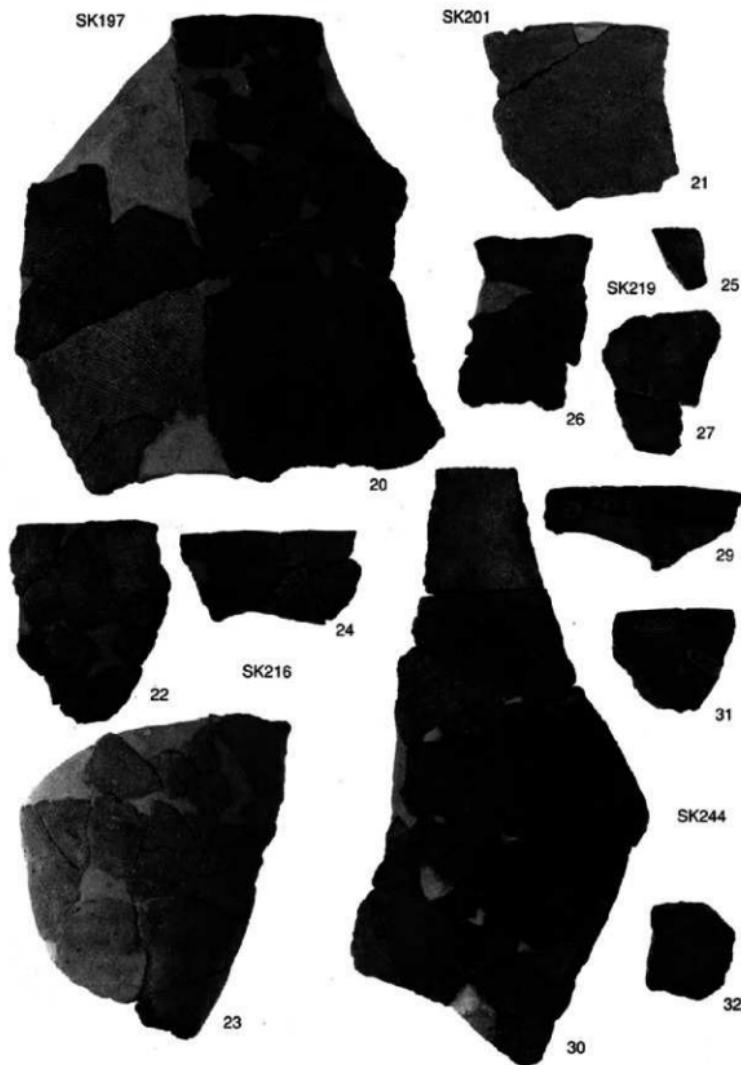


19

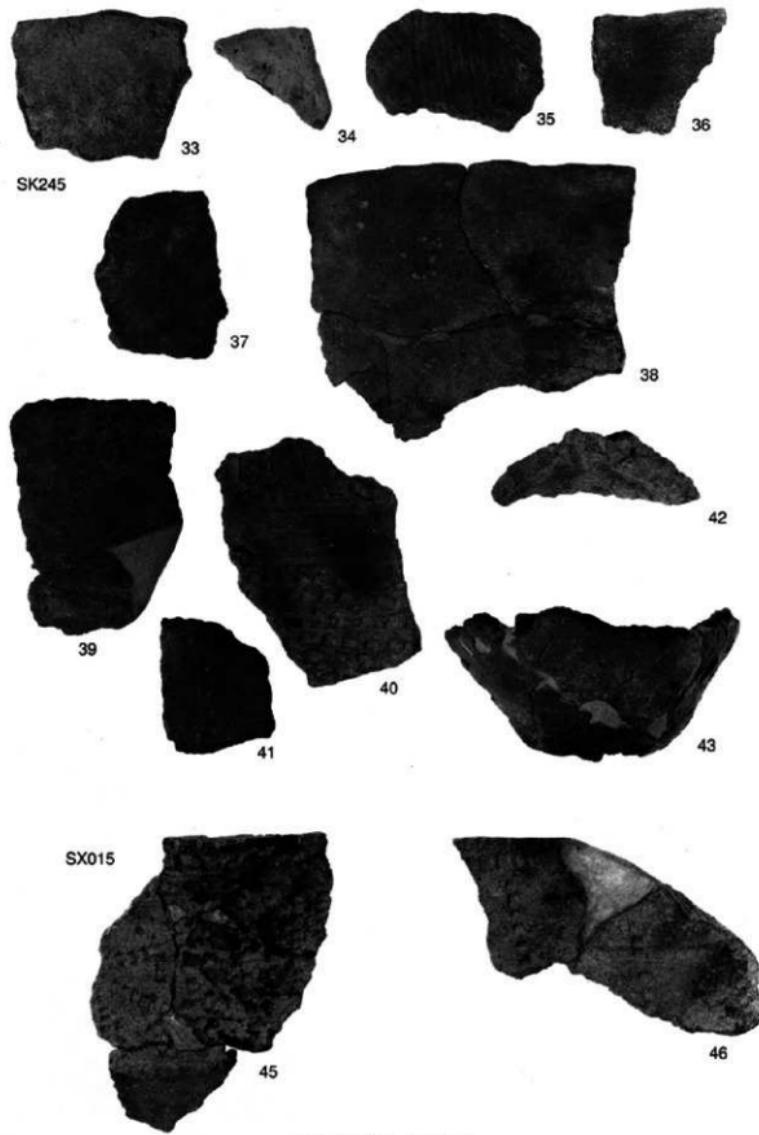


18

炉穴出土縄文土器 (2)



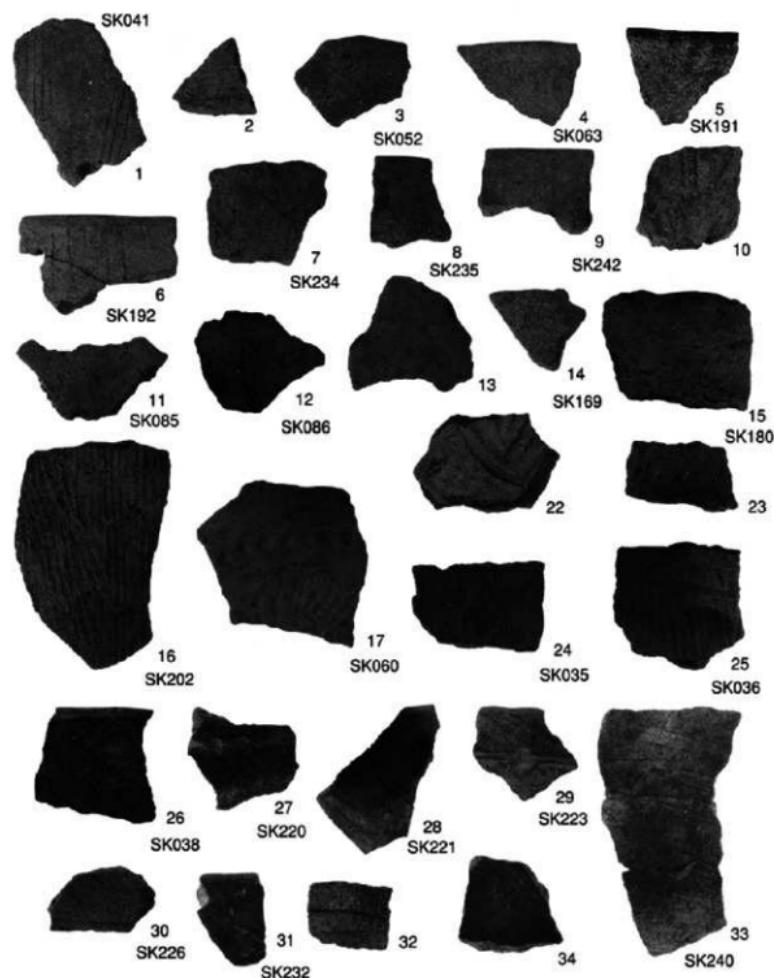
炉穴出土繩文土器 (3)



炉穴出土縄文土器 (4)



陥穴出土縄文土器



土坑出土縄文土器

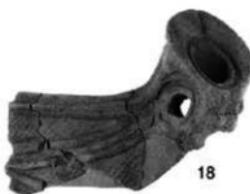
SK245



SX015



SX008



遺構外-121

炉穴・遺構外出土縄文土器

遺構外-224



226—遺構外



227—遺構外



230—遺構外



329—遺構外



328—遺構外



222—遺構外

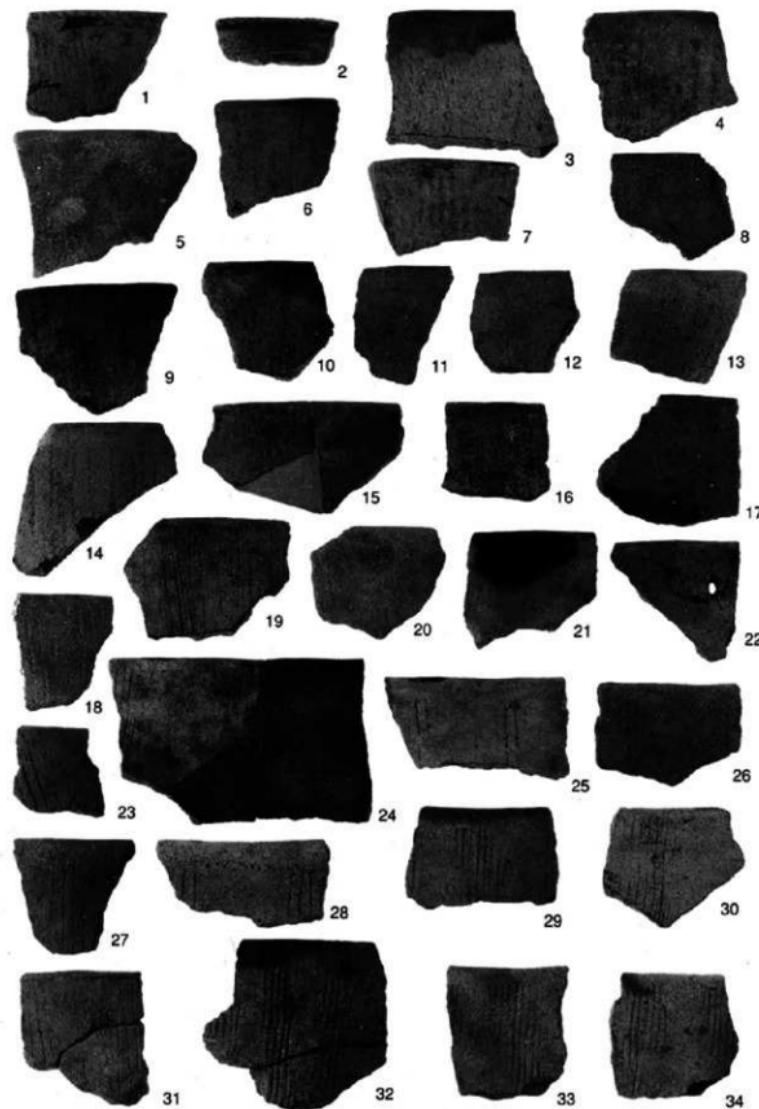


223—遺構外

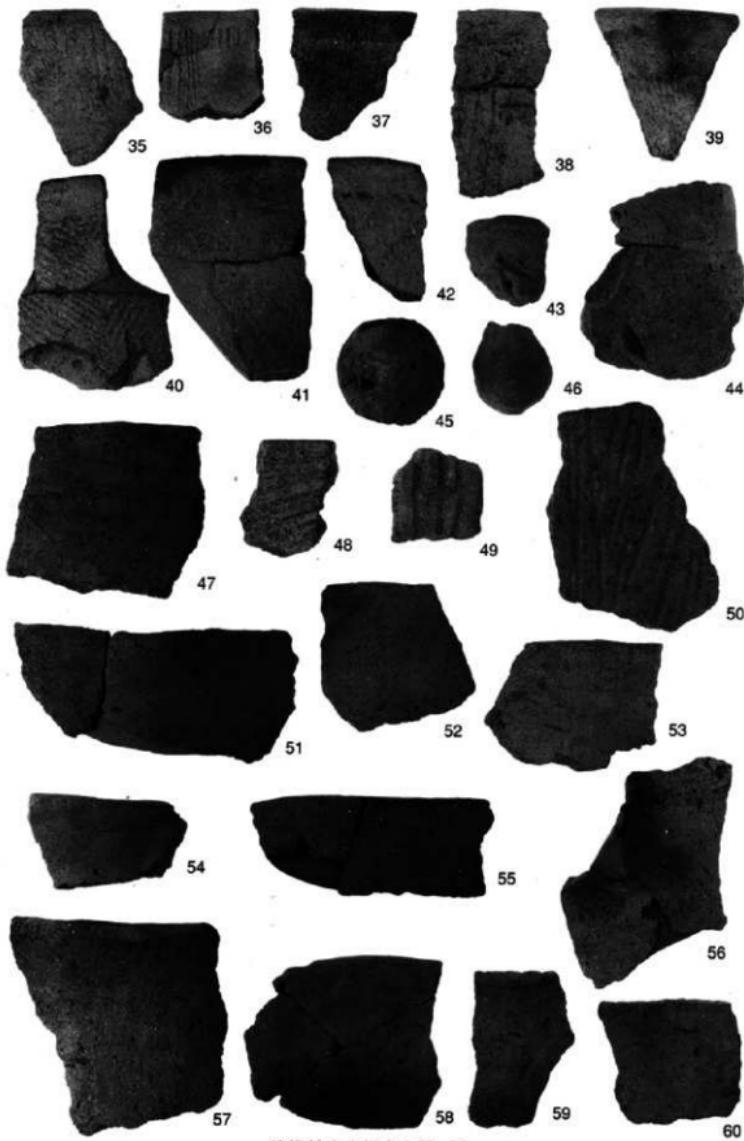


331—遺構外

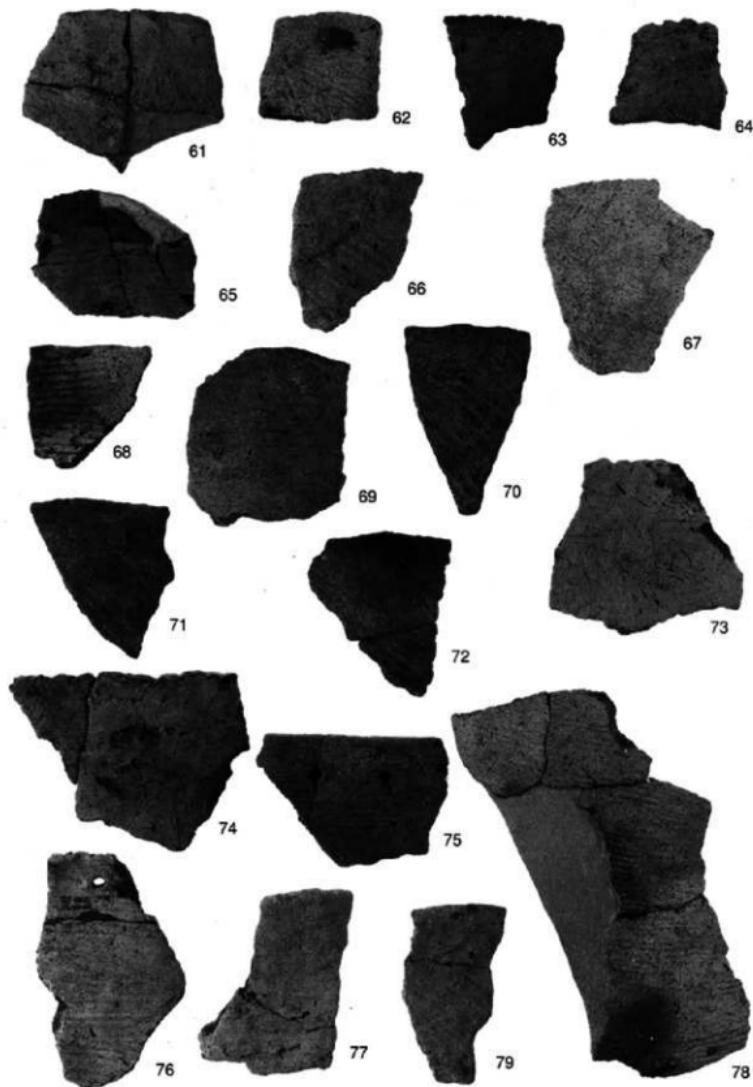
遺構外出土縄文土器（1）



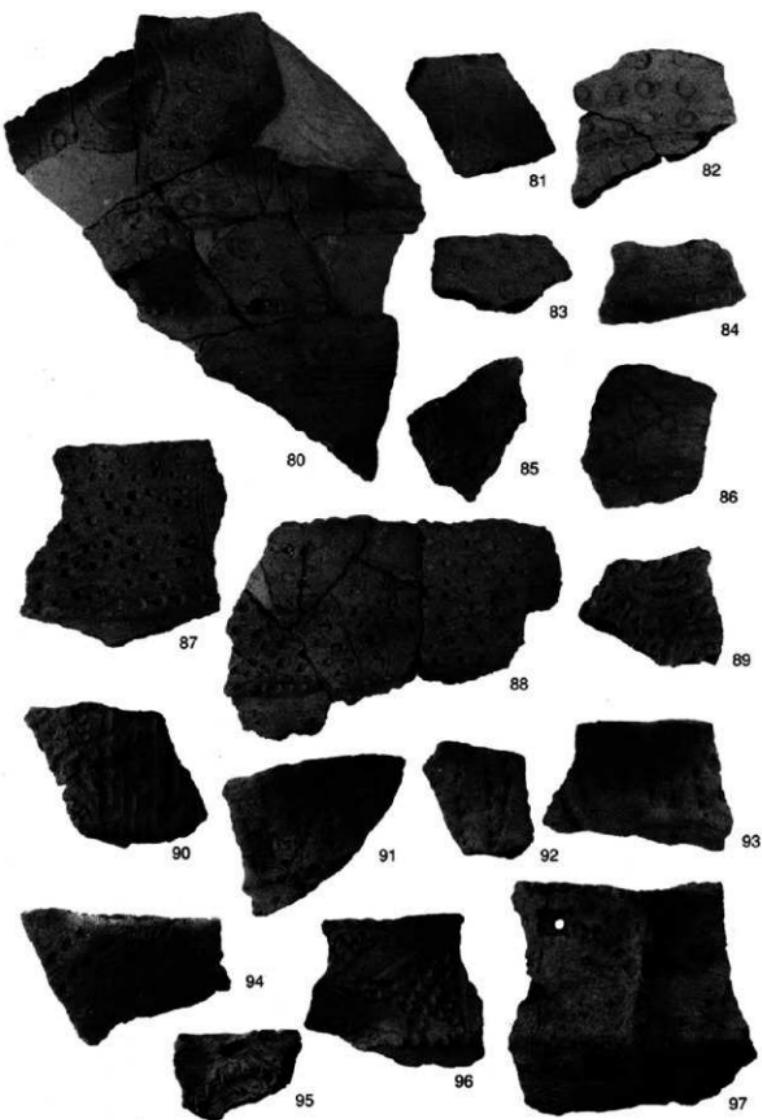
遺構外出土縄文土器 (2)



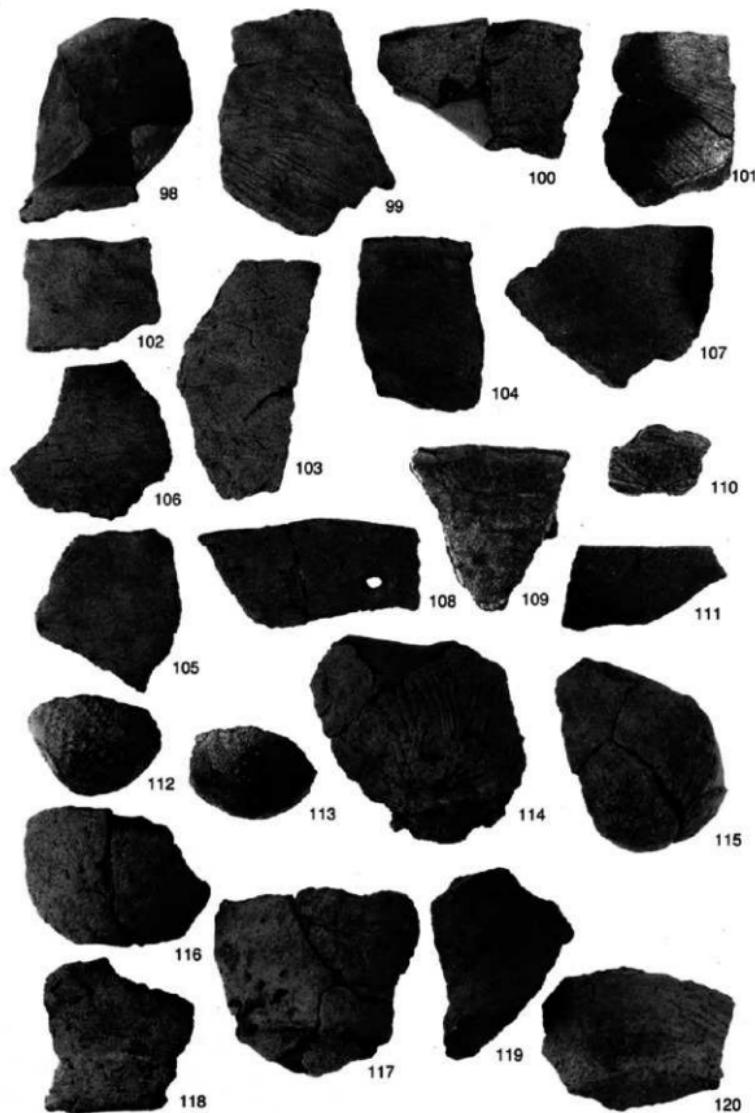
遺構外出土縄文土器 (3)



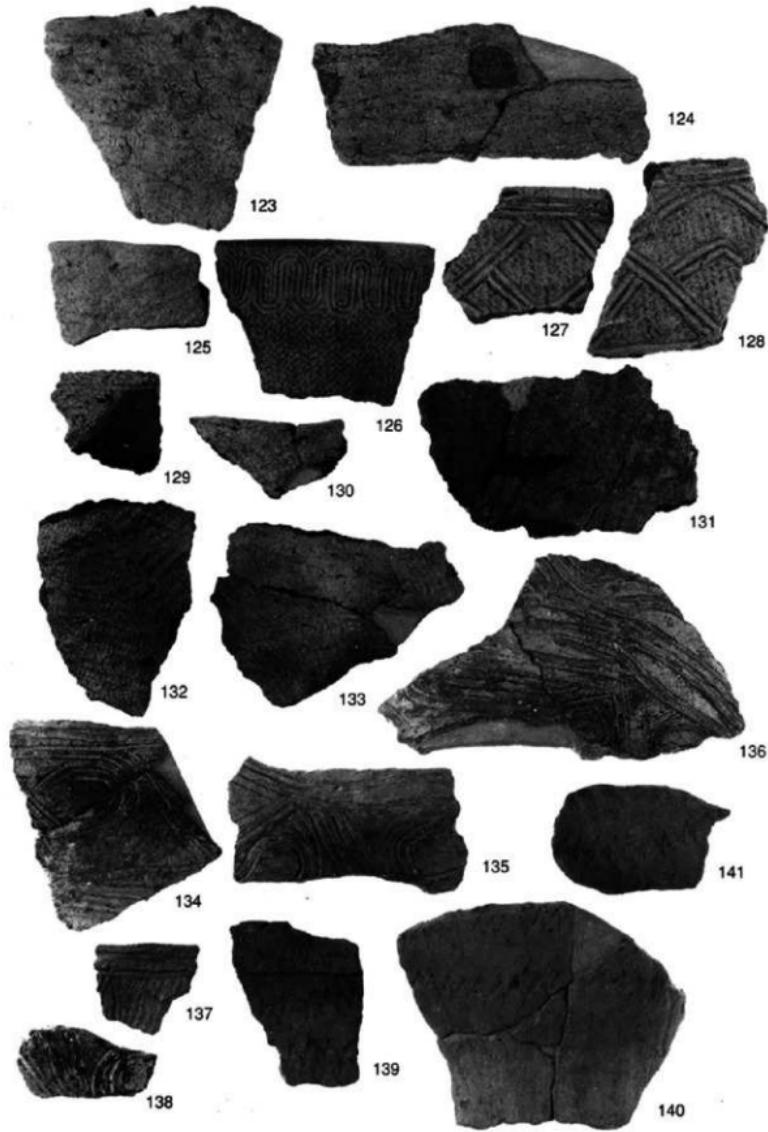
遺構外出土縄文土器 (4)



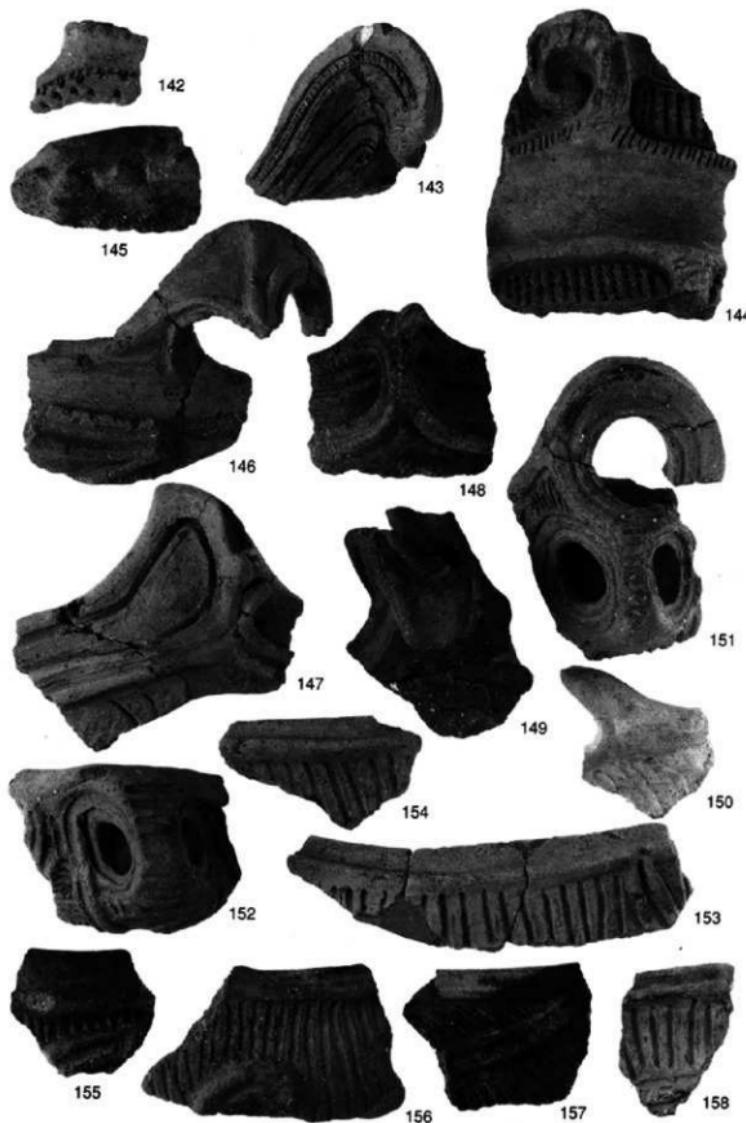
遺構外出土縄文土器 (5)



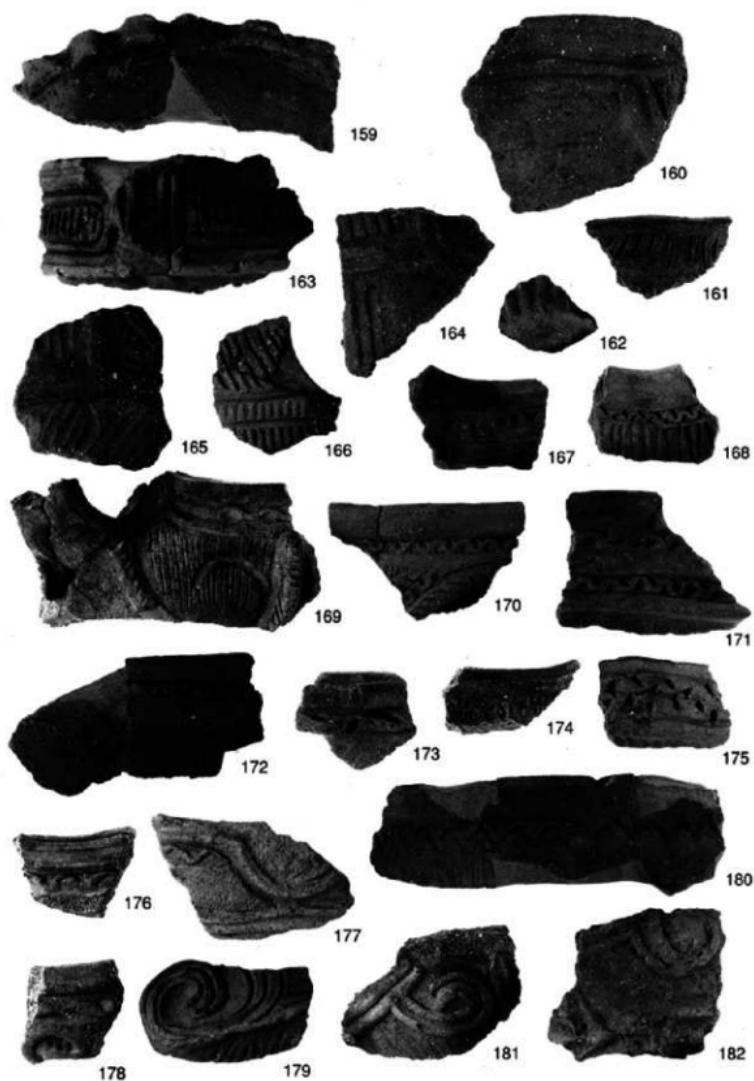
遺構外出土縄文土器 (6)



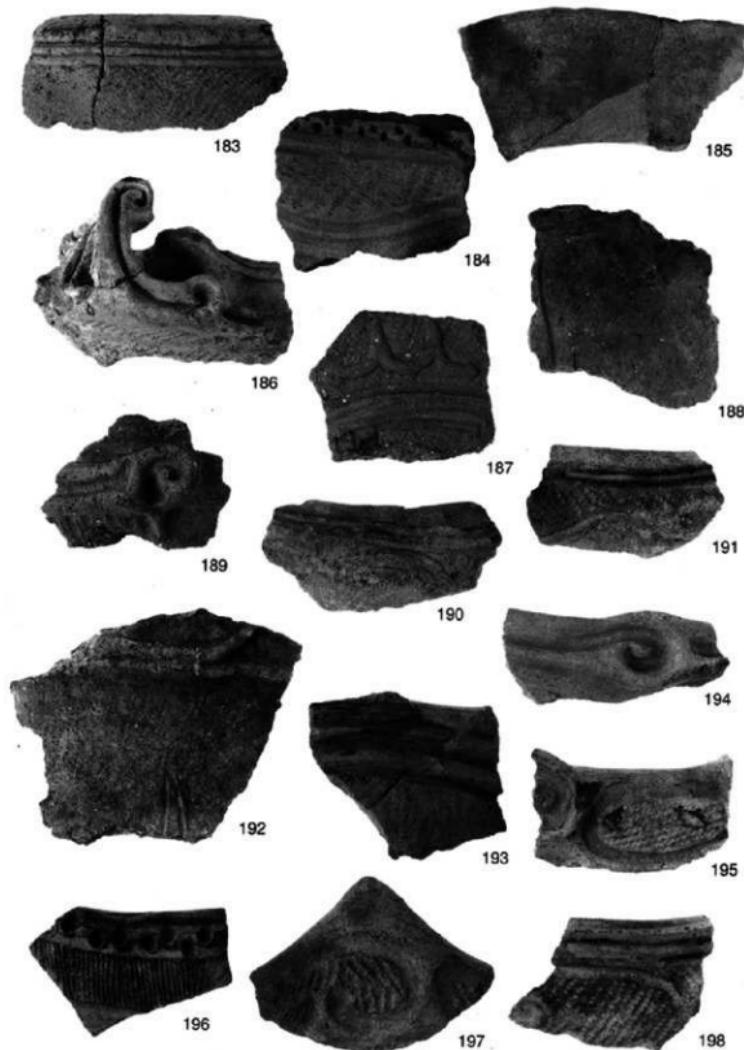
遺構外出土縄文土器 (7)



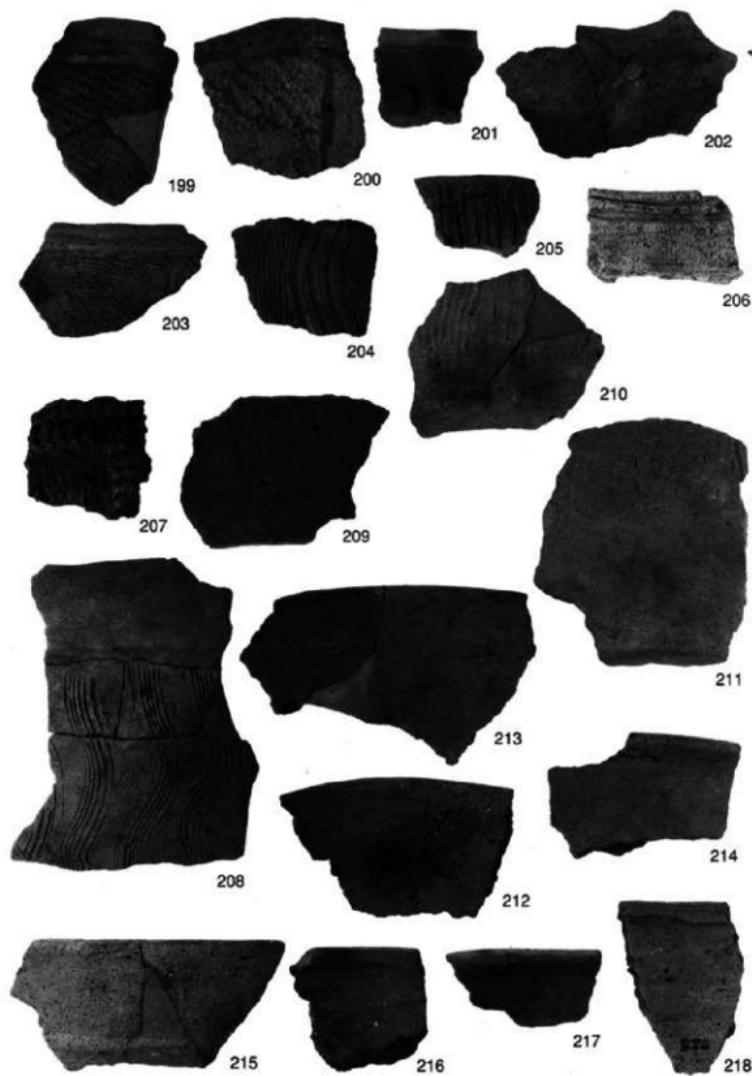
遺構外出土縄文土器 (8)



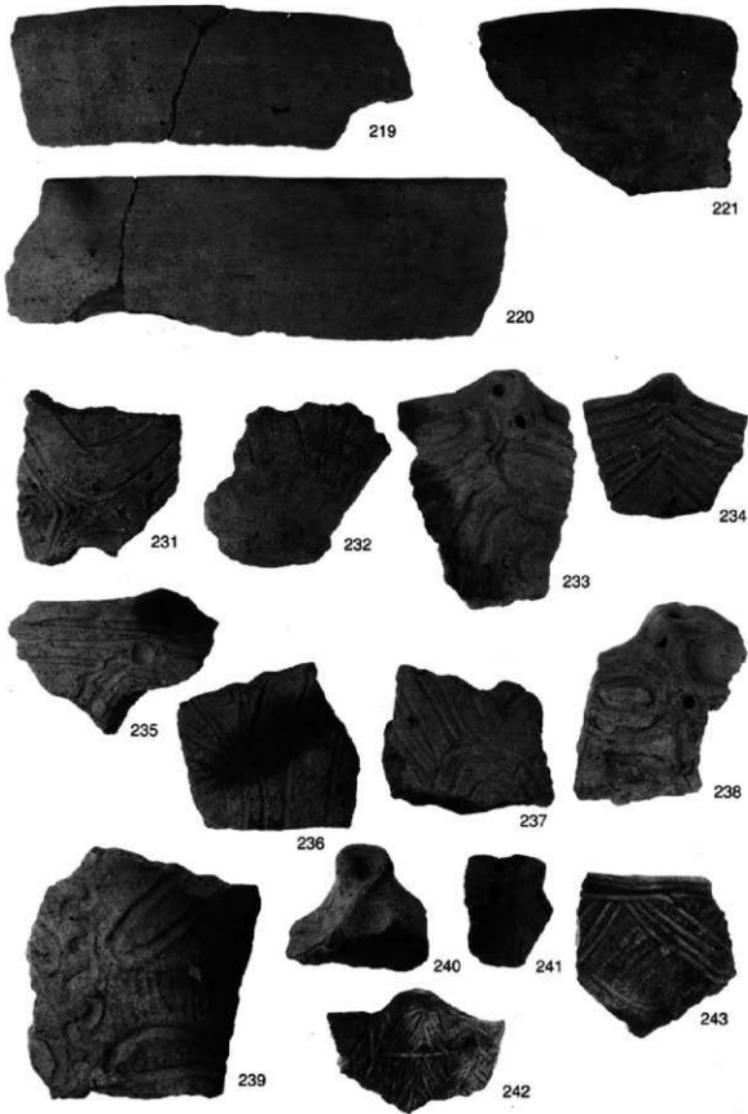
遺構外出土縄文土器 (9)



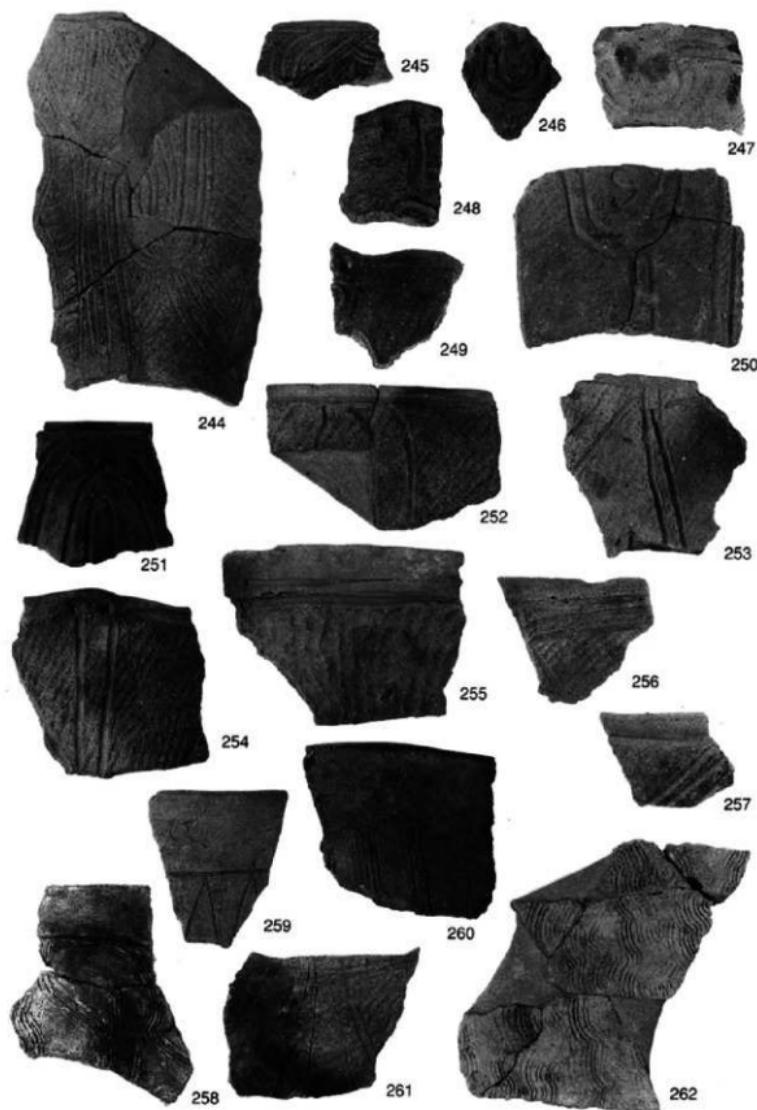
遺構外出土縄文土器 (10)



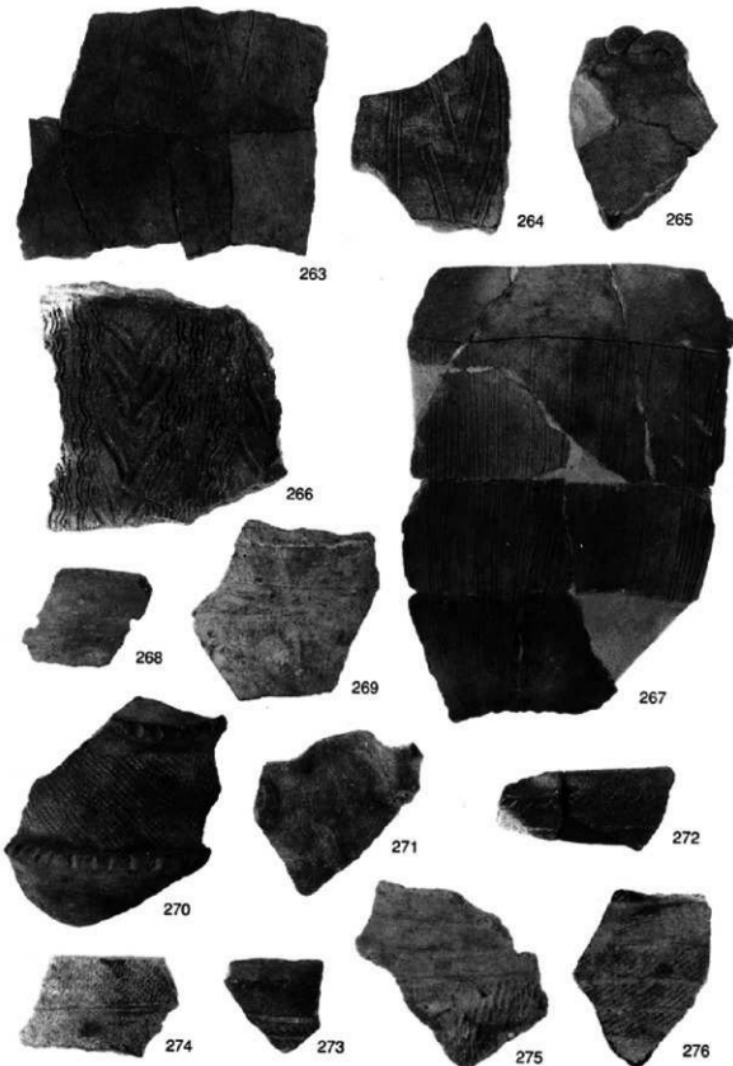
遺構外出土縄文土器 (11)



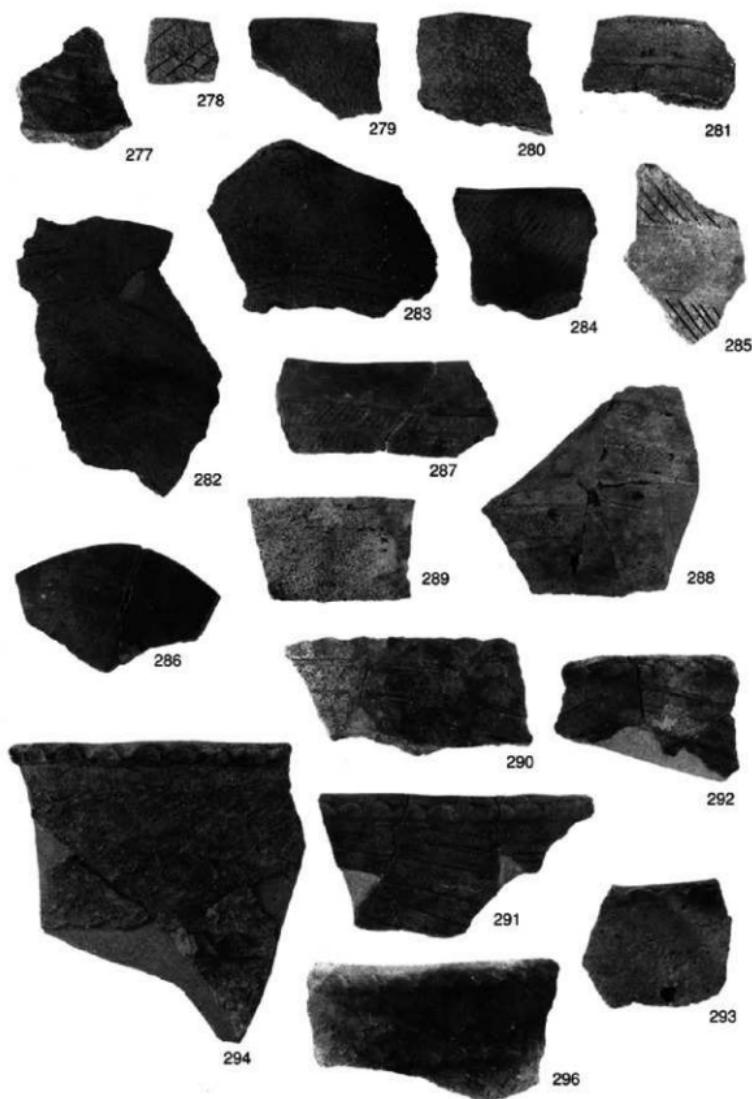
遺構外出土縄文土器（12）



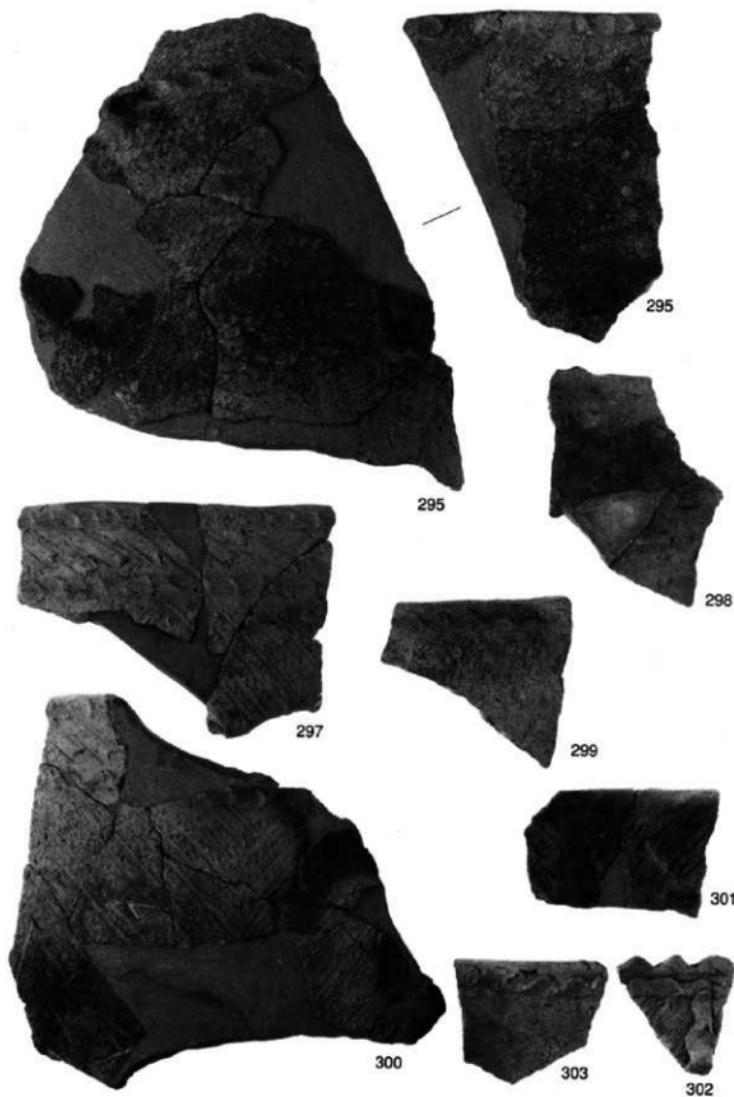
遺構外出土縄文土器 (13)



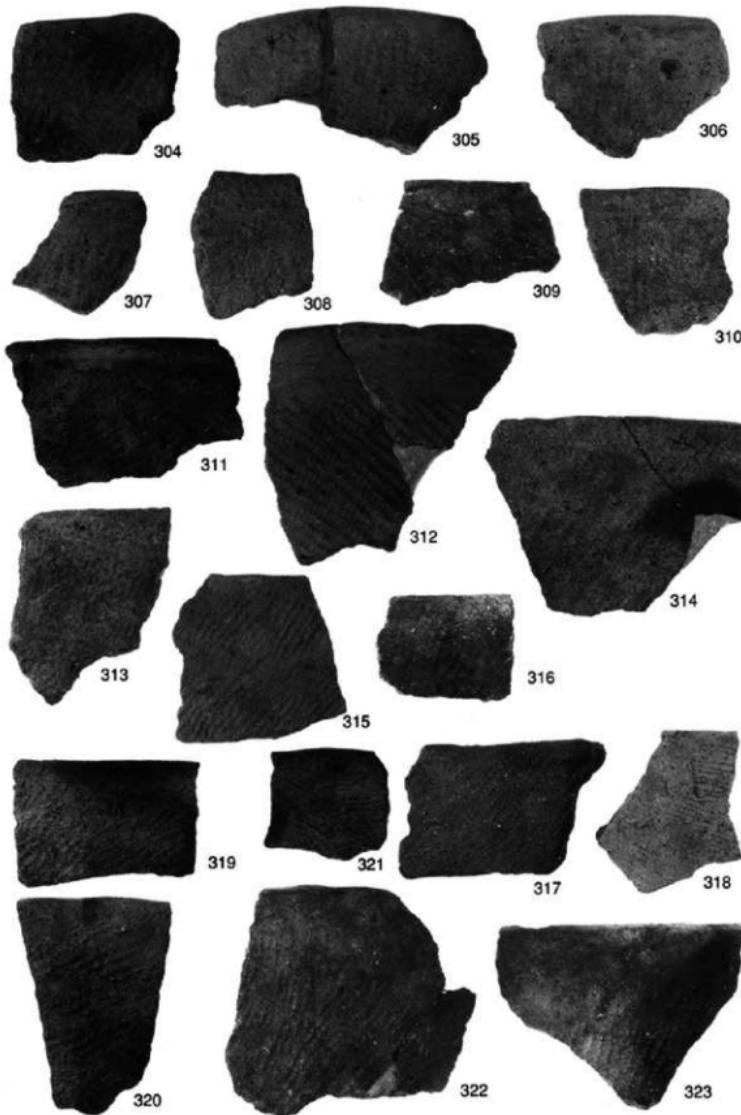
遺構外出土縄文土器 (14)



遺構外出土縄文土器 (15)



遺構外出土縄文土器 (16)



遺構外出土縄文土器 (17)



122—遺構外



228—遺構外



229—遺構外



324—遺構外



325—遺構外



326—遺構外



327—遺構外



332—遺構外

遺構外出土繩文土器 (18)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

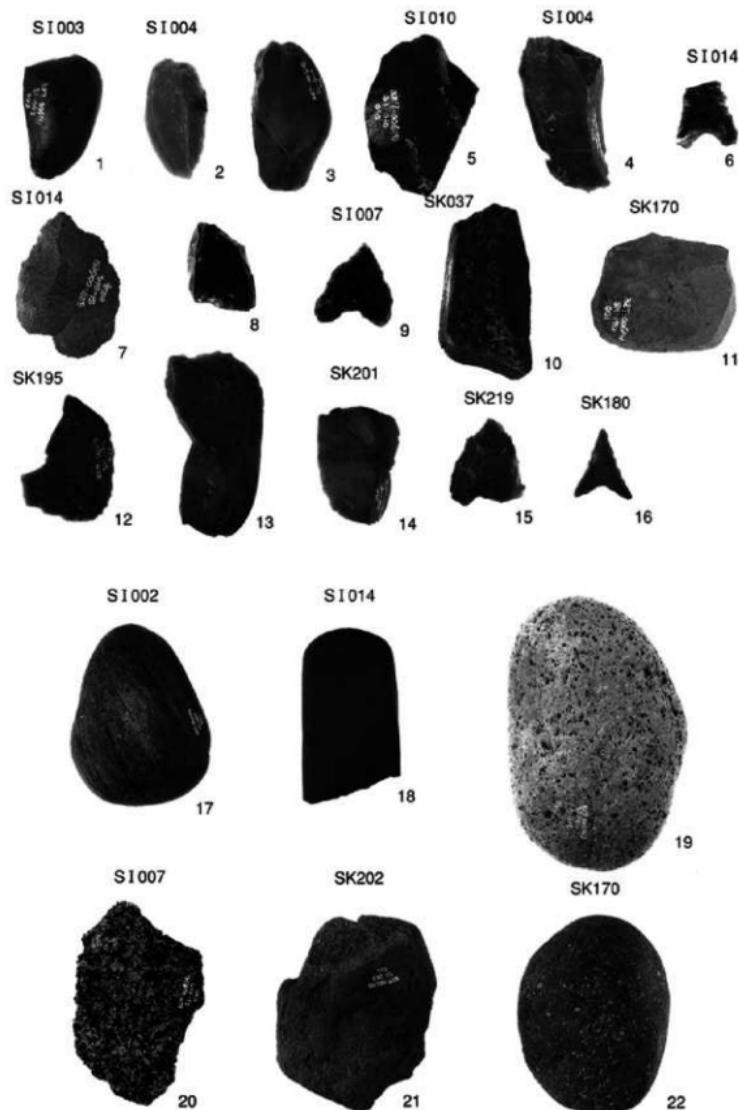


13

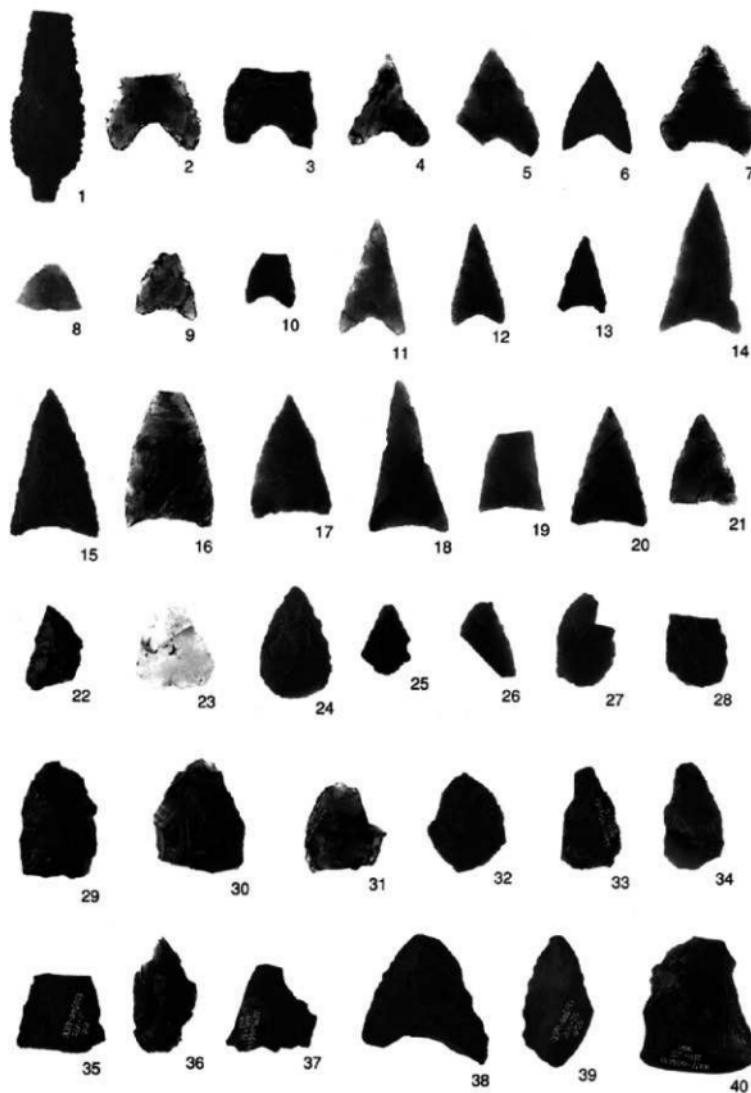


14

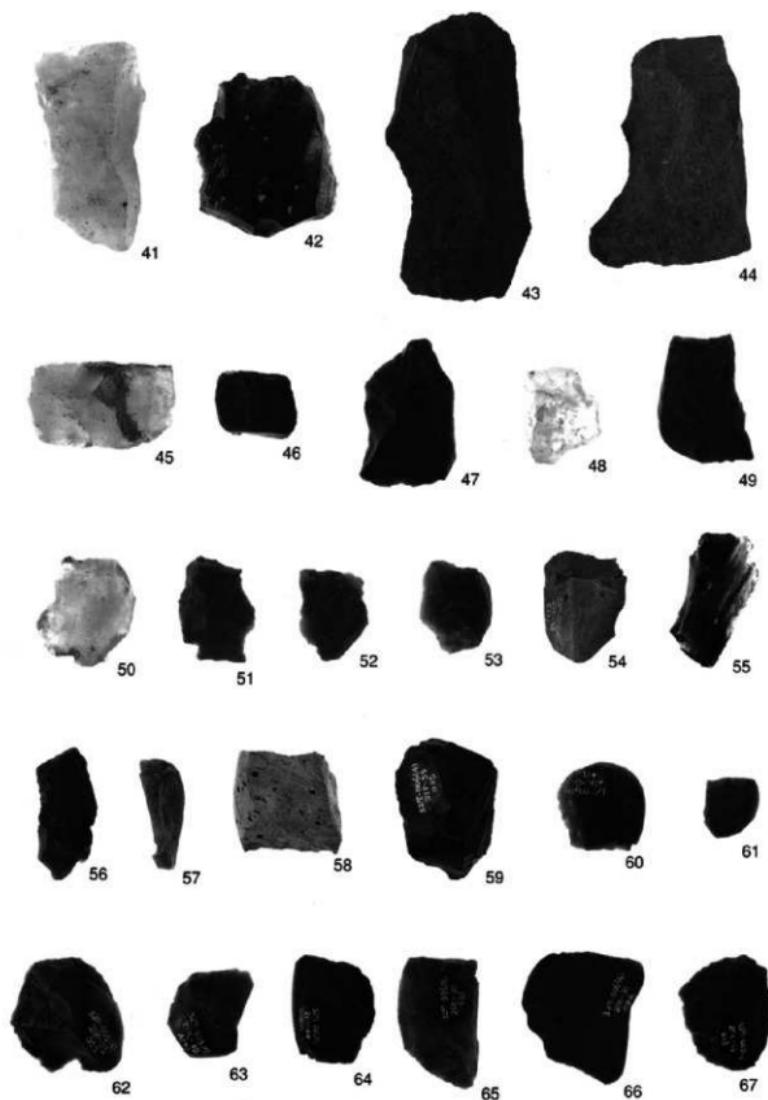
遺構外出土土製品



縄文時代石器（1）



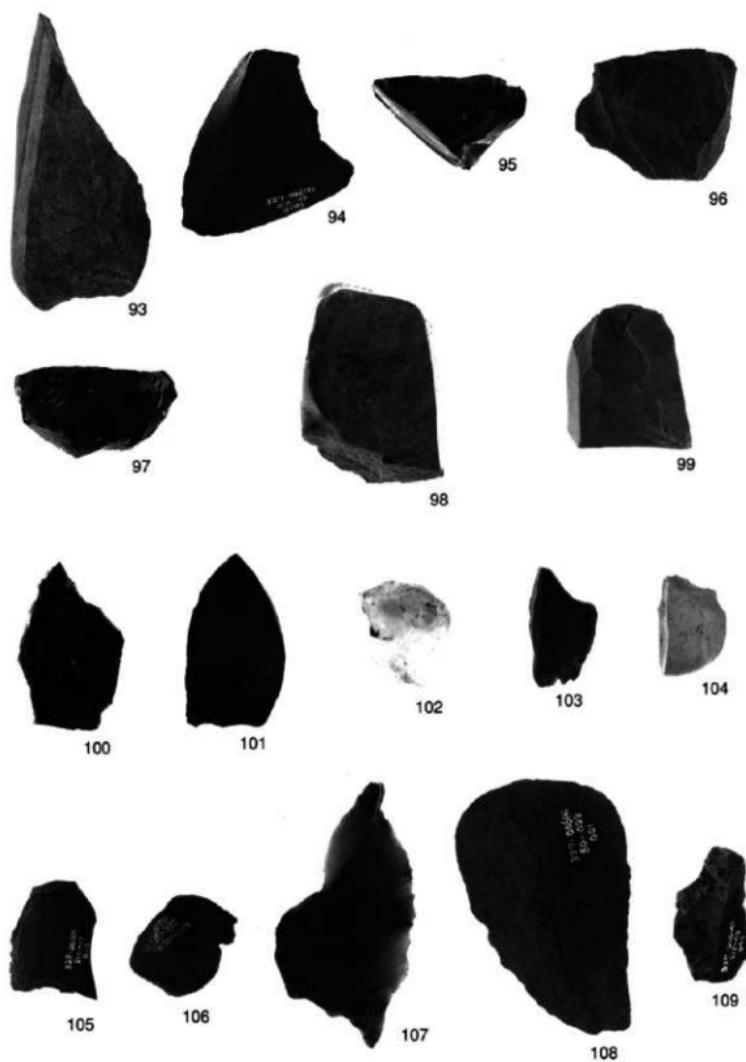
縄文時代石器（2）



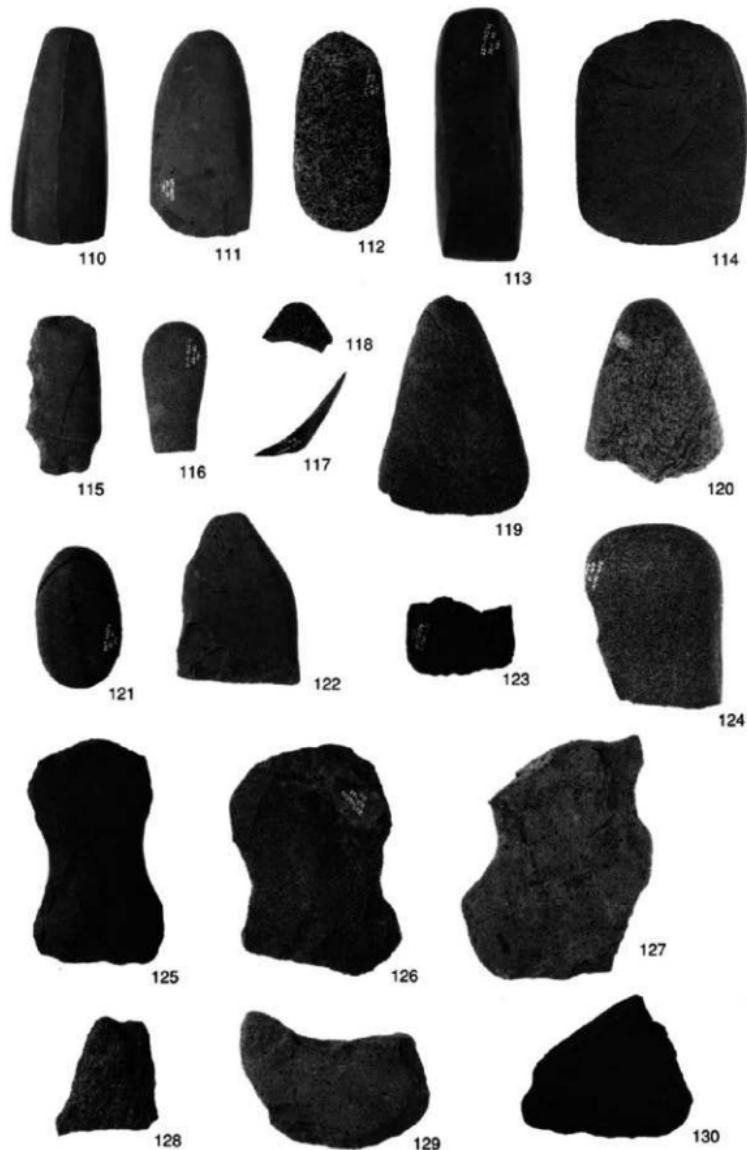
縄文時代石器 (3)



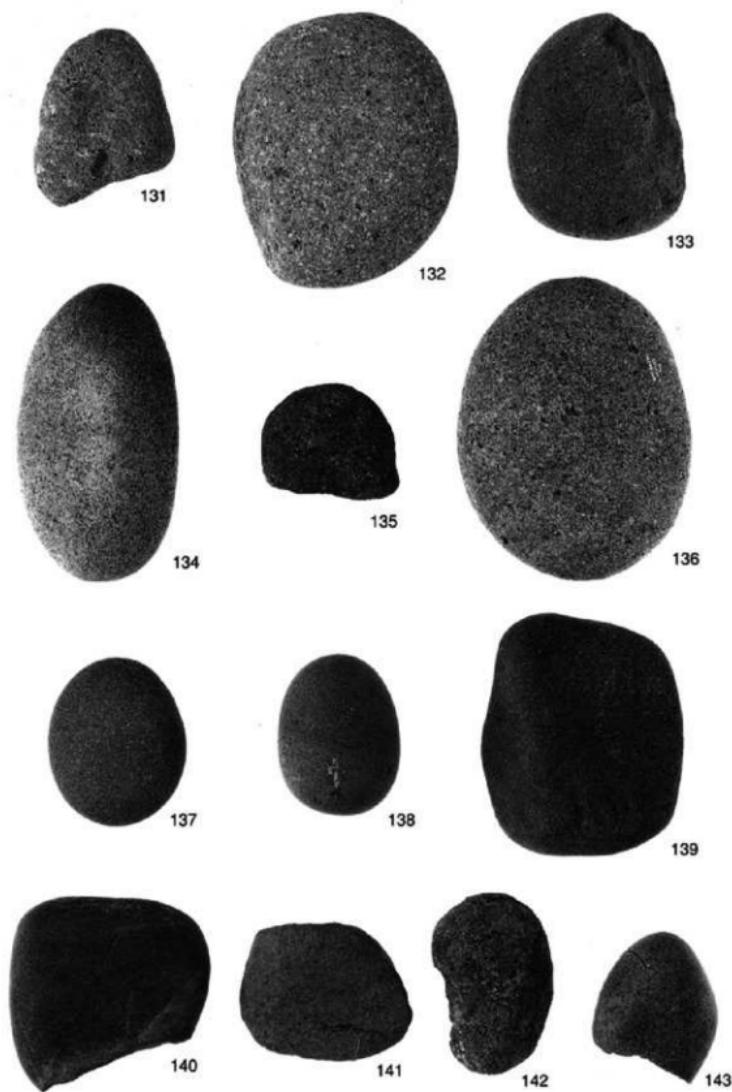
縄文時代石器 (4)



縄文時代石器（5）



縄文時代石器 (6)



縄文時代石器 (7)



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



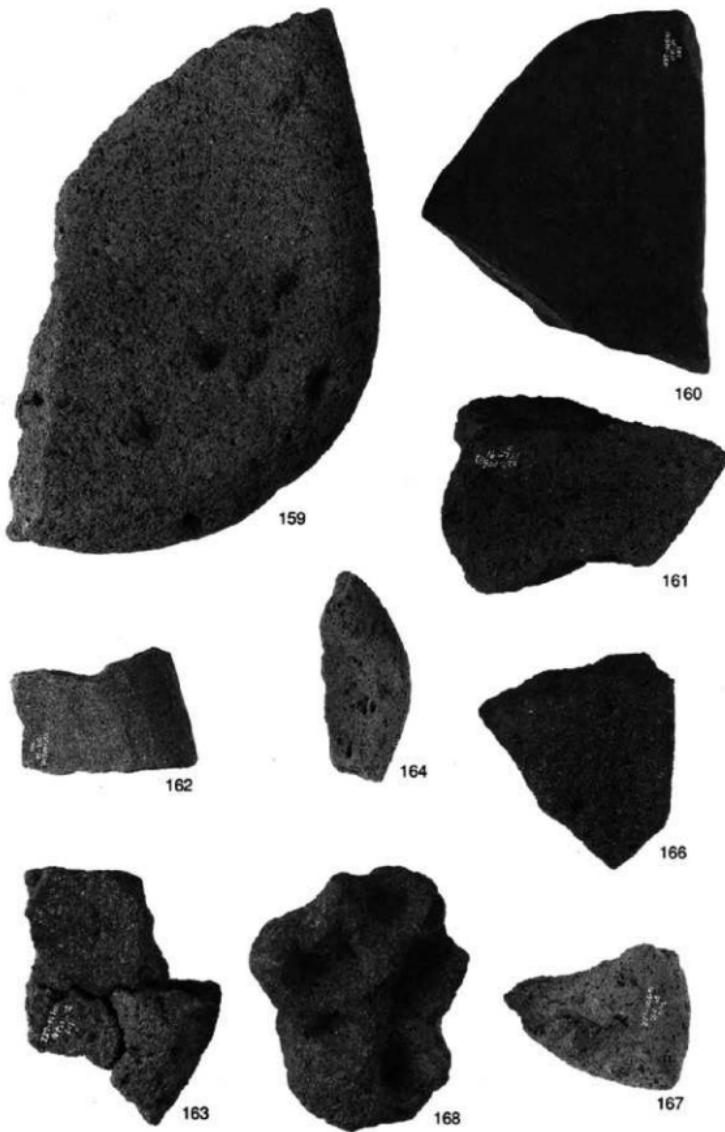
156



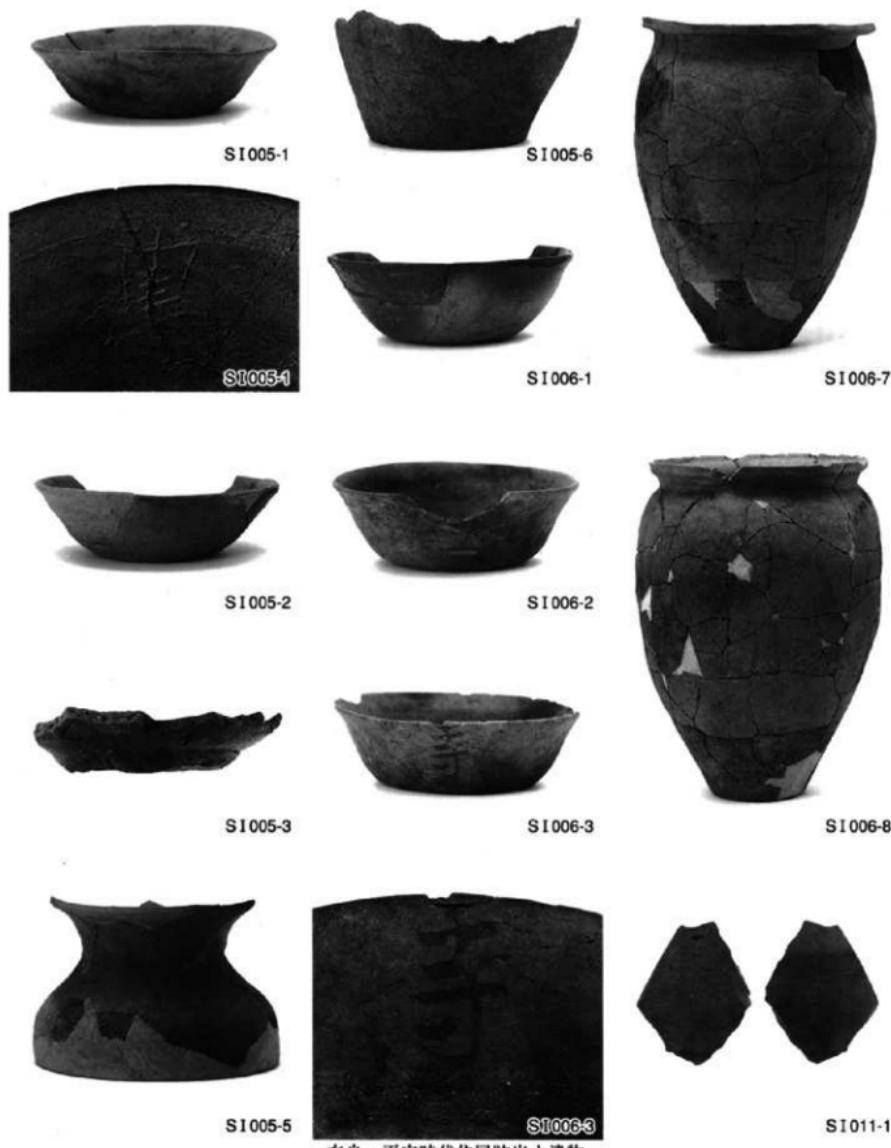
157



158



縄文時代石器 (9)



奈良・平安時代住居跡出土遺物



S1011-2



S1012-5



SK411-1



S1012-1



SX005-2



遺構外-1



遺構外-4



S1012-4



SX005-1



遺構外-4



S1012-4

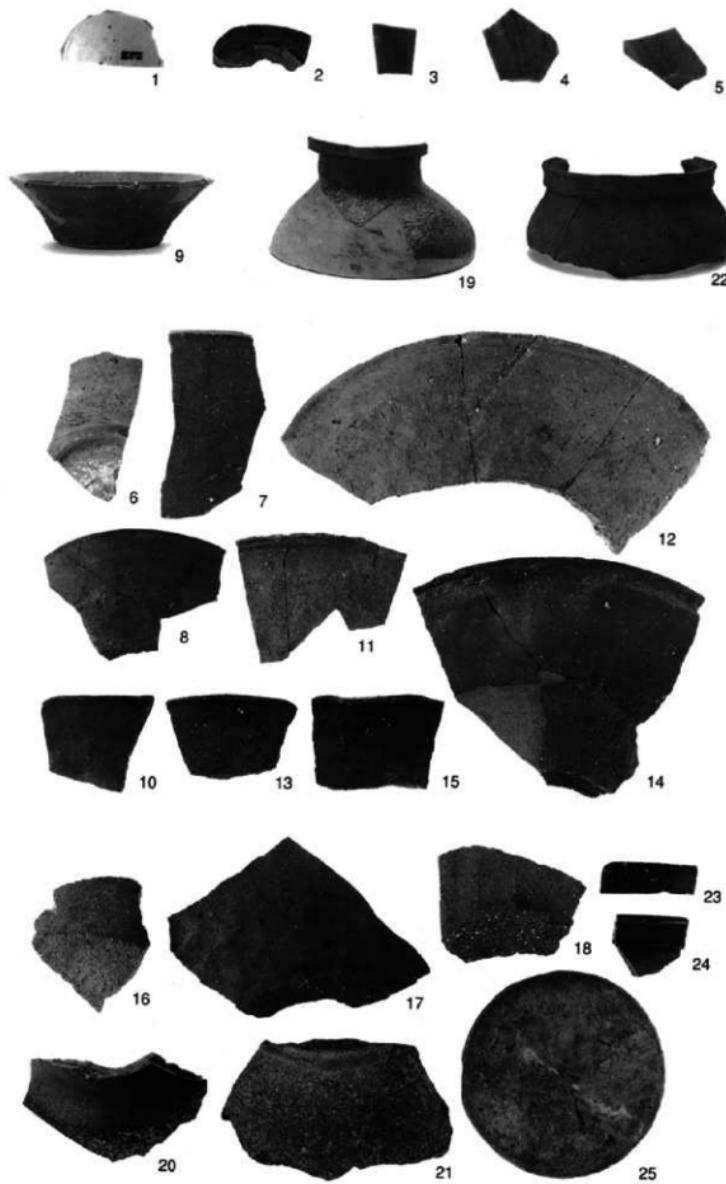


SX005-1



遺構外-6

奈良・平安時代住居跡・遺構外出土遺物



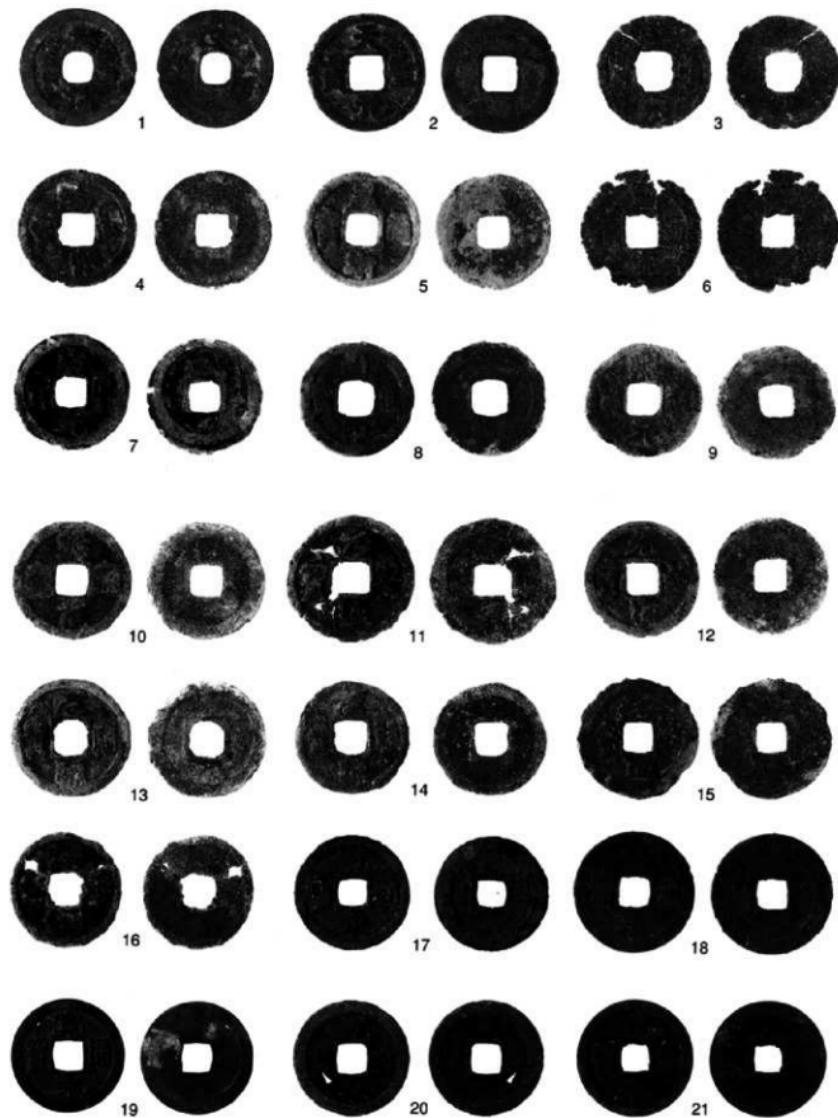
中世居館跡出土陶磁器



中世居館跡出土鉄製品



中世居館跡出土石製品

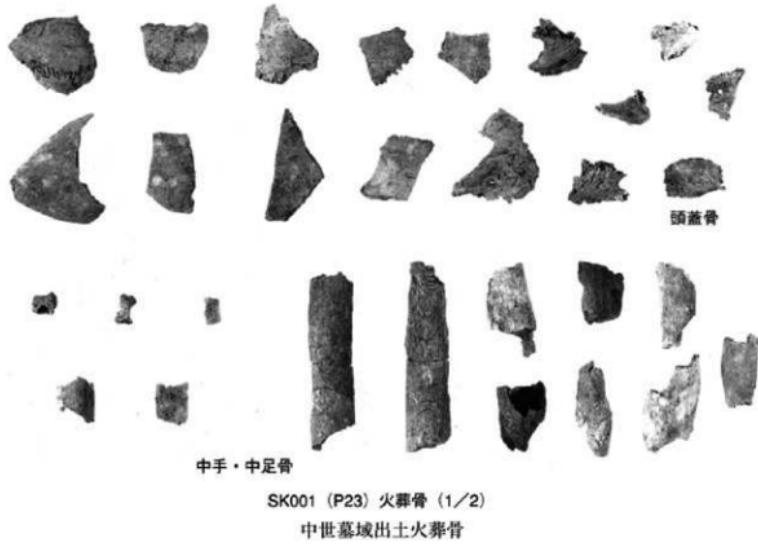


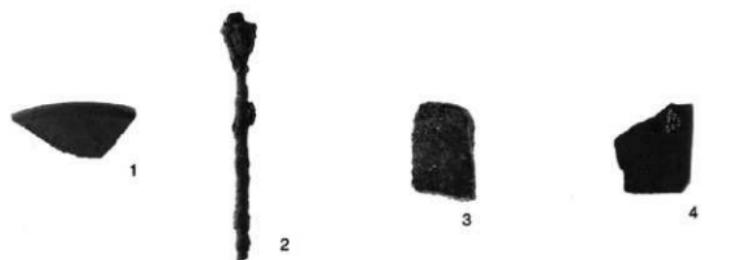
中世居館跡出土銭貨



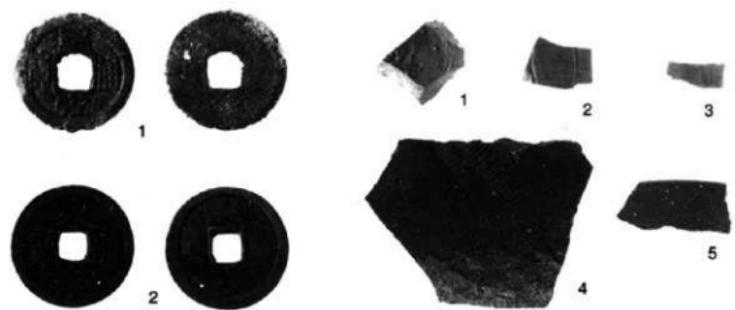
中世墓域（SK001）出土陶器・砥石

SK001





SX012

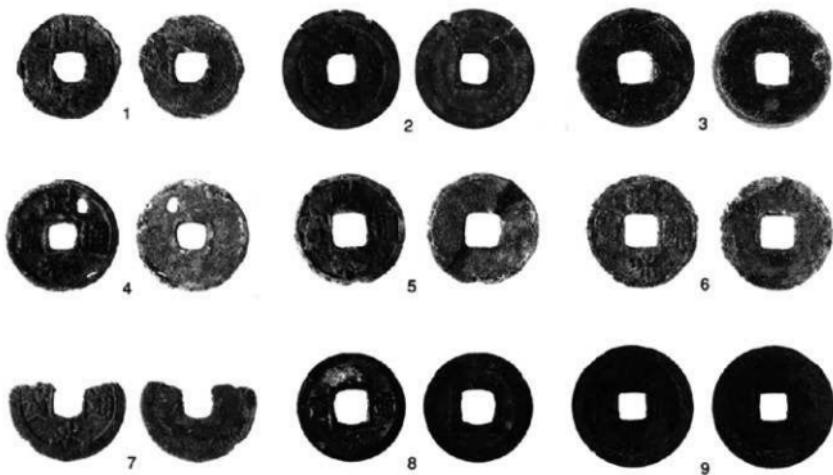


SX012

SX020・021



台地整形区画・溝・遺構外出土遺物



土墨・溝・遺構外出土銭貨

報告書抄録

ふりがな	まつざきちくないりくこうぎょうようちぞうせいせいひじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ4
書名	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 4
副書名	印西市松崎Ⅲ遺跡
卷次	4
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第547集
編著者名	岡田誠造 藤淳一 立和名明美 渡邊高弘 新田浩三
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地 2 TEL043-422-8811
発行年月日	西暦 2006年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつざきⅢ 松崎Ⅲ	いんざいしまつざきあざはりひと 印西市松崎字堀木戸 1,081-1ほか	12327	006	35度 46分 47秒	140度 00分 38秒	19950405～ 19950831 19971201～ 19980210 19990406～ 20000326 20001016～ 20001213 20030602～ 20030912	45.590	松崎地区 整備事業 に伴う埋 蔵文化財 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松崎Ⅲ	集落	旧石器時代	石器集中地点5地点	ナイフ形石器、台形様 石器、櫛形石器、敲石	
		縄文時代	竪穴住居跡 炉穴 土坑	4軒 36基 23基 稻荷台式土器、夏島式 土器、阿玉台式土器、 加曾利E式土器、堀之内 式土器、加曾利B式 土器石器	早期の住居跡・炉 穴・土坑を検出した。 早期・後期の 土器がまとまって 出土した。
	奈良・ 平安時代	住居跡 竪穴建物跡 土坑	1軒 1棟 10基	土師器杯、土師器甕、 須恵器環	藏骨器を埋納した 土坑を1基検出した。
		中・近世	居館跡 土塁 掘立柱建物跡 地下式坑 土坑 墓域 溝	1 3条 5棟 2基 207基 1 10条 陶磁器・砥石・錢貨	土塁を巡らせた居 館跡を調査した。 また、同時期の墓 域も調査した。

千葉県教育振興財團調査報告第547集

松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書 4

-印西市松崎Ⅲ遺跡-

平成18年3月24日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財團

発 行 千葉県企画庁
千葉市美浜区中瀬1丁目3番地

財團法人 千葉県教育振興財團
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2丁目7番2号